

# ダホメ王国と奴隷貿易

## ——古式経済の分析

*Dahomey and the Slave Trade: An Analysis of an  
Archaic Economy<sup>1</sup>*

(旧邦題：『経済と文明』)

カール・ポラニー

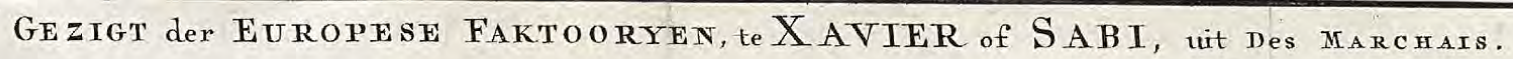
およびエイブラハム・ロットスタイン

山形浩生 訳（2022.06）

---

<sup>1</sup> © 1966 University of Washington Press







# 序文

この研究は経済史の分野のものである。その考古学部分は、メルヴィル・ハースコヴィッツの『ダホメ』(1938) に依存している。本書は親友のトロント大学経済講師エイブラハム・ロットスタインと共同で書かれた。エドゥアルド・ダン格拉斯によるもっと最近のケトゥ史記述 (1957-58) は、S・ジョンソン神父の以前の『ヨルバ族の歴史』の鍵となった。黒人アフリカフランス研究所 (IFAN) による、歴史的なポルト・ノヴォとアフリカ＝アメリカ人に関する刊行物は、ダホメに関する私たちの文献情報源を追加してくれた。ニジェール川大湾曲部とナイジェリアに関する歴史的、そしてある程度は経済的な知識の蓄積も、やはり IFAN とその重要な貢献者ポール・メルシエ (1951; 1954a, b, c) のおかげである。奴隷貿易については、ジョン・ジョンストンによる 1791-92 年の船舶書類 (1930) 、ガストン＝マーティン (1948)、シモン・ベルバン (1942)、K. G. デイヴィーズ (1957) が未刊行データを補ってくれた。アンドレ・シルク『ブラックアフリカ史』 (1961-63) は、この主題をアフリカ人側からの視点で描いている。

直接的な引用源は文中に示した。他の主張についての情報源は、脚注だらけになるのを避けるため、個別には原典を示していない。

感謝すべきは、経済制度の起源に関するコロンビア大プロジェクトの研究助手として、18 世紀ウィダの貿易港データに飛び込んでくれたローズマリー・アーノルド夫人である。このプロジェクトは 1948 年に、コロンビア大学社会科学研究評議会の支援で開始されたものである。我が学術活動に親しく援助を提供してくれたのは、1947 年のロンドン医師ダグラス・ジョリーである。1953-58 年にはフォード財団が、コロンビア大学で行われた制度果て展の経済側面に関する学際プロジェクトを支援してくれた。後年には、他の学術団体がプロジェクトのフォローアップを支援してくれて、ダホメ経済についての制度的な側面からの研究がそこに含まれ続けた。フォード財団の行動科学部門、ウェンナー＝グレン財団、社会科学研究評議会、アメリカ哲学学会に恩恵を受けたことをここに記したい。

K.P.

## 序文

## 目次

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| 序文 .....                        | i   |
| 視点 .....                        | iv  |
| 第 I 部 歴史の枠組み .....              | 1   |
| 第 1 章 内陸王国とベナンギャップ .....        | 2   |
| 第 2 章 奴隷貿易という課題 .....           | 12  |
| 第 II 部 経済のパターン .....            | 22  |
| 第 3 章 分配：国家の領域 .....            | 23  |
| 第 4 章 互酬性：相互支援と協力 .....         | 43  |
| 第 5 章 家事、土地と宗教 .....            | 51  |
| 第 6 章 取引：孤立した市場 .....           | 59  |
| 第 III 部 奴隷貿易 .....              | 72  |
| 第 7 章 ウィダ：貿易港の制度的起源 .....       | 73  |
| 第 8 章 サヴィ：独立ウィダと協定 .....        | 92  |
| 第 9 章 ダホメ支配下の貿易港 .....          | 96  |
| 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨 ..... | 102 |
| 第 IV 部 結論 .....                 | 125 |
| 第 11 章 古式経済制度 .....             | 126 |
| 参考文献 .....                      | 143 |
| 訳者あとがき .....                    | 148 |



## 視点

本書は文字以前の社会、18 世紀の黒人王国ダホメの経済的な業績についてのものだ。ダホメの興隆と、それが世界商業における独特なできごと、つまりダホメの裏庭で起きた現代奴隷取引にどのように対応したかに注目する。だがこの研究全体としての視点は、懐古趣味にはほど遠い。自分自身の時代における問題に対応するために、経済史家としての慎ましい貢献として構想された本書ではあるが、私たちの分析的な素描は、大規模な社会経済的な変化についての現実的な見方というのが、いつ、どこで起きたものであれ、視野を広げて解決策の探索を前進させるのだという確信にもとづいて提示されている。だが、過去の一部の特徴が現代に教訓を与えてくれるように見えるとしても、後進的な世界を理想化しないように気をつけねばならない。

権力を生み出す、あの恐怖というものが、今日においては人々の生活の軸を、物事の経済秩序から引き離し、政治的、道徳的な秩序へと移している。むき出しの肉体的な生存、自由、道徳的に意義ある存在が、目先の未来にとっては重要となる。一見した様子とは正反対に、登場しつつある課題というのは物質的な生活ではなく、生存と人間の尊厳なのだ。このシフトの規模こそが、本書の視点を決めるものとなっている。

私たちの現在のもめごとの歴史的起源を記録したいなら、時代を長々とさかのぼる必要はない。19 世紀は、まったく規模のちがう二つのできごとを生み出した。機械時代、つまり数千年におよぶ技術的な発達だ。そして市場システム、つまりその発展への最初の調整として生まれた経済組織だ。

19 世紀の技術的な奇跡の活動領域を創り出すためには、経済組織の変化が必要だった。市場システムは、生産のための入念で高価な機械を使えるようにするための、唯一の組織手段だったかもしれない。リスク負担の覚悟と能力、製品と消費者についての知識は、「店に並べる」のを何世代にもわたり行ってきた商人階級にとっては異質なものだ。そんな状況なので、あらゆるものについて市場だけが、機械への原材料の安定したフローと、完成製品の処分を保証する唯一の実効性ある方法としてまとめられねばならなかった。あらゆる段階で相互につながった市場システムがなければ、機械への資本投資の経済リスクはあまりに大きすぎただろう。消費財と原材料の購入のために市場が必要となっただけでなく、土地と労働もまた商品もどきとして組織され、移動性と供給の持続性が確保されねばならなかった。

## 視点

このようにして人とその環境は、市場化できる販売用に作られた商品に適用される仕組みによって仕切られることになった。その結果として生まれたのが、市場の自律システムに近いものであり、これは19世紀の最初の部分で西洋社会に革命的な変化をもたらした。

これが自分自身と社会についての人間の認識に与えた影響は甚大なものだった。生活が、相互接続された市場群により組織されるようになり、それが利潤動機に動かされ、競争的な態度により決定されるようになると、人間社会はあらゆる本質的な面で、実質的に利得があり目的に従属する組織となったのだった。

市場システムの下で、経済が社会プロセスに与える影響はもちろん圧倒的なものとなる。経済の働き——需要と供給の相互作用——がここでは社会のそれ以外の部分を形成する、というか「決定づける」。三角形においては、三辺が角度を決めてしまうのとはほぼ同じだ。階級分化を考えて見よう。労働市場の需要と供給は、定義からして、それぞれ雇用者と労働者と一致する。資本家、地主、テナント、仲介人、証人、専門業者の階級は、それぞれ土地、お金、資本、各種サービスの市場により定義づけられ、まさに市場により創り出される。こうした社会階級の収入はその市場で決まり、階級と地位はその所得で決まる。

技術が市場システムをもたらしたら、市場という制度的な仕組みが人間の考え方や価値観を経済中心にしてしまう。自由、正義、平等、合理性、法治といった概念は、市場システムに結実するように思えてくる。自由というのは自由な事業を意味する。正義は私有財産保護、契約の保護、市場における価格という自然の評決に結実する。人の財産、その収入と所得、商品の価格は、いまや競争市場で形成されたかのように見える。平等性は、あらゆる人が契約にパートナーとして参加する無限の権利を意味するようになった。合理性は効率性と最大化する市場行動に集約される。市場こそがいまや経済制度となり、市場のルールが法治と同義となり、それがあらゆる社会関係を、財産と契約の規範へと還元する。

現代の交換経済は市場システムであり、物質的な手段に依存する社会のあらゆる側面を、間接的にせよ範疇として含んでいる。私たちの社会的存在のうち、何らかの物質的な手段なしに実施できる部分はきわめて小さいので、経済（あるいは物質的な供給プロセス）を司る原理は絶対的なものと思われるようになったのだ。

この新しい視点のためには、優先度を変える必要がある。経済は社会との関連で相対化されねばならないのだ。私たちの陳腐化した市場思考は、忘れられた大陸がいきなり工業化し、工業化した大陸が電氣的なオートメーションや原子力により、未知の岸辺へと向かいつつある現代の問題について、現実的なアプローチを行う障害となっている (Polanyi, 1947)。

西洋文明がその下で苦闘させられている、ほとんど意識されない弱みは、その経済的な運命が形成された特異な条件の中に存在している (Polanyi, 1944)。利潤原理を絶対化してしま

## 視点

った結果、人はそれを再び従属させるという能力を失ってしまった。「経済」という言葉自体が、人の物質的な生活とそれを確保するのに有用な大量の技術を思わせるのではなく、むしろ特定の動機、特定の態度、特定の目的の集合を想起させる。それをみんな、集合的に「経済的」と呼ぶのになれてしまっているが、実はそうしたものは、実際の中身ある経済とは異質なものであり、現代西洋文化の性向のとらえどころのない相互作用のおかげで、その呼び名の指すものとして理解されるようになっていただけなのだ。経済の永続的な特徴ではなく、位置的なものだけが、私たちには本質的なものとして見えるようになってきているのだ。

19世紀の強迫観念は、イデオロギー的にも制度的にも人生への道をふさいでしまいかねない。それは生まれつつある社会条件の下での物質生産組織と対処するにあたり、身動きを取れなくするような障害だ。だから私たちの視点は機械時代が次々に提起する、人生と社会にとってのしつこい問題というものだ。比較的最近のイノベーションである市場システムは、労働や土地について市場がない社会の理解を阻害する。こうした市場がないと、経済の仕組みは一見すると説明不可能だ。というのもそこには、生産要素である労働と土地の使用を説明するものが何もないからだ。古い社会に対する経済史家の決定的な関心は、当然ながら経済プロセスが実施されるための構造、制度、運用を見つけ出すことにある。

市場システムの働きを説明するために設計された経済概念は、他の制度的な枠組みに適用したら、まちがいに歪んだ結果をもたらす。たとえば、交易とお金といった基本的な用語の定義を考えよう。交易は、価格で方向付けられる市場の中での、財の双方向移動と定義される。お金は、その移動を支援する手段だ。そして交易とお金が要素として所与なら、市場が想定される。だがこうしたアプローチは、まったく誤解のもとかもしれない。ハムラビ王のバビロニアでは、都市の市場はまったく存在しなかった。だがアッシリア研究者はこの事実を理解し損ねた。さらに上のお金の概念は不十分だ。お金は必ずしも交換の手段ではない。それは支払い手段かもしれず、基準としても使われ、そうしたちがった用途ごとに、ちがった物体や材料単位が使われることもある。バビロニアでは、支払いには大麦が使われた。たとえば賃金、地代などの支払いだ。これに対し、基準として使われたのは銀だ。市場がなかったので、実際のモノの交換を除いては取引の証拠はないも同然だ。たとえば、あるきまった土地や家、個別の奴隷何人か、ウシ数頭や船などだ。そしてそれは、実際に銀が使われた証拠はほぼないも同然だ。むしろ交換手段としては、油、ワイン、羊毛などの主要物資が、手当たり次第にきまった比率で使われていた。

取引の場合でも状況は似たようなものだ。バビロニアでの取引は、エジプトと比べると大量にあるが、学者たちはそれが市場取引だったと考えている。だから指定取引と贈与取引は見落とされてきた。だが古式帝国同士の取引の主要形態は、贈与取引だった。もう一つの指



## 視点

定取引という形態は、バビロニア時代以降行われていたが、前近代の重要な制度である「貿易港」というものを通じて行われた。

また価格の概念も、これと大差ない扱いを受けた。価格は当然のように市場価格のことだとされた。だが実際には、古式の価格はおおむね習慣、法令、勅令により固定されており、ひょっとするとそもそも一般的に価格と呼ぶべきですらないかもしれない。それを「固定価格」と呼ぶのはかなりの誤解を招く。というのも、そもそもそれが変動したためしなかったからだ。おそらく新しい用語、たとえば「等価関係」といったものが必要だろう。本書では、ある種の財が、別の財と代替あるいは交換されるときに永続的な比率を指すものとしてこの用語を使う。この相場の二つの変種のちがいは基本的なものだ。「代替された」というのは、税の「物納」支払いや、ポイントシステムの下で配給財を選ぶときなどの、一方向の支払い移動だ（代替の東亜関係）。「交換」は、財の双方向運動、たとえばある種の実物財を別の実物財で、固定比率で購入するような場合だ（交換の等価関係）。

こうしたあらゆるまちがいの源泉は、交換を経済関係として位置づけることだ。だからこそ、物があればそれは「供給」といった販売用語が適用され、何かがある目的のために雇用されれば「需要」という擁護が使われて構わないのだ、ということになる。こんないい加減な根拠で、経済学者の解釈する人間世界は、潜在的な市場システムだとされていたのだった。実は交換以外のパターンが、前近代世界の経済組織では使われていた。未開社会では、互酬性が経済の重要な特徴として出てくる。古式経済では、中央からの再分配が広く行われている。もっと小規模で見れば、農家の生活パターンは家事だ。だが互酬性と家事は、どれほど一般的であっても、経済現象を交換に還元できなければ認識できない現代の観察者には、目に入らないままなのだった。

ダホメの経済は、再分配的な行政と地域毎の地元の自由に基づいていた、その地元の自由を仲介していたのは、互酬性と家事制度であり、それを地元市場が補っていたのだった。計画農業が、村の自由と組み合わせさっていた。政府による外国貿易が、地元市場と共存しつつも市場システムは回避していた。この古式社会は法治に基づくしっかりした構造を持っていた。そしてその地位はさらに、市場システムにとって異質なお金の機能で強化されていたのだった。

経済史研究者は、客観的な形で過去のデータを提供すべきだ。たとえば宗教的、政治的、経済的な理由から書字という技芸を禁止していた、きわめて階層化された社会があり、そうした社会が望ましくぬ文化的接触より孤立を好んだという点を考えると、文明の基準として識字率水準は使うべきではないだろう。アシャンティ族やダホメ族がこうした例となる。戦争、貿易、通貨における彼らの成果が、なぜ文字もなしに可能だったのか？ その答

## 視点

は、「運用的」とでも呼べそうな、文明の忘れられた段階にある。これは、ガジェットを手段として使うことで、成功したプロセスを概念化しなくても、複雑な機械的・組織的な活動を実行できるというものだ。いくつかの初期国家——古式社会のプロトタイプ——は、まさに運用的デバイスのおかげで未開段階から台頭してきた。そうしたデバイスの例としては、小石による詳細な統計や、区別された記数法などがある。たとえばダホメには、二種類の数え方——一つはタカラガイのお金に適用されるもの、もう一つは「人間やネズミ」つまりその他すべてに適用されるものだ。こうしたデバイスは、IBM コンピュータに匹敵する通信技術の進歩といえる。ちなみに IBM コンピュータもまた、メカニズムによって思考を置きかえ、それを超える結果をもたらしている。

初期国家の下での、行政的な成果の源としてもう一つ指摘できるのは、高い水準の国家機構だ。これは部分的には、後に政府にとってかわる傾向を持つようになる市場システムがなかったせいだ。そこから考えると、現代社会の苦しみ之源となっている政治機構の衰退は、市場が次第に拡大した結果として生じたのかもしれない。

それはさておき、18 世紀のダホメを研究すると、政治的手腕という才能がヨーロッパの特権ではないことが明らかになる。近隣のダホメとアシャンティは、ギニア沿岸で独立した存在を維持し、意図的かつ巧みに何世紀にもわたり別々の通貨を利用していた。大量の商業的な交流があったのも関わらず、その交換レートは安定に保たれた。アシャンティは金粉を使った。ダホメはタカラガイを使った——現代の西アフリカ植民地列強が学んだ通り、金銭媒体としてはとらえどころのないものだ。イギリス人とフランス人はさらに、奴隷貿易においては相互に安定した架空の通貨を利用していた。

アフリカ現地で運用的文明は識字性にとって代わられている。そのアフリカ大陸における目覚めた国々で、高度な国家機構がいきなり復活する可能性もある。自由と官僚制、あるいは計画と市場との不安な紛争ですら、まったく目新しいものとはいえない。入り組んだ行政からくる自由への脅威や、自由な交換と中央計画との矛盾は、古式経済でもすでに見られるものだった。このどちらのジレンマも、ダホメでは相互に作用していたらしい。

初期国家の社会構造には、自由と効率性の両方に対する保護機構として機能する、制度的な装置がいろいろ見られる。ダホメの地方部は、村やブッシュの大小の市場で活況を呈していたが、作物の選択は首都からの計画により指示されていた。外国との貿易は、市場と切り離された官僚ネットワークを経由したものとなり、それを仲介したのが「貿易港」だった。中央の行政と、家族や地元生活（伝統と自由のゆりかご）から生じる活動との正式な分離により、恣意的なルールは禁止された。こうした管轄的な制限は、王宮内に存在する防衛、交易、課税の行政的な区分により強化された。その一方で地方の自立性は、未開習俗に根差したものであり、王様といえどもそれを脅かすことは決してできなかった。

## 視点

現代人が、経済史研究者という形で、植民地以前のアフリカに入り込むのは二度目となる。18 世紀と 19 世紀のイギリス人旅行者たちが見たダホメは、アマゾン女性軍団の故郷だった。これはヘロドトスの半ば神話的なスキタイ以来、比肩するもののない戦闘部隊だ。そこには頭蓋骨のピラミッドがあり、つまりは先祖崇拜の義務により要求された人間の大量生け贄の証拠だし、ある程度は宗教的な人肉食の印でもある。ブリストルやリバプールが戦争捕虜を、筆舌に尽くしがたい非人間的な条件の下で西インド諸島に回送したダホメがこれだ。本書で提起する問題は、私たちの先祖による人類に対する許しがたい罪の相当部分には触れないし、またアフリカ人たちが最近になって個人の自由と進歩という理念を受け容れた話もしない。どちらの方向にも時代錯誤的にならないよう気をつける必要がある。

再分配、互酬性、家事は単独では経済システムとはいえない。おかげで古式経済の図式は必然的に断片的なものとなってしまう。思い起こされるのは、カール・ビューヒャー (1913) による、現代社会だけがおおむね交換取引に基づく、統合された国民経済、つまりフォルクスヴィルトシャフトを持つのだという主張だ。カール・ロドベルタス (1865) の「オイコス」(これはギリシャ人が「家」を呼んだ用語だ) がパラダイムだった古式経済においては、市場がなかったわけではないが、経済は市場システムを持ってはいなかった。だが交換を導入する事で、私たちは市場、お金、交易を導入することになる。これは西洋国民経済のまさに基盤となる材料だ。これで経済システムの要件が満たされるように思えるかもしれない。だがダホメは市場の国ではあったが、そうした市場は、孤立しており、つながってシステムを形成することはなかった。これが見落とされてきたのは、市場、お金、交易が不可分だとまちがって思い込まれてきたという理由が大きい。だが 18 世紀と 19 世紀の思いこみとは正反対に、交易、お金、市場は共通のマトリックスから生じたものではない。実はまったく別々の起源を持つのだ。交易とお金の起源は人間の先史時代に埋もれているが、市場はもっと最近発達したものだ。

西洋思想は、市場制度の機能として以外の交易とお金を考える事がほとんどできなかった。確かにこれは、現代の市場経済の解釈としては正しい。そこでは交易、お金、市場が市場メカニズムの機能として融合して、正しく経済システムと思えるものを形成している。このプロセスの全般的な統合と反復は、市場を通じて作用する需要と供給の力によって生み出されている。だが経済史の相当部分では、交易、お金の利用、市場要素は、相互にかなり独立して生まれ、発達したのだ。

交易/貿易はもともと、財を買って遠くに運ぶという活動だ。これは一方的な「輸入利益」となる。双方向性の要素は主に、探検と贈与取引により生じた。支払いに使われるお金は、限られた状況から生じている。たとえば補償や儀式的な罰金などだ。考古学者や古式研究者

## 視点

私たちは最近になって、交易とお金は社会にひんぱんに見られる特徴だが、市場はちがうということを示している。これは、市場という言葉の両方の意味にあてはまる。片方は場所、「いちば」としての市場だ——通常は開けた場所で、売り手と買い手が出会い、生活必需品、主に食材や調理済み食品が買える。もう一つは需要供給価格のメカニズムであり、ある具体的な場とは必ずしも結びついていない。

ダホメ経済における交換パターンの役割は、いくつも意外な特徴を示している。地元市場、お金、外国貿易は広く見られているが、経済全体の規模での統合パターンとしての交換や取引は、社会の中でほとんど何の役割も果たしていない。理由は簡単。交換が役割を果たすためには、それは市場の力により生じる価格を通じて機能しなくてはならない。こうした条件だと、生産は消費財や生産財の市場における価格の関数となる。

ダホメでは、これがどれも当てはまらない。価格は市場で形成されるのではなく、市場の外主体や機関により形成された。生産は王家、氏族、ギルドの統制下にあり、価格から得られる利潤を目指す個人や企業の匿名競争に左右されるものではなかった。だから交換は、経済プロセスを作り上げる統合パターンへと発達するのを阻止されていた。交換や取引の制度は、経済の限られた一部の中ではきわめて重要ではあったが、分断された傾向のママにとどまった。

交易は主に外国貿易だが、市場とは制度的に別物であり、国家の領域に入るものだった。ご近所の取引は、孤立した市場の範囲により物理的に規定されており、量的に大したものではなく、中距離の交易に成長しなかった。そして中央権力が扱う輸入品や輸出品の再分配フローとは、なおさら融合しなかった。

お金の利用は、地元市場では強制されていたが、やはりそれを発行する国家の統制下におかれた。その国家においては、お金は再分配システムの機能においてとても重要だった。お金の移動は、信用がリソースの動員を左右する経済のような形での「金融」に拡大しなかった。ダホメはおおむね「実物」経済であり、主要金融ですら従属的な役割しか果たさなかった。

非国家領域では、生活の基本的な必需品のうち、市場と結びついているものはごくわずかだった。家屋の壁を作り、屋根をふき、親への義務を果たし、畑を耕作して収穫するときには、互酬的な社会制度が作用した——ドクプウェ（労働チーム）、ソー（工芸ギルド）、そして何よりも氏族だ（父権的な血族社会）。これらが労働と土地の利用を分配し、経済プロセスの移動を仕切り、生産を組織して、主に外部から行動することで市場価格を決めた。お金と交易はこのような形で、国家の再分配領域におさめられた——課税システムは金銭化され、軍備や他の政府輸入品の共有は、国がまとめる外国貿易に依存した。

市場からは全経済に及ぶ交換取引システムは生じなかったものの、三つの交換制度のそ



## 視点

れぞれにおいては、文化的な創造性が華開いた。市場についていえば、孤立した市場は唯一無二の発達物だった。交易は、貿易港ウィダに収束した。これは商業統括機構としてきわめて入念で効率的だった。お金の面でダホメは、通貨の歴史では珍しいほどの卓越した技を生み出した。

ウィダ港を中心とする奴隷貿易が、経済史家につきつける難問は一つにとどまらない。「古式」という用語は、単なる審美的、文化的な意味合いしか持たないものとして系統的な人類学からは排除されたが、「未開」と「近代」との間にやってくる社会学的フェーズを示すために復活させる必要があるかもしれない。だが歴史家としては、この用語の適用には注意が必要だ。さもないと、循環論法にはまりこんでしまう。国家と経済、制度と社会という相互につながった現象——そのそれぞれがときには古くさいとよばれる——は、名前をもたらず分類という栄誉を手にするだけの、正統な先行性を欠いている。国家や社会、経済全体ですら、古典的/古くさいと思ってはいけな。未開社会にはまだ登場しないが、交換手段としてのお金の利用が一般化した社会では、すでに見られなくなった**経済制度**を示すときに「古式的」と表現する一般的アプローチのほうがいいだろう。

古式経済の構造と仕組みを示そうとする分析は、実証的証拠の不在や、概念の不適切性により混乱する問題に直面することになる。この事例研究においては、18 世紀ダホメの古式経済とその奴隷貿易について、用語を明確にして使う努力を行うことにしよう。交易、お金、市場制度の古式版を指摘できるだろうか？ そうした経済は、再分配、互酬性、交換という方向に沿ってパターン化された制度に埋め込まれているものと言えるだろうか？ 異質な文化間の交易を可能にして促進するために、どんな仕組みやデバイスが創り出されただろうか？ そして西洋の貿易は、奴隷の需要圧力の下で、西アフリカ商業手法に対してどのように適応したのだろうか？

ベナンギャップの気候的な特異性と、ダホメの地理という規定の枠組み以外にも、奴隷貿易の悲劇は、制度発展の基礎を形成した歴史的制約にも注意を払うべきだと教えてくれる。だから私たちは、自分たちの状況をアフリカの環境に投影するのは慎まねばならない一方で、この人類史の章において見つけられるかもしれない答の要素を、私たち自身の問題に適用できるようにしておくべきなのだ。

## 第Ⅰ部 歴史の枠組み

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

ダホメ王国がギニア沿海部に1727年に登場したとき、それは新生王国で、歴史はまだ百年にも満たなかった。無人の土地における、民族的に入り混じった集団に対して無理に支配を押しつけ得た、単なる攻撃的な地元部族だったものが、いきなりその軍事的な効率性を恐れられ、入念に構築された外国貿易や安定した通貨、そして傑出した行政力をほめそやされる存在として台頭してきたのだった。歴史学者にとって、慎ましい出発点から国家機構の集大成へとこれほど急速に台頭したというのは、問題となる。

このダホメは、19世紀の地図に登場するダホメではない。地域的にずっと小さく、沿岸から100キロほど内陸に入った、到着までに一日強の距離にある高地で発生した国となる。かなりの戦闘を経てそれが拡大し、19世紀の植民地化以前のダホメ人をやがて包含する領土へと広がった。その栄枯盛衰や、その拡大をもたらした刺激は、それを形成した物理的な型、つまりその限られた領土、そして海岸との関係で野心的な位置条件から生じたものであり、それを生み出したのが通称ベナンギャップだった。

西のコウフォ川から東のウェメ川まで、この国の平均的な幅は80キロほどで、全体として1万から1万3千平方キロほどの地域となり、人口はおおよそ20万人ほどだ。これは北東に隣接する、ヨルバ系のオヨに比べれば、ほんの数分の一の広さだ。ダホメは典型的な東アフリカの人口構成で、断片化した民族集団が、ほとんど切れ目のないサバンナの生態系に適応している。そこにはアブラヤシ (*Elaeis guineensis*) が点在し、寄せ集めの人々がまばらに定住していて、彼らにとってはタブーとなる海を、強迫観念的に恐れていた。ダホメの東と西に隣接する国も、やはり沿岸部を嫌っていた。その国々の首都も、ダホメの首都アボメイと同じくらい海から遠かった。アシャンティの首都はクマシ、ベナン市はベナン王国の首都で、ヨルバ人の住むヨルバ王国の首都は、古都オヨだ (Forde, 1960: 135)。

地理的な存在としては、ほとんど何の特徴もないブッシュ地域だったダホメは、天然資源や自然のフロンティアもない。唯一あるのは、コウフォ川と、南東部の角にあるアテム湖だけだ。深い防衛を行うには小さすぎ、部分的に森はあるが、戦術的な優位性をもたらす川や山もない。こうした欠点を補うために、優れた軍備がどうしても必要だった。ダホメは、生

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

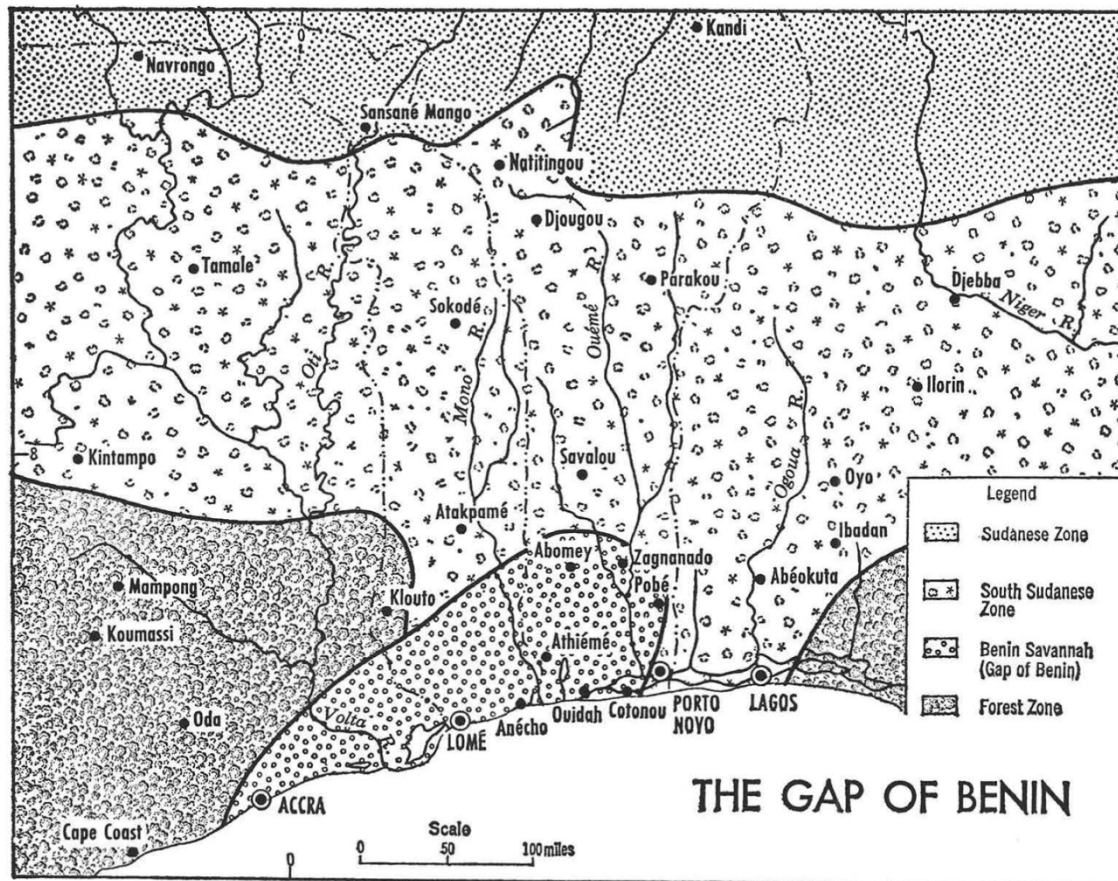


図1 Paul Mercier, *Cartes Ethno-démographiques de L'Afrique Occidentale*, Feuilles No. 5, I.F.A.N. Dakar, 1954 の地図2部分を少し拡大したもの。

存在に必要な火器が唯一やってくる沿岸を完全に避けるわけにはいかなかった。ベナンギャップは、頭部と西部の森林地帯を破り、内陸のダホメを沿海の沼地と結びつけた。全長3000キロほどの海岸線のうち、森林がないのは500キロに満たない。そして幅50キロほどの海岸線では雨期がずっと穏やかなため、気候もよく、特にダホメの南にある短い部分では、土も肥沃になっていた。

このフランス人が「穴」と呼んだ地域はつまり、大規模な「造化の戯れ」というわけだ。数千キロ——セネガルからニジェールに到るまで——にわたり、西アフリカの内陸部に海からアプローチできるのは、河口部だけだった。ここでの記述のベースとなっている民族人口的な図を作成したポール・メルシエは、この西アフリカ地域について大まかに次のように表現している。

それは海岸からサハラまで広がり (中略) サヘル、スーダン、バオール、ベナンと呼ばれる緯度的なシーケンスでの、気候的、植生的なゾーンを構成している。だが、きわめて重要な事実がこの秩序を乱している。それは、ベナンギャップの存在であり、

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

これを通ることでスーダンの気候の影響が、まっすぐ海岸にまで到達できる。だからこれが、西にあるギニアの森林地帯を、東にある中央アフリカ森林地帯と隔てているのだ。この間隙 [trouee] は、ほとんどアタコラ山脈と並行して影響を及ぼす。この山脈は南トゴで始まり、西ニジェールあたりで次第に下がるものだ。この気候的なアノマリーを説明するのは、我々の責務でもないし、またそれだけの能力も持ち合わせてはいない。この問題については、J・リチャード＝モラードの表現を少し引用するにとどめよう。「三点岬 (タコラディ) からはじまり、沿岸はモンスーンを受ける。寒冷な海流が沿岸近くまで流れる。トト＝アタコラ山脈は、スーダンから流れる東部の気流をはねかえすので、それが南へと貫通する。冬には、じじ続きの赤道アフリカがハーマタン[上部ギニアの沿岸での乾燥した陸風] を吸い込む」。つまり、気候がなぜ深い森林の気候ではないかを説明する理由として考えられるものは4つある。

ベナンギャップに相当する沿岸地域について、メルシエはリチャード＝モラードの表現を踏襲している。

[アタコラ山脈と並行して南東に、つまりベナンギャップの方向に動くと] 次第に二つの雨期のリズムが強まる。海岸に近づくにつれて降水量が減る。山脈が海岸から立ち上がるロメで、最も降水量は少ない。「季節のリズムはまだ赤道気候だが、雨は穏やかだ。スーダン性大気はその叩きつけるような激しさを示さない (地域のハーマターンは貿易風としてしか登場しない)。これは赤道の境界地域であり、アブラヤシはすでに生えているが、穀物植物、特にトウモロコシもまだ十分に危ない。要するに、赤道の土地ではあるが、処女森林が登場するほどではなく、したがって人間に耐えられる限界の範囲内となっている。(Mercier, 1954b: 4-6, および Richard-Molard, 1949: 18-19, 43 の引用; 翻訳は著者)

これに加えてメルシエは、この事実がまちがいになく人間的な含意と社会学的な重要性を持つと述べている。

上部ギニアの他の内陸国家にとっては、海岸を避けるのがいちばん楽だった。だがダホメは、火器の確保で奴隷貿易に依存していたため、海岸との直接的なつながりを求める必要があったが、同時にそれに伴う面倒は避けるべき大きな理由もあった。つまり気候と植生のこのギャップは、内陸部と海とのいやいやながらのつながりを形成することになったわけだ。



## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

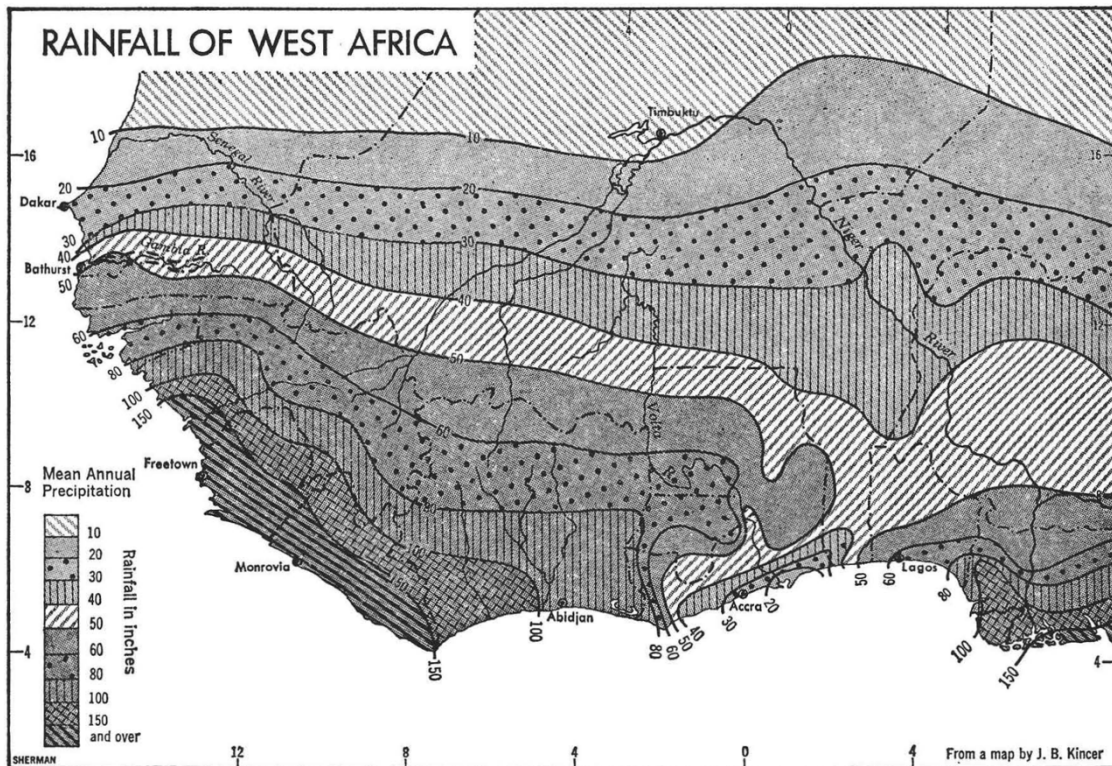


図 2 Rainfall Map of Africa by J. B. Kincer, "Land Classification Map of Africa," H. L. Shantz and C. F. Marbut, American Geographical Society Research Series, No. 13 併載, Plate II の一部

これがダホメの歴史を形成した。

海岸の干潟に住む人々にとっては、自分の居住地が周縁的だというのは安全だということだった。300 キロにも及ぶ相互につながった水路は、北部からの攻撃からは沼によって守られていた。ポルト・ノヴォ、大ポポ、ウィダなどがそうだった。これらは島の隠れ家、浅瀬、流れの変わる川、狭い「水路」などの戦術的なボトルネックを形成していた。内陸部のアルドラ王国もこうした条件が有利に働いていた。アシャンティ、ベナン、オヨなど他の内陸国家も、地理条件により安全が確保されていた。だがダホメは内陸国家に留まることはできなかった。当初から「そして一世紀にわたり、ダホメは近隣国からの攻撃を撃退するのに大いに苦労していた」(Forbes, 1851 :87)。銃を手に入れるためにアフリカとアメリカの奴隷貿易に依存していたので、ダホメ人は海岸部でも軍事的に勢力を確立するしかなかった。だが干潟ネットワークを陸軍が掌握するのはむずかしいし、また近隣の海洋民族や漁民から防衛するのもなかなか手間だった。そうした人々は、おおむねこっそりと、だがときには公然と白人たちの海軍に支援されていたのだ。ダホメは世界の中で恵まれた立地ではなかった。

ダホメの領土は、もっと大きな国家社会の一部となったことはなかった。そうしたものが

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

あれば、その断片が新しい国家構築の材料となったかもしれないのだが、また民族的にバラバラの住民たちが、部族的な組織を持つこともなかった。この点でアシャンティ族やヨルバ族とはちがった。そうしたものがあれば、帝国の均一性に近い連邦を作る事もできたかもしれないのだが。だからといって、宗教的な伝統というセメントを軽視するものではない。宗教はダホメ文化において、人々をまとめあげてあらゆる面に浸透する力を持っていた。祖先崇拜はまた、王族への忠誠をもたらし、これが人々に共通の信仰を与え、王室はその驚異的な年次儀式において、豊穡さと鷹揚さの後光を持つ、光り輝くシンボルとなったのだった(年次儀式は第3章で詳述)。

日常生活にもっと近いところでは、土地へのつながりは、血縁集団または氏族の僧俗財産という高位の水準と、村落生活という一般水準の両方で維持されていた。この社会では、存在の有意義な表現が、村民の平等性と、その専制主義的な対極、つまり貴族的アマゾン女性戦士の軍団の禁欲的な規律や、王家自身による責務の厳密な執行との両方にあらわれていた。フランスの歴史学者 E・F・ゴーチエはダホメ王家を、黒人世界における最も発達した政治組織形態と呼んだ (Gautier, 1935: 129-30)。確かに、嫌悪を催す残虐行為、宗教的な大量殺人、政治面での慢性的な裏切り技法などが、こうした高度な業績には伴っていた。それでも、ダホメ社会は緊密な社会を構成しており、連帯の絆で結びつき、それにやがて打ち勝ったのはむきだしの武力だけだった。

かつてのダホメの経済研究を見ると、極端な官僚制が地元生活の自由と自立性と共存していたという点で、現代の読者は感嘆せずにはいられない。外国貿易の執行は、専制主義的な王家の舞台で行われたが、「ブッシュ」つまり地方部は、おおむね国家領域の外にある社会組織を維持していた。低位階級の人々が暮らす村落や、耕作地を囲む世襲の居住区や、相続される血縁所有のアブラヤシは、中央行政の活動からは切り離されていた。社会は全体として、国家社会と非国家社会で構成されていた。というのも村と、それ以上に氏族の居住区は、絶対に国家の手の届かない世帯の集合体を表すものだったからだ。このように、ニグロ国家機構の二つの頂点、つまり最近にできた王家と、古代からの家族的な居住形態とが、どちらも最高の安定性と持続性を持ってくみあわせり、自発性と制約のバランスにおいては、珍しいほどの完成度を持つ構造を生み出したのだった。

ピラミッドのてっぺんでは、ニグロ国家は無類の権力集中を創り出した。それは王家に世襲される、ほとんど専門的な種類の王制だ。中世ヨーロッパのアンジュー公国、近代ヨーロッパではホーヘンツォレルン一族が、関連した国際的な諸国に王の候補者を供給していた。西アフリカではイレ＝イフェ・ヨルバが上部ギニア沿岸に、カタクレを目指す候補者を大量に供給していた。カタクレとは、ずんぐりした無装飾の黄金の玉座のことだ。ケトゥ (阿保目の 80 キロほど北東) では、本当の建国の王エデと並んで 9 つの王家 (のちに 5 つに減っ

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

た)があり、「順番に」支配した。アボメイのはるか西、トーゴにあるタドでは、ヨルバ族のアジャ分派が広がり、新しい聖都アラダを創建して、そこから新たな王たちの世代が生まれてポルト・ノヴォに広がり、やがてダホメにまで到達した。

社会のピラミッドの底辺では、人々はむき出しの土の上にすわる。そこでは西アフリカの相当部分でのニグロ居住地に必ず伴うものとなる居住形態が編み出された——拡大家族が、男とその兄弟と、妻や息子、未婚の娘たちと暮らす、家が集まった集合家屋だ。こうした壁で囲まれた家屋または集合住宅は「集合体」を構成する (Herskovits, 1938[1]:137)。ダホメでは、この集合家屋は男系血族集団の男子メンバーのほとんどが暮らす場所となる。こうした血族集団は、ハースコヴィッツが「氏族 (シブ)」と呼ぶものだ。こうした男たちを中心に構築される拡大家族が、小屋や屋根を葺いた家屋の集合体に暮らす。このパターンは、社会行動の生物学的、身体的、道徳的な決定要因を反映している。だから近隣は血縁、氏族、宗教という絡み合う構成の基盤として機能する。こうした形で構築された制度は、人間の考案したものとしてはほとんど破壊不可能に近いほどの強靱さを獲得するはずだ。

国家構築の作業は面倒だった (第11章参照)。古いダホメは、移民たちが残していった残余の地域という性質を持っていた。もっとみんなの欲しがる領土がすでに定住され、そもそも近隣諸国には、防衛力のない人々の集積地として以外、まるで使い道がない地域だ。奴隷を狩るための襲撃の獲物としてはお手軽で、必要なら余剰人口をそこに放出すればいいという、ただの隙間でしかない。

つまりダホメはまさに、ポール・メルシエが無人の荒野と呼んだ土地なのだった。彼はそれを、はるか北方と近接した南との間に横たわる権力の真空地帯を構成するものだと述べる。北は一連のニジェール帝国、マリとソンガイで構成され、その東にはハウサ国家が続く。南にあるのはヨルバからベナンを経てアシャンティへと続く、小さな海岸王国だ。メルシエは、この南北の漏斗を横断する、東西の水平的な文化的接触に関する E・F・ゴーチエの拙を受け容れることで、この地域をさらに狭めようとする。その文化地域の東の源となるのがヨルバだ。彼らの遠大な影響力は、黄金海岸から内陸部に広がる西部の森林に到るまで弱まることがない。メルシエはこの見方の裏付けとして、その東西地域の低密な帯を生み出した、一連の奴隷狩り襲撃による人口学的な証拠を挙げる。この帯はダホメの西に隣接するトーゴ中部から、ダホメ中部へと続き、その東部にあるヨルバの同じ緯度地域にまで見られるはずだとされる (Mercier, 1954b:6-9)。

ゴーチエは正当にも、ダホメのサバンナで分断された東西の赤道森林ブロックは、まったく性質がちがうものだと指摘する。ギャップの東にあるのは古代ヨルバ国家や国民たちが暮らす森林地帯で、耕作地がヤシの木の下にあって、人口密度も高く、いくつかの聖都が投射するエネルギーにより維持されている(1935: 121)。何世紀にもわたり、宗教的な伝統のお

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

かげで南西部、ベナンと沿岸部に小さな居住地が生まれ、さらに北西の軍事センターである古都オヨにも居住地ができていた。ギャップの西側には、黄金海岸と象牙海岸の原始林が広がり、それがリベリアまで続き、細い無人の浜辺から厳しい後背地に到る道を、高い山脈が遮っている。ダホメ自体はほとんどがブッシュだ。イレ＝イフェとヨルバは、この地域の少数民族の多くに対して外部から宗主権を使い、政治的な影響を及ぼしたが、併合しようとはしなかった。

その人口はおおむね、東部からの移民の残党だ。そうした移民は、数世紀にわたりヨルバから、ギャップの西境となるモノ川へと横断していった人々だ。次々と生じた移民の波が重なるところ——ときには少し逆戻りした人たちさえもいた——では、その重なった層がいまだにたどれるが、そのほとんどは土着の「未開ニグロ的」部族と混血している。この地域を内部から政治的に統合しようとする動きもなかった。

おおむね同じ方向に沿って、エリートの移民も生じた。これは小規模だが決定的だった。王族の子孫たちがあの王のゆりかごたるイレ＝イフェや、そこからのご先祖の移住先となったもっと最近の聖都から移住していったのだった。友人や召使いたちがそれに従ったこともあり、彼ら自身の血族だけが移住したこともあった。これによって、半宗教的な権威と圧迫感を持ち、王家という職能の実施において真に驚くべき訓練を受けた、大量の王族が存在することになった。

血族集団が交互に出てきて、都市の王を交替で務めようと申し出るかもしれない。イレ＝ヘ一族の支配者の基準を見るため、まずはヨルバの西に隣接する小さな独立国に目を向けよう。ダホメの歴史研究者として直近のフランスの役人は、この地に人生の相当部分にわたり配属されていた。故エドゥアール・ダングラス (1957-58) の業績をここでは詳しく見る。彼は個人的に国勢調査をまとめつつ、地元の一家の回想を元に 17 世紀半ば頃以来のケトゥ史を再構築した。アボメイの北東にあるサヴェと同様に、ケトゥはずっと重要度の高いオヨやベナンのヨルバの分離都市よりも最近になって創建された国だ。口承によるとダングラスの時代におけるケトゥ支配者は、イレ＝イフェの系譜で 48 代目だとのことだが、歴史的に裏付けがあるのはその最後の 10 人だけだ。伝承は、最初の移民の日を 11 世紀というはやい時代に置くことで、イレ＝イフェとのつながりを温存した。伝承と歴史の双方での重要なポイントは次の通り (Dunglas, 1957-58: 19-21):

ケトゥを創建したエデ王は、最も早い王族リーダーから六代目にあたる。その初代、イッチャ＝イクパチャンは、イフェ＝イフェを離れて西に向かい、200 キロほど離れたところに自分とその部族の新居を求めた。イッチャはオケ＝オヤンで宿営した。時間がたつにつれて、息子たちが別れていった。そのひとりオウェは西に向かった。も

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

うひとりはサヴェを創建した。三人目は最も遠くまでさまよい、オヨの創建者となった。オヨはながいことヨルバの軍事首都だった。イッチャ=イクパチャン自身は息子オウエの元に行き、二人で西へ進み、アロ村を創建した。イッチャがそこで死ぬと、オウエはオケ=オヤンの村に戻り、父の墓を建てて数年とどまった。

イッチャとオウエのアロ移住に同行した王族は全部で九家だった。オウエが死ぬと彼の後継者がその九家から選ばれ、その後は交替で選出された。その七番目がエデ、歴史的にケトゥの創建者とされる人物となる。彼はアロに定着し、イッチャとオウエはやがてそこに埋葬された。ここで一族はさらに分裂した。エデの息子三人が別々の方向に移住したのだ。エデ自身は先祖の許しを請い、彼らを忘れないと誓い、忠実な狩人にして道先人であるアラロウモンと一緒に先に進んだ。この案内人が追った目印は、彼が狩りの際に気がついていた巨大なイロコの木だった。ここで伝承が歴史と一体化する。1922年にその高木が雷に撃たれた。それはケトゥの本当の場所に立っていた。ここに最初の入植者たち、後にダホメ貴族となるフォン集団の人々がブッシュに定住し、移民ヨルバ人たちに、自分たちの隣の場所を許した。ダングラスによれば、振り返って見ると、エデがケトゥ王として戴冠した歴史的な日付は1748年だ。伝承によるとその祝宴は一年近く続いたという。死んだ王の葬儀から21日後、首相は評議会全員を招集して、次に順番を迎える王家の中から、全員一致で新しい王を選ぶことにした。できれば、昔からケトゥにずっと暮らしていたのではない王が選ばれるほうがいい。

選出された王が公表されると、数時間にわたり大騒動となった。新王に対する無礼な糾弾、すさまじい罵倒、呪詛が当然のようにぶつけられた。翌朝、懐柔が始まり、どこかの時点で王が横取りした女性はずべて、正当な夫たちの元に返され、王の私的な借金はたつぷりと利子をつけて返され、必要なら亡き王の財宝庫も利用された。「ファ」と呼ばれる占いで決められた「適切な」日に、戴冠に先立って王の遍歴が始まった。まずは伝統により先祖の記憶とつながっている近隣の歴史的な場所が訪問された。それから儀式的なスケジュールが始まり、その中で王は象徴的にも物理的にも、先王エデのアロからケトゥに到る、村の宿营地から未来の首都までの道のりを体現した。その道中に彼は、様々な記念行為を行う必要があり、その後にやっとケトゥにたどりつく。

遍歴が終わると、続いて三つのちがった住居における、儀式的な隔離期間が設けられる。魔法イニシエーションの家における三ヶ月の滞在の初夜に、国務大臣が王に、人をなだめる話し方の秘密を伝える。翌朝、王は家を夜明けに離れ、国務大臣が日中は彼の身代わりとなる。王は高門から入り、町の境界を越えて、大市場へと足を踏み

## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

入れる。彼は莊嚴に正当なる王として宣言され、イッチャ＝イクパチャンにつながり、その親族関係もすべて含む系図が布告者により朗唱される。さらに三ヵ月にわたる特定の住居での滞在はエデの忠実な案内人アラロウモンを記念するものだ。その後彼はさらに三ヵ月を、イフェ市を象徴する宮殿で過ごし、それに伴い先祖の支配者の称号である「アフイン」と呼ばれる。その後、王は藁でできた建物を訪れる。この建物はかつて鉄を溶かしたヨルバの鍛冶場にちなんで名付けられている。そしてやっと王は宮殿に入る。その受付で、仮の住居で身代わりに残した大臣たち数名が再び登場する。王が列席する初の評議会会合が開催される。オヨとイレ＝イフェの王家には、特別な伝令が新王の戴冠を伝えに送られる。

こうしてダホメ東部湿地にイレ＝イフェ王朝が、二つの小王国ケトゥとサヴェのカタクレで戴冠することとなった。ダホメの北東部で常に脅威となっていた偉大なオヨ軍の王家指揮官たちも、エデ王と似たような伝統を持っている。

こんどはダホメのアラドクソヌに目を向けよう。ここは別の部族に属している。ヨルバ王朝の西のアジャ族だ。このイレ＝イフェの分家は、それ以前の世紀にイッチャ＝イクパチャンよりはるかに西までさまよい、北部トーゴのタドを中心地とした。

東部の王朝中心地2ヵ所、イレ＝イフェとオヨは、西の別の中心2つ、タドとアラダと共に、歴史的な期間のほとんどにわたり裏付けがある。この後者のほうはもちろん、アジャのアラドクソヌとのつながりが強い。権力の間では、遠くのオヨの威光が傑出していた。その軍事的な影響力はダホメを完全に横断し、その最南西の端にまで到達していた。そこにあるアラダは、オヨを常に恐れつつも、オヨの利益になるのであれば庇護も受けられる。北のアジャ首都であるタドは、地理的に切り離され、友好関係は中立だったが、南に隣接するアラダは、ダホメを海岸部と隔てる問題の多い緩衝国であり、干潟部族や浅瀬部族の丸木舟艦隊の支援を受けられた。

アラドクソヌ部族台頭の物語は、その発祥地であるダホメ西縁から、平原の中央部、そしてやがては東部へと進み、やがて歴史的ダホメのほとんどが支配下に置かれる。一族の道のりの初期は、とても征服と言えるようなものではなかった。それはむしろ、隙間に公然と居すわるといふに近いもので、ケトゥ王族がエデの指揮下で、人口のまばらなフォン国に静かに侵入したときにやったのと同じことだ。暴力が登場するのは、後にアボメイで地位を確立し、ダホメ領となるものの掌握に向けて王朝が進軍して、無慈悲な地元戦争が続くようになってからのことだった。ゲデ族、オウエメノ族、チ族など「内部の敵」に対する戦争が常態となった。

アジャは、ヨルバ族の中で初期に当方に移住した最大の分派であり、ニジェール川の巨大



## 第1章 内陸王国とベナンギャップ

デルタ右岸にある共通のゆりかごから、最も遠くまで移動した分派の一つかもしれない。今日のアジャ族は人口15万人ほどで、旧仏領トーゴと西ダホメの一部にいる。アジャ族の影響力の中心はタド王国で、アジャ移民に参加した王家が定住した場所から見てモノ川浅瀬の反対側にある。その後の度重なるヨルバ移民の波で、18世紀末近くまで他の人々もこの地にやってきた。その移民は言うなればスローモーションのカエル跳びで、一世代か二世代ほど何もなく、それが次の集団がもはや移住を先送りできない状態に達するまで続くのだ。

このタドから、王族が南方のアルドラ王国に向けて移住した。このアルドラ王国もまたアテメ湖西の干潟でかなりの期間にわたり暮らしていた。こうしてコウフォ川岸のタド居留地アラダは、タドのイレ＝イフェの聖都へと成長した。

伝承によれば13世紀のどこかで、タドの王の娘が森林で雄のヒョウと遭遇し、それがアガッソウ王子の誕生をもたらした。彼の子孫はタドの玉座を狙った。その競争の中でアジャの王子が殺され、アガッソウ一族とその支持者アガッソウヴィは国を追われた。彼らは聖別された先祖の頭蓋骨とあご骨を携え、また一族のカタクレも持っていった。そしてアテメ湖に落ち着いたが、やがてタドの人々はそこからも彼らを追放した。彼らは北東に再び移動することにした。そこにはアブラヤシが生えていた。そこで彼らはアラダを創建し、アガッソウはやがてそこに埋葬されることになる。後にアジャ・タドノウはアラダ・タドノウを名乗るようになる。歴史的には、アラダは初期の地図上でアラダ国として登場するものと同じで、海岸のサヴィ（ザビエル）とジェキン（ジャキン）と隣接している。

17世紀初頭に、アラダのアガッソウヴィ一族の亡き王の息子三人が、継承権をめぐって争ったとされる。長男コクポンが結局勝った。その弟テ・アグバン＝リはヨルバ部族の基盤となるポルト・ノヴォの王となり、末子ド＝アクリンは北に向かいアラダには二度と戻らなかった（Dunglas, 1957-58: 83-84）。彼の孫は、ダホメ初の支配者となる。彼の遍歴の最終段階は、勇敢さ、裏切り、殺人の物語であり、おかげでやがて手に入った玉座は、掌握力の高い手によって勝ち取られたごほうびのように見える。

このようにしてダホメは位置づけられ、根づいたのだった。

## 第2章 奴隷貿易という課題

ダホメ社会に大きなストレスを与えた歴史的なできごとは、外部からやってきたもので経済の領域で生じた。外国でのサトウキビ農園から生じた奴隷貿易の爆発は、ダホメのすぐとなりにあるギニア海岸に到達して、独特の影響をもたらした。

結局のところ、内陸国家としてまとまりたいというかつてのダホメの抱いていた内心の意図を阻害したのは、ベナンギャップという地理的な事実だった。というのも海岸部で何か巨大な変化があれば、ダホメと小さな海洋国家の帯とを隔てている、細い沼地の帯などまちがいなくチッパされてしまい、ダホメとしても南に動かざるを得なくなるからだ。

奴隷貿易がもたらした運命の激変は、やがて新国家の危機を先鋭化させ、王家として傑出した行動を要請するものとなった。

ジェイムズ・ワットによる蒸気機関の発明にも匹敵するほどの、きわめて具体的な画期的できごとが、130 年ほど後にアンティル初頭で起こった——1640 年にサトウキビがバルバドスにもたらされたのだ。それから 20 年もたたないうちに、それは「タバコを超えて、農園からのロンドン輸入品の半分近くを占めるに到った」(Davies, 1957: 14-15)。大西洋貿易の激変が始まった。25 年しないうちに、やがて旧植民地システムと呼ばれるようになるものの仕組みがすべて確立した。1664 年創業のフランスの貿易会社は、政府出資によるもので、かのコルベールが自ら経営していた。

このアフリカ＝アメリカ商業の新パターンが、単に大発見時代の続きでしかないという広範な思いこみはまちがっている。実は大発見時代終焉から一世紀半にわたり、サトウキビ農園の台頭まで、そんなものは影も形もなかった。1683 年になってやっと、アフリカ黒人たちがバヒア（ポルトガルの海外帝国の首都）で見つかる。この黒人三千人は、植民地で使役されるためにアフリカで購入されたものだった。またその時点で、ギニア海岸自体で大きな変化があったという証拠もない。1664 年まで、バーベイン夫人によるとギニアの貿易は「トウガラシ、黄金、象牙に限られていた」。(Berbain 1942: 34)。イングランドでこれに対応する年は 1660 年、「アフリカへ貿易するロンドンの冒険」社が創業したときだ。「その主要な目的は黄金の探索であった」(Davies, 1957: 41)。そのわずか 12 年後に王立アフリカ社が発足し、これについて歴史研究者に言わせると「新会社は主に、英領植民地で需要が拡大しているらしき、黒人たちを取引することになっていた」(ibid.: 60)。だから近代の奴隷貿易は 1672 年に始まったとみることができる。

## 第2章 奴隷貿易という課題

農園はすさまじく儲かり、西インド諸島は王家や最高位の貴族たちの私有物となった。奴隷の調達がいまや「絶対的に必要」(ibid.: 277) と認識されるようになった。農園主たちの利害は法制を通じて実効性を与えられた。豊かな収穫に不可欠な奴隷労働の調達を実施するという条件で、民間貿易商は農園の利益の分け前をもらえることになった。ルイー四世のフランスでは、アメリカに輸出される奴隷一人ごとに、政府の報奨金が支払われた。

国際経済のシフトにより、大西洋をわたる津波が生じ、それが西アフリカ海岸の30キロほどの海岸に押し寄せた。これは、本質的にその参加者たちを豊かにするという性質の、通常の財の交換ではなかった。一世紀もしないうちに何百万人ものアフリカ人たちを、村から連れ去り外国の奴隷へとさらう貿易は、特異なものだった。平和的な交換よりは黒死病に似たものだ。強力な白人帝国という支配層は、急速に広がる砂糖農園のために、熱帯地域から労働力を供給できさえすれば、すさまじい富が手に入るという見通しに目がくらんだ。その結果が近代の奴隷貿易だ。

奴隷貿易のこの新しい変種が、以前のものと本当にそれほどちがっていたのか、という疑問もあるかもしれない。奴隷制は古い制度だし、だから奴隷貿易も古くからあるはずだ、と思うだろう。これは、18世紀の産業革命が固有の影響を持つはずはない、だって機械はそれまでも発明されて生産に使われてきたのだから、と主張するようなものだ。結局のところ、18世紀のアフリカ＝アメリカの奴隷貿易は社会史における独特な出来事だった。ジョン・ホーキンス<sup>2</sup>は、華やかな小話でしかない。1620年という時代になっても、ガンビア川の上流にいたイギリスの探検家は、アフリカ商人に奴隷を買わないかと持ちかけられた。彼はこう答えた。「私たちは、そんな商品は一切取引しない国民であり、お互いを売買したこともないし、自分自身の形を持つものを売買したこともない」(Jobson, 1904: 112 q. Davies, 1957: 15)。

西洋政府が奴隷貿易に与えた意図的な支援にほり、間もなくギニア海岸の商業に新しい仕組みが生じた。1670年まで、セネガンビアから黄金海岸までの海岸には商人がやっていた。だがその後彼らはベナン、カラバル、アンゴラにしか立ち寄りなくなった。後に奴隷海岸となるものは、とばされてしまった。アルドラとカラバルの間には黄金がなかったし、奴隷の需要はまだなかった。初期のイギリス人船長がベナンから帰国したとき、積み荷一覧には奴隷は載っていない (Dunglas, 1957-58: 111-12)。

1670年以後、「ギニア」という言葉は貿易用語として別の意味を持つようになった。公式には、ギニアはセネガルからアルダラとヴォルタ川まで広がっている。だがいまや、ヴォルタ川がその始まりとなった。同時に、その政治社会的な性格も変わった。

---

<sup>2</sup> 訳注：16世紀のイギリス私掠船/海賊船長。初めて大規模に奴隷貿易を行った人物とされる。

## 第2章 奴隷貿易という課題

貿易商は15世紀半ばからギニア海岸北部を訪れていた。だが定期的な奴隷貿易は発達しなかった。犯罪により追放された放浪者、敗残兵、村人や親族に借金をして拘束されたニグロを買う気が万が一あったとしても、アフリカの仲介業者との取引や、まして海岸の探索が、普通の貿易に携わる船長の儲けになることはあり得なかった。それでもその船長が、海岸で二、三人の奴隷を買おうとしたら、そんな余り者かこぼれ落ちた奴隷を買うしかなかっただろう。たまたま部族間戦争が海岸のかなり近くで行われていたら、棚ぼたでそういう奴隷が見つかったかもしれないという程度だ。というのも、アフリカの社会で自分たちの一員を奴隷として売り渡すようなところはないからだ。例外は、きわめて限られた殺人罪に対する罰としてだけだ。だから18世紀奴隷貿易の初頭には、白人貿易商が行った前触れなしの襲撃の話が出てくる。コッソリと沿岸部の村に侵入するのだ。寝込みを襲われたアフリカ人たちは、そのまま引きずって捕らえられるか、抵抗すれば高齢者や身障者と並んで虐殺された。こうした正気とは思えない襲撃が、象牙海岸からわずか数時間のところで行われた(Smith, 1744)。これは戦争でも貿易でもない。むしろ、冒険したがる船長と船員たちの娯楽であり商売なのだった。こうした人間狩りは、ある地方部すべてに対する大災厄へと発展し、それも沿岸部近隣に加え、川や隊商道路が虜囚の販売を刺激する輸送手段を提供する場合には、はるか内陸部におよぶこともあった。襲撃が集中した、保護のないブッシュや森林地域は、ときには人口が激減することになった。それでも、安定した供給フローを必要とする海外の需要がなければ、奴隷貿易の猛威は狭い範囲にとどまっていただろう。だから組織力のある後背地国家は、近代奴隷貿易——トインビーの用語では「壮絶な活動」——が始まるまでは、かなり安全だった。

セネガンビアの浜辺は伝統的に、アフリカ人の手中にあった。外国貿易商と政治的な独立国との永続的な関係は必要とされなかった。秩序ある取引については、浜辺の何か当局や、地元首長と白人貿易書との条約取り決めすら必要とされなかった。黄金、トウガラシ、象牙が一般に取引されたた、それと並ぶ専門特化した奴隷貿易は発達しなかった。重商主義的な発想のため、ヨーロッパ各国の政府が岸に職員を配備しようとしたときですら、白人は相変わらず間借り人の立場であり、所有者ではなかった。後背地の黒人王国は、自国領土を厳しく侵入から守った。決して土地を譲ろうとはしなかったのだ。その後ダホメがイングランドに対し、ウィダを永続的に占拠してよいという提案は、まさににらみ合いから生じた必死の政治的な一歩だったのだ。

西インド諸島にサトウキビが登場して、黒人奴隷の大ブームが生じた。アルドラ王国は上部ギニア海岸で最初の最も重要な奴隷貿易国家となった。1660年代末から、アルドラ王国とその属国ポポ、ジェキン、ランペ。オフラ、グレハウ(後のウィダ)、アジ・アチェ(ポルト・ノヴォ)は、内陸の奴隷が定期的に公益される場所となり、そのほとんどは、アルドラ

## 第2章 奴隷貿易という課題

王国領を通過してやってきた。17世紀始まりの頃には、近くに館を持っていたフランスが沿岸部のウィダ（フーダ族にちなんだ名前）に永続的な居留地を獲得し、その部族の奴隷貿易に参入した。王立アフリカ会社は、それまで近隣のオフラを重視していたが、やはり主要な居留地をそちらに移し、「一方のポルトガルもますます頻繁に訪れるようになった」（Davies, 1957:229）。1705年にカポ・コースにいたイングランドの総領事はロンドン事務所に手紙を書いて、新しいフランスの居留地を止めないとウィダ貿易が失われてしまうと訴えた。翌年、王立アフリカ会社のイギリス人取引員がロンドンに対し「フランスとの取り決めに交換を交わす」つもりだと伝え、二年後にはその取り決めに更新する、「なぜならオランダ人がすでにそうしているから」（ibid.: 279）と伝えた（この取り決めの条件はいまだにわからない）。K. G. デイヴィーズはこう加筆する。「18世紀初頭になると、主要奴隷国4ヶ国がすべて、奴隷市場としてのウィダの優位性を認識した」（ibid.:229）。そして「弊社の貿易の北端から南端まで」価格を調査した結果、彼は「それがウィダで最も安い」と本当に主張する（ibid.:237）。

18世紀最初の十年で、ウィダがこの世界貿易の新たな部門における傑出下中心として台頭すると、ダホメ史は決定的な展開をとげる。同国のすぐ近くで起きたこのできごとは、同国の立地が持つ昔からの矛盾を一変させる課題となった。ダホメはいまや、海岸への地理的および戦略的な依存を活用しようと決意していた。

奴隷貿易の予想外の局所化と、沖合の奴隷商人艦隊による経済的圧力は、ダホメの内陸国という地位を脅かした。これまで奴隷貿易が西アフリカの内陸国に対し、その存在すべてを圧倒する懸念として立ちはだかったことはなかった。国内的にも国外的にも、求められる奴隷の数とそれが引き起こす社会的な破壊の両面で、この供給状況は空前のものだった。年に最大でも数十人の奴隷が、散発的なスラッティー（市場で売られる鎖につながれた奴隷の手段）となってやってくる程度どころか、いまや何千人もの奴隷が何百ものまとまったコフィラス（奴隷の鎖でつながれた列または鎖行列）となって噴出するように運ばれてくるのだ。これを可能にしたのは、地元の収奪者から守るために建設された要塞型ロッジだが、そうした入植地はそれでもアフリカ人支配者たちの協調作戦で襲撃を受ける（Davies, 1957:6）。貿易で他に必要となってくるのは、成人を大量に輸送し、保管し、仮収容し、喰わせ、焼き印を押すための手順や操作だ。大規模アフリカ国家当局との暫定協定を見出す必要があり、たまに地域の入り組んだ政治への介入も必要となった（Davies, 1957:278）。ベナン、オヨ、アシナンティは軍事的に海岸から切り離されていた。間に小さな緩衝国がいくつかあったし、さらに岸辺へのアプローチが高密な森林となっていたからだ。南に向かってせばまるベナンギャップのせいで、ダホメにはそうした絶縁地帯がなかった。

ダホメの政策の理由は厳しいものだった。その危うい軍事的な位置のおかげで、防衛と奴

## 第2章 奴隷貿易という課題

隷貿易は不可分になった。確かに奴隷貿易は、王にとってきわめて巨額の歳入源だったが、陸軍と公共サービスの総費用を負担する王族にとって、私腹を肥やす余地はほとんどなかったし、さらには年次儀式の重い費用負担もある。ダホメは軍事的に準備万端の国家に囲まれていた。弱い近隣国への襲撃を強化して奴隷を手に入れるのは実現不可能だった。大規模な奴隷戦争と、強大すぎる近隣国に対する予防活動は一体となっていた。国家による奴隷貿易を行っていたのは、この地域ではアルドラ王国を除けばダホメだけで、それが絶え間ない戦争の連続へとつながり、おかげで同国における戦士の生き様に対する献身ぶりは、あらゆる通常の基準をはるかに上回って過熱したものとなった。そこにさらに、ヨーロッパ奴隷商人の傭兵的な意図も加わった。これは重商主義的な報奨金と官僚的インセンティブによりさらに硬直した。奴隷の需要は衰えを知らず、要塞や入植地は自分の船を使って奴隷を捜し求め、海岸部の首長国に奴隷を提供しろとうながし、賄賂を贈り、圧力をかけた。奴隷狩り国家ダホメと白人奴隷商人は、時に対立することもあったが、相互の顧客なのだった。

ダホメ戦争の悪循環に戻ろう。戦役には三つのパターンが区別できる。年次戦争は国の制度として実施された。まず、外国貿易向けの供給用。次に、もっと小規模ながら王族の農園の補充用。そして最後ながら重要なものとして、戦役に携わる男性人口半分をずっと扶養するためだ。フォーブスは、あらゆる兵士を交易者と呼んでいる。というのも王は彼らから、敵の首か、あるいは少なくとも生きた囚人ひとりを買取ったからだ (Forbes, 1851 [III] :90)。火薬を供給されたあらゆる兵士は、この要件を達成しなければ処罰された。先祖の墓に水を提供するために、何百人もの囚人が殺された。年次儀式での生け贄に加えて、囚人は虐殺されるのが通例だった。これは国民宗教である先祖崇拝で必要としていた。機能面では、これは「ブッシュ」の王に対する恐れを広め、恐怖を通じた規律維持に役立った。

こうした戦争は、些末な言いがかりで開始されたり、まったく理由なしに行われたりした。動員の儀式がこのイベントを告知したが、実際の攻撃は極秘に開始されるのだった。高速通信手段がないので、急襲はよい戦術の一部にとどまらず、堅実な戦略ですらあった。

ダホメが存在した二世紀半のほぼすべてにわたり、同国の戦争や戦争の脅しの根底には、永続的な周辺列強国についての警戒が存在していた。これは18世紀には十分に有効だったが、17世紀と19世紀にはそれほどでもなかった。その基本的な構図は次の通り。北東には強国オヨがあり、南と南西には中型国アルドラがあり、領土的にはごく小さなウィダが、海洋港湾を備えて南方にある。オヨの不満を抱く属国たるダホメは、ウィダという問題に直面し、背後にはオヨがおり、オヨの同盟国アルドラが脇に控えているというわけだ。この力関係のパターンは、1724年にアルドラ王国の主要都市であるアラダをダホメが征服した後ですら、完全に作用しなくなったわけではない。なぜならアルドラの沿岸進貢国ポポなどの同盟部族が相変わらず侮れない軍事力だったからだ。ウィダに対する戦役は、この敵対的な仮

## 第2章 奴隷貿易という課題

想敵を考慮しなければならず、ウィダが征服された後も、その海洋丸木舟の影が、この港湾に対するダホメの危うい支配を脅かし続けた。さらに白人の要塞や工場は常に、敗退したフエダやポボと共謀してダホメに刃向かってきた。ダホメは北部の内陸国であり、パワーポリティクスに深入りしすぎたおかげで、繰り返し奴隷供給が枯渇してしまったのだ。オランダ、フランス、そしてイギリスの総督たちですら、ときには海岸の現地人たちを煽動し、ダホメの支配を打倒すべく結集させたりした。

国としての敵はもちろんオヨだった。これが事実として確立したのは1708年に、23年にわたる努力の末、ダホメがウェメノウ族を滅ぼすのに成功したときだった。これは主にヨルバ人であり、境界のダホメ川にあるウェメ川岸辺に高密に定住していた。オヨの軍事力を、急成長するダホメと隔てる細長い緩衝国が消えたことで、権力闘争が活気づいた。この時点から、オヨは予防措置としてアボメイをいつでも潰す用意を調べていた。オヨの無敵の騎馬隊に震え上がったアガジャ王は首都から逃亡し、1712年にダホメは惨めな属国状態に貶められ、オヨが命じればいつでも近隣国に軍を送るよう義務づけられた。またダホメは毎年、巨額の貢ぎ物を義務づけられた。献納アイテムの中でも特に重要だったのは、銃の41丁セ

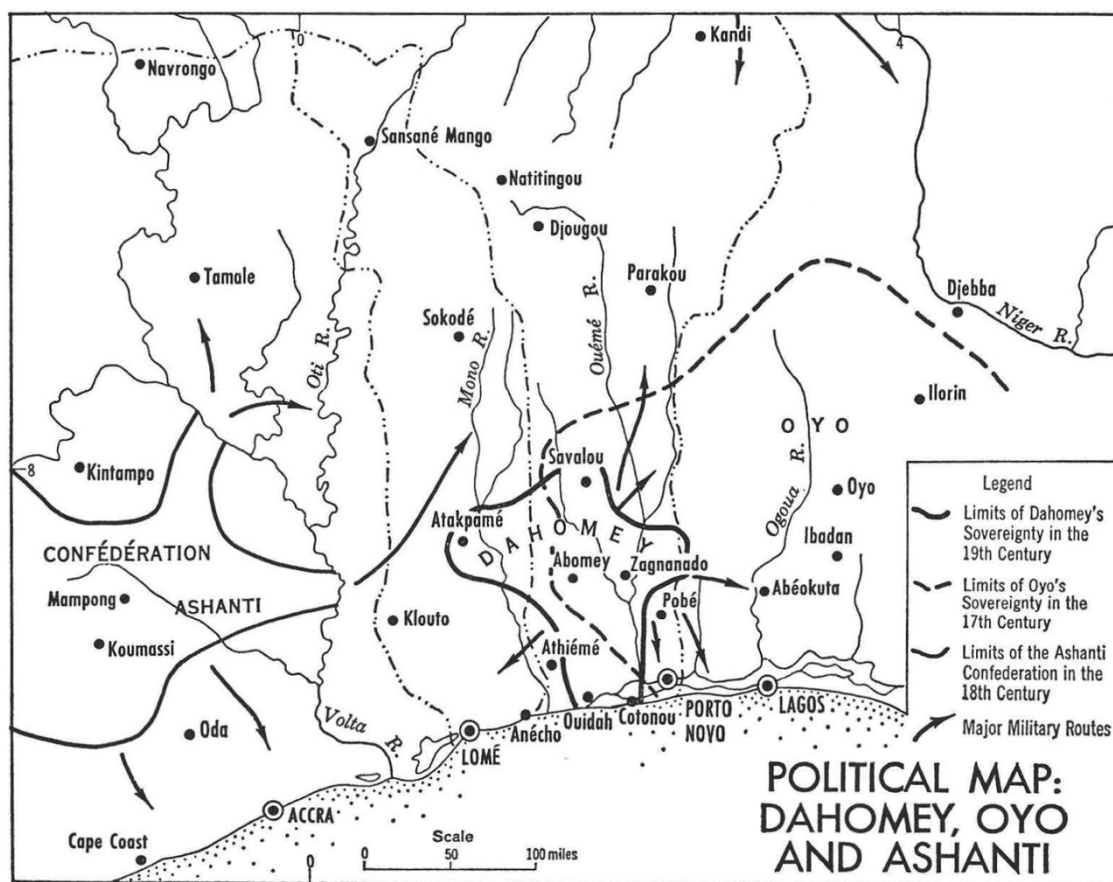


図3 Paul Mercier, *Cartes Ethno-démographiques de L'Afrique Occidentale*, Feuilles No. 5, I.F.A.N. Dakar, 1954 の地図3部分を少し拡大したもの。



## 第2章 奴隷貿易という課題

ットを41セットというものだ (Dunglas, 1957-58:170)。オヨは馬は北方から調達していたが火器を持っていなかった。火器は南部の港湾経由でしか入ってこなかったのだ。

私たちの知る限り、ダホメが銃との交換でヨーロッパ貿易商に提供できるものは、奴隷しかなかった。だがその奴隷は、近隣国との高価な戦争により捕獲しなければならない。オヨが衰退した1818年になってやっと、ゲゾ王はアボメイを強大な宗主国への重い貢ぎ物負担と厳しい従属から解放しおおせた。一世紀以上にわたり、オヨはウィダを通じてダホメに流入する武器を監視していた。アルドラ王国は友好的な緩衝国だったが、全体としてはオヨの手先だった。ダホメは銃や火薬との交換のための奴隷を配送するのに、海岸への安全なアクセスを必要としていた。ある裏付けのある事例では、ウィダの港湾当局は外国火器の大量貨物をアボメイへと回送したが、それに先だって用心のため、ハンマー部から火打ち石を取りのぞいた (Dunglas, 1957-58:152)。あらゆるダホメ兵には、戦闘では火縄を持った別の人間がついて、火皿の火薬に点火しなければならなかった。だから港湾アクセスはダホメにとってきわめて重要だった。もちろん、アルドラ王国による通行料や関税で収入がかなり目減りしたこともある。アルドラを排除したことで、王の臣民を沿岸部の蛇信仰の感染にさらしたり、白人と仲良くしたりする必要なしに、ダホメの監督下でウィダ港を通じて貿易を実施する方法が編み出せる。

ダホメは、海岸に軍事的に拠点を創ったり、ウィダを自ら支配したりすることに対して、強いためらいがあった。ダホメの王は私たちの知る限り、戴冠儀式の一部として海のタブーから己を解き放ったことはない。ポルト・ノヴォで黄金のカタクレにすわる彼の従兄弟たちは、そのタブーから逃れていた。本書第II部「経済のパターン」では、このためらいの根っこにはダホメが征服したフエダ王国を併合するのが不可能だったことがあったという制度的な証拠を検討する。ボスマン (Bosman 1814) とバルボ (Barbot 1732) は、ウィダとアルドラの両方を知っており、この政治的に敵対する二王国の言語と文化がほとんど同じだと断言している。ダホメとその支配集団フォン族では話が正反対となる。だが、こうした地域での帝国建設が、宗教や言語などの障害をものともせずに進むのがわかっているのだから、この場合だけ言語と宗教が絶対的な障壁になったと認めるべき理由があるだろうか？ こうしたパターンは、融合を禁止する生き様の内面化を反映しているのだ。

攻撃は段階的に進んだ。1724年のアルドラ掌握 (Smith, 1744: 169) に続き、フエダ王国の政治首都サヴィへの攻撃が起きた。経済首都ウィダの征服は、ヨーロッパ取引員が中立を維持しろと求められた後にやっと実施された。だがこの侵攻を放棄したり、一時的にでも退却したりすることになれば、オヨへの屈辱的な従属からの解放が絶望的になってしまう。ヨーロッパの貿易商たちですら、海岸の緩衝国がいきなり豊かになったために押しつけてくる屈辱は、なかなか我慢できるものではなかった。王立アフリカ会社の事務員は、ポルト・ノ

## 第2章 奴隷貿易という課題

ヴォで二年間高速され、同社が王に対して負債を抱えているからという口実で奴隷労働をさせられた (Snelgrave, 1734:66-8)。ポルト・ノヴォは、アルドラとウィダと同様に、白人貿易商とダホメとの強制的な仲介業者という特権を享受していた。ポルト・ノヴォやウィダは関税を法外に引き上げ、さらに輸入品の「第一先買権」を主張し、何よりもダホメをヨーロッパの高級財から恣意的に切り離した。

挑戦と対応という大まかな論理を象徴していたのが、ダホメの偉大な業績を生み出したいくつかの痛々しい状況だ。1727年2月のウィダ征服は、まるで最終的なものではなかった。フエダ王フホンは軍の一部と共にアテム湖と大ボポの湿地に逃亡し、陸中心のダホメ人はそれを追えなかった。フホン配下の酋長アッスは勇敢に戦ってウィダまで戻り、フランス入植しサン＝ルイとイギリスの入植地フォート・ウィリアムスの間に野営地を設営したが、ダホメの反攻で追い払われた (ibid.: 116)。フエダ族はオヨに、彼らの窮状に介入させるのに成功した。オヨ騎馬隊がアボメイに迫り、アガジャ王はブッシュに避難した。貿易が大打撃を受けて、ヨーロッパ取引員はその変化を後悔するようになった。不運なイギリス総督テストフォールは、フエダにポポと結託してウィダを奪還するよう説得した。ダホメは兵舎をサヴィから引き揚げており、輸送した奴隷貨物がウィダに到着してみると、同港が15000人強のフエダ軍に掌握されていたので驚愕した。フエダ軍はすでに湿地に蹴散らされたと信じていたのだ。

この非常事態でアガジャ王は父親から相続した女性ゾウ狩人の中隊を武装させることにした。彼女たちはこれまで護衛しかしていなかったが、いまや連隊となって後方につき、兵力を——少なくとも視覚的に——ふくらませることになった。この大胆な実験の結果として、正当にも名高い「アマゾン女性戦士」の制度が生まれた。この大規模な処女志願兵のエリート軍は、王宮のまわりに住み、引退すれば年金ももらえた。このアラドクソヌ王朝の独創性は、厳しい状況下で生き残りをかけて闘う新生国家にとっては財産だったが、その成功をもたらした秘密の源は、ダホメ社会における国家と非国家要素を統合している道徳的なまとまりなのだった。

ダホメ史を、ベナンギャップのもたらす挑戦に対する多重の対応という形で一般化して解釈するのであれば、ダホメ配下のウィダ経済はまさにこれが当てはまる。非商業的な内陸国家が、この港湾をとんでもない規模と複雑さを持つ貿易業務に適応させねばならなかったのだ。多くのヨーロッパ諸国や、無数の内陸からの仲買人たちと奴隷を取引するという入り組んだビジネス実施の細かい話を詳述するまでもない。外国財の流入は、専門的かつ金融的に実施されねばならない。重量や尺度を揃えねばならない。文化的な接触は統制され、国内の取引は望ましからぬ外部からの影響すべてから隔離されねばならない。特に入り込みやすい外貨の力に伴う影響は遮断する必要がある。貿易港の組織が、こうした一見すると対

## 第2章 奴隷貿易という課題

立する要件に見事に応えた様子をこれから見よう。

通過の状況を考えよう。ウィダは小さな王国で、近隣国としては、二つの後背地地域を持つ。ダホメと、少し北東に離れたアシャンティだ。ダホメとアシャンティの政治体制は、自国の政治文法的なまとまりを保つため、別々の切り離された通貨システムを維持するのが重要だということを認識していたはずだ。海岸のウィダーは、ダホメに政治的に従属させられた後でも、文化的には常に距離を置いていたし、別個の存在のままだった。ヨーロッパの会社役員や様々な出自のアフリカ商人たちが自由に交流した。アフリカ商人の多くはアフロアメリカ系で、ポルトガルのムラートや帰国したアフリカ奴隷などだ。ここは複数の通貨が流通しており、一方でダホメとアシャンティは、現代の目から見れば克服不可能な障害に見えるはずのものに直面していたのに、自国の金融システムを分離しておくのに成功した。ダホメは入念で不変の区分としてタカラガイだけを使い、黄金一オンスがタカラガイ 32000 個という固定為替レートを維持した——驚異的な業績だ。アシャンティは金粉を通貨として使った。金塊は王に接收されたからだ。タカラガイはアシャンティでは禁止され、金粉はダホメでは禁止された。ダホメ支配下のウィダでは、どちらも流通した。ヨーロッパ諸国の国内通貨である銀は、硬貨が流通しなかったためウィダではあまり重視されず、溶かして装飾品にされるのが通例だった。

ここでも、外国との関係で奴隷貿易の殺到はアラドクソヌ側に空前の工夫を余儀なくさせた。西アフリカの後背地国家は、ヨーロッパ列強には一切領土を譲らなかった。これは単に、独立主権を頑固に守るというだけの話ではなかった。ダホメの宗教は、国の土地を神々に捧げており、王はその一分足りとも譲渡してはならなかった。この方針はアラドクソヌ王朝の支配者たちによって逆転され、その逆転はしっかり維持された。伝統的な態度の元でなら、ダホメは万難を排してウィダ領有にしがみつかねばならず、そうなれば国はオヨの属領を余儀なくされるが、ダホメとしては武器の自由な輸入が保証されればそれで充分だ。解決策は、最強の艦隊を持つ大列強国との密接な協力を仰ぐことだった。

アガジャ王が、ウィダ攻撃以前からイギリスと協力しようとしていた文献証拠がある。アボメイを訪れた初の白人ブルフィンチ・ランベにさかのぼる王の接触は、文献から再現できる (cf. ブルフィンチ・ランベの手紙 Smith, 1744:171-89)。ウィリアム・スネルグレイヴ大佐は襲撃からたった数週間の荒廃したウィダにやってきたが、すぐに隣接するジェキンでアガジャの使者と会談し、アラダに来て相談にのってほしいと王に招かれている。やがてダホメの政策も成熟して、ウィダの独立主権をイギリスに譲渡するが、条件としてダホメへの武器供給は保証する、ということになった。ブルフィンチ・ランベは、二年にわたりアガジャの王宮訪問を強制させられてから、イギリス人の集落を丸ごとつれて戻るという約束のもとで、贈り物を大量にもらって退去を許された。ウィダを受け容れるようロンドン政府を説

## 第2章 奴隷貿易という課題

得するという努力は、その後支配者が変わっても続けられたが、なかなか実らなかった (cf. ウィルモット提督 Burton, 1893 [II]: 252)。実のところこのこだわりは、この状況下では決して不当なものではないように思えたが、植民地局はダホメ王の申し出の検討さえ断った。

19 世紀前半になると、オヨは衰退しつつあった。フルベ族の騎馬隊がヨルバ族の各種王国の国境線を押し戻し、分裂したエグバはアベオコウタ要塞を築いた。ダホメのゲゾ王は、オヨへの貢ぎ物という恥辱の負担と軍事的な統括から自国を解き放った。ダホメはいまや、国境を安全に確保できたし、奴隷貿易が衰えてきたら、経済をパーム油輸出に切り替えられた。やがてアボメイは、連帯の美德をすべて備え続けたアマゾン女性戦士に守られてはいたが、フランスの砲兵の前に陥落した。傑出した制度的な水準で行使される偉大な才能を持つ国ではあったが、優越した技術には勝てなかったのだった。

## 第 2 部 経済のパターン

ポール・メルシエは、ダホメがきわめて中央集権的な王国でありつつ、それでも宗教と村落の地元生活はきわめて強烈だったと述べている。経済の文やでも、国家当局の中央集権化された領域と、それと並列したかなり国家と無縁の社会とを区別できる。経済の国家領域は第 3 章で示す。国家のない経済領域は第 4 章から第 6 章で扱う。国家領域では再分配が主要なパターンだった。つまり財の移動は、実際のものであれ単なる傾向であれ、まず中央に向かい、そこから再び出ていく。非国家領域、つまり家族や地元の世界では、互酬性と家事が支配的なパターンだった。市場システムがないので、交換は二次的なものでしかなかった。市場は労働や土地を含まず、商品市場ですら孤立しており、まとまってシステムを形成することはなかったからだ。

### 第3章 分配：国家の領域

国家領域の中心制な制度機関は王家だった。神聖なる出自を持つと認められていた。王は人々と、神格化された先祖とのつながりであり、人々の生活の守護者でもあった。したがって王はダホメ経済で中心制な役割を果たした。毎年経済条件を検討し、将来計画を考案し、最低限のタカラガイを人々に分配して食料が買えるようにして、相場を設定し、贈り物を受け取ったり贈ったりして、通行料、税、納付を課したりするのは王だった。

#### 年次儀式

ダホメの生活における王の立ち位置が焦点となるのは、年次儀式という大規模な再分配祝宴でのことだ。これに際して王はダホメすべての集会の前に登場し、独立王権としての各種の責務を実施するのだ。年次儀式は経済サイクルで主要なイベントだった。国民総生産と外国輸入の面と、さらに国民の参加という面から見て、これは比類なき規模の経済制度だった。この地のあらゆる要人、行政官、役職保持者が集まり、文字通りすべての家族が、少なくとも一人の代表により一時的にせよ代表されている集会において、王その人こそが主役だった。丸1日にわたる上演の中で、王は贈り物、支払い、上納金を受け取り、その後この富の一部を贈り物として群集に分配する。

このプロセスの経済的な側面は、財やお金が中心に向かって動き、その後また出ていくという移動、つまりは再分配として分析できよう。これは王家行政体の財政を積み上げつつ、タカラガイや各種輸入品を人々に分配する最大の機会だった。高官たちの報酬もここで処理され、ブランデー、タバコ、絹、ローブ、じゅうたんといった奢侈品の価値ある報酬が彼らに支給された。外国の貿易商やビジネスマンたちは、王の歳入に相当額を拠出し、地元の行政官は、儲かる役職をもらっていたので、自分の収入の一定割合を王に渡した。こうした支払いは必ずしも公開で行われたわけではないが、王家によるお返しの贈り物は、最大限の効果を発揮するように、公開で演出されていた。

この儀式は毎年、ダホメ軍が戦争から戻ってきたときに開催され、アラドクソヌ王朝の王の下におけるダホメ人たちの宗教的、政治的な統合の象徴だった。人々が先祖を祭り、戦闘での勝利について彼らに感謝する機会だった。王は生者と死者との仲介者だった。大量の捕虜を人身御供にして、父祖たちの「墓に水を撒いた」。つまりは犠牲者の血を墓に撒いて、

### 第3章 分配：国家の領域

国民を改めて祖霊の世話に献身させるのだ。こうした慣習は、大儀式においてはさらに大規模に繰り返された。大儀式はダホメ王の死の公式な喪と、その後継者の戴冠の期間を記すものとなっている。

この儀式は、ダホメ生活の中核価値を示す。ハースコヴィッツはこう書く。

あらゆるダホメ人の生活においては、彼と神々の間にいるのが先祖たちだ。(中略)  
つまり先祖への敬意と崇拝は、ダホメ人にとっては生活に意味と論理を与える、大いなる統合力の一つと考えられる。(1938[1]:238)

ウィリアム・スネルグレイヴは、貿易商としては当然の見方だが、ダホメ軍の高官に対して、なぜこんなに大量の捕虜を生け贄にするのか、売ったほうが儲かるのに、と尋ねた。これに対してその高官はこう応えた。

彼らの国ではずっと昔から、あらゆる征服の後で、神々に一定数の捕虜を捧げるのが習慣なのである。(1734:46-47)

バートンは述べる。

ダホメにおける人身供犠は純粹に宗教に基づく。これは王の先祖に対する敬虔さを示す感動的な場面であり、見下げ果てたほどまちがってはいるが、まったくもって誠実なものだ。ダホメ王家は(中略)王としての地位を保ち、幽霊の宮廷を従えて死の国に入らねばならない。これが「大儀式」と我々が呼んだものの目的である。

そしてさらにバートンによると、あらゆる軍事戦役の後では

最初の戦争の収穫物たる捕虜とあらゆる犯罪者は、王のお供を増やすためのリクルートとして送り出されねばならないというのが作法なのである。(1893[II]:13,14)

王が関わるあらゆる出来事は、白人の訪問だろうと単に別の宮殿への移動であろうと、男か女の伝令により先祖に報告されねばならなかった。奴隷販売により追加の利潤が得られるという見通しがあろうとも、王は必要な生け贄人数から一人たりとも減らしたりすることはない。

この儀式は、大規模な財の徴収と再分配の機会だった。いっばしのダホメ人ならすべて、



### 第3章 分配：国家の領域

役職持ちも含め、このセレモニーに自ら出席し、王に贈り物を持ってくる。ウィダのヨーロッパ人たちやアフリカ諸国の使者たちは、やはり贈り物を携えて王に謁見するのが当然とされた。アボメイで何週間も続く祝宴の中で、王は自ら人々に財を分かち与えた。出席者は3、4万人にも及ぶ。王と宮廷人のために建てられた演台には、タカラガイ、ラム酒、布などの高級財が積み上げられ、王や宮廷の高官たちが、祝宴が続く間は毎日それを群集にばらまくのだ (Dalzel, 1793 :xxiii ff., 121 ff., 146-47)。実に多様な財が分配される。近隣国からの立派な綿布などの製造物に加え、はるかヨーロッパやインドからきたものもある。王への献呈品の規模は大きくちがっていた。海岸の貿易商からは豪勢な贈り物が期待された (Forbes, 1851 [II]: 173)。その一人は後に、一年の利益総額に匹敵するものを王への贈り物としてもってきた、とこぼした。

戦闘で捕まった捕虜たちは、このときに王に提示され、それを受けて王は、戦士や高官たちに、傑出した業績をあげた者には奴隷を送ることで公式な認知を与えた。こうした公式の贈答品交換は、ダホメの富と権力を祝うものであり、王と臣民との相互関係と義務を追認するものだった。

#### 軍

人と戦争の材料は王が集めて分配した。毎年、収穫の後に王は軍を率いて戦争にでかけた。軍は従者も含め最大5万人と推定されている。これは総人口の四分の一に相当する。常備軍は、すでに見た通り、驚異的な身体能力と戦闘での熾烈さを持つ女性だけだった。この常備軍を補うのが、男子人口に対する毎年の地方毎の兵役義務だ。あらゆる若い男性には、最低限の軍事訓練が確保されていたが、これは戦場の各兵に従者として少年を割り当て「若い頃から厳しさの中で訓練を受けられるようにするため」だった (Snelgrave, 1734: 79, q. Herskovits, 1938 [II]:80)。

この軍の組織は分散型だった。総指揮は王の役人が実施したが、酋長や各種町や地域の高官たちは、自分の軍勢を率いて戦場にやってきた。酋長たちは自分の兵を、戦役のために軍に提供することになっていたし、その一部、たとえばウィダの王の交易人などは何千人もの奴隷を持っていたから、年次の奴隷狩りに向けて連隊を丸ごと供給した。アハワンガンまたは戦闘長の階級はバートンによると「従者または奴隷を十人から百人戦場につれてこられるすべての役人を含む」(1893[1]:147, n.3)。

兵士たちの装備はそれぞれの主人が行ったが、一部の食品、たとえばハチミツは王の職員が集めて貯蔵し、あらゆる兵がそれを使った。酋長たちは自分の兵士が奪った戦利品を自分のものにできた。「捕虜を捕獲した兵士の酋長は、常に戦争で獲得した奴隷の所有者と見な

### 第3章 分配：国家の領域

される」と王はダンカンに語った (Duncan, 1847[II]:264)。アマゾン女性戦士たちは王の私兵とされ、彼女たちの戦利品は王のものだった。

文民権力と軍事力との分離は、ダホメに大量に見られた制度的な分割のもう一つの例だ。軍は、戦場以外では文民統制下にあった。それぞれ右翼と左翼を指揮するミンガンとメウは、王国で最高位の文民官僚なのだった。ミンガンの下にはガウ、つまり軍の最高指揮官がおり、左翼でそれに対応するのはポ・スだ。ガウは戦場での軍の式を行い、王すら超える指揮権を持つ。文民生活では最高のスツールにすわるのは常に王だが、戦場では王は低いスツールにすわり、ガウは高いスツールにすわる。

戦争で捕まった捕虜については入念な整理が行われた。先祖への生け贄用に十分な置きを確保してから、戦場で失われたダホメ人の数にきっちり対応する数の捕虜が置き置かれた。これはやがて、王の農園に分配されて喪失分を置きかえることになる。残りの捕虜は三つに分けられる。王の家事のために王に与えられるもの、王が奴隷として販売するもの、勇敢さの報酬として戦死や首長たちに分配されるものだ。

王家の農園に割り当てられた奴隷は、再販にまわすことはできない。スネルグレイヴは、王から追加の奴隷を買おうとして失敗したとこぼしている。

後になって、王は売れる奴隷の手持ちがないと言っているくせに、大量の捕虜ニグロを持っていて彼の畑を耕すなどの仕事をしているのがわかった。どうやら、いったんその仕事に採用されたら、陛下は極悪犯罪で有罪とならない限り決してそれを売らないようなのだ。(Snelgrave, 1734: 10~7, q. Herskovits, 1938 [II]:97)

#### 経済行政

北方のニジェール地域では、悲惨な飢餓は珍しくなかったが、ダホメ史には飢餓の記録はほとんどない。ここからダホメの農業政策の成功が判断できよう。この事実がなおさら驚かされるのは、年次戦争により労働力とリソースにかなりの損害が生じるからで、またブッシュが絶えず耕作者への脅威となっていて、ちょっとでも気をぬくとすぐに耕作地を侵害しかねなかったからだ。

「ダホメの王は領土すべてで耕作を強制する」とダンカンを書く (Duncan 1847[II]:310)。そして王自らがダンカンに告げたように「はるか昔に町 [ウィダ] の中とまわりの空き地はすべて、疫病の可能性を減らす狙いで耕作せよという布告を発した (ibid.: 268-69)。

新任の村落役人が、王と宮廷の前で就任儀式を行ったときに与えられた指令で、地方経済に関する王の政策は明確に述べられている。

### 第3章 分配：国家の領域

王は、ダホメでは首長は万人に己の働く場所をしっかりと掌握させよとのたまわれた。  
た。

王はダホメは広大な土地であり、万人はその仕事を暮らす場所に限定しなくてはならないとのたまわれた。このために地を耕す若者は何人たりとも草が刈られない  
うちは畑で働くのを止めてはならないのである。

王は、国はその (中略)[民に] 愛されねばならぬとのたまわれ、よって王はその民  
が国のある場所から別の場所に移住するのを禁じられたのである。というのも放浪  
者は土地に対する深い愛を決して抱けないからなのである。(Herskovits, 1938:67)

農業問題の継続的な行政は「農業大臣」トクポが握っていた。その下には「大農民」グレ  
タヌの長であるゼニとその助手がいた<sup>3</sup>。高官はすべて農園所有者であり、つまりグレタヌ  
の一人だった。農業役人の責務は、作物のバランスの取れた生産を確保し、それに必要なリ  
ソースを調整することだった。主要作物は王国の中で育成場所がちがっていた。たとえばア  
ボメイからあまり遠くない地域ではキビしか生産されていない。他の地域ではヤムイモか  
トウモロコシだけだ。ウィダとアラダには含まれた地域ではトウモロコシとキャッサバが  
主要作物だ。もし作物のどれかの生産が過剰または不足したりすれば、農民たちは転作を命  
じられる。ポール・メルシエが言うように「経済問題については厳しい統制があり、これは  
輸出作物——パーム油——だけではなく食用作物にも適用された」(Mercier, 1954c:210)。穀  
物供給が不足したら、穀物輸出は禁止された。主要な肉の源であるブタは集計され、数が減  
ると数が戻るまで屠畜や販売が一定期間禁止される。

当初から、王は保全措置を講じていた。パーム油の産出は王の勅令で保護され、ブッシュ  
の中に自生するヤシ以外からはやし酒を作ってはならないとされた。やし酒作りは、耕作さ  
れている若い木を破壊するからだ (Burton, 1893[1]:84, n.1)。作物の育成期には、すべての家  
畜は縛っておいて、作物を踏み潰さないようにしろと勅命が出る。

他の産物も同じく行政統制下にあった。ウィダでは町の二地区が製塩労働者にとってお  
かれ、この労働者たちの生産作業はウィダの総督と王宮の「塩役人」が監督した。伝統に基  
づき王は、生活必需品である塩からは収入を得てはならず、したがって塩の物納税は他の製  
品よりも少なかった。さらに塩は、タカラガイ一つ分の価値というごく少量しか変えない人

---

<sup>3</sup> 農業行政に関する主な情報源は Herskovits, 1938[1]: 112-25。

### 第3章 分配：国家の領域

物であれ、必要としているすべての人に販売されねばならない。

ハチミツ生産は全量が軍専用とされ、民間生産販売は一切許されなかった。ショウガは医薬品とされた。ハチミツ同様、民間生産販売は禁止され、流通は王家の役人が医療目的でのみ実施した。民間人は、トウガラシ生産は割り当て量にもとづいて認められていた。畑の持ち主は、ラフィア製の袋一袋分のトウガラシ収穫ができるだけのトウガラシ株を植えられ、それも個人用途のみが認められた。一部の地区は、市場販売用のトウガラシ生産を割り当てられており、こうした地区からトウガラシを運び出すときにはタカラガイで税金が徴収された。根菜は私的利用分だけしか育成できない。バートンによると、コーヒー、サトウキビ、米、タバコの耕作はウィダ近郊では禁止されていた。理由ははっきりしないが、おそらくこれが望ましからぬ贅沢品とされていたからだろう。

王国の食糧供給について王が責任を持つことを物語っているのは、王と地元市場との関係だ。市場は人身御供によって聖別されねばならなかった。そして人間の命を奪っていいのは王だけだったので、市場は王の直轄でなければならなかった。すべての市場は王の認可を受けて設立され、市場には役人が立って、秩序と規制遵守を確認した。すでに述べたように、市場ではタカラガイを使わないと食品は買えない。タカラガイは年次儀式で王の手から民に分配されたが、これは民草に食べ物を買う通貨を与える手段だった。同様に、王宮への訪問者はすべて、王の歓待で提供された以上の食べ物が欲しければ、タカラガイを贈られた。そして辞去の許可のしるしとして、訪問者はタカラガイを「こっそり」与えられたという。伝承によれば、それは彼らが帰路で食べ物を買えるようにするためだったという。

#### 国勢調査

王宮経済の再分配の仕組みは、きわめて広範な計画と行政の仕組みとつながっていた<sup>4</sup>。年次儀式の題目として登場する多くの経済問題は、一年を通じて王の行政による検討事項だった。人々の生活は王の責務となっていた。実際、彼の責任は経済のあらゆる側面にまでおよび、従って来たる儀式の準備の中で実に多くの行政活動が実施されていた。

大雨期が終わった直後、収穫が終わったら、王は年次の軍事戦役の用意を始める。これは徴兵と徴税のためのデータをもたらし国勢調査の実施時期となる。国勢調査は人口、農業工芸生産、家畜など、各種の生産と王国のリソースを調べていた。

---

<sup>4</sup> この部分と次の課税に関する部分の主要な情報源は Herskovits, 1938 [I] : 107-34; [II] : 72-79. 国勢調査への言及はまた Le Herisse, 1911:84 にも見られる。

### 第3章 分配：国家の領域

慎重に調べられたのが労働力リソースだ。総人口と、各職業分類の労働者数が数えられた。耕作者、編み手、陶器作り、狩人、製塩労働者、財を運ぶ荷担ぎ人、鍛冶師、奴隷だ。耕作者の数を数え終わると、穀物倉庫に所蔵された農作物の計量、王国全土のアブラヤシ、ウシやヒツジやニワトリの数、各種工芸品の生産量が集計される。こうしたデータを集計してから、王国の総生産に対して税がかけられる。穀物、パーム油、塩、工芸品などで、そこから次の軍事戦役向けの装備が確保される。それぞれの首長が王に提出する村の人口数の数字は、軍の各種師団への兵の割り当ての根拠となる。

この国勢調査では、運用的に文書記録の代わりとなる、巧妙な行政デバイスが活用された。だがなぜ全国規模の国勢調査が実にわずかな官僚的面倒しか伴わなかったかという最大の流は、民が自発的に法を遵守し、ルールに自発的に応えたからだ。この国勢調査は、物納とタカラガイによる徴税の基盤となった。これは再分配パターンの下で、国への財やサービスのフローの中身となる。国勢調査で集めた人口データは国家機密で、王しかそれを知らず、村長や地域の長が自分の地域についてその数字を漏らしたら、鉄輪絞首刑となる。

人口の国勢調査 (cf. Herskovits, 1938 [II]: 72 ff. ここでは大量に参照する) は以下のように実施された。王宮で、女性役人の指揮の下で、箱が 13 個用意される。それぞれの箱は二つに仕切られていて、片方は男性、片方は女性用だ。村や地区の長によって誕生が王に報告されるごとに、その子の性別に応じて該当する部分に小石がおかれる。年末になると、小石はすべて一段上の箱に移され、最初の箱は空になり、翌年に新生児の記録が繰り返される。13 番目の箱にある小石はそこで捨てられる。14 歳になったら子供は成人とみなされ、年次の成人の計数に算入されるからだ。王宮の別の部屋では、死を数える箱が保管されていて、同じようにして計数が行われる。各地区の死亡報告が王宮に伝えられ、戦闘での死者数を報告する任務を持った部隊責任者が二人いる。奴隷と捕虜の計数は別の役人二人が行う。彼らの報告に基づいて総数が求められる。

村ごとの国勢調査主計結果を含む袋が、四つの大きな袋に入れられる。これは男、女、少年、少女のそれぞれに対応し、それぞれをあらわす印が縫い付けられている——男性は短いトランクス、女性はビーズ、少年は男性性器、少女は女性性器を備えた人物像だ。さらに三つの袋がある。黒い袋は戦死者で、赤い袋は病死者、白い袋は捕虜だ。

ダホメの成人を数えるとき、男性がまず数えられる。戦闘動員の 10 日から 12 日ほど前に、各家族集団の世帯主は自分のグループにいる 13 歳を超える男性の数を報告しなければならない。村長は、報告を受けた男性ひとりにつき、小石を 1 個袋に入れることでそれを集計する。その袋には、その村を示すシンボルが縫い付けられる。たとえば籠編みの村なら、そのエンブレムは籠の絵かもしれない。

こうした袋は村長が自らアボメイに持ってくるか、あるいは各村長から袋を託された地

### 第3章 分配：国家の領域

区の長が持ってくる。各長は王の前で名乗りをあげ、するとその村の男性はどの軍部隊に配属されるかが告げられる。

軍が召集されたら、女性の勘定が始まる。軍の各部隊の指揮官は、それぞれの兵士に一家の女性の数を尋ねろといわれる。こちらも村ごとに、小石で記録されて王宮に送られる。その年、戦争に採られなかった男性の家族に属する女性は、戦役に出頭しなかった男性の数について、部隊責任者の委員会が各村から報告を受けてから数えられる。またこのときに、それぞれの村がどれだけきちんと軍への召集に応えたかがチェックされる。出兵の割り当て数があるわけではない。だが戦争が終わり、軍の指揮官たちがそれぞれの村から呼びかけに応えた男性の数を報告したら、この数字は村ごとの男性総人口を記録した小石とつきあわされる。兵の数が、村の総人口の半数を下回っていようものなら、村長は絞首刑だ。

経済調査と家畜の課税のための手順 (cf. Herskovits, 1938[1] :116 ff.) は以下の通り。王は年次ブタの頭数調査を開始するにあたり、屠畜人の世襲代表三人に対し、ブタを買った村の名前を報告せよと命じる。そこで名前の挙がった村に伝令が贈られて、村長と販売用のブタを持つ者全員が招集される。王が、ブタの新しい値段を設定するから、というのがその理由だ。出廷前に、村長はそれぞれの村のブタの頭数を数え、これが各村人によるブタ在庫の報告の精度チェックに使われる。そして複雑な統制システムが開始される。まず村人には、今後六ヵ月にわたり成年したメスブタの屠畜は愧死される。これは、メスブタの数を現状のままにして、この数字がその後の総数計算で定数と見なせるようにするためだ。次に、王国中の通行料徴収の関所すべてに、ブタは一切通してはいけないと命令が下る。そして最後に、あらゆる市場の担当官は、その後六ヵ月で市場で販売されたブタの頭を王宮に持ってこいと命じられる。この六ヵ月の終わりに、村長たちは村のオスブタの数を報告し、この数に、同期間に王宮に届いた頭の数を足すと、この期の冒頭に報告された総数と同じか少し多くなるはずだ。あまりに多くのブタが屠畜されて販売されたとわかると、一年にわたり豚肉販売停止令が出る。家畜税はこうやって集めたデータに基づいて決まる。屠畜場は、扱った動物の数に応じて課税され、さらにブタを飼育する者はすべて年にブタ一頭という基本料金を取られる。

他の家畜——ウシ、ヒツジ、ヤギ——については、これほど系統的な統制はない。こうした動物の頭数調査は、およそ三年に一度だ。こういう場合には、市場に常駐する廷吏により「大惨事」がやってくるぞ、との発表がある。たとえばウシの疫病、干ばつ、その他この調査の口実のためにでっちあげられた災厄だ。ウシの持ち主は、神さまを鎮めるための捧げ物として一頭ごとにタカラガイを1個持ってこいと言われ、その貝が王国すべてから集められる。王宮の女性担当官が、タカラガイ一つごとに小石を一つ脇にやり、動物の種類毎に別の山を作り、小石の山ごとに袋に入れてから、タカラガイを神殿に送る。それぞれの袋に縫

### 第3章 分配：国家の領域

い付けられたシンボルが、そこで数えられている動物の種類を示す——ウシの角、ヤギのヒゲ、ヒツジなら雑草と舌だ。そしてこの頭数調査にブタも含められていたら、ブタの袋には屠畜人のナイフのしるしがつく。税はこの頭数に基づき、それぞれの村は、頭数の一定割合を王宮に納める。ヤギだと 12.5% くらいだ。これを実施するためには、40 頭ごとに 5 頭を取るか、8 頭に一頭ずつ選び出すことになる。

#### 課税

王宮とその農園以外の王室の歳入源は、包括的な課税、科料、納付物の仕組みだ。ダホメの課税は包括的で、徴税、会計、統制の効率的な仕組みとつながっていた。脱税を見つける二重チェックのために間接的な技法がいろいろ使われた(cf. Herskovits, 1938 [I]: 107 ff.)。王国内の産物と国内取引はすべて課税され、税制は各種の経済計画と統制の仕組みにつながっていた。これらについては次節で述べよう (cf. また Le Herisse, 1911: 82-91 および Foa, 1895: 274 ff.)。

肉は各種の狩人により王宮に供給されていた。国民全体にとって狩りは重要な肉の源だった。家畜の肉の消費よりも、野生動物の肉の消費量のほうがおそらく多かっただろう。年次の狩りはいまだにダホメ生活の節目なのだ。

王宮には狩猟の長が二人いた、一人は狩人、一人は漁師の長だ。そしてそれぞれの村に狩猟長 (デガ) が置かれていた。アボメイ近くの狩りの神を祭る神殿で、年次儀式典礼の一環として、狩人たちの人数が数えられた。この人数をもとに、デガは 4 人ごとに 13 の集団に分けられた。ダホメの月のそれぞれに対応する。この 13 の集団はそれぞれ、一ヵ月にわたり王宮に肉を持ってくることになっている。さらに殺された動物すべての頭は王宮に送られ、その玄関を飾る。漁師への課税は魚の干物で徴収され、おそらく狩人たちと同じような手順で徴税されたはずだ。

家畜となると、すでに見たとおり、ブタを飼う者は毎年一匹ずつ差し出さねばならない。屠畜人は殺した動物の数に基づき課税された。ウシ、羊、ヤギは三年毎に課税され、動物の一定割合、たとえばヤギなら八頭に 1 頭が召し上げられた。馬は地位の高い一部の個人しか持っていなかった。馬一頭ごとに年 4000 タカラガイの税が徴収された。

ハチミツ、トウガラシ、生姜の納付は、こうした産物に特化したアボメイ近くの二つの地域が行っていた。こうした製品は軍の備蓄と見なされ、生産は細かく見張られた。

塩の課税もまた生産の細かい監督に基づいていた。塩は海水の蒸発により得られ、その生産は沿岸町ウィダに限られていた。製塩労働者たちはウィダの二つの地区に住んでおり、蒸発を行うための固い蒸発池を掘らねばならず、掘る許可を王の副官から得ねばならなかつ

### 第3章 分配：国家の領域

た。製塩労働者1人あたり、王は毎年塩を10袋要求した——8キログラムほどだ。こうした袋はウィダの総督に抛出されたが、彼は受け取った塩の袋毎に小石を一つ積み、こうした「塩小石」を決まった時にアボメイに送った。アボメイで小石は10個ずつ数えられ、製塩労働者何人分の塩かが見極められる。総督が正直に申告しているかを見るため、別のチェックが行われる。王宮から別の役人がウィダの製塩労働者地区に送られ、使われている固い蒸発池の数を数える。この数は、総督の提出したものと正号しなくてはならず、乖離があれば大罪となって、総督はこの役職の給料一年分を取り上げられるという罰を受けることもある。この塩の課税から、王は自分の世帯と、場合によっては軍隊にも供給する。

鉄に関する会計、課税などの行政手段においては、鍛冶場が単位となった。全国で12ヶ所が、鋏を作る鍛冶場に指定されていた。そしてそれ以外の鍛冶場では鋏の生産は認められず、そのそれぞれは生産を監督の役目を負った役人が厳しく監視していた。鍛冶場から直接鋏を販売することは認められなかったので、あらゆる販売は、市場担当官の監督下で、市場で行われねばならない。市場の長官かその副官は、鋏の販売をすべて目視確認し、その売上を記録するため、その鋏を製造した鍛冶場の銘がついた箱に、小石を一つ入れる。鍛冶場にはすべて銘があった。その銘がその鍛冶場の生産物に推され、あらゆる銘の一覧表が王宮に登録され、そのコピーが前市場担当官に配布されていた。それぞれの市場長官は、鍛冶場ごとに一つずつ、全部で12個の箱を保管しており、その箱がいっぱいになるとアボメイに送られ、首都からはかわりの空き箱が送られてくる。それを補う生産の計数のため、鍛冶師たちが王宮に召喚され、自分の鍛冶場で鋏が何個作られたかを尋ねられる。こうして報告された総数から、市場で販売された鋏の数が差し引かれて、手元に残った鋏の数が得られる。課税はこの数に基づいており、それぞれの鉄工員は王から未加工の鉄棒が与えられ、鍛冶場に残っている売れ残った鋏の量とおおむね対応する数の、弾薬包<sup>5</sup>を戻すようにと指示される。

鋏の生産にたずさわっていない他の鍛冶師たちは、鉄の神（グ）に使える神官たちを通して計数された。それぞれの鍛冶場には祭壇があり、指定された時になると神官たちは一緒に王宮に呼ばれ、王の手から毎年の神事に必要な雄鳥を受け取る。そして、事前に王宮にいた雄鳥の総数から、神官たちに渡された雄鳥の数を差し引くことで、王国内の鍛冶場の総数が計算される<sup>6</sup>。加えて、それぞれの神官にその鍛冶場で何人働いているか尋ねることで、鍛冶師の数も調べられる。

織工や木工職人も、同様にして製品の一定割合を税として取られた。

国内取引も課税された。通行料金所を通して財を運ぶ荷担ぎ人を数えるため「パスポート」

<sup>5</sup> 原文は cartridge。まだ火縄銃の世界で薬莢ではないし、具体的に何を指すか不明。

<sup>6</sup> 訳注：これはおそらく凡ミス。最初の数から引くのは、王宮に残った雄鳥の数のはず。それで何匹が神官に渡されたか、つまりは儀式を行うべき祭壇＝鍛冶場がいくつあるかを計算したはず。



### 第3章 分配：国家の領域

方式が採用され、そうした取引に課税された。あらゆる町の入り口、干潟の要所、ヨーロッパ貿易施設の戸口には通行料金所があった。年次儀式のときに

公的な廷吏が市場にでかけて、すべての荷担ぎ人は決まった役人のところで名乗りをあげろと発表する。(中略) 各人は役人の前で名を名乗り、そして自分のパスポートとなる何かのしるしをこっそりと提示する。たとえば小さな鎖を使い、通らねばならない料金所の数だけ輪を残し、残りを料金所の管理人に配る、といった具合だ。あるいは小さなラフィア布を渡す人もいるかもしれない (中略) こうした布の複製が料金所のすべての役人に配られる。この (中略) 荷担ぎ人が (中略) 料金所に到着して、「パスポート」を求められると、その布を提示する。これは管理人がすでに受け取った布と照合され、ちょっとでも両者にちがいがあれば、荷担ぎ人はしばらくあられ、牢屋に送られる。(Herskovits, 1938 [I]: 130-31)

課税の方法は以下の通りだ。

それぞれの料金所では、ある荷担ぎ人が通るたびに小石が脇によけられ、年末に彼の評価課税額は彼が往き来した回数に基づく。(Ibid.: 131)

他の税は輸送時の執行により実施された。たとえばトウガラシは、少量の場合を除けば、限られた地域でしか生産できず、それは市場から遠くにあった。おかげで輸送される財に対してタカラガイで課税できた。

地元市場での物納税は、市場で販売される各種商品の「サンプル」という形を採った (ibid.: 127-28)。だがフォーブスは、「すべての市場に常駐する徴税人は (中略) 販売用に輸送された財の価値に応じた数のタカラガイを受け取る」(Forbes, 1851 [I]: 35) と書いている。

ダンカン、ダホメの全住民に対する人頭税に触れている。人によっては、これはかなり高いものとなった。たとえばウィダの総督の奴隷二人は、年間で人頭税\$1,500 と \$2,500 をタカラガイで払ったとされる (Duncan, 1847[I]: 122-23)。

役人が死ぬと、以下のように相続税がかかる。まず、死者の所有物がアボメイの王宮に運ばれる。すると王は、死者の息子が父の公職を引き継ぐか、それともその公職は別のだれか (たとえば戦場で活躍した兵士) の栄誉を称えてそちらに与えられるべきかを決める。息子が父親の財産を相続できるのは、彼がその役を世襲できた場合だけだ。ダホメでは、王がすべての財産や土地の所有権を持っていたので、父親の財産を息子に戻すのは、贈り物という形となる。同時に、相続品の一部は王が手元に残す (Herskovits, 1938 [II]: 6)。

### 第3章 分配：国家の領域

基本税は農作物すべてにかかるものだ。毎年、収穫の後で「農業大人」トクポとその助手たちは、作物を貯蔵する穀物倉庫を数え、トウモロコシ、キビ、ピーナツ、豆、ヤムイモの供給を別々に記録する。検査された穀物倉庫と、国勢調査で得られた農業労働者の和人が照合され、すべて記録されたかどうかチェックされる。

すべての報告が届いたら、王は農作物の税を確定し、それぞれの村に全体の比率にもとづいて税額評価を行う。

墓掘り人に対しては、葬式の数に基づいて税がかかる。遺族からも王宮に納付が行われる。これらは一年後に別に積み立てられ、王族、酋長、外国捕虜など、自然死してダホメに家族がいない人々の埋葬費用に充てられる。奴隷の自然死証明を行う手数料は 3000 タカラガイだった (Burton, 1893 [II]: 107)。たまに囚人について要求される身代金への言及があり、また収奪的な罰金や過料で生じる歳入もある。国の他の歳入源は、従属している町に対する税や上納物と、外国貿易からの歳入だ。

#### 王制の相場（定価）

王の責務の一つとして、自分の治世において使われるべき各種の相場を布告する、というものがある。ダホメの生活では、習俗的な性格を持つ相場がたくさんあった。たとえば結婚のときに花嫁の両親に対して行われる支払い額、各種式典などにおける神官や各種村の役人に支払われるべき儀式料、葬式で血族集団の間の厳密に計算された贈答品交換などだ。こうしたものは習俗的な相場で、それが政権ごとに変ったという証拠はまったくない。

輸入品に使われる相場は王が布告する。ダルゼルは、アダフーンゾウが「どの市場におけるどの交易商も、男奴隷にはタカラガイ束 32 本、女奴隷にはタカラガイ束 26 本以上支払ってはならないと発布した（後略）」そして王自身も奴隷をこの値段で買ったという。「王自身も、ひもでつなげたタカラガイをもとに自分が定めた値段を王宮の門で支払った」(Dalzel 1793: 213-15)。ウィルモット司令官に王は、自分が奴隷に定めた値段は「80 ドルで、それぞれに 4 ドルの関税をかける」と述べた (Burton, 1893[II]:249)。港湾税も「治世ごとにちがった」(ibid.: 94, n.1)。

市場価格の場合、この状況はいささかちがっていた。こうした値段は通常は地元の行政体により固定されていたが（第 5 章参照）、自分の治世下で使われるべき一般水準を決め、在庫の不足または過剰に応じてそれを変化させるのは王の役割だった。やがて、ゲレレ政権の下でどうやら生じたらしい危機時には、あらゆる相場が引き上げられた。それどころか、ゲレレ王は何やら十年計画を導入したらしい。バートンによると、「ゲレレ王は十年にわたり臣下たちを窮乏させると決意したと言われている。すでにそのうち六年が経過している。こ

### 第3章 分配：国家の領域

の期間が終われば、彼らはまっとうな労働につけて、物資はきわめて安くなるので1日に一人あたりタカラガイ一つで生活できるようになる」(1893[II]:57, n.1)。その六年間で相場は四倍に引き上げられた。「過去六年で値段は四倍増した」とバートン。さらに「先王の元ではタカラガイ 3 個で得られたカンケイ玉<sup>7</sup> (ダホメ版のクオータレン食パン一斤) が、いまや 12 個になっている」(ibid.:162-63)。

ダホメにおける相場は金銭化されていた、つまりはタカラガイで表現された。だが、それが勅令による相場だという性質は、まがうことなきものだった。公式に適用されていたし、あまり頻繁には変わらず、したがって決まった定価的な性格を持つようになった。これは例えば、フォーブスらが報告した市場価格一覧に明らかで、そこでは各アイテムの値段がその時と場所での時価として書かれている。通貨単位の指定すら、決まった相場を反映している。これはタカラガイの束御本が「ガリナ」と呼ばれるという有名な事例からもわかる。「なぜならそれはホロホロ鳥の値段だからだ」(Burton, 1893 [I]: 107, n.1)。

組織化された労働市場といった性質のものはまったく存在しなかった。バートンによれば「前世紀にムンゴ・パークが述べたように、ニグロは支払いに基づくサービスというものを知らない。それどころかアフリカ言語はこの言葉を見捨てる」(Burton, 1893 [II]: 132-33, n.2)。フォーブスの時代のウィダでは、カヌー漕ぎ人と荷担ぎ人は、海岸部の他の地域からきた流れ者がほとんどで、その頭目により仕事集団として「貸し出され」ていた。「荷担ぎ人とハンモック人の (中略) 生計費は (中略) 1 日あたり男性ならタカラガイ束三本、女性なら二本である」(Forbes, 1851 [II]: 81)。タカラガイで記載されているが、支払いの少なくとも一部は現物だった——布、タバコ、ラムなどだ (ibid. [I]: 122)。

荷担ぎ人の「積載量」もやはり固定だった。アボメイからウィダに旅するとき、ダンカンの荷担ぎ人の一人がついてこれなかったら、首都の総理大臣に伝令が送られ、彼は「即座に新兵を派遣して、後れをとった悪漢を処罰させた。というのも彼の話では、大臣自らが荷担ぎ人の貨物をそれぞれ検査し、そのすべてが荷担ぎ人の規制重量を大幅に下回っているのを確認したからだとのこと」(Duncan 1847[II]:291)。

証拠で見ると、たとえば税などの支払いにおいて、ある財を別種の財のかわりに差し出すのを許すような等価性/相場はないようだ。農作物の税は物納で、代替物の余地は報告されていない。

公共事業もまた王の範疇だった。ダルゼルによれば「王は酋長たちを召集して彼らに労働を割り振り、彼らの領民たちにその手間の代償を支払う」(1793 :xii)。すでに述べた通り、道路の状態は年次儀式で調べられる。ダルゼルはまた、王が酋長たちに「アボメイからウィ

---

<sup>7</sup> Cankey-ball。不詳

### 第3章 分配：国家の領域

ダまでの道を作るよう命じ、それぞれに道幅を示すためのひもを渡した」(ibid.: 170-71) 都のことだ。

王は「公衆女性」を指名することで、家族への配慮を示した。バートンによればダホメには

公的な女性がいて、これは組織化された王立の制度であり、王宮から指名される。  
(中略) 現在の王は快樂のために新鮮な女性部隊を指名したが、彼らはまだその稼業を始める許可をもらっていない。(Burton, 1893[II]:148)

この場合も名前は相場からきている。

当初報酬はタカラガイ 20 個だった。したがって通称「コ・シ」、二十の妻という呼び名になった。(中略) 大臣たちの訴えにより補償は東二本、つまり 4 倍になった。  
(Ibid.:148)

王はこうした女性を王国のいたるところに住ませたが、それは「民間家族の平和を安全に守るため」だった (Norris in Dalzel, 1793: 129)。ノリスはこうした予防措置が必要なのは、階級の高い人々が大半の女性を独占してしまい、不倫の罰が厳しかったからだ、と説明している。さらにダホメ男性は、女性が子供を産んでから最大三年も性交渉を控えねばならないこともある。そうでないと、その後の子供たちが病気がちになると信じられていたのだ (Herskovits, 1938[1]:268)。

王宮

ダホメの国家領域は王家とその王宮経済に密接に結びついていた。王宮に帰属する歳入や機能と、国家に属するものとの間に明確な区分はないし、またそんな区分をするのは不可能だ。両者の役割は密接に結びついている。この理由から、本書では両者を王宮経済という見出しの下でまとめた。

たとえば王の妻は、一部の推計では 2,000 人ほどになる。その多くは国の行政で重要な役割を果たした。また各種工芸に駆り出される妻たちもいた。全員がアボメイの宮殿と、アクプエホの王の御殿に暮らしていた。またアボメイ王宮には、アマゾン女性戦士の多くのメンバーも暮らしていた。これはダホメの常備軍で、最大 5000 人の女性と推定されている (Herskovits, 1938[II]:88, n.3)。王宮の田の女性住民は、ハーレムと王家の高齢女性たちに仕え

### 第3章 分配：国家の領域

る大量の奴隷だ。高齢女性たちは、高い下王たちの墓守をしている。ある推計では、アボメイ宮殿での女性の総数は 3000 人から 4000 人となっている (Dunglas, 1957:92)。

王のご落胤の一部は、特別な伝令となり、また王に仕える他の業務を行った。バートンの推計では、王のご落胤は 2000 人ほどだ。ル＝エリセはずっと多い推計をして 12,000 人としている (Le Herisse 1911:35)。

ダホメは大臣、行政官、監査人、徴税人、警察など、広範な国家官僚制度を使用していた。アボメイの最高位の役人たちは、自分の家に住んではいたが、王宮から食べ物を供給されていた (Duncan, 1847 [I] :257-58)。

王宮そのものも、壮大な建物だった。各王は、独自の門を建立した。これは壁の空いたところで、急ごしらえの木のドアがそれを閉ざす。この門の前に派、幅 7 メートルほどで長さ 20 メートルの、傾いた草葺き屋根を持つ長い小屋が壁沿いに建てられた。ここで王は、まわりにしゃがむ廷吏たちの中でマットに横たわり、判決を下すなど王としての責務を実施する。

王の農園は、王家の収入源の一つだ。そこではパーム油などの産物がとれた。アクプエホの王宮からのパーム油とパームの実ウィダで輸出された。王の農園の手入れをするのは国内奴隷たちで、特別な地位を持つので売り渡せない。

他にアクプエホ宮殿では各種の工芸が行われた。布織りやパイプ作りなどだ。王や他の王家用の布がここで織られる。細長い貯蓄小屋にはトウモロコシなどの備蓄が置かれた。また染め小屋、陶芸作業場があり、こうした事業所すべてに王の妻たちが参加していた。歳入としてはあまり大きくないが、アマゾン女性戦士たちによるゾウ狩りもあった。これは祝宴の食料となるだけでなく、呪物小屋用の骨や頭蓋骨、さらにウィダから輸出される牙や歯も得られた。

#### 行政と二重体制

ダホメの行政は正直さ、精度、信頼性の面で卓越していた。ゴーチエ (1935) はその能力が、アフリカ国家の中で並ぶものがないと評価している。ほとんど自動的なチェックと統制の手段が採用されていた。記憶技術と計算能力を提供する運用的デバイスが使われ、行政的な細部を実現していた。これから見る通り、珍しいほど効果的な制度的チェックも実践されていた。独自の手法は、男女の性差によって提供されるものだ。あらゆる等級の役人を二人一組にするのだ。たとえば男性の実働役人と、それを管理する女性という具合だ。バートンによれば「ダホメの役人は、男性と女性、位が高いのと低いのが、常に対になっていた」(1893 [I] :33)。ここでのイニシアチブは上からきたものであり、国家の領域に属する。

### 第3章 分配：国家の領域

別のもっと深くて広いイニシアチブが非国家領域から発生し、自律性の自動的な保護として機能した。先祖崇拜は、あらゆる住戸に祭壇が置かれており、呪物小屋のまわりにも密集し、氏族の集合住居に必ずある神殿のまわりにはもっと祭壇がある状態で、これが信仰の雰囲気を作り出し、それが反官僚制の圧力を生み出した。こうして法治の情緒的な基盤が内面化され、大衆に対する政府の制約装置はおまけでしかなくなったのだ。

性別的な二重体制に頼るという驚くべきデバイスは、徹底して実施されていた。王家の行政システムでは、すべてがペア、ときには複数のペアで行われた。まず、王国のあらゆる役人には王の居住区に暮らす女性の相棒または「母親」がいた。こうした女性役人はナイエと呼ばれた。それぞれの女性は、男性相棒の行政活動をすべて詳しく調べ、その活動を絶えずチェックするのが仕事だ。ハースコヴィッツはその仕組みを次のように説明する。

たとえば、こうしたナイエの一人が、ヨヴォガのこれまでの報告を記憶する役目を任されたでしょう。このヨヴォガは海洋地区を仕切っていたので、製塩業者すべてを統制している。このヨヴォガが報告を挙げるナイエはヨヴォガノ、つまり「ヨヴォガの母」と呼ばれ、王宮評議会で塩生産の問題が採りあげられるときには必ず出席した。彼女はすでに、王が声援業界を調べるために派遣した独立役人からの報告を持っていて、ヨヴォガによる活動報告が、このもう一つの報告と帳尻があっているかを確かめるのが彼女の仕事だ。(中略) 王の方針として明示されていることだが、役人たちの話を聞くときには、まずこの長の「母」であるナイエの話を聞いてからでないと、王は一切耳を貸さないのである。(1938[1]:111)

別の女性集団、クポシまたは「ヒョウの妻たち」がこのナイエたちを仕切っていた。ここでもやはり、クポシには二つの集団があった。一つは女性八人で構成され、王が顧問たちの意見を聞くときには必ず出席した。もう一つの集団もやはり八人構成で、何よりも大臣や神官たちが報告するときに出席した。こうすることで、高官の報告においては常に三種類の証人がいた。彼の「母」、常に出席する八人のクポシ、そして特定の大臣が報告するときに呼ばれる、他の八人の専門家証人だ。

二重の組織は軍の中でも一貫していた。軍は二翼に別れていた。右翼と左翼だ。それぞれの翼には男性部分と女性部分があった。あらゆる男性は、最高位の将校から末端兵卒ひとりひとりに到るまで、王宮に相棒がいた。たとえば右翼はミンガン、つまりダホメの総理大臣が指揮しており、その相棒は「女総理大臣で、しかも王宮内部にいるから、総理大臣よりも優先権がある」(Burton, 1893[1]:146)。

フォーブスは軍についてこう語る。

### 第3章 分配：国家の領域

軍として見ると、二つの旅団にわかれる。ミエガンたちとマヨたち、右翼と左翼だ(中略) 右翼には二つのミエガンと二つのアガオス、男性戦士と女性アマゾン戦士がおり、それぞれの旅団では兵卒に到るまで男と女で同等の階級がずっと続いている。軍でのこうした関係は父と母と呼ばれる。(中略) 男性兵士は、糾弾を受けると「母」に訴えて代弁してもらう (Cf. Herskovits, 1938[II] :84)

アボメイの王宮への訪問者はすべて、滞在中のニーズについてすべて面倒を見てくれる「母」があてがわれ、その母は、王の賓客に許されたすべての謁見に参加した。

新王は戴冠時に、父に仕えた大臣は留任させたが、自分の代表としてもっと若い高位の男性たちを指名する。これは、こうした若者に仕事の訓練を積ませるのと同時に、年配の政治家たちのお目付役という役割もある。

ダホメに併合された地域は、自発的な併合であれば自分の行政体を温存できたが、「王の妻」と呼ばれる王宮からの人間が送られて地元酋長と同居し、王にかわり酋長の行いに対して監視を行うこともある。

それぞれの大臣の家には王の娘と役人が二人住んでいた。彼らは大臣の取引を監視して、その報告に基づいて大臣は納付を行う。王の利害に関わる紛争が生じたら、こうした役人たちは王に直接報告を行う。そして紛争が深刻であれば、大臣は逮捕されるか罰金を取られる(Forbes, 1851 [I] :34-35)。

もちろん、この種の二重体制は役人の数を2倍、4倍にするのだから、官僚制がそれで緩和されるというのはパラドックスだ。だがあらゆる責任あるオブザーバーは、好意的な人もそうでない人も、ダホメ人の文民および軍事的な活動が傑出した効率性を示す点については認識が一致している。

社会学的な要素が働いていた可能性は無視できない。つまり女性的特性の支配性だ。私たちは、作用していた可能性のある身体的、文化的な要因の相対的な大小をここで論じるつもりはない。ただ事実問題として、女性が政治体制の機能にこれほど重要となるサービスで、ここまで大きな役割を占める国家レベルの社会はきわめて少ない。細かいことまで配慮して、常識の根拠となる日常生活の情報を記憶するのは女性のほうが長けているという点は検証され、決して否定されていない。

行政のだれもが認める優秀性と女性分子がその中で果たす重要な役割だけでは、ダホメ女性が最高位まで公職にひかれる度合いを説明しきれないようだ。ここから、二重体制という装置そのものの背後に、何か実務的な効率性の配慮を超えた精神的な態度から生じる、何らかの動機が働いていたのだらうと思われる。

### 第3章 分配：国家の領域

二重体制はこのようにダホメ文化で広く見られる特徴だった。公的部門の仕組みは、階層構造として垂直に広がるだけでなく、同じ水準への付加により水平に広がっていった。戦場の軍組織から最小単位に到るあらゆる国家組織における対称性は、何か根深い文化的傾向のせいでなければ存在し得ないはずだ。二への偏愛は、血族関係の意味論にも、神殿の構成にも、日常的な占いの秩序にも痕跡を残している。この宇宙から社会のミクロコスモスに到る二重概念の追求は、王位にある人物の場合にも止まることはなかった。王の位そのものが「二重」だ。王はブッシュの王と町の王という二重の役割を持っていた。バートンはこの事実をこう説明する。

ダホメ王家の特異性の一つは、彼が二重の存在だということだ (中略) 一人二役なのだ。たとえばゲレレ王は、都市の王であり、「ブッシュ」のアデ＝クポンだ。ブッシュとはここで、農民と都市以外の地方部、ということである。(1893[II]:58)

ブッシュの王は、町の王のために存在する環境の複製を持っていた。アボメイからたった10キロ離れたところに、彼専用の宮殿があり、町の王の配下にいる役人集団を複製したものが置かれている。軍の組織では、ブッシュの王は独自の司令官を、男性女性の両方とも持っていた。そして町の王だけでなくブッシュの王にも「母」がいた。スカーチリーが述べるように「王 (ゲレレ) のために公的に行われることはすべて三回繰り返される。まずはアマゾン女性戦士のため、次にアデ＝クポンのため、そしてアデ＝クポンのアマゾン女性戦士たちのためだ」(1874:271)。

実のところ、二重性の完成に対する本物のこだわりが、形而上学的秩序についての最初期の神話的概念から、家庭での双子誕生に対する愛好に到るまで貫徹している。子孫繁栄への嗜好がこの傾向を生み出したのかもしれない。統計的に見て双子の頻度が高いことが、伝統的に見て双子の前後、つまり双子の前か後か、あるいは双子二件にはさまれたの誕生への先行をもたらした理由かもしれない。

ダホメ神殿の最上位には、マウ＝リサという二重の神がいる。メルシエによると「神の世界のあらゆる集団における理想の種類は、男女の双子、あるいはもっと稀ながら同性の双子である」(Mercier, 1954c:231)。彼名双子信仰における両性具有的な要素の文化的解釈を深めようとはせず、「二重性がすぐに目につく」政治組織の領域に目を向けたがる (ibid.: 232)。どうやら念頭にあるのは、ブッシュの王という制度だ。その経済的な重要性を初めて認識したのがメルシエだった。彼によれば「二重の王は途絶えていたが、それを復活させないとダホメは繁栄できないとゲゾが報された。そこでゲゾはガ婦毛とゲレレ、アッドクポンを設置し、片方に対して行われたことはすべて、もう片方に対しても行われねばならないとした」



### 第3章 分配：国家の領域

(ibid.:232)。こうして 19 世紀にはアカバ王とその双子の妹ザグバの古い物語が復活した。「二人は、双子は常に同じ扱いをうけるべきだという教義に則り共同で統治した」(ibid.:232)。

このどは、カナに玉座を持つブッシュ王の経済機能に目を向けよう。ダルゼル王時代のカナは大都市で、アボメイからは 12 キロほど、住民は 15,000 人ほどだった。彼はノリスを引用してこう書く。「王はしばしばここに暮らし、付属建物まで含めればセントジェームズ公園に匹敵する敷地を持つ広々とした家を持つ。それが高い泥の壁に囲まれており、ほぼ正方形となっている」(Dalzel, 1793: 118-19)。ノリスはその一辺の長さを測ったが、1700 歩だったという (これは英マイルほどだ、とノリス著書の編集者は脚注で述べている)。「カナとアボメイの中間くらいのところに、王の別荘ダウヒーがあり、これは古くから一家の住まいでありもともと無名だった彼らが台頭する前に暮らしていた小さな領土の首都なのだった」(Dalzel, 1793: 120)。カラミナ (カナの古名) の田舎はとても肥沃であり、その作物が近隣の町を喰わせていた。

カナには王家の埋葬地があり、ダホメ最古にして最大の市場一つがある。もともと一家のお気に入りのリゾートで埋葬地だったのが、影の政府と宮廷の所在地となり、別個の経済首都にもなった。ダホメの再分配経済は現物で取引されたので、ブッシュ王の宮殿には独自の重要な役割があった。貯蔵庫にして工業センターであり、税として集めた大量の作物を貯蔵し、それを製造品と併せて分配していた。

アボメイの王宮から 生産的、分配的な経済活動を分離してカナに集中させたのは便宜上のことかもしれない、行政、軍、技術的な観点からの要請だった可能性さえある。

アボメイとカナの中間あたりにあるダウヒー宮殿にいるときには、王は政治的首都と経済的首都に向けた見事に修景された完璧な道を使い、わずか一時間のところにいた。財宝が警備され世話を受けたのはシンボニー宮殿、つまりアボメイの大家屋だった。これらは子安貝、鉄棒、布、武器、弾薬、ヨーロッパ製家具がいくつか含まれている。王の無数の家族が使う糧食はここに貯蔵された。高位の若者の妻は、最大 2 万個のタカラガイと引き換えに、政治首都の宝物庫の門で引き渡された。武器や道具を生産する鍛冶師の原材料、各種職人への現物支払い、要塞や門、壁、橋、戦略的な街道の建材もここで分配された。

常に危険だったのはオヨだ。1712 年以来、負担の大きい献上物アグバンは、時に悲惨な騎馬隊の襲撃という脅しの中でいきなり増やされたりしたし、ダホメにとっては屈辱の種だった。アグバンは毎年オヨの使節団に対し、カナで提出された。首都から近い場所なのに、周辺の部族は信用できないことがいくつかの事件からうかがえる。王は何度か、王家の墓と市場の平穏を守るため、一帯をなだめなければならなかった。カナには古くからヨルバ族の居留地があり、ダホメ人たちが悲惨な敗北をとげてからは、ダホメと征服者オヨとの仲介役となり、献上物の交渉を行った。41 丁の銃が入ったケースを 41 個というのがアグバンの一

### 第3章 分配：国家の領域

部だった。少なくとも軍用資材はずっと遠くに置かれていたのもうなずける。

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

国家の領域における再分配パターンは、これまで見た通り多くの波及効果を持っていた。だが日常的な側面でみると、生活は国家とはまったく関係ないご近所、血族、信仰という制度に埋め込まれていた。これらはいずれも局所的なものだった。

しばしば、家族や氏族の外にある社会の生産リソースをあてにしなければならないことがある。所有者が病気のときに畑を耕したり、泥壁を作ったり、屋根を葺いたり、生け簀用に講師を調達したり、お祝い用の食べ物や、婚礼、葬式、喪の儀式用の食事のために、そうしたものが必要となった。こうした作業は明らかに、個別の世帯主の力量を超えることが多い。だが雇える労働力のプールがないのに、どうやってこのニーズを満たすように労働力を振り向けたのだろうか？非国家の領域では、ダホメの主要な制度の一つを通じてそれが行われた。ドクプウェ、または労働チームだ。道路建設や王宮の壁の修理といった公共事業ですら、ときにはドクプウェが施行した。ただしこれは再分配システムを持つ国家の領域の範疇に入る。この場合、王は酋長たちやドクプウェガ、つまりドクプウェの長に声をかけ、緊急事態のために手下の人間を集めろと命じる。王は、普通のホストと同様に労働部隊のために宴席を設け、リーダーたちには贈り物をするものとされる。

ドクプウェは大きかったのは確かだが、様々な扶助を提供する共同組合的な組織は他にもあった。互酬性、つまりこの仕組みの根底にある原理は、国家の経済での再分配と同じように、非国家領域で本質的な特徴だった。互酬性は家事とともに、非国家の領域での主要な経済パターンだった。

互酬性にはお互いへの善意の態度が伴うことが多い。だが態度だけでは、協力だろうと競争だろうと、経済をまとめられない。もっと本質的なのは制度だ。つまりそうしたプロセスを方向付けて、態度を支えるものだ。これはまた、一部の有名な原始的互酬性でも見られる。トロブリアン諸島民の自給自足組織における家族グループや、ニューギニアのバナロ族の複数婚 (Thurnwald, 1916)、あるいは西アフリカのティヴ族の単純な交換婚姻 (P. Bohannan, 1954: 69-75; L. and P. Bohannan, 1957: 72 ff.) では、家族グループの対称的な部分で互酬性が実施されている。

社会構造の中で対称的な性質が発生すると、相互的な行動は簡単に発生する。アリストテレスは別の相互性の源を指摘している。あらゆるコミュニティに内在する善意だ。それがなければコミュニティは成立できないとされる。それは、負担を喜んで分かち合う姿勢で表現

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

される。いずれの場合も、それを支える構造的な要素がある。前者では対称性、後者では決まったコミュニティ成員の間の積極的な善意だ。だがアリストテレスの「コイノミア」は、対称的に構築された集団同士のやりとりから示唆されるよりもずっと幅の広い相互性を意味している。コイノミアは小集団で起こることもあるし、社会全体に広がることもある。大小問わず、それが存在する社会は成員の間での財の再分配と、労働負担の共有を「交互に」組み合わせるだろう。この根底にある原理を彼は互酬（アンティペポントス）と呼んだ。

ダホメの労働分配の主要制度はドクプウェだ。互酬的な労働チームとして組織されたドクプウェは、強力な支援組織の一部を形成した。他の制度としてはソ（工芸ギルド）、グベ（相互支援集団）がある。グベは、財の相互支援を手配するもので、ソのほうは主に労働に関係する。

### 作業チーム

「あらゆるダホメ男性は三つのことが上手にできねばならない。畑を耕す、壁を作る、屋根をふくことだ」（Herskovits, 1938[1] :30）。この格言は互酬によりダホメ人が頼られる三つの主要な仕事を反映している。

実際問題として、ダホメでは労働市場がない、つまり賃金労働が存在しないのに、こうした労働はどのようにふり分けられる、または配分されるのだろうか？ドクプウェ、つまり労働チームはダホメで普遍的な制度だった<sup>8</sup>。これは目的や運営において、西洋社会における労働市場とはまったく対照的で、畑の耕作確保や、婚姻の物質的責務や親への責務を実行する支援など、社会の作業を確保するのが主眼だった。この意味で、労働は強制的な助け合いまたは互酬パターンとして組織されていた。

村の成人ダホメ人は全員がドクプウェに所属していた。この制度が全コミュニティに広がった性格を持つものだというのは、あるダホメの首長による次の発言に見られる。

これは全員のためなんだ。首長だろうと平民だろうと、ドクプウェは助けてくれる。家が必要なら、ドクプウェが作ってくれる。耕す畑があれば、ドクプウェが耕作してくれる。病気のときも助けてくれる。みんなドクプウェの長には敬意を示さねばならない。彼がここにきたら、私は首長の帽子を彼の前では取る。（Herskovits, 1938[1] :64）

貧しい人と首長とが同時にドクプウェの支援を求めた場合、その要請が行われた順番を

---

<sup>8</sup> この制度の経済的重要性に気がついたのはハースコヴィッツ（Herskovits 1938）で、本章では彼が示したものをたどる。

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

厳密に遵守して助けが提供されるとのことだ。

ドクプウェガ、またはドクプウェの長は、村で首長とその助手に次ぐ第3位の高官だ。大きな村なら、地区ごとにドクプウェがあってそれぞれ長が置かれる。小規模な村なら、村全体で一つですむ。ドクプウェガは職務を実行するため三人の助手を持つ。生活の非政治的な側面すべてにおいては、ドクプウェの要請に応えないことはあり得ない。これは、厳罰によって施行されている。

本当にどうしようもない理由がなければ、ドクプウェガの召集に応じないことはできない。許可なくそんなことをしたら、村民仲間から村八分になり、妻たちには離縁され、家族は彼の違反に対する罰のおかげで貧しくなる。彼もその親族も、葬式もしてもらえない (中略) (ibid.:70)

伝統によれば、王ですらドクプウェの召集には応えねばならない。あるとき、ゲレレ王の治世の間に：

この太鼓隊やハンモック担ぎ人、無数の随行員を従えた強大な王は、作業中のドクプウェのところを通りがかったが、ドクプウェガにあいさつもせずに通り過ぎようとした。ドクプウェガは即座に笏を手に行列を止め、ゲレレに対して、なぜドクプウェの決まりに違反したのかと問いただし、畑で働けと王に召集をかけた。話によれば、ゲレレは謝罪し、ドクプウェに気がつかなかったと説明して、お詫びとして奴隷五十人を作業に提供しようと述べた。だがドクプウェガは満足せず、その夜にゲレレに対し、大量のラム酒と布という罰を科したとのことだ。 (ibid. :70-71)

この半ば伝承のできごとは、ダホメ人たちの心の中での、このドクプウェという制度の範囲と特性を反映したものとなっている。王が命じた道路の建設においては、王の居住地のある地区のドクプウェガが、所属先のドクプウェの一員として働けと王を召集する。王はその報せを受けて、人々に飲食物を送り、軍に呼びかけて道路を完成できるだけの労働力を提供する。

ドクプウェは、あらゆるダホメ人に対して、その人が個人的な責務を果たしたり、指定された状況での緊急事態に対応したりする支援を提供する。ドクプウェが行動する状況は、大きく五種類ある。ドクプウェは、村民が動けなくなったら、その畑が確実に耕されるようにする。病気だったり高齢すぎたりして、植えつけに必要な工作という重労働ができず、だれにも助けてもらえなければ、ドクプウェが助けにくる。その人が貧乏すぎたら、労働者たち

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

に食事を出す必要もないし、ドクプウェガに手数料を支払う必要もない。若い頃にその人が他人に提供した支援や、若者であれば将来お返しするはずの労働が、互酬の義務を満たすことになる。

二種類目の支援は、畑が広すぎて自分ひとりや自分で手配できる労働では耕作しきれない場合だ。こうした場合、その人はドクプウェの長に規定の支払い（現代なら酒一びん、布四ヤード、二フラン 50 サンチーム）を行い、懐が許す限りの壮大な宴会を労働者のために提供する。

ドクプウェはまた、妻の実家に対する伝統的な責務、アシトグレを夫が満たすためにも頼られる。この取り決めでは、義理の息子は義理の父親のため、年に一度かそこら、重要な作業を完遂し、義母の家をしっかりと修繕しておかねばならない。ダホメ人によると「娘の多い家は金持ち」（ibid.:73）。義理の息子がこの責務を怠れば、妻がやがて取り上げられ、実家に戻される。その人にたくさん妻がいたら、この義務はかなり面倒か不可能に近くなる。そこでドクプウェの支援が求められる。ある事例では、義理の息子の村のドクプウェは、45 キロ離れたアボメイの義父の居住地の壁を作った。

同様に、ドクプウェは父親のせいで生じた奉仕の支援も行う。二十歳か二五歳まで、息子は自分の畑を獲得していても、自分の家族を確立するまで父の畑で働く義務があり、その後も儀礼的に父親の支援を続けたりする。ここでも、その息子が充分豊かなら決まった手数料を支払う。そうでなければ、村人仲間は無料で彼のために働くが、後にドクプウェを通じて支援要請があれば、彼は義務として働かねばならない。

最後に、ダホメ人がだれであれ死んだら、ドクプウェが召集されて遺骸に死に装束を着せ、入念な葬儀を仕切る。

労働活動はお祭りの機会でもあった。労働歌が歌われ、仕事が終わったら宴会だ。屋根を葺くなど一部の仕事では、男たちはペアになって働いた。一つのドクプウェしか呼ばれなければ、それが二つに分けられてお互いに競争した。

ドクプウェの職務は信頼に基づくもので、ドクプウェガ自身もかなり地位が高かった。この役職は世襲制で、ドクプウェガはそれぞれ、王か王家の長の前で、自分の後を継ぐ息子を指名した。新任ドクプウェガの就任儀式は王宮で王の御前で行われ、宮廷と新任ドクプウェガの家族が出席した。

### 工芸ギルド

職人社会では仕事の取り決めにおける互酬の例がたくさん見られる。鍛冶師や編み手や、しばしば製陶師たちの間では「交替で」働くのが通例だった。鉄、布、陶芸の労働者たちは

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

ソーという協同組合に組織され、その長であるソガに従った（鍛冶師や織り手はそもそも家族集団に所属していた）。ソの組合員はみんな、各人の原材料を交替で加工し、鍛冶師は鋏や斧を作り、編み手は布を作って、それが原材料を提供した個人によって販売される。陶芸は、共同で焼かれた。集団に対する責務を果たさない者がいれば、他の会員からお仕置きを受ける。

組合員同士の畑の耕作を手伝う協同組合的な仕事集団も、ソと呼ばれた。この組織はドクプウェと対立するものではなかった。というのもこうした目的のためにどんな男たちの集団だろうと、共同ではたらく5人以上の者がドクプウェガの許しを得ていればこうした組合を組織できたからだ。だが、ソとドクプウェのちがいは堅持された。

（ソの）メンバーが会員の畑耕作を手伝おうと思ったら、ドクプウェガに作業監督を依頼する。だがドクプウェガは作業監督をするが、それを実施しているのがドクプウェではなくソだというのは理解されている。（ibid.:253）

ソとグベ（次に説明）は必要時に会員に支援を提供した。会員が病気になったら、仲間が代わりに働いてくれる。会員は会費を払い、親戚が死んだら定額が与えられた。ソは会員の葬儀に参加し、苦境のときには会員に分担が課せられて遺族に提供される。

市場で食べ物を売る女性たちは、ソドッドという似たような組織に所属していた。これがギルドとちがうのは、ソとグベに似た相互支援の機能は持っていたが、仕事の仕組みは統制しなかったという点だ。

### 家族の支援

ダホメで最も広範な制度はグベという互助組織だ。この名前は拡大家族にも適用された。これは自発的な組織で、参加者はある種の責務の実施でお互いを助け、各種の社会的な機会に集まるという盟約で結ばれていた。この責務と各参加者が求められる貢献は、この組織結成の際に事前に決められている。参加者が病気になったり大損害を被ったりしたときには支援が与えられる。あるいは、参加者が義理の親の葬式など、何かの儀礼で多額の贈り物をしなければならないときの支援もある。ハースコヴィッツはそうした儀礼の一例を描いている。

遺骸の実際の受け容れの翌朝、死者の娘と結婚または婚約している男性はそれぞれ、自分のグベを連れてきて、この機会に求められる贈り物をする。（ibid.: 251）

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

その妻または未来の妻に、「絹かビロードの」布がお金とともに渡される。

この二種類の布を提供してから、男は背後に集った自分の組織のメンバーたちに向き直り「これで私は出発した。後押ししてくれ！」と言う。このとき、組織の仲間たちは組織結成時に合意された金額を提供しなくてはならない。(ibid.: 251)

儀礼での贈り物交換は激しい競争だった。グベのない人物は、華やかな誇示に伴う栄誉を獲得できない。その妻や婚約者も自分のグベを従えている。故人義理の息子や義理の娘たちが、男側の集団と女側の集団とで贈り物交換を交互に始めると、この競争は激化する。求められたときに自分の分の貢献ができない参加者は、組織の共同のお財布から必要資金を融資してもらえた。いずれ余裕ができれば、この金額を返済することになる。参加者が死ねばグベは葬式を手伝い、各参加者から与えられた布キレを縫い合わせた死に装束を提供する。

グベは係官四人、太鼓、旗を持ち、これが公式の出席においては掲示された。女性の組織は男性のものよりも豊かなことが多かった。

親友

「親友」は親友が生涯にわたって提供する信頼だけでなく責務をも伴う関係だった。遺言を告げる相手は親友で彼は遺産執行人となる。この関係は、結婚するときに親友に頼らざるを得ない男の場合が例となる。娘の家族が：

娘の婚約者、あるいは後にその義理の息子に支援を求めたら、彼は友人のところにいき、すると必要なものは何でも与えられる (中略) 娘が夫の居住区に連れてこられると、夫の友人は彼女に薪を与え、畑から戻ったらトウモロコシとキビを与える。彼女が病気になったら、看護するのは夫ではなく、この友人なのだ。(ibid.: 313)

親友の家族ですら関与する。この結婚で娘が生まれたら、その子は親友の妻になるものと誓われる。もし何らかの理由で友人がこの責務を果たせなければ、彼の息子は自分の家族から女性を見つけて、父の親友の息子の妻にしなければならない。この責務は次世代にとってあまりに強力なので、その予定花嫁が結婚の成就前に別の男と駆け落ちしたら、危機が生じてしまう。その娘をもらうはずだった男は氏族の長のところに赴き、その氏族の女性で、駆け落ちした娘が嫁ぐはずだった氏族の男と結婚していた女性全員について、まとめて離婚



## 第4章 互酬性：助け合いと協力

宣言する。その晩のうちにこれらの女性は、どこに住んでいようと実家に連れ戻される。この行動は全国に波及する。というのもこの氏族の拡大家族はダホメの他の地域に住んでいることもあるからだ。こうして妻を奪われた男たちは、娘の搜索に乗りだし、彼女をその両親とともに、氏族の長のもとに引き出す。娘は、自分を誘惑した人物の名前を白状させられ、すると氏族の長はまたもや離婚を宣言する。今回は、自分の氏族の女性で、その犯罪者の氏族の男性と結婚している者全員の離婚だ。こうした出来事に伴う氏族同士の交渉は、しばしば何ヵ月もかかり、紛争仲裁で王まで駆り出されることもある。

だが紛争がどう解決されるにせよ、その娘はもともと約束した男には与えられない。かわりに、明らかに平和を維持する趣旨から、彼女はこの一件に関連した氏族のどれにも属していない男に与えられる。だが彼女を奪われた男は、彼女の氏族にいる最も適齢期の娘を妻に迎える。この娘についてそれ以前に行われていた約束があっても、それは取り消される。というのもこの責務についての紛争解決が何より重要だからだ。これが解決を見てからやっと、師族長たちは関係する氏族全員に適用される全面離婚宣言を取り消す。

### 質草

こうした助け合い関係は、ダホメ人たちが依存状態に陥るのを防ぐのに役立つ。だがこうした手法では不十分な事態が生じたら、別の互酬が持ち出される——質草の提供だ。もしある人が払いきれないほどの多額の罰金を背負いこむなどの不運に直面したら、必要な資金を他人から借りて、子供のひとりをその質草として提供する。この関係が榮譽に基づく性格のものであることは、質草として奴隷は提供できないという事実からわかる。

この制度には入念な安全策が講じられている。この取引は村の首長の前で行われ、そこでお金の手渡しされ、返済期日が設定される。利息はない。質草の子供は、その期間の間は貸し手のために働く。働けないほど幼い子供は質草に使えない。期日の終わりに貸し手と借り手の両方が首長の前にやってきて、質草とお金が返済される。

借り手が期日に質草を請け出せなければ、期限が延長される。それがあまりに先送りされ、その質草が女の子であれば、彼女は貸し手の妻とされることもある。すると借金は、ある種の結婚について義理の息子予定者が果たすべき、通常の金銭的義務と同等とみなされる。質草を伴った貸し手は自分の村の長と借り手の村の長の前に進み出て、彼らがその結婚を正式なものにする。だが質草が少年であれば、三つの選択肢がある。まず、借り手は金額を2倍にして、二人目の息子を貸し手に質草として渡し、新しい返済期日を設定することもできる。あるいは、二人目の息子が与えられるが、負債の返済のために行われるべき具体的な仕事を貸し手側が指定しなくてはならない。たとえば、畑の畝を何列耕せ、といった具合だ。

## 第4章 互酬性：助け合いと協力

この場合、借り手は負債返済に必要な仕事を完遂するためにドクプウェにお願いすることもできる。三つめの手として、関係する村の首長二人は、質草が負債を返済するために完遂すべき仕事量を設定し、その仕事にどれだけの時間がかかるかも指定する。この期間が過ぎたら、質草が実際にやった仕事量と関係なく、負債は返済されたものと見なされる。

質草を濫用する人物に対しては世論の反発が生じる。というのもこれは、だれもがいつか頼る可能性のある制度だからだ。また、借り手か貸し手が、質草請け出し前に死んでしまった場合を扱った手続きもある。

## 第5章 家事、土地と宗教

農園と、百姓の耕作地

非農業社会の経済的基盤は、特殊な生態のバランスにある。農地がやってくると、土地が中心的存在となる。生活と社会組織は、部族社会であれ家族社会であれ、農業環境に左右されるようになる。こうした社会での経済パターンは家事だ。

財の動きはすべて世帯主が支持する。世帯主は世帯の労働を分配して、消費される食品を割り当てる。だから降雨耕作 (rainfall tillage) の地域では、オイコス (ギリシャ人は「家」をこう呼んだ) が永続的で固定された社会制度となる。アリストテレスは、オイコスは家族と奴隷で構成されると述べた。その5世紀ほど前、ヘシオドスも似たような描写をしており、浮遊のために食料を貯蔵しておかないと、家族は飢餓に直面しかねないと追加した。

ダホメでの土地保有形態の筆頭は、王の領土だ。これは戦争捕虜が耕作する。ここに王子たちが保有する領土も加えてよいだろう。こうした大規模所領 (グレタヌ) は主要食品の卸生産に携わり、作物は市場女性が小売り販売する。その反対の極にあるのは村人の耕作地で、所有するのは従属させられた先住民たちだ——元奴隷で、いまだに首長が要請すれば労働日の半分を、地元の行政にとって公職とされる仕事に充てるよう義務づけられている人々だ。

氏族と複合住居

ダホメでの伝統的な土地所有形態は、複合住居 (コンパウンド) を中心とする。これは小屋や建物の集合体で、拡大家族 (グベ) が住んでおり、このグベは父系親族または氏族 (ゼヌ) への共通の参加を通じた密接な親戚関係にある、男系親類に基づいている。本章のデータはメルヴィル・ハーコヴィッツ (Herskovits 1938[1]:137 ff.) の研究に基づいているが、この種の居住形態が氏族と、特にその宗教的な組織と絡み合っていることを指摘している。

50 氏族の成員たちが保有する土地は、多くの複合住居とそれに付随する農地に分けられており、その規模はグレタヌと村人の耕作地との中間だ。この意味で「氏族複合住居」は「中産階級」の土地と言えるかもしれない。ただし、この土地は世襲や相続の対象となるので、これ以外の意味ではまったく不適切な用語となる。

## 第5章 家事、土地と宗教

集合住居が二つから五つ集まった集合体は、単なる個人の集まりではないが、血族と宗教の分かちがたい絆で結ばれた共同所有でもない。ダホメでは、こうした住居のまとまりは、数世代にわたって密接して定住し、宗教的に聖別された世襲と後継のルールに従ってきた氏族の、先祖の家の一部となる。完成された住宅は、氏族の末裔集団の一つに関連した家族が暮らす。その成員たちは、創建者が埋葬されている特定の集合住居を、先祖の神殿と見なす。こうした地方部での発展の外的な必要条件は、追加の集合住居が拡張するために大量の土地の余裕があることだ。内的な必要条件は、創建者の墓を男性の子孫が守護せず立ち去ったりしないという。氏族の成員たちを縛る宗教的な命令だ。現職者が死んだら、彼の家族はその先祖の集合住居を再び離れ、次の継承者に場所を譲らねばならない。氏族の継承は主に分岐による。つまり兄弟が年齢順に次から次へと引き継ぎ、その後は次世代が長子相続に基づいて継承する。つまり、長兄の長男から始まるわけだ。これを補うものとして、さらなる集合住宅の建立と、創建者の後継者たちすべてを、それぞれの独自の家族衆ご住居に埋葬し直して奉るための、各種ルールが存在する。

集合住居をアフリカ世界の枠組みで考えると、西アフリカとスーダン地方のアフリカでは、住居パターンとして、これは広く一般的に見られるものなのだと認識すべきだ。だが氏族の先祖の家と、その入念な宗教儀式の場として見た場合、アフリカの中で集合住居がダホメほど強烈に息づいている場所はなさそうだ。

つまりここでは三つの特徴が融合している。物理的かつ視覚的には、集合住居は家屋や小屋の集まりが、きわめて耐久性のある壁や土盛りで囲まれている。耕作された畑とアブラヤシの木の群れを持つこの集合住居は、ダホメ地方部の特徴だ。二つめに、集合住居は拡大家族（グベ）が住んでいる。その男性成員は近親で、通常は共通の父系祖父や曾祖父を持つ。その同じ男性成員たちは氏族と関係しており、氏族は50ほど記録されている。氏族は地域が限定されていないが、あらゆる氏族は先祖の集合住居を含む創建時の集合体を中心に存在している。第三に基本的な点として、こうした拡大家族や世帯が根本的な形で結びついている氏族は、比類ないほどの豊かさと強さを持った内部的な宗教の力で生み出され、維持されている。それは一種祖先崇拜であり、住戸や集合住居と血縁単位を引き離せない社会的存在へとまとめあげている。

経済史研究者としては、どうしても他の非アフリカ的な地方部の形態を想起してしまう。荘園あるいは領地と呼ばれるものだ。確かに、アフリカと西欧の形態は、次のような側面が結びついているという点では共通している。つまり、しっかり壁で囲まれた住戸、家族の世襲による順位づけ、伝統的な宗教イデオロギーだ。これの政治経済パターンは漠然と「封建的」と呼ばれる。これは、部族文明と騎士文明との間の文化ギャップを埋めるために持ち出される用語だ。農民世帯と荘園経済とのちがいは主に規模のちがいでしかない。だがアフリ

## 第5章 家事、土地と宗教

カの集合住居は、要塞化されておらず、軍事的な特性はまったくない。その壁はプライバシーを確保するためのもので、安全保障のためではない。また氏族は騎士道精神、戦争馬車、エリート的な意味合いを持つ専門化された有閑階級による騎士的な武力などとはまったくつながりを持たない。また集合住居は、従属労働力を勝手に使えるような、社会経済的支配階級の特権は一切持たない。つまりこうした西洋封建主義の社会基準は、驚くほど見あたらないのだ。だからヨーロッパの荘園的な封建システムと、アフリカの氏族集合住居のシステムとでは、共通点はあるものの激しく対照的な面がある。

氏族の集合住居と制度的に同種ながら、強い逸脱を示すのはダホメ王室だ。ダホメの王室は国家領域の頂点であり、国家の外に存在する地元制度の実体とは、一貫して切り離されている。氏族とその集合住居は、そうした国家外の地元制度なのだ。

定住する氏族が地元で小規模には、王室そのものと共通する性質がいくつもあるのは明らかだ。だが人間的価値観は何と恐ろしい対照を示していることか！ 氏族もまた血縁組織で、先祖崇拜に情熱的に献身し、死者の忘れられた魂や幽霊の世話から出発して、全国的な宗教慣行の規律の表現として表れる。王室はこの同じ価値観を含んでいる。だが氏族の家庭的、人間的雰囲気と、王室のすさまじい規模での残虐な拷問愛好との間には雲泥の差がある。王室の拷問は、国家的な理由と、先祖崇拜の硬直的に遵守された思いこみとの組み合わせにより正当化されている。シブの集合住居で華開いたのと同じ美德や価値観は、国家の範囲になると道徳的な疎外を引き起こした。支配王朝もまた、氏族としての地位を強調はした。自分たちは超氏族であり、王としての戴冠式が行われるアラダがその祖先の町だという。だが氏族はそれ自体としては一般村民に対して根本的な特権を与えられることはないのに、王室はその出自から、無限の社会政治的な権威を引き出しているのだ。

### 継承と相続

集合住居は、入念で驚異的な制度に見えるはずだ。少数の単純な継承ルールを原動力として、高い耐久性を持つ構造が発達した。創建の身ぶり——ある個人の行動——がひとたび起きたら、その影響が根深い抵抗の力である、住み慣れた住居へのこだわりや、個人的な先行と習慣を克服して生き残るのだ。どんな虚飾や情熱も、道徳的な法には勝てない。それを遵守することで、この制度は生きながらえる。伝統的に聖別された継承が、全面的な成熟性を持って機能するのだ。

新しい集合住居の創建者は通常、自分の先祖の集合住居から放浪して離れた若者だ。土地の一区画を耕作し、アブラヤシを何本か植え、自分のために家を建て、また妻や妻たちのためにも一軒建てる。やがて息子たちの家も追加する——息子は二人いるとしよう——娘た

## 第5章 家事、土地と宗教

ちは母親の家にとどまる。息子たちが成長して結婚したら、別の中庭に家を建てる。いずれこの家屋群のまわりに、高さ三メートルほどの壁が建てられる。創建者の集合住居はこれで完全な地位を獲得する。彼が生きている間は、この状況は変わらない。死んだときには、引っ越しが始まる。これは祖先集合住宅の長が死ぬたびに繰り返されるものだ。創建者の家は常に、継承した男性が住み、彼が家の隣に祭られた創建者の墓守をするのだ。創建者が死ぬと、長男が一家と共に父の家に移り住む。その継承した長男が死ぬと、次の継承者が爽雨犬舎の家に移住する。死んだ元の長男の妻や子供たちは先祖の集合住居から退去して、新しいまだできていない二つめの集合住居に移住さなくてはならない。この新しい集合住居建設の負担は、新しい家長が引き受けねばならない。そこに前の集合住居の長が埋葬しなおされ、彼の息子のひとりがその墓守をする。その後の継承は、長子相続に変わる。長男の長男がいまや、お名時用に新しい三つめの集合住居を建てねばならない。もし創建者が息子二人しかいない場合、この義務は繰り返されない。というのもそうなったら継承者は、死んだら自分の集合住居の中で、父の墓の近くに埋葬されるからだ。

先祖の集合住居はもちろん大きくなったりはしないが、二番目、三番目の集合住居は大きくなって、いずれは二つに分裂する。この時点で継承は激変し、その集合体で最も年長の者が継承する。

こうして継承は、血族構造の主要単位である集合住居を発達させる。相続を無視することによって——どのみち集合住居では相続など大したものではない——氏族の土地保有の突出性は明らかだ。これは、私たちが述べたように、個別の財産とは別のものであり、共同所有ともちがっている。土地は自由に切り離せないし、またその利用は集合的な意思決定で決まるものでもない。継承で生じる氏族メンバー同士の財産権の対立は、ほとんどが別の集合住居の存在により解決される。氏族内での死によりもたらされる、移転の二つの原理（つまり継承と相続）が交差するところで、いくつか困難がまだ存在することもある。継承は地位に関するものであり、相続は従属的なものとして所有権や財産に関するものだ。相続が継承に従属するものとなっているのは、相続された所有物の用途のせいだ。こうした所有物は、神殿への氏族の貢献などの支出を軽減するのに使われる。そうした支出は、最終的には氏族の地位のために供されるものなのだ。

氏族の集合住居で継承と相続を分ける境界線は、ここではその両方を含む上位の原理のせいでぼやけている。こうした原理に含まれるのは、創建者の名前の一意性は維持されねばならないこと、土地は一家の手を離れてはいけないこと、年長者は若者からは相続しないこと、女性は男親からは相続しないことだ。すでに触れた他の有効な原理としては分岐と長子相続がある。後者は前者に従属する。アブラヤシの木の信託は氏族に有利に行われる。また死者自身の息子は最終的には父の傍らに埋葬されるという系統的な再埋葬、集合体の中に

## 第5章 家事、土地と宗教

神殿が建立されてそれが集合体のすべての集合住居に所属する。

財産が集合住居の中で割り当てられ、蓄積されるときルールは、財産の断片化や独占が起きないようにしている。むしろ、家族所有物は驚くほど永続的となり、それに伴い地位は極度に強固なものとなる。というのも、継承と相続のルールが折り重なって作用することで、維持されるのは財産というより均等な地位水準だからだ。その鍵を握るのは、集合住居の集合体の中で実践されている、信託制と不可譲性の持続的な影響だ。

土地についていえば、相続は単に使用の移転であって財産の移転ではない。このルールは、土地だろうと人々だろうと、王だけがダホメでは完全な財産権を持つという原理の延長となる。だから土地の「所有者」はそれを売れないし、奴隷の「所有者」は王の許可がなければそれを売れない。

この普遍的な不可譲性と共に広く見られたのは、土地からの収入を確実に家族の目的のために確保する、信託の制度だ。これはおおむね、集合住居の長として特権的な代表を務めたり、氏族のための緊急支出（罰金、身代金、持参金など、負担が必要となるかなりの支出）を行ったりするときの、地位的な要件だった。

### 先祖崇拜と神殿

「先祖信仰はダホメ社会組織の焦点と考えるべきである。氏族とその構成部分が存在し永続するためには、先祖の崇拜がしっかり実施されねばならない」(Herskovits, 1938 [I]: 194)。氏族の集合住居が、居住の住居であると同時に、国民宗教の体現なのだという結びつきは、このハースコヴィッツの記述が見事に表現している通りだ。

いきなり核心に入ると、先祖崇拜の二つの運用上の性質を念頭におく必要がある。父の墓の物理的所在地に関する強烈なこだわりと、死後あまり年数がたたないうちに物故した親族が神となる、という点だ。ダホメの氏族は二つのやり方で、生者と死者をつなげていた——生者たちの間で死者を身体的に保存すること、そして日常生活においては彼らを神々として温存することだ。

新しい畑を開墾するという労働が行われる前に（またもやハースコヴィッツによると）農夫はその新しい土地にどんな超自然存在が宿っているかを見極めねばならない。彼は：

その土のサンプルを占い師のところに持っていく。すると占い師はまず、最初の儀式としてヤシの種を投げて、宿命に対してそもそもこの新しい土地を耕作してよいか相談する。肯定的な答が返ってきたら、大地への生け贄が行われ、嘆願者はその畑の予定地から土を持ってきて、それを人間の頭の形にして、目にタカラガイをつけ、

## 第5章 家事、土地と宗教

その頭を地面において、パーム油とニワトリの血を捧げ、最後にトウモロコシを小麦粉と水で混ぜたものを捧げる。この儀式は彼がひとりで畑にいるときに行われ、その頭はそのままそこに残され、風化して壊れるにまかされる。(中略) 占い師は各種の神々に個別に呼びかけ、やがてそのひとりが運命によって、その畑の氏神として指名される。(Ibid.: 31)

こうなると、その精霊は

先祖崇拝の強力な神で、大木に宿るとされる。この畑を耕作するはずの男は、その土地で見つかる大木を占い師に告げる。占い師はその精霊が宿った木を見つけて、それが守り神の祭壇となるのだ。(ibid.:21)

所有者は御神酒として、その木の幹にパーム油をかけ、この捧げ物を四日毎に繰り返す。ときにはニワトリも加える。そしてこんどは

この畑の開墾をして、その後は耕作をはじめてよい。だがこの期間、さらに後に作物が収穫されるときには、この毎週のパーム油の御神酒は続け、その畑の精霊が善意のものかを示すような徴を待つ。(Ibid.:32)

こうした捧げ物にもかかわらず家族に不運があれば、あるいは何よりも重要な点として収量が乏しければ

彼はそれが精霊の悪意の証拠だとみて、占い師と相談してから、その畑は放棄されるであろう。五、六年にわたりその畑がよい作物を生み出し、所有者が繁栄すれば、その畑の守護霊信仰の神官を訪ね、その精霊を有益な「公的」神として「確立」するのに必要な儀式の種類を教えてもらうのが彼の義務となる。(Ibid.:32)

所有者は今度はその精霊のために、木の幹のまわりに小さな祠を作り、そしてその時点以降は、彼自身がこの精霊の神官でない限り

自分で生け贄を捧げてはならず、信仰の神官を呼んでかわりに生け贄を捧げてもらわねばならない。木そのものは共同体の財産となり、その根元に建てられた祠にはだれでもお参りしてよい。(後略) (Ibid.:32)



## 第5章 家事、土地と宗教

集合住居の耕作した畑にある一本の木が、公式の祠になるプロセスを分析することで、氏族と組織化された崇拜がダホメでは極度に融合していることがわかる。やがて氏族は神殿(お参りと訓練の場所)を作り、成員のひとりを世襲の神官に指名して、なが年にわたり何人もの見習い神官を養う。その神は氏族保護を請け負い、その集合体に神の霊を吹き込む。

ダホメの宗教は、広範な神話的背景を持つ偉大な神々の、三つの神殿から派生している。そのサークルのどれかに所属する神々に捧げられた神殿には、階級化された神官たちが暮らしている。公式の神官たちのまわりでは、大量の占い師たちが預言を行い、「ファ」という人気ある口寄せシステムを通じて、信者と宿命との接触を保つ。占い師は預言のための日常的な魔法を使って、最も普通の相談手段としている。ファは宗教慣行における自家製薬として有効だった。これで人は自分の運命と接触を保てた。運命とは宿命の変種でありつつ、一般人にまったく手が出せないものではない。素人でもファを少し勉強して、自分の運命を自分で探究できた。もっと腰の据わった信仰者たちは神官たちに訴えて、その信仰へのイニシエーションを求める。これは何ヵ月もの訓練、正式な踊りの指導、宗教言語一つか二つの習得、見習い神官に共通する秘教的な知識の獲得が伴う。神官階級は、神殿を建立して創建時の神官を指名した氏族につながっている。神殿は氏族の先祖の集合住居近くに建てられ、そこから永続的に生計の支援を得られる。

パトロンとなる氏族は、多くの見習い神官たちの面倒も見た。神官イニシエーションの段階は、入念な儀式、何ヵ月もの隔離の後での神殿からのエクスタシー的な「出現」、象徴的な「死」、内面を浄める期間と新しい名前の獲得、身体への切り傷模様とその治癒、てんかん状態に伴う身体ストレスからの「復活」を経るもので、それに伴い何日にもわたる入念な踊りの上演を行う長い儀式がある。すると見習い神官たちは自宅に戻って、もっと高い地位へと進む。男も女も様々なキャリアを通過し、様々な食事制限と断食期を経る。この献身者たちの核のまわりで何千人もの信者たちが、動物の生け贄、食べ物やお金の捧げ物を伴う規律の暮らしを受け容れ、自分たちを代表する神官が個人的に所属するサークルの多くの神の一人に対して、神官ヒエラルキーの統制の下で、お参りを続けるのだ。

### 宗教の経済収支

ダホメ社会の研究者にとって、経済的な側面からの収支を考えることがそろそろ求められるであろう。問題は、氏族の集合住居や先祖崇拜がそれぞれ、ダホメの地方経済に対して持つ社会経済的な貢献をどのように評価するか、ということだ。

全国的な規模で、偉大な神々の崇拜に携わっていた人々だけ——神官、占い師、見習い神

## 第5章 家事、土地と宗教

官たちについては、漠然とした数字しか使えない。バートンは女性人口の四分の一は集合住居から引き抜かれ、こうした職業に就いていたと考えた。別の情報源では、制度的な神職に引き込まれていない者が人口の半分に満たないとしている。確立した神殿は、あらゆる氏族の集合体居住区に存在したし、あらゆる集合住居には慎ましい祠があった。神殿の職員を維持するために氏族が負担した大量の物質的な重荷に加えて、氏族が週に数回にわたり神々に捧げる生け贄、賽銭、贈り物、食事などはさらに巨額だった。ダホメ生活の記述は、このように人間の消費から差し引かれた量を巨額だと推計している。ハースコヴィッツは、このようにして氏族が示す「顕示的消費」こそは、彼がダホメの中産階級の行う富の獲得行動や利得ある事業と考えるものの背後にある主要動機なのだ、と強調している。

毎年の作物や、もっと重要な点として相続されたアブラヤシの木から得られる収入のうち、どれだけが宗教的消費に向けられるのかを計測したくもなる。実際、相続を通じて消費から保護されていた大量の信託財産がなければ、集合住居は信仰の費用で荒廃してしまった可能性すらある。投資された富について明確な証拠がないので、征服前の氏族がそもそも事業を営んでいたかどうかさえ疑わしいようだ。20世紀は宗教支出から商業投資へのある程度の移行をもたらしたようだ。だが18世紀と19世紀について言えば、証拠を見る限り経済の宗教的な毀損が生じていたようで、商業的な事業の余地はほとんど残されていなかったようだ。高官たちの土地付き所領は、明確に農園として使われ、卸売り販売用に活用されていない場合には、信仰への奉仕に使われるほとんど果てしない奉納を見る限り、自由に仕える巨額の収入があった証拠とはまるで見なせない。革命前のメキシコ、ハンガリー、チベットは、ふくれあがりすぎた信仰の制度や家族週間のおかげで、同じくらいの規模で経済に負担がかかっていたかもしれない。だが彼らの教会は財宝が寄付され、大量の土地所有を行っていた。ダホメの氏族集合住居は、永続的な霊的吸い上げによって資本を奪われていたのだった。

## 第6章 交換：孤立した市場

これまでの章では、経済プロセスがダホメ社会の主要な制度に埋め込まれている様子を示した。それは国家の領域にある王宮や年次儀式でも見られたし、非国家の領域では自発的な労働チームや互助組織、さらに氏族集合住居と先祖崇拝に見られた。

価格を決める市場がない

ダホメの市場は価格設定市場としては機能しなかった。食品（多くは調理済み）を定価で販売し、またある程度は工芸製品も販売した。市場は厳格に金銭化されていた。お金の使用は強制的だった。物々交換は許されない。財はお金と交換に販売されるしかなく、購入にはお金が使われた。しかも現金購入だけだ。信用取引や卸販売はない。だが売り手は定価でかなり安定した報酬を保証されていた。これは様々な形で、生産者団体がときどき定価を変えることで実現されていた。地元市場で価格差があっても、市場の間で財の移動は起きなかった。別の市場に持ち越されるような信用や負債は存在せず、ちがう市場の間で投機による利潤が実現することもなかった。だから市場システムのものは何も生まれようがなかった。

実際、調理済み食品を流通させるという市場の重要な機能は、それが家事という農村社会における古くからの経済統合に近いことを裏付けている。家事と市場はここでは、食品の配分を組織するちがった方法と考えて良い。状況次第でどちらかが使われるわけだ。首都での王の賓客たちは、毎日王家の女性によって食べ物が運ばれるが、彼女たちはいつも一つの機関から別の機関へと調理済みの食事を運んでいるわけだ。ウィダが征服される前に観られた別の習慣として、ウィダ王は家臣 4000 人ほどの食事を提供し (Burton, 1893 [II] :43)、また在住のヨーロッパ領事たちの所在地にも食事を出したという。ダホメ王家の賓客たちは、アボメイやもっと内陸へと往き来するときには、「王の家」で食事を提供された——これは道中の町にある特別な宿場で、現地の役人や王家の女性が勤めている——あるいは、王の命を受けた地元の首長たちが提供することもあった。あるいは、そうした施設がないところでは、旅行者たちは道端や村の市場で食べ物を買った。アボメイへの訪問者はすべて、首都からの帰途につくとき、旅路で一行の経費を支払うために、このためのタカラガイを「渡され」た (cf. Dalzel, 1793: 146 and Burton, 1893 [II]: 178, n.1)。

## 第6章 交換：孤立した市場

つまり家計の店舗から食事を提供するという活動は、地理的にあまり拡大はできなかった。一部の準公務員たちは、部分的には配給、部分的には市場を通じて報酬を得ていた。ノリス (Dalzel, 1793 での引用) やバートン (Burton 1893) らが言及しているアボメイの「公的娼婦」たちも、どうやら王室のメンバーたちが食事を提供し、加えてそのサービスについて固定の報酬を受け取っていたらしい。また王国中の村に駐在している公的娼婦たちは、自分たちの受け取る報酬を補うため、食事やビールなどを市場での販売用に調理していた。

国内移動は確かに市場のおかげで助かっていた。交易商などの国内旅行者は道端の市場に頼れたし、町の市場——内陸はわからないが少なくともウィダなどの海岸町にはあった——は雇われ労働者の日々のパンを提供していた。荷担ぎ人、ハンモック担ぎ人、カヌー漕ぎ人など、外国人で現地の世帯とのつながりがない人々は、「生計」という名の賃金をタカラガイで受け取り、それを使って市場で食べ物を買った。バートンによれば「多くの『働く人』は路地で朝飯と夕飯を食べている」(Burton, 1893 [I]: 48) とのこと。ここでの「路地」とは彼がウィダのゾベメ市場を指すときの用語だ。

ダンカンの記述 (Duncan 1847[1] :289) は、いつもながら詳細で迫真だ。旅行者が飲食のために立ち寄る道端の市場は、主にカンキエ (トウモロコシとヤシ油でできた地元のパン)、ローストビーフ、ゾウ肉、茹でた豚肉、ヤギ肉など旅路に必要な糧食や物資を扱っていた。調理済みのヤムイモ、キャッサバ、ときにはサツマイモも売られていた。水と地元の飲み物であるペトは高値で売られていた。カナとアボメイの間の有名な、王家が誇示したがる街道には、スカーチリーの言及した路側市場があり、そこでは旅人は飲食のために休憩できる (Skertchly, 1874: 153)。こうした道端の市場は地元の食品市場の役割も果たした。これはもっと気安い「ブッシュ市場」も同様だ。

ブッシュ市場は村や町に対し、売り手の仲介を通じて供給を行った。その売り手というのは近所の女性たちだ。こうした小売市場では、価格は決まっておらず需要と供給の力の変化について、制度化された表現はまったく与えられていなかった。

定価市場は、市場での興奮を常に争いの種となる価格と結びつけるのになれているヨーロッパの観察者にとって、パラドックスめいた特徴を提示するものかもしれない。バートンのコメントを引用してみよう。

それは奇妙なコントラストとなっている。売り手は、パイプを口からわざわざ出す手間すらかけず、タカラガイ二つという価格をもごもごと、静謐かつ無関心に語り、一方の買い手は、それを買って要求額を払わねばならないと知っているのに、騒々しく興奮してみせるのだ。(Burton, 1893 [I] : 49)

## 第6章 交換：孤立した市場

スカーチリーが述べているように、値切ったり交渉したりしても、買い手としては無駄だ。「買い手は騒々しく興奮してみせるのだが、その商品の値段がタカラガイ一つ分ですら減らされることはほとんどない」(Skerchley, 1874:28)。このパズルの答は、興奮した値切り交渉が目指しているのは価格ではなく、取引における以下のいくつかの側面のどれかをめぐるものだということだ。一つは、その販売商品が定価に該当するものかということ。そしてもう一つは、売り手の扱う計量容器が適正かということ、三つめは、各種価格が様々な通貨で支払われるときの比率が正しいかということだ。また売り手が自分たちの権利のために立ち上がらねばと感じると、この構図はいきなり変わる。ハースコヴィッツはが記録しているところでは、市場の女性は

市場にやってきて、財を懐に入れながら、標準定価を支払おうとしない個人に対しては、そうした不屈き者を入念に打ち据えることで自衛する。そして集団の興奮した女性たちはみんなそれに参加するのだ。(Herskovits, 1938[1]:61)

### 強制的なお金の使用

定価は、ダホメ市場の他の特徴と不可分に結びついていた。それは、販売/購入の強制的な金銭化だ。1694 年というはやい時期ですら、フィリップス船長はウィダでタカラガイがお金として使われていると報告し「こうした貝殻がないと彼らは何も買えない」と述べている (Philipps, 1746: 2 44)。海岸部からニジェール中部まで、市場のこの驚くべき特徴は広く見られている。これは意外な事実だ。というのもこうした経済のほとんどは「実物」経済であり、政府中心の入念な主要商品財政も含め、金銭化されていないからだ。だがビンガーは、19 世紀末の西スーダンについてこう記録している。

一般にこうした国では直接交換は存在しない。購買を行う前に、自分の財をその国の通貨に換えねばならない。(Binger 1892[1]:2)

あるいはバスデンは、イボの現代の市場についてこう述べる。

あらゆる財は地元通貨に基づいて販売される。商品を別の商品と物々交換することはない。(Basden 1921: 196-97)

スカーチリーは、上述のカナとアボメイを結ぶ壮大な道に隣接する、上述のスナックバー

## 第6章 交換：孤立した市場

について書く中で、この性質がいかに根深く定着しているかという慣用的な証拠を提供している。彼の描くブッシュ市場は、その名前に滑稽な警告「現金のみ」を含んでいるのだ。その市場の名前は

アクウェ＝ジャナハンという。アクウェはタカラガイで、ジャナハンというのは持っているなければ、という意味だ。だからこの名前は「ここは市場だがタカラガイを持ってきていなければ役に立たないよ」ということなのだ。(Skertchly 1874:153)

この孤立した市場の金銭化がなければ、食品の定価設定は実施不可能だっただろう。後に見るように、ダホメ政府の最も驚くべき成果は、タカラガイと黄金の安定した為替レートであり、これはミクロコスモスたる地元市場での食品価格の固定に基づいていたのだ。

現金、信用取引なし

取引を局所化するためのもう一つの特徴は、信用取引の発達が阻止されていたことだ。信用取引があれば、ある市場の取引の影響を、同じ「輪」の中の別の市場へと伝えただろう。フィリップスは現金支払い市場でのタカラガイ利用が一般的だと指摘し、ラバトは1727年に、ウィダで「この国では信用は知られていない。(中略) 商品を受け取る前に支払いを済ませる」と書いている (Labat, 1731 [II]: 166)。ただし彼によれば、砂金とタカラガイはどちらも使われていたという。現代のバスデンは、イボ族について、彼らの市場では「それぞれの取引はまったく別個のちがった出来事なのだ」と強調している (Basden 1921: 197)。分析的には、これは市場システムの欠如を決定的に裏付けるものだ。

小売人の報酬：二重の記数法

こうした孤立した市場では、ダホメ女性は商売を通じて、限られたとはいえ安定した所得を確保できる。これはその市場のある地域で活動を統制して切り続ける組織のヒエラルキーの中で、彼女に地位を与えるものとなった。一日の大半は、製品が農園で買われて市場に運ばれるまでの徒歩で占められている。これは一日二往復となることもあった。カンキエパンやペット飲料、調理済み肉、ペーストリーなどが、男性労働人口のニーズに応えるために彼女たちが販売したスナックや食事を構成していたが、彼女たちはこうした調理できわめて忙しく働き、外国の観察者はすべて、大いに賞賛している。こうしたすべては、孤立食品市場で制度化されており、そうした市場はすべての女性の生産活動の中心となっていた。

## 第6章 交換：孤立した市場

財務的には、売り手の報酬となる利益マージンの源は小売人の割引だったが、こちらも源はまったくちがう性質のものだったようだ。ハースコヴィッツは、卸売人が小売人に産物を売るときに、まずその商品が町の市場で販売される実際の小売り価格を見極めてから、価格設定を二割引きにしていると述べる。

価格はグレタヌ同士の取り決めで固定されるのではなく、それぞれの人物が小売市場を注意深く観察することで固定されている。隠密エージェントがアボメイに送られて公開市場で穀物を購入し、たとえばその卸売人のエージェントが1フランで食事一食分を買ったとしたら、市場の女性に対する卸売り価格は80サンチームとなる。(Herskovitz 1938[I]:56)

要するに、市場女性の労働については、2割に相当するものと規制されており、その手法は状況次第で変わる。

西スーダンの実に広範囲にわたる様々な地域に関する多くの情報を見ると、タカラガイ通貨の二重記数法が使われていて、それが自動的に小売人に同じくらいの利潤を確保したらしい。メイジは1868年にこう書いている。

タカラガイはきわめて特殊な数え方になっている。我々は10ごとに数えるから、最初は記数法が十進法に思える。だが我々は $8 \times 10 = 100$ と数える。 $10 \times 100 = 1000$ 、 $10 \times 1,000 = 10,000$ 、 $8 \times 10,000 = 100,000$ となる。だから100,000というのは(中略)実際はたった64,000で、10,000は(中略)8000でしかない。1000は(中略)たった800で、100はたった80だ(後略)(Mage 1868: 191)

1899年にはバイローも似たような説明をしている。

タカラガイはバンバラ法で数えられる。これは、3桁目ごとが80で始まるというものだ。だからタカラガイ5000個を5フランと言われたら、それは $50 \times 80$ と理解せねばならず、つまりは我々の記数法だと4000なのだ！話がタカラガイのこととなると、我が国の当局はこのバンバラ法を使わざるを得ないが、警告を受けていればそれで特に不都合は生じない。(Baillaud 1902: 71)

バイローはさらに次のコメントを付け加えている。「この価格差は小売業の利益となるものと理解されている」(ibid.: 71)。つまり、たとえばタカラガイ1万個の価値を持つ財を大量

## 第6章 交換：孤立した市場

に購入した小売人は、実際に支払うのは 8000 タカラガイだ。(cf. また Lenz, 1884[III: 158-59)。だが少量を小売りするときには、この二重の記数法はあてはまらず、売り手は 10000 タカラガイ全額を受け取るので、金融システムのおかげで2割の利潤を得ることになる。

ダホメ自体ではこのタカラガイの二重記数法についての直接証拠は存在しないが、現代においても、利潤を二割に規制する手順が残っていることを考えると、ダホメの歴史を通じて制度的に利潤を統制する手法があったことが示唆される。

### 価格設定

こうした市場は、私たちの知る限り価格設定はしない。つまり需給に応じて価格は変動しない。だが価格は実際にどう設定されるのか？ これは生産者組織の機能の一部だ。この組織には、その市場で食品を売る女性たちの組織も含まれる。工芸品となると、ギルド組織が自分の職能の作業条件を統制し、製品の基準を決め、規律を維持し、市場で販売される製品価格と、小売りの手順を設定する。

まず、食品価格は市場において圧倒的に多いアイテムだ。アボメイの市場では、価格を設定するのは市場に最初に来た女性だ。この価格がその日は維持される。海岸都市ウィダとポルト・ノヴォでは、同じ商品を販売する小売人たちはソドッドという協会に所属しており、これが食品の販売価格を決める。ハースコヴィッツによると「価格はこうした協会が決め、その会員はみんなそれを遵守する」(1938 [I]: 61)。値切り競争が起きないのかと質問すると、女性たちはそんなことをするヤツがいるのか、と驚かせてみせた。そんなことをすれば利潤が減るだけだし、供給分は通常はどのみちその日のうちに売り切れるのだ。

ソドッドはまた、互助機能と疑似家族機能を持っており、それが会員を強くまとめている。だれかが病気になったら、全員が見舞い品を持って訪れる。だれかが死ねば、同じ製品のあらゆる売り手は、葬儀から8日間は市場に顔を出さない。

大手市場での食品を売る小売り女性たちは、その供給品を専用農家から調達した。ダホメのあらゆる高官は大量の農園を持ち、後にはグレタヌ、つまり卸売り人の資格を得た (ibid. [I]: 55)。彼らの畑の一部は、長さ 25-30km で幅は数 km という規模だった。彼らはキビ、トウモロコシ、ヤムイモといった、単一の主食作物の栽培に特化していた。小規模市場についての情報はこれほど完全ではないが、どうやら女性たちは、夫の村の畑からの余剰や、自分の集合住居の畑からの余剰に頼ったらしい。土壌の作物において、小売りのためにまったく等価なものを創り出す手法の強固さは、現代においても驚異的なものだ。ハースコヴィッツが調査を行ったとき、パーム油の小売価格を設定するのは小売り女性たちだった。油は標準容器に入れて販売され、価格はパームの実のバスケット価格に応じて変動するが、パームの



## 第6章 交換：孤立した市場

実のバスケット価格は、王の決定によるもので、王はそれをパームの実の世界市場にあわせて決定した。この世界市場価格に、パーム油を調製して販売する専門家が投入した労働の等価分が加えられる。

第2に、工芸製品の価格は決まっていた。個別の標準化されていない製品だと、工芸品価格設定は食品とはちがっていた。だが工芸ギルドまたはソの影響力は、製品の生産販売を通じて支配的なものだった。

織り手たちは、この工芸ギルドを構成する特定家族に所属しており、順番にブローカーとして活動した。織機は彼らが暮らす集合住居の近くにある、別の小屋に置かれていた<sup>9</sup>。織り手の主要グループの首長は、あらゆる織り手を統制していた。協同作業が基本であり、織り手たちは厳しい規律を課せられていた。ある織り手が新しいパターンを発明すると、仲間の職人たちにその見本を送る。それぞれのパターンに名前があって、デザインごとに定価が定められた。これはよく知られていたから、市場で値切り交渉はほとんどなかった。織り手は、地元で紡績された綿の価格に基づいて定価を決めた。ハースコヴィッツによれば、かつて綿花が育成されるまで、地元のラフィアがこの計算で使われていたとのことだ。綿の価格(42 単位長の梳綿あたり 10 サンチーム<sup>10</sup>)に織り手は女性の布なら 15 フラン、男性の布なら 30 フランを上乗せした。だから原材料価格が固定なら、標準のマークアップ分のおかげで、その布を作るのに使われた材料の量だけが価格変動要因となる (Herskovits, 1938 [I]: 62)。販売競争はさらに、パターン利用の制約でさらに制限された。自分の布を売ったり、自分が考案したのではないパターンを複製したりするときには、ギルドのメンバーはギルド長の許可が必要で、そうしたデザインの使用料を支払わねばならなかった。(ibid.: 76)。

すでに述べたように生産は、持ち回り制で行われた。ある集団のメンバーたちは、それぞれのメンバーが供給した材料を順番に加工したから、それぞれの織り手が順番に布供給の所有者となった。そして織り手集団の一員が今度は、自分の集団全員にかわって順番に布の販売を任される。彼は市場が閉じたら、それぞれの布の所有者に精算を行うよう義務づけられていた。精算できなければ罰が科される。ハースコヴィッツによれば

(前略) 仲間の一人に糸を提供して、この仲間が布を売って利潤を得たのに、互酬する段階になって履行しなかったら、サガが動き出す。これは不履行者の財産を差し押さえるということだ。差し押さえて売却できる家畜もここに含まれる。もし下手人

---

<sup>9</sup> ハースコヴィッツは、彼の知る限り織り手の集団は三つしかなく、すべてアボメイ在住だということ (Herskovitz 1938[I]: 76)。

<sup>10</sup> 訳注：ten centimes for a carded piece of forty-two lengths 不詳。

## 第6章 交換：孤立した市場

が差し押さえられるものを所有していなかったら、協会の会員資格を剥奪され、当局に対して苦情が申し立てられる。かつてであれば、これは王が裁可すべき問題となった。(Ibid.:254)

鉄の加工業もまた特定家族の成員で、持ち回り制で働き、鍛冶場のまわりの別区画に住んでいた。鍛冶場のメンバーは共同で働き、それぞれが自分や仲間の書こうする原材料を順番に提供した。できた製品は材料を供給した者に所属する。鉄製品に定価はなく、それぞれの鍛冶師が自分で値づけをして売ったので、その人の懐具合に応じて値段は上がったり下がったりした。スカーチリーは、鉄製品の価格は製品ごとに別々に決められたと書いている (q. Herskovits, 1938[1]:62, n.1)。

定価がないのはしんちゅうや銀の加工を行う「黄金職人」も同様だ。また布でアップリケ作業を行う人々も同様だ。彼らは職人というよりアーティストと見なされており、人数も比較的少なかった。木彫りの場合、購入者は彫り師に対して、だいたい同じくらいの大きさの作品であれば、その後の買い物で最初の製品に支払ったのと同じ金額を払うことが求められていた (ibid.: 62)。

鉄と布の作業をしたのは男性だったが、三つめの主要な工芸品である陶器は女性が扱っていた。女性集団が共同で焼き窯を使い、陶器を作るのは個人でやったり手助けを受けたりしたが、焼くときは共同で火を入れた。陶器の販売人は、ある種類の陶器がすべて市場に到着するのを待ってから、その日の定価を決める (ibid.: 61)。壺の作り手の場合、ハースコヴィッツによれば

グループの他の女性と折り合いが悪い女性、特に値引きをする女性は、陶器の在庫を仲間に割られ、さらに報酬なしにしばらく働かされるという罰を受ける。その後でやっと、ギルドの特権すべてが再び認められるようになる。(Ibid.:76-77)

### 定価の変更

定価はどのように変わるのか？ 一般に、価格は最初に設定されたのと同じやり方で変更された。だがこの仕組みには独自の非弾性的な部分があった。価格が変わっても、必ずしもそれに対応して「供給」変化は生じなかった。季節的な高価格ですら、売り手の間の競争にはつながらなかった。またすでに見た通り、国家がトクボとその役人を通じて農業全体の監督を行っていた。毎年、作柄の調査が行われ、各種作物の生産変化を命じることができた。「供給」の変化は一般に、地元の価格変化から生じたのではなく、行政的な意思決定で生じ

## 第6章 交換：孤立した市場

た。ハースコヴィッツによれば：

ある作物の生産過剰があり、別の作物の生産が過少なら、ある地区丸ごとの作物が、彼[トクボ] の命令で帰られたりする。(Ibid.:112)

フォーブスは、農業状況について王と大臣たちが、年次儀式の期間中の国家会議で議論している様子を描いている。だがどうやら中央当局は、食品供給の統制だけにとどまり、価格の問題は地元の組織に任せたようだ。だが地元組織は、伝統的な食品価格に介入するのをきわめて嫌った。さらに拡大地域内で一般的に価格差がなかったことを考えれば、なぜ市場機能に基づく取引がなかったのかはわかる。この事実についてはまた後述。

安い食品

こうした市場制度は、決して高度なものではないが、かなり効果的に機能していた。この制度の結果として生き延びるための手段が普遍的に安くなった点は、あらゆるヨーロッパの観察者が感銘を受けている。これは特にウィダで顕著だった。それがアルドラに征服されていたときも、独立後も、やがてダホメの支配下に入ったときもそうだった。これは生態的な理由から、ウィダのすぐ西の国、干潟居住の荒涼としたポポ地域とは対照的だ。この地域は半ば飢餓状態で、それを海や干潟からの漁でなんとか軽減しているのだ。自然の収穫はもちろん、内陸のダホメにも庭園のようなウィダの地域ほどは有利に働かなかった。それでもここで引用した著者たちは、ダホメを訪れその経済状況に言及したときには、生活が厳しいとか食べ物が不足しているとかいう話はほとんどしていない。物乞いや乞食がいた様子もない。帰国する船長にとって、その生きた貨物に食べ物を供給するのは絶えず懸念事項だった。地元の首長たちはしばしば、ビジネス収支に圧力をかけようとして内陸の食品市場へのアクセスを認めなかったが、食品価格に関する苦情の訴えはまったく見られない。現地人の戦術は単に、遅れを引き起こすことで船長に巨額の損失の脅しをかけようとしていただけのものだ。窮状が食品供給の価格により引き起こされたことはなかった。

無文字の海岸地域や内陸のダホメで地元記録がないため、18 世紀の経済史研究者は、生活費のとんでもない安さについての主張を裏付けるデータがほとんどない。だがバルボーやボスマンからダンカン、フォーブス、バートン、スカーチリーとを隔てる 150 年以上の期間は、滋養に関する生活の容易さはいささかも不足していない、単純な物質文化の構図を、事実として十分に裏付けのある形で提示してくれる。

## 第6章 交換：孤立した市場

通過の安定性について言えば、よい証拠がある。32,000 タカラガイが黄金一オンス、すなわち 4 英ポンドという為替レートは、この期間のどの時点でもまったく疑問視されなかった。この事実だけでも、ドイツ、フランスイギリスの有力な学者たちによって、リビアの南からギニア海岸まで広がり、東西は大西洋近辺からチャド湖まで広がる広大な地域における生活の安上がりぶりについて、一様に驚きの声があがっている点を指摘するのに充分だ。こうした学者たちは、生活必需品はきわめてわずかなタカラガイで買えると主張しており、その裏付けとしてタカラガイと金属の交換価値についての厳密な言及が提出されているのだ。

ナクティガルはタカラガイの民主的効果を分析している。彼によるとタカラガイ 1 つは「ターレルを 4000 個の貝殻に分けた価値を示す (中略) これは貧困者が、考えられるあらゆるモノや材料をきわめて少量だけ買えるようにしてくれるのだ」(Nachtigal, 1879[I]:692)。ハインリッヒ・バルトは、中央スーダンでタカラガイが登場する以前から現地にいたが、こう書いている。

人々が一週間分の必需品を市場で買いそろえるために市場で負わされる疲労は、現時点では売買のための標準のお金が存在しないために、なおさら面倒なものとなっている。(Barth, 1859)

彼は当初、タカラガイを導入した公共政策について懐疑的だった。それが「住民たちの自然な求めではなく支配者たちの浅慮によるもの」(ibid.) ではないかといぶかしんだのだ。ガバガス、あるいは地元の 14 ヤードの綿布はボロに劣化した (訳注：どうもそれまではこの布キレがお金がわりに使われていた、ということらしい)。新通貨の交換価値は、布キレと 8 タカラガイが等価で固定されていた。バルトはやがて、貝殻が「小さな品物を買うのにとっても便利であり、綿布よりもはるかに便利である」(ibid.) と同意するに到った。ナクティガルはこの普遍的なタカラガイを大いに賞賛しており、その価値をプフェニヒの十分の一ほどだと計算している (1879 [I]: 692)。それに対応するイギリスの黄金価値は、ほぼ八分の一ファージングちょうどだった。フランスの権威であるシモン・ベルバンは、1 タカラガイの価値をフランスの通貨で、1 リヤールの五分之一としている (Berbain 1942: 69)。つまり半ファージングだ。細かい通貨単位の利点は、タカラガイ通貨が一時的にインフレとなった時期には見えにくくなっただろう。バートンとスカーチリーは、ウィダでこうした物価上昇を目撃した。このときはカンキイが 3 タカラガイから 12 タカラガイに値上がりした。だがスカーチリーは、価格上昇を記録しつつ、それでも「あらゆる店には大量の 2 タカラガイの商品がたくさん見られた」(Skertchy 1874:28) と付け加えている。というのも屋台には通常の縫い

## 第6章 交換：孤立した市場

針の二組セット、安全ピン、何十ものトウガラシの株、塩ひとつまみ、腕の長さほどの白い綿糸、爽やかな飲料が指先ほど、一口分の羊肉やヤギ肉（よく焼いて塩を振ってある）が展示してあるのだ。その二世紀近く前——1694 年頃——ロンドンのハンニバル社のトマス・フィリップス司令は、ウィダ王の御前を訪れたとき、ちょっと仕事を休んで、小さな市場が開かれている木陰の集まりについて書いている。

そこにあるいろいろなものの中に定食屋が見られ、珍しいのでここで記述しておこう。それは最大の木の本元にあつて、そこに店主はテーブルとして、直系一メートルほどの平らな木の板を地面の上に置いていた。肉はゆでた牛と犬の肉で、それがウシの生革でくるまれて脇に置かれ、ゆでたキャンシイが土器の皿にのって、パンがわりに反対の脇に置かれていた。

気安い食事が始まったが、なかなか作法が整っていた。

食事にやってきた者はテーブルの横にしゃがんで、そこに八個か九個のタカラガイの貝殻を置く。すると調理人はきわめて器用に、その人が置いた価値の分を小さなかけらにして切り、そしてキャンシイと塩を与える。それで満腹しなかった人はもっと貝殻を置き、その分だけ肉を追加でもらう。

タカラガイは立派にその任を果たした。

私は彼のテーブルのまわりに八人か九人が一度にいるのを見たが、彼はそのすべてに給仕し、実に器用に彼らのお金を受け取ったし、混乱はまったくなかった。だがお金を替える必要はなかった。これは彼にとって仕事を大いに楽にした。(1746:238-39)

外国貿易と市場との乖離

供給が孤立した市場での食品価格の上昇に応えがらない点はすでに触れた。古代経済の研究者は、初期の社会では、未開社会だろうと古式社会だろうと、外部貿易と地元市場は、現代社会で私たちが慣れ親しんでいるような密接な接続性を示さないことを思い出そう。ダホメの到るところにある市場はこの意味で、現代的な形ではふるまわないのだ。その単純な理由は、価格差のある市場システムだけが貿易の方向性を導くからだ。

## 第6章 交換：孤立した市場

ダホメ経済は市場システムという交換パターンの拡大を明確に欠いているため、中央から運営され、軍と外国貿易のために行われる、割り当てに基づく政府取引以外は、ほぼ何もないものと予想される。民間商人はおらず、大量の依存した荷担ぎ人や、軍事守備隊としての命を受けた高官や商業外交官が、典型的な隊商の人員を構成する。中産階級商人、たとえばイスラム貿易ムラーなどは、ダホメでは一過性だ。その地方部では中距離の取引は存在しない。新しく獲得され、まだ統合されていないダホメの地域が存在する国境町近くでは、まだ民間隊商取引の余地があるので、町の外部市場と内部市場のソンジアが、貿易と市場の区別を示すものとなっている。やってくる貿易商は、外部市場で酋長に迎えられる。そして酋長が財を全部買い上げ、そしてそれを町中で妻たちに利潤目当てで小売りさせるのは、彼の特権であった。また一部は隣接する村の小屋の中で、思春期の若者が売り歩いたりする。ダンカンの赤裸々な描写では

老人 [バッフォの酋長] は、これがバッフォにおける主要な市の日なのでお終わらわだった。そしてさらに彼は、古い習俗を維持することが許されている。これはここではマヘー地方従属以前から存在していたもので、この場の取引すべてを自分で独占してよい、というものだ。この結果として、酋長は若い妻たちが屋台の番をしたり、市場で商品を行商したりするのを忙しく見回るのに余念がない。その妻たちの多くは、私が見るに他の妻たちの利潤など個人的関心などないも同然なのだが、盗難が絶対に起こらないようにすべく、酋長は最も若い妻たちを、市場の中で最も目立つ場所に配置して、自分はその場すべてを見渡せるところに陣取った。年配の、あるいはもっと信用できる妻たちは商品を町のちがった部分に運んで売り歩くかどうか、自分で判断が許されていた。主要な、またはお気に入りの妻たちはそれぞれの個人に販売用に割り当てられた部分の商品を売り出すが、しばしばそれは所有者が指定したものよりさらに高値で販売され、買い手が見知らぬ人物ならなおさらその傾向が強かった。もちろんその上乗せ分は個別の売り手が懐に入れる。(Duncan 1847[II] :47-8)

第II部では、内陸のダホメ王国の経済を採りあげた。ここは1727年移行は、ギニア海岸のウィダ貿易港も統括した。19世紀半ばまで、アボメイがこの華開く古式帝国の首都だった。おおむね、四つの統合されたパターン——再分配、互酬、家事、市場での交換——がその経済の機能を説明できるようだ。統計データがないので、その成功/失敗については、経済史研究者が一般的に使う社会厚生のマーカーか、その逆のものをもとに計測するしかない。社会均衡、安定した生活水準、あるいは逆に飢餓、人口減少、社会騒乱がそうした指標となる。金銭経済の重要な震度計は、その通貨安定性の度合いだ。部分的にしか金銭化され

## 第6章 交換：孤立した市場

ていないとはいえ、ダホメの巨大な外国貿易は、その為替レートを異様なほど厳しい試練に直面させた。だが市場システムに代表されるような均衡メカニズムなしに、一世紀以上にわたり平和時も戦争時も、安定した為替レートがどうやって維持されたのだろうか？ 私たちの分析のこの段階では、古式経済の硬直した構造的強固さこそが、均衡デバイスに変わるものとするしかない。

## 第 III 部 奴隸貿易



## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

### 初期社会における貿易港

貿易港は、機能と効率性の綿で私たちの国際市場に匹敵する制度だったが、私たちがなじんでいる競争的な需給と価格のメカニズムとは無縁の運用手法に限られていた (Polanyi, 1963)。制度としての貿易港の起源は、はるか昔にさかのぼるものだ。存在理由は、交易者に命や身体の安全と、さらに財産の安全を提供することだった。外国の海岸での見知らぬ者同士の出会いはあらゆる初期の貿易で必ず生じたし、そうした出会いにつきものの危険も必ず生じたからだ。だからこそ、古代では沈黙の物々交換や沈黙貿易が無人の浜辺で行われた。これはフェニキア人がやっていたとヘロドトスが書いているものだ。北部ギニア海岸で、今から二千年前に、塩と黄金の交換がこの仕組みで行われていたという。

文明化された地域における貿易港の発生においては、一般に三つの特徴があった。経済行政、政治中立性、輸送の容易さだ。貿易は価格競争ではなく、行政活動を通じて行われた。港湾当局は政治的な肩入れをしなかった。最後に、海岸、沼地、河川を問わず航路の中立性は、安価な輸送のために不可欠だった。

安全性を保証するのは、隔離された島のような場所、水路や湿地や干潟のネットワーク、半島、ペトラなど山地の要塞、砂漠環境、あるいはこれらの組み合わせだった。こうしたそれぞれは、地中海でも、アジアでも、アフリカでも、中央アメリカ亜大陸でも各種のちがった戦術的優位性をもたらした。ウガリト、エル・ミナ、タイレ、シラクサ、ミレトス、ナウクラティス、ピレエフス、ロードス、カルタゴ、コリント、アレクサンドリアは、隔離されたり半島だったりした貿易港の例だ。ツムタラカン、カラコルム、カンダハル、ティンブクトゥは砂漠地帯に囲まれていた。そして島嶼センターとしてはゴリー、ジェイムズ・フェルナンド・ポー、西アフリカ沖合のプリンス島、メキシコのゾコヌスコ、ザイコランゴ、マラバルなどがある。

原則として貿易港は軍事的には「弱い勢力」、たとえば部族社会や小王国にあった。だからそこに滞在する外国人は、商品を奪われたり奴隷にされたり、すぐに殺されたりするのを恐れる必要はなかった。弱い勢力の真逆、つまり強力な秩序ある政府の下までこないと、貿易商にとって安心できる状況にはならない。政府が、中立性を守る意志も能力もあり、法と公正な正義を施行できない限り、外国商人は軍事力が支配した地域を避けねばならなかつ

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

た。

コルテスが武力をもってアカランを訪れたときがその好例だ。アカランはメキシコ帝国とマヤ帝国の間に位置する地域にある、川沿いの街だ。何百もの丸木舟を持つこの街は、元々は単なる部族地域でしかなく、河川域と沼地域の商人たちが、丘の人々と接触するセンターとして有名だった。ほんの数年後、征服者としてアカランに進軍したコルテスは、そこがすでに交易場所ではなくなったことを知って驚いた。実はその変化は、それが軍事帝国——コルテス自身のもの——に組み込まれたことで生じたものだった。いまや中立性が阻害され、それまでは遠い山の森林の作物を持ってそこに来ていた部族にとって、魅力が薄れたのだった。

別の事例は、16世紀メキシコから千年以上もさかのぼるものだ。ローマ時代のシリアにおけるまばゆい隊商都市パルミラは、ロストフツェフにより貿易港の性質を持っていたと主張されている。そこでは東から西へ、そして西から東へ砂漠を歩き、敵同士であるパルティアとローマの商人たちが出会っていたからだ。だからこそ、ローマ人はパルミラには駐屯兵をおかなかったのだ、と彼は主張する。むしろ退いて、この隊商都市にある種の遠隔支配をかけるだけにとどめた。軍は意図的に遠くにおかれて、砂漠からやってくるアラブたちに対して、この町の近隣に入っても危険にさらされることはない、と保証していた。つまりこの都市は人口的に一種の国際中立性を与えられており、それが商業的成功にきわめて有利となったのだ。ロストフツェフは、パルティアとローマとの間で文書による合意すら取り交わされたはずだと述べる (Rostovtzeff 193 2: 103)。そして同じく歴史的な事例としては、当のウィダが挙げられる。これは条約により守られた中立港として栄えた。それがダホメ帝国に征服されたことで、一時的に奴隷貿易は衰退した。小規模な奴隷供給業者がいまやそこを敬遠したからだ。

経済開発の学徒なら、これを見てこう尋ねるだろう。17世紀の変わり目に、上部ギニアの海岸僻地で、干潟のフエダ族が暮らしていたような場所が、どうやって独立行政域として確立し、世界奴隷貿易の中心として名を馳せ、当時の列強の間で猛威をふるっていた大戦の中で、ものの一、二年でどうやって正式に中立性を宣言できたのだろうか？ その答は、まさにその時代、まさにこの西アフリカ海岸の場所に生じた、アフリカ＝アメリカ奴隷貿易の軍事的、技術的、経済的ニーズに求めねばならない。

奴隷貿易の歴史的発達においては、アフリカ海岸の三つの地域を区別する必要がある。一つは黄金海岸。これは黄金以外にも、以前から奴隷が売買されていた。アフリカ＝アメリカ奴隷貿易の大波が黄金海岸に1660年代にやってくる以前のことだ。それから、東に行って海岸から少し内陸部に入り、1669-1704年の四半世紀で、黄金貿易から奴隷貿易へと移行し

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

たアルドラ王国がある。三つめの地域は、小王国だったウィダだ。ここは元はアルドラの属領だったが、17世紀末期頃の奴隷貿易の津波により、国家の地位に格上げされた。この独立貿易港が台頭したのは、「現代的な」奴隷貿易（1704-27）の要件にとって、アルドラの緩い古式帝国構造が不平等だというのがわかってきたからだった。

このそれぞれの地域と時代において、貿易が実施されるやり方は、海岸部とその後背地の政治形態に依存した。これは「商品」が供給されたり、それが秩序だって放出されたりする、制度的な経路に決定的に影響した。経済学者ならそれを「供給」と「需要」の相互作用とも呼びたがるだろう。市場メカニズムがないので、ここでは経済プロセスは、異様な形をとった政治組織の仲介を通じて作用していたのだった。

### 黄金海岸の奴隷貿易

黄金海岸は、熱帯雨にさらされる濃い森林山脈と、浜辺との間の狭い帯域でしかなかった。ほとんどは砂がちな荒地で、やせたブッシュがヴォルタ川までまっすぐ続き、海岸と後背地の川の差金が唐突に終わる。海岸には、小さく人口密度の低い漁村が部族社会の一部として点在したが、そうした部族社会のどれも組織化された国家にはほど遠い。黄金貿易は、ヨーロッパ人がいろいろな商品を黄金と物々交換するという単純な手段で行われた。これは「城塞貿易」、つまり倉庫（工場）から行うか、あるいは船から行う貿易だ。「城塞貿易」というとずいぶん恐ろしげな感じだが、実は慎ましい店舗に従業員（主に現地人）が数人いるだけで、本格的な城塞はごくわずか、エル・ミナとカポ・コルソにしかなかった。これは主に工場を守るためのもので、しかも想定敵はヨーロッパの競合相手だ。ほとんどの貿易は「船舶貿易」として行われ、特に奴隷貿易となるとこちらが中心だ。地元のブローカーがほとんど夜に、通過する船長たちのところへ、奴隷一人か二人、最大でも三人のせたボートでこぎ出すのだ。黄金貿易ですら、ヨーロッパ諸国と地元集合組織との間で決まった形で行われていたわけではない。見知らぬ相手と異国の海岸で行う商業関係に必要な、地元の政治ユニットが存在しなかったからだ。

ボスマン（Bosman, 1814）の、ギニア海岸における王国と共和国との鋭い区別は、この地域の政治組織の鍵となっている——彼が絶対専制君主の秩序だった領域と呼ぶもの、主になり区部についての賞賛と、沿岸に散在する部族共和国とその不安定な連邦についての、弱くて無力という低評価よりはきわめて示唆的だ。ギニアのトウモロコシ海岸、歯海岸（象牙海岸）、黄金海岸の海岸部には組織化された国家はほとんどなかったが、これに対して奴隷海岸自体の海岸には、ウィダとポルト・ノヴォという小さな官僚的王国が存在していた。

17世紀半ばのヨーロッパ列強は、こうした貿易の条件が持つ意味合いをなかなか理解で

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

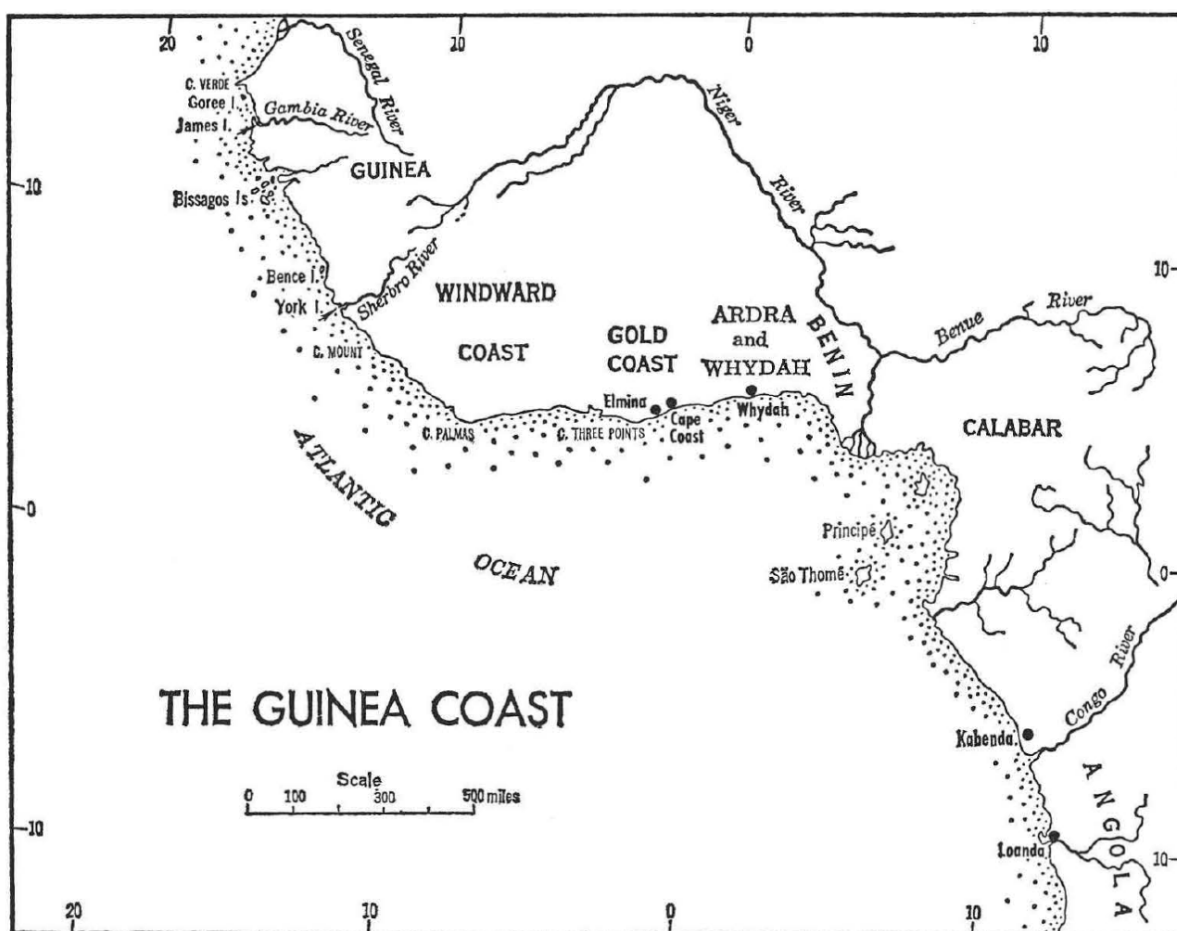


図 3 K. G. Davies, *The Royal African Company*, Longmans, Green and Co. London, 1957 より

きなかった<sup>11</sup>。実質的にヨーロッパの勅許会社は、交渉すべき地元パートナーもなく、よって守るべき貿易条約もなかった。不首尾に終わった外交契約、中断されてばかりの合意、ときにはくだらない対立などがいくらかでも見られた。アフリカ国家が外国貿易にふさわしい機関を自ら設立するまでにはかなりかかった。

ヨーロッパ各国はときに、黄金海岸の「王家のいところ」と外交関係を結び、こうした形式的な身ぶりを通じて暗黒大陸に商業的な足がかりを築こうとした。なかなかおもしろいエピソードがこのためにいろいろ生じた。

その一部の主役は、黄金海岸への進出が遅れたフランスだった。イッシニ王ゼナの息子と称するアニバなる人物がフランスに送られ、ボソーと面談して尋問された結果、ルイ 14 世に謁見した。ルイ 14 世は彼に騎馬警備員をあてがい、後にその教父にすらなっている。イッシニ——現在のコートジボワールのアッシニ——に戻ったら、アニベは王位を継承する

<sup>11</sup> これ以降の段落の内容は、ポランニーが各種の情報源を元に抽出したものである。あらゆる事実関係の主張について出所を再構築するのは不可能だった。(編者)

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

ものと思われていたのだ。だが彼は詐欺師だということがわかり、結局何も起きなかった (Roussier, 1935 :xvii ff.)。

別の支配者、コメンド (現在のガーナにある) のアモイシ王は、アキタグニ村をルイ 14 世に奉納した。勅命によりルイ 14 世をそこの絶対君主にしたのだ。その後の調査で、イッシニ王国はリリパットの規模しかない極小国で (訳注：ここ、前の詐欺師のイッシニの話がなぜ出てくるのかわからない。アキタグニ村の話か、編集ミスでこの一節は前の段落に入るべきなのか?)、そのアモイシ王も荒れた海岸数平方キロを支配しているだけというのがわかった。もっときちんとした君主であったコメンドの王は、フランスと仲良くした咎で、オランダ交易会社に即座に殺された。だがヘンテコな外交パターンがここで生まれ、貿易が黄金から奴隷に移り、その規模がすさまじく拡大したときに、それが重要な意味を持つことになる。地元の支配者はいまや、外国の外交的な接触を自分自身の商業官僚制の代替物とみなす傾向が見られるようになり、こうした外交相手が、奴隷の包括的な輸出に必要な面倒で費用のかかる監督行政を提供してくると考えるようになった。地元の酋長国——ただしもっと普通の王国は必ずしもそうではなかった——が好んだ商業的な取り決めのパターンは、ヨーロッパの国に自国の奴隷取引の独占権を与えて、かわりにヨーロッパのパートナーに、この複雑で高リスクのビジネスのとりまとめを自分でやらせる、というものだった。

黄金から奴隷への変化は、黄金海岸の東端、ボルタ川の向こうで 1670 年にかなり唐突に起きた。その場所は、あまりきちんと国境の定まっていないアルドラ王国だった。一世代もたたないうちに——つまり 1704 年には——これがアルドラの小さな海岸属国だったウィダ王国の世界的な地位を押し上げることになる。アルドラには空前の奴隷供給が登場し、この状況はアルドラが提供できるものよりも適切な、制度的手法を要求した。この変化で作用していた実際の力を理解するためには、この条件下でのこの奇妙な貿易に求められる要件を考える必要がある。

1675 年頃には、黄金海岸での貿易低下が顕著になった。船長たちは黄金をもとめてさらに東にさまようことになったが、不首尾に終わった。同時に、東インド諸島では奴隷需要が激増していた。このため、1670 年には、イッシニでの黄金取引を促進すべく劇的なフランス外交を忙しく推進しようとして無駄に終わったダモン閣下は、その世紀末にイッシニに戻り、今回は黄金から奴隷に切り替えるよう王を説得しようとしたが、これも無駄に終わった。というのも奴隷隊商が海岸に到達するのはさらに東でのことだったからだ。

はるか内陸部から、北から、何千人もの奴隷がすでにベナンギャップに沿って動きつつあり、アルドラとウィダに向かっていた。歴史的な奴隷大取引が始まったのだ。

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

アルドラ：移行期

西アフリカの奴隷貿易は、17 世紀半ばには黄金海岸の「単発貿易」として始まったが、17 世紀には奴隷海岸のウィダですさまじい高みに到達した。この二つの時代と場所の間には、1670-1794 年に、短いながらも重要な移行期がアルドラで生じた。歴史的な証拠は乏しいとはいえ、貿易港の前身がアルドラで生まれ育ったところから、17 世紀最後の二十年間に生じた苦労や苦しみを通じたその成長をたどり、ウィダでそれが世界貿易の完全な制度として確立する様子をうかがうことはできる。

それまで文献記録がアフリカの内陸国アルドラに触れたのは二回しかない。最初は 1971 年、フランス西インド会社のカロロフが記録している。二回目の 1704 年には、ジャン・ドゥブレ（海賊と呼ばれる）がいまやラシエンテという名前になった同じ会社の株主としてアルドラのことを書いている。その間にアルドラは、西半球の亜大陸全体における社会経済を変えようとしていた、あの巨大な動きのマトリックスとして、時々活動を見せていた。だが、時はまだ満ちていなかった。アフリカの奴隷収量は何倍にも増える必要があり、それを加速したのはウィダで導入された商業イノベーションの各種だった。アルドラ自体での成長は遅かった。確かに、列強は何としてでもアフリカから奴隷を吸い上げ、アメリカで使役しようとしていた。だが市場システムがないので、このプロセスは既存の制度的な仕組みに頼らざるを得なかった。そうした仕組みは、その性質上、まったく商業的なものではなく、むしろ政治的なものだったのだ。

だから増大する奴隷貿易は、一世代にわたり、アルドラ王国とその家臣である酋長国という緩く結びついた国家組織を構成する、領土主体に埋め込まれていた。大小問わず、こうした王国は奴隷貿易に課税することで金銭収入を得ていた。アルドラは、帝国内で貿易する許可について、巨額の一括料金、関税の支払いをあらゆる船に課し、さらにこの地域に入る奴隷ひとりあたりに固定通行料を設定し、さらに外国に売られる奴隷には同額の税金を追加した (Barbot, 1732: 349-50)。この関税と通行料の恩恵を主に受けるのは王だが、その王はさらに附随的な商業サービスからも収入を得ていた。

帝国の内陸中心部は、奴隷供給をどんどん進め、海岸の諸国はヨーロッパの需要に対する供給口となるはずの配送経路を提供することになっていた。だがこの政治的な仕組みでは、入ってくる奴隷と、それを売りさばく可能性とをつなげる、応答性の高いリンクを提供するような調整組織はなかった。というのも中央政府は、この戦争じみた海洋性属国地帯には行政職員を保有していなかったからだ。

これが何より異様だったのは、北からアルドラに流入してきた奴隷が、南での流出を司るヨーロッパ奴隷商人の代理人と出会う地域は、小アルドラ村の左右で丸一日分の距離しか

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

離れていない、ただの陸地のかげらでしかなかったということだ。北に向かって、この小さな地域は広大な内陸部からの供給の備蓄から発する奴隷を受け容れる場所だった。南の海に向かう方は、奴隷を浜辺に向けて吐き出していた。この場所は、特定の部族、都市、小国家に属するものとされていなかった。ウィダとポルト・ノヴォを除くと、それは無法な部族のろくにまとまっていない領土の真ん中にあり、そうした部族たちはお互いに交戦しあっていた。地理的には、そこは緩慢な川と広がる沼地の迷路に覆われ、浜辺とお互いからは広い湿地で切り離されていた。アルドラが宗主権を持つこの海岸部での条件はおおむねこんなものだった。アルドラの伝統的な首都アラダは、海から60キロほど内陸にあった。この海からの距離は、アシャンティだろうとオヨ、ヨルバ、ベニンなどあらゆるギニア国家の首都が遵守しているものだった。各国とも、支配者にとってタブーである海からは安全な距離を維持していたのだ。どこも船隊は持って折らず、川や湖や沼地での漁業以外は行っていなかった。海岸での行政監督作業を引き受けるなどという発想は、だれもまったく持ち合わせていなかった。彼らの海との接触は、おおむね独自の生活を送る漁業部族に対する宗主権にとどまっていた。

茫洋と広がるアルドラ帝国は、つまり北部からの供給も、南への奴隷放出路も支配していなかった。アルドラ王は、内陸市場から輸出用奴隷を買うこともなく、国境を越えて系統的な襲撃を行うこともなかった。供給主体は北からの隊商で、王は遠くの出所からそれが移動を始めたら、やってくる供給を遅らせることはほとんど不可能だった。また販売先の統制もきわめて不十分だった。小さな漁業効果は満船的な反乱状態だった。いつも奴隷を自分で売りさばきたいという誘惑があった。また乗り気のヨーロッパ人たちを、自分の地元食品市場に引き入れたいし、公式には閉ざされた道を通して奴隷を密輸したいし、ヨーロッパの奴隷商人とアルドラとの取り決めを邪魔したいし、外国取引員を出し抜いて、倉庫を収奪したり、果ては全員殺してしまいたいかもしれじ、工場を妨害し、ヨーロッパの要塞を囲む地元村をそそのかして反乱させたり、すべてが崩壊したときに滑らかな輸送と取引を保証してくれるような、勅許会社と地元の人々との取り決め一枚噛みたい気持もある。

この地元紛争とヨーロッパの介入のパターンを示すものとして、バルボ (Barbot 1732) とボスマン (Bosman 1814) の目撃記録がある。ヴォルタから東へ進むと、コト、小ポボと大ポボ、ウィダ、ジャキン、オフラ (またはヨーロッパ人が小アラダと呼ぶ国) がある。これは優れた道が大アルドラや、ラゴス川のアッセム (アルドラの商業首都) へと続く、地域のハブだった。

コトの人々は小ポボと決着のつかない戦争を続けており、これは両者共通の後背地の近隣国アカンボには歓迎された。小ポボはしばしば、アルドラ王の手先となった。オフラが1670年にアルドラに反逆して、王のお気に入りのオランダ人取引員が殺されると、王は小

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

ポポを説得してオフラを攻撃させ、彼らを滅ぼし、その首長をれんこうさせた。その後、バルボの回想では (Barbot 1732:452) 「アルドラ王の後押しを受けて」小ポポは「進軍してウィダの人々を攻め、彼らの国に宿営した。そこから追い払われると、その首長はコトを攻撃して戦死した。現在の王は、兄の死の復讐としてコト人を攻め」 (ibid.) コト人たちはやがて自国を追われた。これが1700年頃のことだ。

大ポポに目を向けると、一連の外国介入が記録されている。彼らの王は、なんでもフランスの助けを借りて兄を更迭して玉座についたそうで、そのフランスにより彼はウィダに進貢させられたという。だが大ポポは「その軛を投げ捨て」たが、再びフランス艦隊の支援を受けたウィダ人たちに侵略された。攻撃者たちも大損失を被り、ポポを沼地の彼らの島から完全に追い落とすことはできなかった (Barbot, 1732:452-53)。ボスマン (Bosman (1814) は当時、ウィダ (当時はアルドラの不満だらけの進貢国の一つ) を訪れており、その王がヨーロッパ人に大人気なのを知った。実はその王は、英仏の助けを借りて玉座についたのであり、その兄が更迭されたのだった。その人気ある王の死により、また内戦が起こるとだろうとボスマンは予想した。ヨーロッパ人たちは、王の兄ではなく、王の若い息子のほうを押すだろうからだ。間もなく、まさにその通りのことが起こり、これがウィダの貿易港設立と密接に関係した出来事となる。

アルドラ王はずっと小さなウィダに対処できず、またさらに小さく弱いポポですら撃破できないといった政治的パラドックスは、ほとんど通行不能の湿地や沼湖の真ん中にある、攻撃不能な干潟の立地が持つ戦術的な利点から生じた部分が大きい。この搬出地域の政治組織はつまり、提供されるリソースとその分配の可能性との間に、ある程度のやりとりを想定するような経済プロセスを通すにはまったく不十分だったらしい。この状況は、確かに異様だった。亜大陸丸ごと二つ——南米と西アフリカで、どちらの場合にもそれぞれの後背地のずっと奥まで入り込んでいる——の海岸部に広がる新しい貿易の動きが、その財と潜在利用者との間の物理的、制度的接触がほとんどまったくない状態で動き始めたのだった。

ギニア海岸のアルドラ王国はおおまかに半円状の形で、海岸に向かって東に弧を描いていた。その北限は、ベナンに向かうブッシュにまで延長しているはずだが (ibid.:346) 海への唯一の直接アクセスはオフラ (小アルドラ) で、そこは幅1.2キロほどの陸の狭路でしかなかった。その他の部分では、アルドラはいくつもの海洋コミュニティ群 (ウィダとポルト・ノヴォを含む) で海と隔てられており、どこもおおむね王の進貢国だった。奴隷貿易の主体として、アルドラはある程度は漏斗として機能した。北に開かれており、それが湿地で終わり、そこから奴隷が様々な方向に送り出された。

王の政府は奴隷の通行料を要求した。貿易にかかる税金は、奴隷貿易の主要な歳入源だったからだ。だから王の関心は、できるだけ多くの奴隷が自分の領域を通過することにあっ



## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

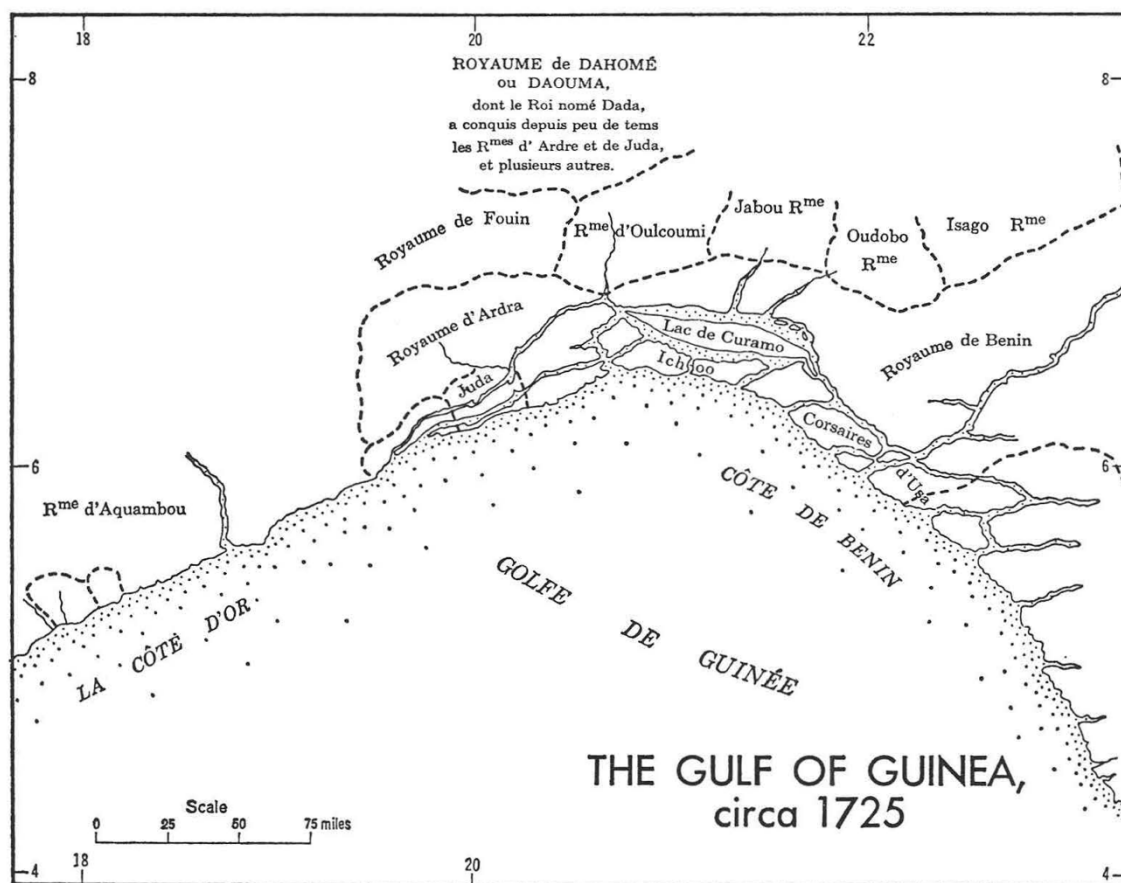


図 4 Sr D'Anville が Pere J. B. Labat, Voyage Du Chevalier Des Marchais En Guinee . . . en 1725, 1726, 1727. Amsterdam, 1731 の Volume I (1 ページの手前) 用に描いたギニア海岸の地図の一部

た。ただし、通行料を取りはぐれるものがあったはず、また最終的に奴隷を買う外国貿易商たちは、王個人に完全を支払わねばならない。奴隷がどんな形で売られるかは、王にとって知ったことではなかった。単に売り「手」が事前に奴隷を、貿易中心アッセムからわずか三キロの大アルドラにいる王の役人に見せて、通行料を払いさえすればいい。この要件は、一部の海岸属国には運用上対応がむずかしかった。大ポポは、ポポ人が売る奴隷はすべて、まず大アルドラにつれてきて通行料を支払わねばならないというアルドラの制約に抗議して反乱を起こした。だがこれは、幾多の奴隷貿易の要件の中で、奴隷の放牧場所が政治的にアルドラ監督下に組み込まれていることから生じる、対応困難なものの一つに過ぎなかった。各種購入者の奴隷選択、奴隷の食事と警護、あちらこちらへの輸送、各種購入国ごとの焼き印は、季節を問わない気象条件や軍事的配慮でさらにややこしいものとなり、監督行政のややこしい問題を引き起こして、それがこの事業の設けにも影響するようになった。主に積み込みで生じた遅れにより、帰還航海の到着も遅れたことで巨額の損失が積み上がることもあり、これが奴隷商人にとって平均費用を増やすことになった。

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

ヨーロッパ人の買い手たちと、地元の取引供給者との同期が取れないという問題は、発端から存在していた。商品を送るというヨーロッパ人の約束は、ときに何年も遅れた。だが黄金海岸で待ち受ける黄金は、奴隷収容所で喰わせたり警備したりする必要がなかったのに、予定顧客のいない未配達 of 奴隷は重い負担となった。奴隷ラッシュの最初の十年で、アルドラは奴隷の供給過多に苦しんだ。これはフランス政府が大風呂敷を広げたくせに、奴隷が手に入ったらいくらでもすぐに船にのせるという約束をやがて満たせなくなったからだ (D'Elbee, 1671 [II] : 407)。時にはその状況は逆転したし、それもすさまじく急に変わった。スネルグレイヴ (Snelgrave 1734) によるウィダ二回目の訪問報告への序文に、数字が出ている。1712 年には西海岸からイングランドに出発した船はたった 33 隻。それが 1725 年には 200 隻以上だ。デルベールとバルボは、奴隷がまったく手に入らないときの、オフラのオランダ人たち (昔から暮らしているアルドラ王のお気に入り) がいかにがっかりしたかを記録している。オランダ船 5 隻が空荷でエルミナに戻らねばならず、残りの船もそこで待つしかなかった (D'Elbee, 1671 [II] : 406)。これが勅許会社の貿易損失の主な源だった。こうした会社はすさまじいオーバーヘッドを持っており、タイミングがとんでもなくずれると、ひどいことになってしまうのだ。「割り込み屋」たちの競合商品は、ほとんどの場合品質もすぐれていたし、また三割方安かった。彼らは見つければ手当たり次第に奴隷を買い上げ、したがって不適切な政治環境により取引された経済プロセスの危険を逃れることができた。

アルドラの初期奴隷貿易に関するデルベールの記述は、つまり地元の行政体がいまだにフランスとの直接取引において中心部で崩れかけていた作業に、何とか対応している状況のものであり、官僚的な障壁がどれほどすさまじかったかを示している。王と奴隷商人との間の取引に関する彼の報告——儀式的なものも商業的なものも——は同時期のバルボの記述の細部と組み合わせると、外国船長として別の船が到来するたびに、自ら大アルドラに赴いて、あらためて関税を支払わされ、王宮で歓迎の外交的エチケットをすべてやりなおさねばならないというのが、いかに大きな負担だったか、ある程度うかがえる (ibid.: 403 ff.)。

奴隷についての「貿易の値段」は、バルボによれば

一般に王が調整し、それが布告されるまではひとりも売買が許されない。王はあらゆる取引の選好の決定権を自ら握っているし、おおむね定価で売られる奴隷を最も多く持っているのは王だからだ。女奴隷は、男奴隷より四分の一か五分の一安い。(中略) いかなるヨーロッパ人も、王が売買を意図する前に待つことなく、そこに貿易のために出かけてはならない。(1732 : 326)

そして特にアルドラについては:

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

船がヨーロッパから到着するがはやいが、船長や上乘人は小アルドラの知事を待ち、彼に連れられて王の元に案内され、いつもの贈り物をたずさえて謁見しなければならない。王への贈り物は通常、見事なサンゴ3-4ポンドの小包、キプロス布6反、モリーン三切れ、ダマスク織り一切れから成る。

ヨーロッパ人たちは、貿易許可を得るためと各船の関税として、王に奴隷50人分の価値を与えるのが通例である。ヨーロッパ人たちは自分の費用で、大アルドラで貨物の中から、王が自分のために貨物一覧から自分のものとした、そうした財すべてを配達しなければならない。(中略) 我々は常にヨーロッパ財、奴隷、アグリイという青い石の価格を調整する(中略) アルドラの王は、王として廷司にそれを布告させ、万人がそうした廷司の労働の対価を満たせば船の上乗り人と自由に取引してよいことにする(中略) そしてそうした布告が王から国民に発せられないと、だれも上で述べたアグリイ[真珠]も奴隷も青い石も決して売ろうとはしない。(Ibid.:349)

知事またはその役人が、取引員に随行して岸から六キロほど内陸に入り、そこに商品を運び込む家を指定する。すると取引員は「貨物をすべて陸揚げして、その村まで荷担ぎ人に運ばせる。それから(中略) その荷担ぎ人たちに、王が自分のために唾をつけたものをすべて大アルドラまで運ばせる」(ibid.: 349)。

これは王の取り巻きの各種階層——王家の人々、商業的官僚制度、政治行政の高官——への贈り物における長い段階を、大幅に略して説明したものだし、下船の各種段階において見本や主要財を運ぶための入念な取り決めが、これとはまったく別に存在する。トップレベルの貿易交渉儀式が、自国の新しい船が沖合に投錨して、だれか人が下船したら、そのたびごとに繰り返されねばならないというデルバーの苦情が、これで裏付けられる。

別のやり方としては、プロセスを分散化して、属国にもっと権限を残すことだ。つまりオフラ、ジャキン、ウィダ、大ポポ、ポルト・ノヴォなどの進貢国民に、王の役人を助けてもらうことだ。すでに、こうした属国の国内国外の状況に伴う不確実性は見た。だが奴隷貿易の動きのすべては、こうした半独立主体の寄せ集めに移動しているのだった。

よく調べて見ると、貿易が続けられたのは、こうした政治体の自発的な調整があったからでしかなかったことがわかる。その好例が、小さく、弱いながら、名目的には独立国だったトリだ。地図を見ればこの国が実在したことはわかる。バルボ (Barbot 1732:327 および 345-46) とボスマン (Bosman 1814) は地理的な詳細を記述している。トリはウィダとアルドラ(フエダが政治首都をサヴィに置いてから犬猿の仲)の間にあり、海からはたった15キロ、川で船により到達できたが、アルドラの政治首都大アルドラより遠いわけではない。実際、

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

海岸部の多くの事実上の状況においては、中立性の要素があった。二重統制がよく使われた。たとえば、まったく同じ場所が、ヨーロッパ貿易商たちにより、アルドラのものとされたりウィダのものとされたりした (Barbot, 173 2: 3 2 7)。また別の地域では、競合する国により二人の司令官が別に指名されて、共同で活動した。別の時代には、二つの国が共同で一人の司令官を指名した。ブッシュ地をあらわす地図は、点線で囲まれた地域の支援で大アルドラ隣のアッセムへの隊商アクセスを記す地図という装置を使い、それによりブッシュという一種の影の独立国を通り抜ける、アルドラ領の中で隊商に開かれたジャングル道を示していた (cf. Dalzel, 1793 の地図)。こうした領土の独占性の制約は、やがて登場する解決策である貿易港の近似として理解できる。

内陸国の根本的な困難はもちろん位置的なものだ。行政中心は平均で、海岸から2日かかる場所にあった。さらなる許可として、日中は軍事的に脅かされている地方部の通行を知らない者には認められなかったことがある。だから内陸帝国は、その独立主権をうまく海岸まで広げられなかった。

遅延と距離の累積費用により、奴隷貿易のアルドラ方式の不十分さがあらわとなった。奴隷商人には、完全と通行料という直接的な金銭負担がかかった。大量の因習的な贈り物とあわせて、これらはなんだかんだで、貿易船一隻あたり、価値で見て奴隷75人分、あるいはときに85人分にもものぼった。だがウィダでは奴隷32-35人分の価値を超えることはなく、「これはそこに住む英仏の取引員にとっては大いに有利な数字である」とバルボは述べている (Barbot 1732: 350)。ウィダの数字に、輸送費などの追加費用としてさらに奴隷12人分を追加しても、せいぜい50人分で、アルドラの80人ほどとは比べものにならないうえ、積み込みの所要時間でさらに差は開くことになる。

状況が救われたのは、ダモンによる1698年の、フランスとアルドラとの間で三点条約を結ぼうという提案だった。この条約の二点目と三点目は、奴隷貿易の独占権をフランスに与えるというものだった。アルドラはさらに、自国民がフランス以外の国からは一切買い物をしないと約束することになる。アルドラはどちらも受け容れた。だが一点目は、王がその玉座を海岸付近に移すという約束が必要だった。この要求は容認できなかった。内陸王国アルドラは、その地位を海洋国に変えるのを拒否した。断言できることだが、やがてウィダに確立される貿易港の制度は、ダモン殿の第一点「海岸に引っ越せ！」(1935 :83)に見事に含意されているのだ。

奴隷海岸にて

ウィダはいつ、どのようにして西アフリカの奴隷港としてアルドラに取って代わったの

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

か？ アルドラは、アフリカの古式帝国構造を持つ内陸国で、新種の複雑で大規模な世界貿易をうまく切り盛りしようとあがいて失敗した。社会学者なら自信たっぷりに、この状況は不可避免的に適切な組織を要求するものであり、包括的な変化は必然であったと言うであろう。いつもながら、その「必然」が実際にはどう起きたかを示す役目は歴史研究者のものとなる。この変化は、もはや内陸型ではない国家を必要とし、しかも急速に公平な商業官僚制を発達させる必要があった。ほぼ一夜にしてでっち上げねばならなかった社会的階層化は、傑出した天然資源の保有が条件となった。

本書の主張は、ダホメの歴史的形態の少なくとも部分的な説明として、ベナンギャップに依存している。その変わった地理的な偶発時における気候要因を強調するのだ。それでも、歴史については粗雑な生態的決定論には囚われないようにしよう。ここでは、人間の巨樹地形態、つまりは国家構造が、基本的な生態系に影響されないことはない、と想定するにとどめる。第2章で説明した気象条件がもたらす経済的影響の一部をここでは考慮する。

17世紀の著者たちは、ウィダに展開する風景に魅了された。そして20世紀の学者たちも一様に、「ウィダの園」における突出して高度な国家機構と官僚制を指摘する。黄金海岸——黄金がとれたり、少なくとも広く取引されたりした場所——は、ヴォルタ川の東か、そのすぐ手前のレイで終わった。それに続いて東に延びる奴隷海岸は、バルボも指摘するようにあいまいな用語だった。証券取引所の俗語で「ギニービニー」というのはギニア海岸からベナンまでのことを指したが (Davies, 1957:39)、バルボが述べるように (Barbot 1732)、ベナンに着く前にその名前は終わってしまう。実際には、奴隷はヴォルタ川のすぐ東で得られることになっていた。つまりアルドラの海岸属国たちが、アルドラ領の隊商貿易の出発地から奴隷の一部をまわしてもらえればどこでもよかった。ウィダは、その海岸近くの庭園や草原の美しい眺めにより、この仕組みの中で圧倒的な存在だった。実はウィダの西端ギリギリのところまで、ヴォルタ川東に優に80キロにわたり、奴隷海岸は黄金海岸のほとんどと同じくらいか、それ以上に荒廃していた。実際、大ポポの沼地は飢餓の頻発地として悪名高かった。そしてさらに、ウィダの東では、赤道ジャングルの致命的な湿度が、ラゴスに行き着かないうちに立ち上がってくる。ベナンギャップが創り出す海岸レジームは、つまるところウィダとポルト・ノヴォの後背地だけで構成されていたわけだ。ヴォルタとベナンの間の海岸部にある、秩序だった組織化された国はこの二つだけだったのだ。

この領土的には限られた経済的な奇跡——ウィダはその中心だった——は単に、降水の現象の結果だった。乾燥した熱い地元の貿易風のおかげで、年次の降水は赤道なみの水準にはまったく到達せずに、北部スーダン波の水準まで下がった。おかげで穀物も問題なく栽培できたし、キビも豊かに生え、トウモロコシですら生い茂った。ウィダは大規模な食品輸出国となり、軍事的に無敗の大ポポの首を、食品依存で実質的に締め上げることができた。こ

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

の作物の豊富さが、アルドラ奴隷貿易の発端とともに始まった、秩序ある国家建設によりすぐに人口爆発を引き起こした。

まったくちがう二つの事実群が、この因果関係の2段階をそれぞれ構成している。まずは生態的な事実、つまり地元で食物の余剰を可能にした気候的な優位性。そしてもう一つは奴隷ラッシュという外部的な事実が、階層化された官僚機構を必要としてその食物余剰を制度化したことだ。要するに、バナングャップは二つの形で作用した。はるか遠くの西インド諸島農園における緊張が引き起こした、大量奴隷移動の避雷針として、そして適切な制度——貿易港——がその供給を、国際商業の重要な要素へと転換するのを可能にした、生態的な滋養余剰の源をもたらすものとして。こうして奴隷ラッシュはやがて、圧倒的な力を持つ出来事になり、それがダホメをアフリカ内陸国という伝統的な係留索から引き離し、傑出した成果の高みへと投げ上げたのだった。

ウィダの歴史は、アルドラの歴史と好対照だが、同時に制度的な水準ではアルドラを継承したものでもある。貿易港に不可欠なのは、行政手法と中立性の方針だが、そのどちらもアルドラがある程度は先鞭をつけていた。きちんと秩序だった形ではなかったにせよ、どちらの原理も基本的にはアルドラにも存在していた。価格設定と物納方式においては監督行政が作用しており、プロセス全体に不可欠な各種の利潤を全体として確保していた。国際貿易の場所に不可欠な中立性のほうはといえば、アルドラではまさに本質として党派的な存在である領土国家などが、共同統制や二重主権などの中立性装置を編み出していた。黄金貿易から奴隷貿易への移行に伴い、アルドラのような政治的にゆるくつながった貿易地帯から、きわめて組織化された貿易港への変化が生じたのだった。

フエダ族が無名の存在から台頭するには時間がかかった (Dunglas, 1957:126ff.)。南ニジェール人たちの末裔であるフエダ族は、どうやらラゴス地域の出身で、そこから西へと移動したらしい。途中で最も長く滞在したのは、魚が豊富なヘン湖 (アテメ) でのことで、タド支族である地元のアジャ族首長が、彼らに対する君主権を獲得したらしい。やがて彼らは湖から追われて、海岸近くに戻り、耕作をしなければならなかった。このアジャ族支配を 1520 年頃とすると、これで 14 世紀から 1671 年までのフエダ族前史がまとまったことになる。その 1671 年には、フランス西インド会社のためにカロロフが村を創建するのを追うが認めた。カロロフはそれを、東プロイセンのバルト地方の沼地にある故郷にちなんで、ピラウと名付けた。

その頃には、フエダ王はすでに先見の明を示し、北部にある政治首都サヴィから、海の近くの南にあるゴレゴイ村を、将来的な商業中心として分離するという一步を踏み出していた。この国領全体は、幅 30 キロしかなく、拡張する気配もなかった。相変わらずアルドラ

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

の属領ではあったが、すでに影響力を発揮しはじめており、たとえばオフラは進貢村（訳注：cotributary. Contributory の誤植？）となっていた。

フランスの帝国建設者 J.B. デュカスがベナンからやってきて、1688 年にオフラを通りがかったところ、アラダが指名した酋長に加えて、ウィダ（グレゴイ村にヨーロッパ人たちが、そのフェダ住民にちなんでつけた名前）が設置したもう一人の酋長がいた。デュカスはジュダ（フェダのフランス式の書き方）が、過去 20 年にわたりイギリスの獲得した奴隷のうち、毎年きわめて多くを占めていることを指摘した（DuCasse 1935）。

デルビーはこれとは独立して 20 年前に観察記を残しているが（D'Elbee 1671）、こうした具体的な数がある程度裏付けている。1669 年にアルドラ王は、必要なら毎年奴隷 6,000 人を提供すると請け負っている。これは当時としては極度に多い。これは、ルイ 14 世の提督による大風呂敷に呼応したものかもしれない——この提督の訪問は、国王からアルドラ王に黄金の馬車が贈られたことで印象的なものになり、アルドラ王はそれに乗って自らの首都に向かった。この大風呂敷に応じる形で、北部からの奴隷の洪水が引き起こされたが、フランスはそれを輸送する船をまるで用意できず、おかげでデュカスが驚きとともに記しているように、その恩恵を受けたのはイギリスなのだった。ウィダがオフラでイギリスに売った奴隷は、フランス用にアルドラが用意した奴隷なのだ。これは、ウィダとアルドラが「仇敵」であるにも関わらず実現した。そして、これまたデュカスが報告している、オフラでの絶妙なタイミングの共同統治は、まさにウィダが躍進するための装置だったかもしれない。というのもウィダの数字はその後、デュカスが報告する奴隷輸出の高い方の範囲で推移するようになっているからだ。ただしその購入の相手国はちがっていたかもしれず、また販売を扱った港はその相手国といろいろ変な取り決めをしていた可能性はある。私たちの情報源は乏しいので、奴隷貿易ないでお目にかかることの多い、パラドックスめいたビジネス上の動きが持っていた合理性は解明しきれない。

デルビーの幸先のよい訪問から、わずか 50 年で生じたアルドラの大災厄は、ウィダの勢力が優勢になったことで、間接的に引き起こされたにすぎない。ウィダは当時、アルドラが動員できる兵力にはとてもかなわなかった。アルドラ、ウィダ、ダホメの関係の根底にあった、個人的なライバル関係と政治的陰謀のもつれを通じて、長期的には経済効率性の論理が勝負を決めた。アルドラは、ますます反抗的になる属国ウィダとのビジネス上の競合に不満を持つようにはなったが、それでもウィダは共通の敵ダホメに対しては、アルドラと結託する傾向にあった。とはいえ 1724 年にアルドラがダホメに軍事征服されたのは、間接的にはウィダ貿易港の商業的効率性のせいだった。ウィダは 20 年ほど前に確立され、やがてアフリカの内部でも外部でも、奴隷貿易の中心地となった。現前たる事実として、ダホメはその防衛システムを通常の奴隷狩り襲撃に基づいたものとして構築していた。これは信頼でき

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

る軍備の供給を必要とし、したがってダホメとしては、その安全の供給源となるウィダを、自国内で有効な監督行政のできない古式帝国であるアルドラの手に任せておくことはできなかったのだ。

実際、ダホメの勢力がアルドラ帝国に襲いかかって叩き潰すよりはるか以前に、はるか遠い西側世界の圧力が、新奴隷経済の弱点に集中するようになっていた。その弱点がアルドラだ。アルドラの没落を加速したのは、すでに何世紀もギニア海岸で取引していた、保守的なポルトガルとオランダの列強ではなく、後からきたイギリスとフランスだった。西インド諸島の農園は、この最新の西欧列強二ヶ国の支配階級にとって、すさまじい富の源になりつつあり、彼らはそうした農園を合理化したくて夢中だったのだ。新生のウィダは、実質的にこの二ヶ国が創り出したものでもあった。

ポルトガルは、15世紀第四四半期以来、ギニアの貿易を実質的に独占してきた。タカラガイ通貨の単位も、貿易担当役職の名前も、取引言語もポルトガル語だ。ポルトガル語は、この広大な地域の共通言語だった。アルドラ皇帝は、サントメ島（訳注：ギニア湾の島でポルトガルが支配していた）の修道院で教育を受け、最もカトリック的な王家であるフランス王への彼の嗜好は、コルベールの効率性運動を阻害した、気取りとお役所仕事を引き起こす面倒が実に多くても生き延びた。だがこれはすべて奴隷ラッシュより以前の話だ。サントメ島とアンゴラを拠点とするポルトガルによる地元奴隷貿易ですら、ポルトガル所有のアフリカ砂糖農園の労働力獲得を狙ったものであり、ギニア海岸でアフリカの内陸貿易商たちに奴隷を売って、海岸でポルトガルから買った商品を内陸に運ばせるようにしたものだった。アンゴラにおける、ポルトガルのこうした組み込み型奴隷貿易は、部分的にはリスボンから、部分的には地元聖職者と修道院が統括していた。アフリカの島の農園は、英仏の勅許会社を西インド諸島の農園のために仕切ったような、高圧的な政府を利用できなかったのだ。

ギニア海岸でオランダは、ポルトガルの貿易システムを引き継ぎ、さらに海岸の要塞をポルトガルからもぎ取った。ポルトガルは、後の奴隷商人ほど大量の奴隷の高速配送と船の即座の回送を重視するような奴隷ラッシュには直面していなかった。奴隷ラッシュ期の貿易のテンポは、まったくポルトガル＝オランダ的なものではなく、むしろ英仏的なものだったのだ。アルドラ没落とウィダ台頭で、その英仏的な色合いの濃い時代にやってくる。ダングラス（Dunglas 1957）は、18世紀の小規模な奴隷海岸諸国の組織が、黄金海岸の内陸諸国や、アルドラさえも上回るほど、自分たちの強みを自認していたと述べる。彼によれば、ウィダとポルト・ノヴォはどの西洋列強にも貿易独占権を与えようとしなかった。これはポルトガルとオランダが、ベナン、カラバル族、コンゴの伝統的なやり方のほうを好んだ理由の一つだ。そうはいっても、アルドラで危機が発生したのは、1669年頃のフランスの行動のせい



## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

だったし、30 年ほどたったときのウィダにおける解決策は、英仏の軍事的な動きにより結実した。つまりこれこそが「歴史的必然」の実際の生じかただったのだ。もっと詳細な研究をすべき周縁部は、1698-1704 年に構築された。

長年にわたり、フランスとアルドラの間にまともな関係を樹立しようと試みてきた勲爵士ダモンは、王に以下のような正式提案を行った。その第一にして最も重要な点は、彼が自ら次のように述べている。

王が私どもにこの領域で勢力を確立して欲しいと望まれるのであれば、王は私どもに対して海岸に定住をお許しいただかねばなりません。これはすなわち、王ご自身がそこに、首都の他の者たちを伴って引っ越され、そこを居住地と定められることで貿易を惹きつけねばなりません。というのも、そうでないと商品を、海岸から 7 リーグもの距離にある王様の現在の居住地に運ぶ費用が、私どもにとっては破滅的な負担となってしまうからです。(D'Amon 1935: 83)

王はフランスに包括的独占権を与えるのには合意したが、その条件として毎年最低三千人の奴隷を出荷することを求めた。これに対して王自身は、望むのであれば毎年六千人の奴隷を提供するという。だが王が居住地を変えるという最初にして最大の条件については、王は検討すら拒んだ。

ダモンの草案は 1698 年の日付となっている。1701 年初冬、ダモンは公式にウィダ王に対し、奴隷に対して定価を設定するように公式に要求した。王は、これが「フランスの居留地が確立したら」すぐに実施すると示唆した (ibid.: 106)。スペイン継承戦争が始まり、グレゴイ (ウィダ) 周辺に居留する列強も、お互いに戦争状態となった。1680 年代末から奴隷貿易が華開いていたウィダは、いまや騒乱の危機に瀕していた。ヨーロッパ人に人気のあった、長きにわたり支配してきた王が他界し (おそらく 1703 年)、それをきっかけに、アルドラの後進性に反発していた内外の分子が力をあわせて、文句なしの革命を引き起こした。イギリスの王立アフリカ会社歴史家 K. G. デイヴィースは、ヨーロッパ奴隷商人は世紀が変わった直後には、ウィダに集結する傾向がはっきり見られたことを記録している。1704 年になると、三大列強はそこに要塞と主要な居留地を構えた (Davies 1957:274)。必然的に、国際関係は黄金貿易よりも奴隷貿易に強く影響した。ルイ 14 世により、アシエント (スペイン奴隷貿易独占権) がフランスギニア会社に与えられた (1701 年 9 月 14 日)。これを執行するのは先見の明を持つデュカスだった。ダモンはほぼ即座に、奴隷に定価をつけるようウィダ王をせつついた。

一年しないうちに、フランスとイギリスの地元兵舎が、国内王位継承問題について行動を

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

起こした。この種の介入は、ウィダ王が大ポポの王位継承のときに行ったものだったが、今回はそれを英仏が共同でウィダに対して行った。数百人ものヨーロッパ水兵たちが、外国人嫌いらしき魅力のない兄にかわり、その弟をもっと啓蒙的な支配者として王位につけた(1703)。この場合のように、地元の利益と、たまたまその領土を利用している外国列強の利益とが一致するケースはなかなかない。だがウィダの国内的な利害から見て、アフリカの問題と商業を阻害している国際紛争とを切り離すことが強く求められた。つまり奴隷探究が、四大列強を結集させて、そのホスト役たるウィダ王のサービス改善を支援し、外国の紛争を自国に持ち込まないという彼の願いをかなえることにしたのだった。

二つの密接に関連したステップが、1704年の日付を持っている——ヨーロッパ諸国同士が競争をなくすために交わした秘密協定と、港とその周囲をあらゆる国に「開放し」て彼らの戦争においては「中立」を保つという新王の宣言布告だ。デイヴィースはイギリス取引員がロンドン本社に送った極秘の手紙を引用している。そこには、フラストオランダとの間に「協定」を結ぶのが喫急であるという思わせぶりな言及があるが、その中身についてはほのめかしさえない (Davies 1957: 274)。別の文脈では、原価に対する均一のマークアップが問題の核心だったと信じるべき理由について詳述しよう。管轄港による奴隷の「定価」は、こうした「協定」を導入するのに大いに役立つ。ダモンが、確立した不変の奴隷価格を求めたのは、もちろんすべての列強に対して均一の「価格」を意味した。だがこの「価格」は支払い方法にも関連していた。つまり認知された標準が求められた。実際にはこれは、「取引オンス」という架空の単位の基盤として機能した。これは奴隷貿易の会計通貨として使われたものだ。

この頃には、政治首都と商業首都の分離——つまりサヴィとウィダの分離——は事実になっていた。フィリップスとボスマンはまだ、サヴィにある竹製の王宮がビジネス統括の唯一の中心だった状況を回想している。外国要塞の司令官の住宅や、会社の倉庫は、貿易港の緊密につながった機関をあらわしていた。ウィダは、成長する地元の町だったが、フランス、イギリス、オランダの要塞がお互いのごく近くにあり、地元の村は、それぞれの呪物を備えてはいたが、サヴィからは完全に切り離されていた。ウィダはいまもサヴィから統括され、またサヴィは地方部も司り、その役人が食品価格を宣言した。英仏は、大砲により合図を受けて、到着する船に対応した。だが、旗竿はみんなで共有していた。平和時にはこんな様子だった。王は、列強同士が自分たちで物事を決め、アルドラに対抗するときには支援してくれるものとあてにできた。もちろん、奴隷供給を左右するのは結局のところアルドラで、その奴隷なくしてはウィダ＝サヴィでの大規模な仕組みはそもそも存在理由がない。

コルベールの西インド会社 (1664) はいまや、アシエント担当ギニア会社と改名された (1701)。J. B. デュカス提督は、その日付のアシエント条約へのルイ 14 世署名に同席してい

## 第7章 ウィダ：貿易港の制度的起源

た。この儀式に出席していた新任貴族の中に、ホンフルールのジャン・ドブレなる人物がいた。彼は「ディエップの海賊 (Corsair of Dieppe)」と呼ばれ、本書のお話はこれから彼のほうに移る。たった三年後の1704年9月、彼はウィダにいる。驚異的な組織力の持ち主だ。まさにその年、デイヴィースによると、奴隷保有の四大列強は、駒をサヴィに進め、王の許可を得て海岸から五キロのところに要塞を建て始めた。若きアマル王 (またはアマト王) は、ヨーロッパ人と大いに仲良しで、ドブレのためにサン・ルイ・ド・グレゴイ要塞を建ててやった。

どうやら間もなく列強同士が「調印」した「条約」で、会計の慣行を揃えることが約束されたらしい。つまり、彼らが輸入した財が、地元奴隷に対する支払いに際して値づけされる時の「レート」をどう決めるか、ということだ。たとえば、原価に対する百パーセントという適正な「マークアップ」の合意が、黄金海岸の一部ではすでに伝統的に使われていたらしい。1704年9月6日の王による中立性布告のおかげで、列強同士のすばやい価格協定が可能になったのだろう。中立性違反には重い罰金と、その身分や階級を問わず違反者の即時追放の脅しは、革命的变化のさらなる証拠だ。実際、アルドラとの決裂により、ウィダが将来的に物資供給で頼れる専門的な貿易職員を用意するのが賢明ということになったかもしれない。学のあるイスラム伝道師、ムラー、奴隷貿易専門家としてこれまで大アルドラで信頼されていた人々が、ウィダに移住するよう恭しく求められたという証拠がある。こうした読み書きができた驚異的な国際貿易家たちは、将来の貿易港における財産となる。この先見の明がある取り決めの日付も、1704年だった。

その後23年で、ウィダの奴隷貿易は組織的な頂点を迎える。そしてまさにその成功のため、アボメイのフォン族、つまりダホメに征服されるはめになってしまったのだった。

## 第8章 サヴィ：独立ウィダと協定

フエダの部族王は、エドゥアルド・ダングラスの用語を使うと「政治首都と商業首都の分離」を全面的に活用した。サヴィの村は政治首都で、ウィダの町は商業首都であり、王国自体もウィダと呼ばれた (Houeda の訛り)。サヴィの慎ましい王国行政府は、地元の名家出身の少数職員で実施されていた。ヨーロッパの外交および軍事職員ですら、サヴィでは王の就業住居の中に押し込まれていた。ほとんどが世襲の通常の地位区分があれば、小国の切り盛りに必要な各種機能には十分だった。おかげで、王宮のまわりにもっと複雑な仕組みが次第に発達する余地ができたが、それでもそうした仕組みは地元経済と勅許奴隷貿易会社の両方とのつながりを維持した。サヴィに鎮座する地元支配者を、商業ウィダから統治するダホメの総督にすげかえたら、すべては新しい基盤をもとに仕切り直す必要が生じる。

この二つの首都は貿易港にとって不可欠な資産だった。どちらも海岸から馬で半日以内の距離にあった。ウィダの外国要塞は、相互の防衛のために近接し、まとまって建っていたので、浜辺、各種要塞につながる地元の村または「キャンプ」、サヴィの王宮に隣接する郡司令官の住居との間で安全な通信が可能だった。

ジャン・ドブレはフエダの政府が魅力的なほど単純だと述べる。大臣6人が、個別の仕事を持っていて、家庭的な規模の官僚制のお手本だった。灰色のメスロバが大臣のひとりを一女性の楽士をたずさえて——食品市場に運び、そこで彼は屋台を検分してその月の価格を布告し、また翌月の市場の場所も発表する。これが終わったら、市場はピクニックとなり、大臣は草にすわって寝っ転がり、歌手や踊り手に大盤振る舞いをして、その残り物は放置されるので下々の者たちが恩恵を受ける (Doublet, 1883:257-258; cf. also Bosman, 1814:487)。別的大臣は通貨を検分する。タカラガイがしっかりひもで束ねられているか、ちゃんと数は揃っているかを調べる。不足があればその束は彼が没収する (Labat, 1731 [II]: 163)。市場では、品質と計量をめぐる活発な交渉がいつも見られる——暴動や詐欺がなければ。

サヴィのヨーロッパの司令官や取引員たちは、王の監督下で自分たちの活動を規制するコミュニティを形成した。王と外国高官との間に介入する者はだれもいなかった。海事問題については、若い地元職員が岸辺と浜辺、港湾を監督した。王の商業補佐官が地元商人とヨーロッパ奴隷商人との主任仲介業者役を果たした。高官、職員など文官、武官の階級すべてが、フエダ族から採用された。晩になると王はヨーロッパの友人たちを、ひとりでこっそり訪れた。ことのほか肥沃な土壌の耕作者コミュニティに注入された商業的富は、ほとんど父

## 第8章 サヴィ：独立ウィダと協定

権的な形で社会に吸収された。エルミナの洗練されたオランダ総督ボスマンは、何度も休みをとっては数ヶ月にわたりウィダで過ごし、その人々と雰囲気を楽しんだ (Bosman 1814: 477)。実際、本書の情報源を見ると、サヴィが有機的な成長をとげたことがわかる。かつて竹製の王宮が建っていた場所が、奴隷貿易を独立経路へと振り向ける王宮の所在地に発展していったのだ。そしてオランダとポルトガルの貿易商たちはサヴィに接近した。やがてサヴィは、フランス会社の所在地へと変身し、それが奴隷ラッシュを合理化して新しい貿易センターとなったのだった。

ボスマン、ジョン・バルボ、トマス・フィリップスがサヴィで見たのは、政府機能を果たす単純な村だった。だがたった十年後にそこは、国際港の外交行政首都へと自然に展開していた。この発展は部族王国の枠組みで生じ、世間的な習俗と地位が、基本的に官僚階層構造を有用なものとする、抑制や統制を提供していた。フィリップスは王の村だった静謐なサヴィを次のように描いている。そこには 50 軒ほどの「家」があり、王宮は彼がこれまで見たこともないほどみすぼらしく、低い泥壁で、やねはわら葺き、床は土間だが、王宮の近くの片側には「40 軒ほどの家で構成されている町があり、王の妻たちのために壁で囲まれている」(Philips 1746:232)。当時のスケッチによるとフィリップスの言う「家」は慎ましい小屋だった。

商業は伝統的な順序にしたがい王が開始した。船の司令官にとって、初日の公式行事は、手持ちの財はどんなもので、奴隷を何人買うつもりなのか？ 二日目の行事は、手持ちの財はいくらで、奴隷一人についてそれぞれの財がどれだけ要るか？ 三日目は、財の見本を提示して、それぞれの価格について延々と交渉する。四日目は倉庫、台所、宿泊場所がヨーロッパ人に割り当てられる。五日目には、合意されたレートで関税が王に対して現物で支払われる。それが終わると「鐘」を鳴らすようにお触れがまわる。あらゆる人々が奴隷を売るように幹につれてこいという報せだ (ibid.: 234)。この鐘は棒で叩くもので、小さいくぐもった音を立てる。砂糖の塊の形をした、空洞の鉄で、その中の空洞部はタカラガイ 50 個が入るくらいの大きさだ。「すると貴人たちがそれぞれ、その程度と品質に応じて奴隷を引き出してくる。優れたものから順に出てくる」 (ibid.: 234)。「幹」——奴隷たちのバラック——の主と、奴隷の主が王により指名されて、二人で奴隷の警備で海岸までの輸送の責任を負う。各人とも、この仕事で奴隷 1 人分の価値に相当する報酬を得る。彼らの扱った奴隷 1300 人のうち、一人たりとも失われはしなかった (ibid.:235)。サヴィに拠点を持っていたのはオランダだけで、倉庫三つ、居室 7 つ、庭園があった。ボスマンが出会ったはぐれ者のフランス陣は、食べ物も宿舎も得られなかった。それどころか国を出ることもできなかった。というのも数年にわたりフランス船は一隻もこなかったからだ。

これを J. B. Labat 神父のサヴィの地図 (表紙の次に掲載) と比べて見よう (Labat 1731)。

## 第8章 サヴィ：独立ウィダと協定

これはわずか25年後のシェヴァリエ・ドマルシェのスケッチに基づくものだ。サヴィの現地の村はもはや、王宮建築や外国工場の倉庫、オフィス、庭園の背景でしかない。そうした外国倉庫の長は、共同住宅を王宮と並んで持っている。その絵にはフランス、イギリス、ポルトガル、オランダの施設が描かれている。フランスは、門のどこかに小さな市が毎日たっている。また万人がアクセスできる公開食品市場が四日ごとに立つ。たまたま出産中のメスのヘビを守るための小さな小屋まで描かれており、武装警備員がそれを守っている。

双子の首都、サヴィとウィダを、しっかり保守された道路が結んでいる。政治首都とその王宮的艦隊のアメニティはこのようなものだった。これに伴い、自由貿易と平和的商業の制度化に向けた動きがあった。だが1704年には、ウィダに要塞を持つ列強4国のうち三ヶ国は、四ヶ国目のフランスと戦争状態に陥った。公海での敵船拿捕は文明的な手口と思われていた。港を離れた商船はどれも危険にさらされたし、その積み荷は船艦だろうと商船だろうと、強いほうの船が合法的に自分のものにできる。

ウィダにとって、これは奴隷貿易の終焉を意味しかねなかった。この状況で、アマル王は司令官たちと、加えて列強の主人取引員も召集し、王宮の聴聞会堂に集わせた。王はかれらの対立などに耳を貸そうとはせず、貿易は陸上のみならず、会堂でも、さらには領海内 (*de la vue de la rade*) でも自由なままにせよと命じた。貿易したい者は、完全な中立性を遵守し、それぞれの艀装人 (武装担当者) たちに、共同責任および個別責任を持って行動させよ、という。

フランスの敵対国たちは、フランスをこの商売から締め出そうと考えており、王の提案を拒絶した。王は、腹を決めるのに一時間の猶予を与え、王に従わなければ永遠にこの港を出て行け、そして商品も置いていくことになるぞ、と述べた。そして妥協案として、この条約は二年の期限をもうけ、その後はまた見直すと約束した。王は、自分が貿易港の厳格な中立性を維持すると宣誓し、その誓いを大いなるヘビに対して行った (この神はダホメにはまったく異質なもので、ウィダ土着のものだった)。不当な拿捕の場合、違反した国の主張は、被害を受けた船の竜骨1フィートあたり男性奴隷8人分の損害賠償を支払う。その損害額は、王の命を受けた専門家の前で算定される。この競艇はジュダ (フエダ) 王アマルに加え、ジャン・ドブレ (ホンフルールの海賊)、シェヴァリエ・ドマルシェが署名していた。調印はザヴィエル (サヴィ) にて、1704年九月の第六の日に行われた。二年後の協定更新は、その後のヨーロッパ貿易高官たちが、竹の宮殿の聴聞会堂に集まって署名を行っている。

バーバン (Berbain 1942) は1704年の協定には一切触れていない。彼女の沈黙は、この協定の政治的に危うい立場を考慮してのもので、明らかに地元でのフランスの軍事行動から生じたものだ。イギリスの歴史記録はそれを無視している。直近でこの時期を扱ったフランスの学者——エドゥアルド・ダングラス (Dunglas 1957)——は本書での情報源について、上

## 第8章 サヴィ：独立ウィダと協定

から目線で「善良なるラバト神父」と言及する。だが彼自身は、そのラバト神父 (Labat 1731) が前文を採録したデマルシャイス記述の有効性を認めたようだ。ウィダの貿易港台頭と、後継問題を片づけるときに列強が果たした役割、および新王国の中立性についての本書での分析では、サヴィ繁栄に一役買った外国の介入を参照した。だが各種貿易財を基準にした奴隷の価格を掲載している、1704 年協定の付属 (Labat, 1731 [II] :91-92) を見ると、第十章で見るように、やはりこの協定が本物だという決定的な内部証拠が得られるのである。

## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

ダホメ史の最初の一世紀をまとめたのはフレデリック・E・フォーブス (Forbes 1851)、訪問中のクェーカー教徒だが、彼によるとそれはほぼ絶え間ない、生存をかけた軍事的苦闘だったという。この一世紀には、これまで見たように、海岸のウィダでは壮大な変化が生じた。サヴィのフエダ族の王は、いまやアラダの旧宗主から独立した。

フエダ族のアマル王とイケイケのヨーロッパ勅許会社群が設立した貿易港組織は、1704年にダホメのフォン族の手に移った。フォン族は熾烈なエネルギーは持つが、商業の経験は一切ない。おかげでウィダは、内陸国の配下で国際港としての地位を永続させることになった。

西アフリカ国家機構の世俗的な伝統や、海をタブー視する強力な宗教のため、フォン族は自国の存続を、最近獲得した海洋所有物に賭けることにした。

アラドクソヌは、この取り組みの規模を見くびったりはしなかった。彼らはフエダの海岸支配をひっくり返して、自分が支配権を手に入れつつ、この海岸沼地地帯を、自国のきわめて中央集権化した国家に一切編入するつもりはなかったし、そこの住民たちが持つ奇妙な宗教観念といささかも関わり合いを持つ気はなかった。ダホメの神殿には、このそこら中にある呪物小屋の忌まわしいヘビ信仰などが入る余地はなかったし、祖先アガッソウヴィの英雄的なヒョウとならんであの大蛇を融合的に容認する余地もなかった。さらに、海のタブーを無視するような軍事戦略は一切考慮されなかった。川や沼地を越えるために丸木舟を使うことさえ許されなかった。物理的な安全と国民的士気の確保には、極度に敵対的なフエダ族を完全殲滅以外の生ぬるい解決策は、長期的にまったく認められない。まずはその首長や指導者を、ついでその残党共を皆殺しにするか、唯一の代替案としては、そいつらを外国の奴隷として売り飛ばすのだ。実際の出来事はこの視点にふさわしいものだった。サヴィで破壊された王の居宅は二度と再建されなかった。戦闘で虐殺されたフエダ族に加え、捕虜本選人が、彼に勝利をもたらした祖先の神々への捧げ物として王により殺された。数日後に、戦勝祝典でさらにトゥフォエ族 (フエダの支族) が400人生け贄にされた。逃亡したフエダ王は、自分の部族の人々により引き渡され、死刑になる (Dunglas, 1957:155-57)。

フエダ全国をフォン族に再定住させようという試みに加え、ウィダ自体の全面的な移住が実施された。こうしたすべてが証明するのは、アガジャ王が海岸の征服によって、きわめて野心的な道筋に乗りだしたということで、その後継者たちも一貫してその方向性を維持



## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

した。それはウィダの無慈悲な平定であり、やがてはその場そのものをヨーロッパの海事列強に引き渡すことになる。アガジャ王は行動の人だった。

ジャキン駐在のイギリス取引員ブルフィンチ・ランベは、たまたまアラダを公務で訪れていたとき、同市がアガジャ王の軍の前に陥落して、アボメイに連行された。二年後に、彼は釈放され、純金二十ポンドと奴隷 80 人を与えられた。これはウィダにイギリス人入植者を連れて戻ってくると約束したからだった (Snelgrave, 1734: 66-68)。他のイギリス人訪問者たちはアラドクソヌ支配者たちに、似たような意図で接触を受けた。ずっと後になってゲレレ王は、当時イギリスのウィダ副総督だったダンカンを通じ、ロンドン植民地曲に正式な提案を贈った。実際の文書を書いたのはダンカンだが、その内容は王によるものだ。これはウィダ征服の一世紀以上後に起きた。ダホメの代々の王たちは、ウィダを自分の領土に編入はしたくないが、一方で反逆は反乱を恐れて自治権を与える気もなかったのだ。

長期的には、積み重なる軍事、人口、行政、経済的な負担でアボメイもつらい状況となった。この小国ウィダの軍事的征服だけでも、その後さらに半世紀も尾を引いた。外国に逃げたフエダ族がポポ族と同盟して反攻し、海岸部の放棄を支援する恐ろしいオヨ軍の襲来もあり、各種ヨーロッパの要塞が発端となる狡猾な陽動もあり、そうした要塞の砲による介入が、ダホメにとって血みどろの惨劇を引き起こしたことで、ウィダはダホメの政体にとってのひどい頭痛の種となった。アマゾン女性戦士軍団を、ある軍事作戦中の即興的な対応として正規軍化し、それを見事な士気と物理的な水準で一世紀以上にわたり維持したのは、この成果を啓発したエネルギーの高さを示すものではある。フエダ、ポポ、ダホメの間に、イギリス総督アブソンを通じた永続的な講和が成立したのは、やっと 1772 年になってのことだった。

ダホメによるウィダ征服は、二重の変化をもたらした。ダホメ人たちは、フエダ人たちを国民国家の持ち主ではない存在としつつ、自分の支配下でこの海岸人たちが開始した貿易港組織を永続化させ、発達させようとした。サヴィは、ダホメがその支配力をフエダの部族的な存在に限定したら、もはや存在しなくなった。これは同国政府の完全な変化をもたらした。というのも制度面から言えば、これは土着社会の自家製手法を、外国の支配層の手による行政で置きかえることで生じたもの以外ではなかったからだ。

ウィダ占拠と貿易港運営は、ダホメ国家機構の見事な業績だった。というのも、海岸の所有物は内陸国にとっての災厄だという、昔ながらの原則が、ここでも圧倒的にあてはまったからだ。ウィダの征服は軍事的必要性から出た行動だ。結果として、安全保障面の配慮が、あらゆる面で占領者たちのレジームを支配していた。被征服領土やその住民を、ダホメの緊密に中央集権化した行政監督に統合しようという試みはすべて、ダホメ国家を騒乱に陥れたかもしれない。また、ウィダの宗教を、ダホメの社会生活を一般レベルで支える宗教的な

## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

信念や慣行の総体に吸収しようとするれば、社会の文化的統合にとって致命的になりかねない。行政統合は国家の領域を攪乱しただろうし、文化の融和的な統合は、生活の非国家領域の基盤に、その宗教的な根幹で打撃を与えただろう。最も広い意味での安全保障的な配慮、これは政治と文化的統合の要件も含むものだが、それが商業的な利潤より優先されたのだった。というのも、同国の未来はまだ安泰にはほど遠いものだったからだ。一世紀にわたる絶え間ない戦争で、アボメイの平原から東のウエメ川、西のコウフォまで基盤を広げ、北はサヴァロウのフォン族ともつながれたとはいえ、アボメイのフォン族の状況はまだ危うく思えた。北東の覇者オヨの残虐な気まぐれに、屈辱的な従属を強いられているだけではなく、最近では南部のヨーロッパ諸国からの武器輸入源との接触も、アルドラの拡大と、ウィダ領土へのヨーロッパ要塞の永続的な確立の結果として生じたウィダのアルドラからの解放のおかげで、不確実なものとなりつつあったからだ。

圧倒的な敵軍税の脅威により、首都の疎開が何度も起きたことが、ダホメが海岸部を安全な逃げ場所として見るようになるのに貢献したかどうかは、はっきりしたことは言えない。マヘー族攻撃に直面して、対決すべきかフエダ領に退却すべきかで、ダホメ軍が少なくとも一度は迷ったのは事実だ。やがて、退却しないことにしたが、それは二種類の敵対勢力に挟み撃ちにされるのを恐れたせいだ (Dunglas, 1957: 161)。要するに、ウィダとの和平はあてにはならなかった。フエダ族は、アテメ湖の向こうにいる血縁集団のみならず、近隣のどの部族にも持続的な形で抑え込まれることはなかったポボ族も永続的な味方につけていたし、ダホメ以前のウィダの、古き良き時代を決して忘れたことのないヨーロッパ人たちもフエダ族の味方だった。ヨーロッパ人たちはサヴィの独立王家と親密な接触を持っていたし、また内陸の隊商ともしっかりした取引関係を持っていたのだ。

この新しい国民国家の新陳代謝は、年次の奴隷狩り襲撃により獲得した武器に依存して防衛を担保していたため、ひどい人口学的な苦境を強いられ、それが何度となく激しい危機としてあらわれてきた。戦役後に、王の御前でアマゾン女性戦士と男性軍司令官たちが行った「自己批判」の、省略なしの報告は、「年次奴隷狩り襲撃」の持つ不穏な意味合いを示すものとなっている (Forbes 1851 [II] :86-104)。アマゾン女性戦士軍団は、その存在期間のすべてにわたって最高度の連帯性を維持してきたが、身内に容赦することはなかった。また王の將軍たちが自分たちの仲間の命を助けることもなかった。勝利しなければ自分たちの首が物理的に危ういからだ。あらゆる方向で、あらゆる側面で、活動年齢の者をつかまえ、老病者は殲滅するという目的で奇襲が仕掛けられた。これは獲得した周縁部の領域で、人がまったくいなくなるということだ。敗退して従属させられた人々のみならず、ダホメ兵たちの間にも不満が広がっていた。彼らはしばしば、戦術的に実現不可能な目的のため、自殺的な復讐戦で被害を被っていたのだった。王族や、不当に降格させられた將軍たちは、しばしば

## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

最高の兵を何千人もつれて軍から逃亡し、これで和解不可能な敵の勢力はふくらむことになった。だが年次の奴隷狩り襲撃は、どんな王も絶対に無視できない国民的な制度であり、実際生産的な貿易がまったくない国としては、奴隷狩りがなければ武器を購入するための輸出財がなくなってしまい、したがって深い恨みを抱く敵に対する防衛手段がなくなってしまう。そうした敵は、こちらの国民をまとめて外国の奴隷として売り渡すのを決してためらわないだろう。

まさにこの軍事的・戦略的な時点で、内陸国としてのダホメの地位が痛烈に効いてきて、ウィダ征服を頭の痛い問題にした。内陸国という立場は孤立を意味した。それは古式条件の下では、軍事的、戦略的な理由から、何にも増して必要な条件だった。国内政策も対外政策も、安全の要因として物理的な距離が決め手となっていた。不可侵な地理的位置という優位性がない限り、国の中核を敵侵略から守るのは、主に距離であり、それがときには無人の地や荒れ地で増幅される。それが、他の面では連続した国家の住民たちを隔てている状態が必要なのだ。距離が軍事的に、攻撃に対する保護をある程度は与えてくれるのは、それが奇襲をむずかしくするからだ。どうやらダホメが継続を決意していたような、近隣国に対する定期的な攻撃戦争のため、同国は奇襲に頼らざるを得なくなり、これが一般政策に遠大な影響を与えることになる。戦争に先立って、外交キャンペーンが展開され、被害者は自分たちが安泰だと思い込んでしまう。続いてダホメ軍はフェイントをかけて、ちがった方向をめざして首都から出発するが、やがて詐術によりアカされた秘密の裏道を通して、敵に襲いかかる。こうした包括的な用兵は、長期的なスパイ活動を必要とし、しばしば血盟の仲間たちが、貿易商を装って被害者の地域や血縁集団に何ヵ月も前に潜入して行う報告に基づいていた。

ダホメ配下のウィダの組織的な枠組みは、ヤヴォガン事務所が設定した。このヤヴォガンが、白人の総督となり、民間行政の長となったのだ。後の19世紀には、ウィダにおけるダホメ政府の代表トップはチャチャとなった。これは王の絶対的な信頼を受けた機関とされている。この役職は、ゲゾ王(1818-58)が白人の血盟兄弟たるフランシスコ・フェリックス・デ・ソウザに与えたものだった。彼は傑出した人物だった。彼が指名されたことで外国貿易に関するヤヴォガンの管轄権が剥奪されて、チャチャの手に集約されたらしい。

外国貿易の実質的な統制と、関税の額は、貿易に関するあらゆる行動を公開の形で強制する、一連の規制によって確保されていた。これはまた、法の細部に到る遵守を強制するような、自動チェックの網の目を創り出していた。大まかに概略を述べると、国際港におけるビジネスの大半は、上の独立主権の交替には影響を受けなかった。こうした項目としては、外国貿易商たちがダホメで貿易を行う許可を取得する金銭的な義務や、奴隷の輸出入において必要な通行料や税金、さらには奴隷自体の価格があった。以前はサヴィの王やその大臣た

## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

ちが担っていた仕事で、いまやヤヴォガンとチャチャが最終的な決定者となり、それを公式の貿易商、警察、軍人、各種の荷担ぎ人や船漕ぎ人、ハンモック担ぎ人、各種奴隷が実際のきつい仕事をこなす。通常の仕事としては、上陸、首長の本での最初の会合、浜辺のテントで財を保護、それを倉庫や要塞に移動、貿易役人との一連の会合、王への関税支払い、給水、材木供給などの通常サービスについて、固定価格での現物払いというのが一般的な順番となる。

ダホメは、政治軍事的リスクを負担するわけにはいかなかった。何度となく、あらゆる手続の実施すべてにひとつ残らず監督機関を導入する、公式に提供されたサービスを、貿易商たちは強制的に使わされたのだった。法的につながりのない個人や集団同士の、統制されない接触の可能性はまったく残されていなかった。

貿易と戦争の厳密な分離、軍人と商業人員との明確な分離は、政治的に歓迎されない接触者にとっては、さらなる障害となった。こうした手段を通じて、あらゆる密輸品は防止され、特に戦争の資材の密輸は不可能となった。その一方で、兵器は友好的な目的地に転売できる。またそれは、もしその気があれば、外国企業の輸入品や、地元の同盟者や依存者たちに対するちがった扱いを容易にした。同様に、様々な出所の主要産物輸出についても優先権を与えやすくなり、受け手にとって金銭的な利点が確保できる。これはまた、身分や階級に基づいて選ばれた輸出業者のシンジケート設立も可能にする。しばしば、大物たちは自分の奴隷を優遇された「王の価格」で売って良いとされた。

ダホメのタカラガイ通貨を、外国為替面で安定させる手法もまた、外部への支払いを完全に統制したことで、その有効性が大きく高まることになった。たとえば王立財務省による黄金の割り当ては、外国支払いの方法がダホメ当局の裁量次第ならば、すぐに実施できる。タカラガイの安定した黄金か血は、主に棒を利こうと、そこでの財の移動に対する厳格な統制手法のおかげだったであろう。だが、確かにこれでは地元の非ダホメ貿易商たちが港にこななくなる。というのも、あらゆるビジネス取扱は部外者に損失のしわ寄せがいく傾向があったからだ。

歴史研究者としてはそろそろ、ダホメのウィダ征服のバランスシートを書く用意をすべきだろう。ダホメの王たちは、被征服地を帝国本体に統合せざるを得なくなるのを嫌い、港のリモコンを好んだ。港は、国の中核部からはいままでどおり隔離されたままにしようとしたのだ。一方では、武器と交換される奴隷がおり、それが意味する安全保障はあった。これに対して、男女の兵士が大量に戦死することになった。ウィダから輸出される奴隷の数は、ダホメ以前の水準には回復しなかった。かつては、多くの地元戦争から捕虜が集まる内陸部の奴隷市場が、北と東の隊商たちの供給源となり、そこから組織化された需要地点に向けて輸送路が一行に進んできた。だがいまや、たった一つの国による毎年の戦争で得られる、生

## 第9章 ダホメ支配下の貿易港

き残った捕虜たちの収穫だけが供給源となっており、その供給ですら、人身御供の被害者たちで大きく減らされたし、さらに王や大地主の農園用奴隷でさらに数が減ってしまった。1687年以前の時代には、ウィダでイギリスが毎年、14000-15000人の奴隷を狩っているというデュカスの推計は、いささか誇張かもしれない(1935:14)。さらにオランダなど他の国の分を5-6000人足さねばならないのはまちがいないが、ポルトガルとフランスの分はずっと少なかったはずだ。それでも、奴隷ラッシュの頂点では、毎年奴隷2万人がウィダ地域から輸出されていたのは、ほぼまちがいない。ダホメ期の輸出がそんな水準に達したかどうかは怪しい。というのも北と東、マベーやヨルバからの輸送隊商は、ダホメ領を横切るのをほとんど完全にやめたはずだからだ。

だが決定的な資産、つまり銃と火薬の流入(およびそれが敵対する隣国には流入しないこと)がいまや継続していた。ボスマンが数十年前に、彼やその各国の仲間たちが内陸の原住民たちに供給しているヨーロッパ製火器の数について恐ろしいと述べてつ言及しているのだから、ダホメの主要な目的が実現したのは疑問の余地がない。軍事的な生き残りを目指す戦いの中で、ダホメが立場を堅持できたのは、おそらく海岸からの大量の火器流入のおかげでしかなかっただろう。

ダホメの長期戦略が実りつつあった。ダホメがオヨの宗主権から解放されたのは、ダホメ自身の努力によるものではなかった。それでも、ダホメは北部からの攻撃、まずはヌベ、ついでフルベの攻撃が、古オヨの戦力を19世紀第一四半期に打ち破るのを目の当たりにする。ダホメの政策が勝利したのだった。

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

国内取引とヨーロッパとの取引

当初からヨーロッパ人とアフリカ人とのギニア海岸における取引は、内陸部の現地人たちによる有史以来の取引手順に従って行われた。それは、相互に調整するという性質のものではなかった。両者のうち調整したのはヨーロッパ人のほうだけだ。結果は、不均衡な制度発達で、しかもそもそもきわめて遅いものだったが、やがては鋭い通貨イノベーションをもたらした。

17 世紀末の会計制度に関する報告 (Davies, 1957; Wyndham, 1935) を見ると、イギリス王立アフリカ会社の事業において、損益について致命的な曖昧さの印象を受ける。その歴史を研究した K. G. デイヴィーズは、その遅れを認めて、人類学的な説明を試みている。「ある文明が別の文明と取引するとき、その価値観はいずれおおまかに同化するが、そのプロセスは時間がかかるし、アフリカでは 17 世紀末までにそれが完了したとは言えない」 (Davies 1957:235)。だが成長は続いたものの、二つの貿易システムは相変わらず別々のものであり続けた。その後五十年で、ギニアの貿易は上ギニアから下ギニアに広がり、さらにカラバルへと広がった。相当量の黄金取引に、細かい物々交換が織り込まれた。経済組織の進歩尺度が会計制度であるなら、進歩は貿易が地理的に西から東へと広がる中で、進歩はきわめてゆっくりとしか生じなかった。

西アフリカとヨーロッパの貿易方式のギャップをめぐるデイヴィーズのアプローチは、いくつか本質的なちがいを無視している。これらは価値評価的なものではなく、制度的、組織的なものだった。地元でも貿易（取引）は重要だった——これは遠くから産物を獲得する、目的をもった活動のことで、1:1 での物々交換となっていた。緊急事態になると、その単純な変種が起きた。たとえば 2:1 とか 2¼:1 といった具合だ。ヨーロッパの貿易とは、各種の工業製品を外国に輸出して、金銭的な利得を得るのが目標だった。

地元の産物は、他の産物に対して「現物」で、伝統的な比率で、地位としての交易人により交換される標準化された財だった。そうした交易人は、所得をそうしたビジネスから得ていたのではなかった。輸送、警備、交渉は基本的に、長距離を旅する隊商が行うものだった。彼らはときには、ある政治単位から別の政治単位へと直接移動したし、またときには、半年ごとの市を訪れて、他の交易人と会った。

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

これを「統制処方 (administered)」貿易と呼ぶなら、ヨーロッパ側での取引は「市場貿易」と命名されるべきだ。前者とは対照的に、それは価格に基づき利潤を挙げるのを最重視し、したがって単一通貨 (つまり黄金) で多種多様な商品を包含するための、金銭化された会計制度が必要となった。費用を上回る販売マージンは不可欠だった。というのも貿易は、黄金や奴隷の獲得が政治的に認められた目的なのだと宣言されている場合ですら、赤字では続けられないからだ。

この困難の核心として、地元の貿易は三つの厳格にかみ合う特徴があり、それが変えられなかったという点がある。まず、その動機は遠くの産物を、地元の産物と引き換えに獲得する必要性だった。これは等価物の物々交換行為と捉えられていた。第二に、取引手段としてお金は間に入ってこなかった。地元でたまたまお金が使われていたとしても、同じものの取引の両端で使われているとは限らなかったからだ。最後に、産物が交換されるレートは、伝統的に決まっておき価格交渉の余地はなかった。物事の常として、こうしたレートはそもそも産物の貿易を必要としたのと同じ、生態的、軍事的、輸送的な要因により決められていた。

調整のそれ以外の部分は、ヨーロッパ側が負担するしかなかった。王立アフリカ会社の「市場貿易」という絶対的な要件は、伝統的なレートでの利得なしの物々交換という地元システムには、絶対に組み込めないものだった。その一方で、ヨーロッパ人は、1:1(またはその倍数) のレートでの「現物」交換という地元の要件に対し、一連の実務的な調整で対応できたし、ある程度は実際にそうしていた。これがズバリどのように行われていたのか、そしてどの程度成功したのかが、ギニア貿易の歴史でありこれは黄金貿易の時代も含まれる。ウィダ貿易港で高みに達した奴隷貿易だけが、金銭会計と組み込まれた利益マージンというヨーロッパのニーズに対する解決策を与えてくれた。

ギニア貿易が海岸沿いに広がっていった詳細な年表を見ても、会計制度の進展についてはほぼ何もわからない。情報源が乏しいわけではない。バルボの大著 (Barbot 1732) は、上ギニア海岸の北端からウィンドワード海岸の最南端までで取引された商品の質と量を記述しており、王立アフリカ会社の記録研究を招いた。というのも専門家たちは、それを見れば黄金海岸での値づけや費用会計手法での調整を示唆するものが得られると自信たっぷりに予想していたからだ——だがそんなものはなかった。地元取引の数多い様々な基準が使われており、ときにはそのレートが局所的に変わりさえた。これに対してヨーロッパの会計制度はあらゆるアイテムを一つの基準、つまり黄金に還元しなければならなかった。だが、セネガンビアだろうと黄金海岸だろうと、デイヴィーズは「両地域で残された帳簿は、損益について不完全で、おそらくは誤解を招く印象を与えるものだ」と率直に認めている (Davies 1957:238)。ウィンダムは、基準の暫定的な調整は「アフリカ貿易に関連した他のあらゆるものとオン味来、多様で困惑させられるものだ」と述べる (Wyndham 1935: 70)。

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

その好例が「バー海岸」だ。アフリカ人の貿易は、ここでは格付けとそれに対応する会計制度を、他のどんな場所よりも先進的な形で生み出した。ウィンダムを引用すると

ウィンドワード海岸では「鉄棒」が他の財すべてと関連づけられた価値単位で、この貿易は「バー (棒) 取引」と呼ばれるようになった。だからムーアがガンビアにいたときには、フリンジ1ポンド、火薬2ポンド、銀1オンス、銃の火打ち石100個が「バー (棒)」だった。それぞれの貿易財は、「バー」となる数量を持っていた。だがその数量は、海岸の各地でちがうばかりか、隣接する場所ですらちがっていたのだ。  
(Ibid. :67)

「バー」が、ヨーロッパ人への財の販売においては「静的な名目価値」5シリングを持っていたとしても、それは地元の取引での価値とはまったく関係なかったのも当然だ (ibid.: 68)。だが地元民にとってバーの価値評価が系統的になれば、それだけヨーロッパの会計制度にとってはややこしくなった。王立アフリカ会社は黄金会計を目指す必要があったが、基準として鉄棒を使うことで満足はしていた。だがそれは、各地で黄金に対して同じ関係を持つものではなかった。だからヨーロッパ貿易は、産物同士の1:1の現物交換比率という方向に追いやられた。バー取引がおおざっぱな経験則で花開いている限り、まともな会計など問題外だった。

デイヴィーズは、ギニア貿易が実施されていた条件を通説に訴えている。それは現地人のやり方やニーズに支配されていたのだ、というのだ。ヨーロッパ貿易の主要な特徴は、アジア貿易や、後にはアメリカの貿易もそうだが、金銭的な損益会計だった。だが西アフリカでは、ヨーロッパ人はこの基本的なやり方をあきらめねばならなかった。その間ずっと、例外なしに、彼らは西アフリカでは現地スタイルの「実物」交換に頼り、お金の利用を控えた。

地元の貿易財は黄金、奴隷、トウガラシ、象牙、現地の布、さらに皮革、ウシ、キビだった。ヨーロッパの貿易財は銃と火薬、ブランデー、鉄棒、ときには銅、さらにインドやヨーロッパの布、中古のシャツ、金物、重量で量る装飾品など、やがては数百種類もの多様な商品が使われた。

現地の貿易財は海岸の場所によってちがうものが基準となった。ヨーロッパの産物としては鉄棒が主要な基準だが、カラバルでは動画像基準だ。布がその次に使われた。だがヨーロッパの貿易は単に、地元産物取引一般のパターンをたどるだけではなかった。何にも増して、地元とヨーロッパの基準が関連づけられねばならないときには、現地の基準が利用された。たとえばセネガルでは、ヨーロッパの財は皮革を基準に測られ、奴隷は鉄棒で測られた。だがこのヨーロッパと現地の二つの基準の間には、鉄棒一本が皮革八枚 (またも現地の財)



## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

というレートが存在した。

またタカラガイの貝殻 (*Cypraea moneta*) は、重量または体積に基づきヨーロッパの貿易財となったが、奴隷海岸では地元の基準としても使われた。タカラガイは計算上——貝殻一つが 1/8 ファージングの価値——ほんのかけらほどの砂金と同様に、奴隷海岸では地元食品市場での交換手段として使われていた。黄金はもちろん、ヨーロッパではなく地元の取引財であり、黄金海外以外のいくつかの地域でも基準として使われていた。

だが鉄棒での値づけは、ヨーロッパ人の特権ではなく、彼らの会計制度という全般的な問題解決にはほとんど寄与しなかった。「バー海岸」のように地元民が唯一の基準として突出して使われているところでは、あらゆる産物の価値をバーで表現し、またほとんどのヨーロッパ製品の値段もバーで述べた。デイヴィーズは、たまに損益会計ができるのはウィンドワードの貿易だけだと言及しているが、その事実はこれで説明がつくだろう。

「バー海岸」の例外的なケースは、西アフリカ生体系の重要な特徴から生じた。他の大陸における先史時代とはちがい、アフリカのほとんどの場所では青銅と鉄がいっしょにやってきたのだ。これが、ヨーロッパの鉄棒がギニア海岸全域で熱心に求められた原因に貢献した。これはしばしば国内取引の基準でもあった。だからこそ、ウィンワードの黒人たちは、イギリスの貿易商がやってきたときに、伝統的な「バー」価値をつきつけたのだった。イギリス人は大量の「航海鉄」の大量輸出者であり、鉄棒の海岸での価値評価を引き揚げて、できる限り利潤を確保しようとした。デイヴィーズが述べるように「この地域の貿易では鉄棒が重要な役割を果たしたが、会計上の鉄棒と実際の鉄棒は必ずしも、常に同じとは限らなかった」(Davies 1957:238)。その「請求書」で、王立アフリカ会社は鉄棒を 4 シリングとして計上した。ガンビアの現地人に対しては名目価値 5 シリングだった。実際のイギリスの貿易では「会計上のバーの価値は一般に 6 シリングだった」(ibid.:238) が、実際の鉄棒はたった 4 シリングしかなかった。ウィンダム (Wyndham 1935:48, n.1) は、鉄棒の通常価値を 5 シリングから 3 シリングに引き下げようという提案についての議会委員会を引用しているほどだ。

基準となる鉄のシリング価値がこれほど極端に「弾力的」なら、共通のシリング単位でアフリカ人もヨーロッパ人もやがて統一する話になりそうなものだ。だがそんな地域金銭化への集約に現代の学徒が見出すかもしれない進歩というのは、現実の進歩ではなく、単なる見かけ上のものでしかないのだ。それは単に、ヨーロッパの基準がいかに安定性からほど遠いものかを証明しているにすぎない。現代の万能のお金は、一世紀後に登場することになるが、市場取引の結果であり、そんなものは西アフリカの国際貿易の夜明けにおいては、粗雑な形ですら存在していなかった。「バーは、ヨーロッパで理解されているような形では、有効な交換媒体ではなかったのだ」とウィンダム (ibid.:68)。「シリング」は、なおさら架空の

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

単位でしかなく、交換手段ではなかったが、現地人の「静的なバー」と同じく、地元の基準としては使えた。唯一の例外は、すでに述べたようにウィンドワード海岸での貿易での一時期だけだった。「この慣行は、雇った船の所有者がウィンドワードからの貨物の分け前を得られるようにするためのものだった」。だから、売上の会計はロンドンに戻ってなるべくすぐに計上する必要があった。1680-1687年には「ウィンドワードからの貨物95県についての会計を保存した。そこからそれぞれの航海の利潤（偶発的な経費差し引き後）が計算できる」（Davies, 1957:239）。平均的な利益率は38%だった。残念ながら、同社の貨物簿において損益がどの単位で計上されていたのかという示唆はない（おそらくはポンドやシリング。ペニーだろう）。

奴隷貿易におけるポジションは、王立アフリカ会社の独占に対する規制により、さらに悪化した。それはアフリカ西海岸でしか有効ではなく、三角貿易の三つめの航路、つまり西インド諸島からイングランドに戻る部分については適用されなかった。だが利潤が実現するのは、その部分なのだ。その部分において、西インド諸島で奴隷が競り落とされたときの対価である植民地の産物がイギリスにもたらされるからだ。また、農園主たちは会社への債務返済がかなり遅れた。その支払いは現物払いであり、すでに三角貿易の二辺を終えた船の帰国に間に合わないこともしょっちゅうだった。

デイヴィーズははっきりと、王立アフリカ会社に関する限り、個別の航海単独についての損益会計は一切記録されていないと述べている。王立アフリカ会社が、アフリカの産物貿易にあわせようとする最大限の努力にもかかわらず、黄金に基づく金銭的会計にはまったく近づけなかったし、貿易取引における利益マージンの確保もできなかったのだ。物理的な物々交換という最初の設定から、ヨーロッパの損益会計までの距離は、実に長かったというわけだ。

「長さの重さ」

あらゆる物々交換の状況における基本的な問題——こっちのどれだけに対してあっちのどれだけか——は一步步解決された。基本的な運用上のデバイスは、「長さの重さ」の確立だった。一方では単位について合意し、また一方では「交換レートの固定」を合意するのが主なやり方だ。というのもこの二つが合意できなければ取引は一切不可能だし、これが決まればそれ以外の取引は起こり得ない。重さの単位や計測単位の確立には、その交換レートの交渉の条件となる以外の商業的な意義が与えられることはなかった。実際には、これから見るとおり、単位と交換レートは同時に交渉された。

ギニア海岸で、布と黄金を交換した初のイギリス人のひとり、ウィリアム・タウルソンの

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

記述 (Towrson, 1555-56) を見ると、重さや長さの単位と、黄金の重さと布の長さの交換レートが、初期の黄金貿易でどう確立されたかわかる。最初の交渉の冒頭では、イギリス人は布長さ 2 エレを、黄金重量 2 エンジェル<sup>12</sup>と交換しようと提案するため、イギリスの物差しと重りを海岸のニグロ「キャプテイン」に送った。すると、相手は独自の布の物差し (少し大きめ) と独自の黄金の重さ (少し軽め) を送り返して、この取引ならできると示した。これで二つの問題が登場する——実際の計算単位として、同定された単位を見出すこと、さらにそうした単位に基づいて表現された、物々交換が容認できるようなレートを見出すことだ。こうした想定に基づいて行われた取引は、公正に 1:1 の交換と表現できる。一巡目には

(前略) 先方は小舟を我が艦上へと送り、黄金を持ちしことを示し、そして半クラウンほどの重みのかけらを示し、こちらの尺度と重さを知り、それを先方のキャプテインに示さんとするを求める。そこで当方は 2 エレの長さで 2 エンジルの重さを先方に見せんがために与え、それを彼らは持ち帰り (後略) (Towrson, 1907:81)

二巡目には

先方は当方に 2.325 エレの長さを持ってきて、1 クルサド重量の黄金を示し、これだけの長さに対してこれだけの黄金を出すと手振りで示したが、いやそれは応じられなかった。 (Ibid.: 81-82)

だがこの場では合意には到達できなかった。近くの別の場所での手順が繰り返され、イギリス人は同じ交換レートを提示した。また、交渉に先立ってニグロ首長に対して銅製のたらいがふたつ、贈り物として含まれたことが示されている。この「贈り物」はエチケットに属するもので、取引に属するものではない。

キャプテインが落ち着くと、私は 2 エレの布とたらいを二つ送り、それを先方にあげて、かれはまた同じ長さに対する重さを求めたので、私は 2 エンジェルのおもりを送り、だが向こうは受け取らず (中略) (強調引用者) (Ibid.:83)

交渉は続き、もう贈り物は無視された。

---

<sup>12</sup> エンジェルは 1/16 トロイオンス、あるいは 30 グレン。

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

(前略) キャプティンたちはスツールを持ってきていて、そこにすわり、若者を艦上に送ったが、それが 1 エレと 4 分の 1 と十六分の一のはかりを持ってきて、その四倍を 1 エンジェルと 12 グレインで受け取る。私はかれに以前とおなじように 2 エンジルの重さに対して 2 エレを提案し、相手はそれを尊重せずまだ前出の 4 倍の指標にこだわり (後略) (Ibid.:84)

つまりニグロたちは要するに 5 と 1/4 エレの布を黄金 42 グレインで受け取るのを希望し、イギリス人は 2 エレを黄金 60 グレインで渡すと提案したわけだ。

翌日、さらなる交渉のあとで、両者は長さで重さに合意した。つまりイギリスのエレと、ニグロの重量単位である 1 エンジェルと 12 グレインだ。

(前略) そしてかれらは船が出港しようとしているのを見たら、そこに乗ってきて、我々エンジェルと 12 グレインの重さを与え (中略) そして身ぶりで (中略) 三エレなら受け取るという。 (Ibid.:85)

要するに、重さで見た黄金と長さで測った布が交換できるのは、布の長さ (3 エレ) と黄金の重量 (1 エンジェルと 12 グレイン) の等価性が確立されたからだ。この場合は、布の売り手の長さ単位を使い、黄金の売り手の重さ単位が使われた。

同時の交渉されたのは、重さと長さの単位だけでなく、1:1 の基盤でその相互の単位の交換レートだ。これは根本的な活動であり、取引の残りはこれをもとに理解されることになる。この比率が、1:1 関係の単純な整数倍のときにも、原理は同じだ。カ・ダ・モストは、セネガル河口の沖合を帆走していたが、1455 年にこう書いている。

肌の黒いムーア人の地域では、お金は使用しない。お金の利用を知らず、ニグロたちも知らない。だがすべての取引は、モノとモノの交換により行われ、しばしば一つに対して二つという具合だ (後略) (Ca da Mosto in De la Harpe, 1780)

この謎めいた主張が行われてから 3 世紀半もたって、イギリスの旅行者ヒュー・クラップートンとその巨大な隊商は、中央スーダンにいて、チャド湖の北にあるビルマ近辺で食べ物不足していた。地域の女性は、十分な食糧やエサを見つけられないと宣言したが、やがて必要とされているものを「150%の利益で」提供してくれた。クラップートンの日誌のこの下り (Clapperton 1828) は、カ・ダ・モストの「一つに対して二つ」の取引という一説が解明される。ビルマの女性たちは価格を、規定のレートあるいは規定の等価関係の  $2\frac{1}{2}:1$  に

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

設定した。2:1というのは、カ・ダ・モスト的には、伝統的なレートの二倍ということだ。いずれの場合も、産物は操作的に別の産物と交換されたが、その交換の行われるレートは、規定の等価関係の単純な倍数だったということだ。この二つの証拠は、長い時間をはさんではいるが、謎めいた形とはいえ産物の取引の根底にある方式を含んでいたわけだ。地元民の心には、規定の等価関係である1:1の変種以外の取引はあり得なかったのだ。

詰め合わせ (Sorting)

産物を1:1で取引するのが、アフリカにおける取引のやり方だった。どこか知らない熱帯の浜辺やその沖合の艦上での、アフリカ人とヨーロッパ人交易者の最初の出会い以来、入念な手順はこの結果を目指すものであり、相手が習慣的に使う重さや長さの単位をお互いに見極めるのだ。その結果は一種の「長さの重さ」への儀式的なコミットメントだ。布を黄金と交換するにあたり、これは「取引の比率」を疑問の余地のないものにする、あらゆる合意の前提条件だった。こうした取引の言語に関する主要な合意なくしては、そもそも会話が始まらない。そして北ギニアから黄金海岸まで移動するギニア貿易がそこで終わっていたら「長さの重さ」以上のものは、ほとんどの現地の財をヨーロッパのものと交換するにあたりまったく不要だったはずだ。それでも、二つの側面から困難が生じた。一部はヨーロッパの輸出財の種類がますます増えたこと、そしてそれ以上に黄金海岸で購入される奴隷の増加だ。実際、奴隷貿易のラッシュは、17世紀最終四半期には洪水のように増えたので、ヨーロッパ貿易商としては交易技法の発達がないと対応できない状況が生まれた。そしてここでもまた、この問題は現地人の取引スタイルで解決されねばならなかった。彼らの取引は、産物を1:1で交換するのが基本だったのだ。

奴隷は分割不可能だし、取引される相方の財に比べて相対的に高い価値を持つ。各種のヨーロッパ商品が、様々な詰め合わせ比率で、共通の基準に等しい物とされないと、奴隷の等価物として扱えるようにならなかった。現地人の側からすると、戦争、服装、装飾品、金物など、拡大するニーズの幅2より、ますます新しいヨーロッパの財が求められた。金銭化された会計制度は、産物の交換を超えた取引手法を求め、商業取引の中で利潤の余地を生み出す必要が出てきた。

奴隷と価値が等しくなり、金銭的な会計の要素が入り込む余地をもたらし、新しい種類の産物が創り出された。これはいくつかの産物の「詰め合わせ (Sorting)」で、それが合計で奴隷の「取引レート」となる。この用語が初めて登場したのは、カラバルへの奴隷貿易拡大のせいかもしれない。詰め合わせは、奴隷輸出の「手」の必要性和嗜好にあうよう慎重に選ばれた。アフリカ人の保守性は無視できなかった。詰め合わせの選び方が悪いと、値段を下げ

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

でも受け容れ可能にはならなかった。競争は、詰め合わせで提供される産物の種類とその品質だけに向けられた。王は、銃と火薬の確保以外は、関税、通行料などの外国貿易から得られる金銭収入を重視していたが、一般人口はむしろ、取引の中で他のどんな特徴よりも財の品質や魅力にこだわった。それでも、もぐり商人たちが、王立アフリカ会社よりも最大25-30%有利な条件を提示したことで、現地人たちは大いに喜んだ。だがそれ以下の値下げは黙殺された。だから一般の会社貿易商は、交換比率を交渉する余地はほぼなかった。

こうした条件では、比率の交渉について簡単な一般化はできない。カラバルでは、地元の首長がときどき、川上の中央アフリカ奴隷市場で購入したと称する奴隷を販売した。彼は何日にもわたり、通常の鉄棒12本ではなく13本よこせと主張した。内陸での価格が上がったから、これ以上は下げられないのだという。これに対してダホメ王は、奴隷狩りの襲撃で悪名高かった。ダホメは貿易財を何も生産せず、奴隷を獲得するリソースは戦争しかなかった。だから彼はその分だけ、奴隷価格引き下げに応じやすかった。さて私たちの情報源は、ウィダの王たるアルドラ王 (Barbot, 1732:326, 349) そして後のウィダではダホメ王の名代ヤヴォガンが、輸入貿易財すべての「交換比率」を設定するようになったと断言している。王として、「彼の選んだ」財については激しい交渉が展開されたが、王と船長との間で価格は問題にされなかった。ボスマン (Bosman 1814) は、外国貿易商とウィダ王との対立を決して隠そうとはしないが、文句を言っているのは王家が奴隷の支払いとして提示された財の中から無遠慮な選好を示すという点だけだ。バルボ (Barbot 1732) は、ヨーロッパ貿易商たちの間で価格競争はまったくなかったと言い、支払い方法——タカラガイがどれだけ、財がどれだけ——のみが現地人と外国人との対立の元だったと言う。

一世紀をはるかに超える期間にわたり、複数の王の支配下で、多数のヨーロッパ諸国が関わり、その相互の関係を悪化させる重大な出来事がいろいろあった中、何百という奴隷貨物が出荷されたというのに、「貿易の比率」から生じる困難がほとんど言及されていないというのは、確かに驚くべきことだ。だが英仏の情報源は共に、取引が王自身やその主任高官たち以外と取引を開始する前には、その比率が王の承認をえなくてはならなかったという事実を強調する。その最初期ですら、ドブレ (Doublet 1883) は王の役人の統制下にある地元市場での承認価格にこだわる。もちろん奴隷価格が非公式には交渉されたのはまちがいないし、民間仲介業者たちは定価でしか販売できず、ヨーロッパの貿易財は内陸市場では、主任官僚 (アルドラではフェオウラ、ウィダでは王自身、あるいはカラバルでは地元の王) が承認した比率でしか販売できなかったのは疑問の余地がない。その答えは、価格は原理的に変えられないものであり、王はそれを認知はしたが交渉はしなかったということだ。グルグ (Gourg 1892) は、鉄棒とインドの絹を除けば変えられないのだという。変化を禁止しているのは、前の船の比率がまだ有効だという慣習ルールだ。奴隷価格はダホメでは高位の外交問

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

題であり、カラバルでは長期にわたる交渉によるものだが、詰め合わせに含まれる財に適用される比率については情報がないも同然だ。実際のレートの記録に入念な取り決めがあったと考えるべきだし、特に詰め合わせに新しい財を入れたる手順は面倒だったはずで、これは通常は 1 か月の遅れをひきおこした。どうもそれ以外は秘密のままにすることになっていたらしく、詰め合わせのアイテムの「比率」が実際にどこまで交渉の余地があったかについてははっきりわからない。

人間が価値評価される分類を司るのは古くからの法だ。旧約聖書は、神殿の奉仕のために献納された子供や親を請け出す聖人に対して、その神殿が要求できる補償を規制している (レビ記 27)。ナクティガルはダルフル (東スーダン) で、奴隷価格の表についておおむね似たような分類を発見している (Nachtigal 1887)。アトキンスは、1721 年のシェラレオネで、女奴隷についての整理を示している。

| 黄金バー         |      |    |
|--------------|------|----|
| 水晶? (Planes) | 1 片  | 10 |
| 77 ポンドのやかん   | 7 個  | 26 |
| インド更紗        | 3 切れ | 12 |
| ハンカチ類        | 1 切れ | 2  |
| 女奴隷の価格       |      | 50 |

(Atkins 1737:163)

黄金バーというのはアトキンスによれば、黄金の針金をねじりあわせたもので、価値はアッキー、あるいは黄金 1 オンスの 1/16 だ。

ここに挙げた詰め合わせの品目一覧は、物理的な単位ではなく理想を示している。積み荷一覧は、貨物が船倉に安全のためどう積まれているか、その荷下ろしの地理的な順番などはまったく無視して貨物一覧を挙げている。その一方で、地元民は伝統的な財や比率はお馴染みだし、会社の倉庫で販売されている品目の多くも知っていた。各会社は、同じ財を提供しないようにすることで競争を慎重に避けた。というのも経験からして、黄金と奴隷の供給はみんなにいきわたるほど十分だと知っていたからだ (Barbot, 1732: 182)。

詰め合わせは、すでに述べたように、主に奴隷貿易において、1:1 の「実物」取引の原理を維持するための装置だった。その原理適用における調整は、できるだけ一貫性を持つ慣行が必要だった。バルボ (Barbot 1732) は、標準的な奴隷の寸法は「足首から耳たぶまで 6 スパン」だという。イゼルトによれば

若いニグロは慎重 4 フィート 4 インチ [ラインラント尺] でなければ成人とは認め

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

られず、ニグロ女は4フートだ。(中略) この長さに満たない部分は、1インチあたり8リスダーレルとされる (Isert 1797: 110--11)

補償の一覧も提供されている。「(前略) たとえば、歯が一本なければ2リスダーレル。片目や指などの四肢が欠けているなど欠陥が大きければ、その分だけ差し引き分はずっと大きくなる」(ibid.)。もし奴隷の身長が標準以下だったり欠点があったりすれば、売り手は買い手に補償しなくてはならない。詰め合わせはそれでも変わらない。それを減らしたら、どの品目を取りのぞくべきか、ヨーロッパの貿易商に対してその詰め合わせをどう再配置すべきかという選択が残ってしまう。するとこれは、地元の「実物」取引という根拠が侵犯されてしまう。この根拠は、詰め合わせをひとまとめとして交換するものと含意しているのだ。

そこで導入された運用上の装置もまた、「実物」取引の原理と厳密に整合したものだった。ジェイムズ・バルボ・ジュニアは、年齢層を一覧にして評価するにあたり、「15-25 歳の黒人」つまり標準年齢から始める。そしてこう続ける。

8-15 歳と 25-35 歳では、三人が二人と見なされる。8 歳未満と 35-45 歳では二人がひとりと見なされる。(後略) (1732)

年齢過少あるいは高齢という欠陥は、ここで操作的にまとめられて、単純な数値的装置により解決されている。

詰め合わせは、地元民の記憶力と計算能力に頼ってある取引の評点を維持できるようにする、理想的な単位だった。おそらくここで、有名なダンバが救いの装置として登場したのだろう。イゼルト (Isert 1797) の探究精神と訓練された頭が、ダンバの謎を解いた。アフリカとアジアに広がる、豆をつける植物 *Abrus precatorius* は、均一で魅力的な豆をつける。豆は真っ赤で黒点があり、「アヒルの目」とも呼ばれる。ダンバ豆は「葉の重量」として機能し、宝石や貴金属の計測にも使われた。これはダホメで一般的な黄金の重さを量る基準だった。大きな黄金重量は、トロイオンス、あるいは16アッキーまたはエンジェルで、このエンジェルはそれぞれ24ダンバの重さだ(近隣のアシャンティでは、2ダンバに相当するタクの種が使われていた)。ダンバ豆そのものは無価値だった。地元民にとってその記憶装置的な使い方は、ヨーロッパ貿易商に売った黄金に対して貸しとなっている、貿易財の価値を忘れないためのカウンターとしてのものだった。

黄金1オンスは4英ポンド(または80シリング)に等しい。だからアッキーは4ポンドの1/16、つまり5シリングだ。黄金海岸では、ヨーロッパ人は黄金を買って商品でその代金



## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

を支払ったが、売った黄金のダンバ重量を含む革袋が、ヨーロッパ人がその現地人に対して「実物で」負っているポンド/シリング/ペニーの価値をあらわしていた。すでに対価が支払われた分の黄金に対応する数のダンバを取りのぞくことで、袋に残ったダンバの数は、その現地人の貸しになっている貿易財の量を示すものとなっている。すでに支払われた剤の「比率」を知っている彼は、貿易商から今後入ってくる財を数えておけるわけだ。ちなみに、タカラガイと黄金の絶対的に安定した交換比率のおかげで、ダンバを簡単にタカラガイの数やポンド/シリング/ペニーに換算できるし、またオランダのギルダーやデンマークのリスダーレルといった他の銀通貨にも換算できる。こうした銀通貨は、ヨーロッパ人が黄金と安定した交換比率を維持していたからだ。

詰め合わせは地元の 1:1「実物」交換の原理に準拠していたが、これはまた商人が新製品を導入し、貿易財を最も儲かる割合で提供擦る商業技能の余地も生み出した。「オンス」に等価とされる財の量は永続的に決まっていたが、自国で最も安い財の選択は、ヨーロッパ貿易商の能力の範疇にあった。

まだ利益マージンの制度化は実現していなかった。

イギリスの「取引オンス」とフランスの「オンセ」

当初から、ヨーロッパ人が取引を強いられた現地の通貨の枠組みは、彼らのビジネスの金銭化を阻害した。だがそれ以外にも、西洋外国貿易の二つの基本要素が欠けていた。輸出貨の種類拡大（そうしたものの価値は積み上がる）、および利潤のために組み込まれたマージンだ。K. G. デイヴィーズは、信頼できる損益会計の不在が王立アフリカ会社の資本構造を脅かし、やがては同社の 1750 年の正式な清算よりはるか以前の 1712 年に、財の輸出を止めざるを得なくなった様子を示している。

この問題を運用上の形でまとめる質問が二つある。まず、すでに同社の貿易最初の十年で、150 種類以上のヨーロッパの財が (Bosman, 1814:376)、様々な単位で取引されていた——ブランドーや火薬は体積、鉄棒と銃は個数、布は長さ、タカラガイは個数、重さ、体積単位だ。こうした多様な財を、少数の地元産物と交換するに先立ち、どのように「加算」すればいいのか？ 第 2 に、「実物」で行われる取引で、ヨーロッパ人は金融的損失につながる取引をどのように回避すればいいのか？ もっと厳密には、取引を利潤確保に向けて計画するにはどうすればいいのか、そしてその利潤をどう実現すればいいのか？

やがて導入された解決策は、詰め合わせの導入とともに新しい会計方式の単位を導入することだった。それが「取引オンス」だ。そしてこれは、アフリカ人にヨーロッパのお金を利用するよう強制せずに起こった。19 世紀の植民地主義では、ヨーロッパのお金の利用が

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

強制された。また、この調整は、西アフリカにおける地元の長距離取引で容認された形式に操作的に準拠しつつ実現された。

「取引オンス」は、ヨーロッパ人にとってはとりあえずの金銭化と、取引の損失を防ぐための初期の試みにたどれる。初期の金銭化は、現地人たちが産物を基準として使った点に見られる。このやり方を王立アフリカ会社が採用した。王立アフリカ会社の輸出品で鉄棒が多かったのは、すでに述べた通り、主に地元民が鉄の利用について文化的に偏向があったことで生じたものだ。だがこの準金銭化は不十分だった。というのも黄金で測った鉄棒の価値は変動していたからで、さらにギニア海岸の各地でもその価値はちがったからだ。カラバルにやってくると、鉄棒ではなく「銅」が導入された。ジェイムズ・バルボ・ジュニアは、1699 年の古カラバルにおける銅棒の等価関係一覧を示している。こうした取引の等価関係は、支払いのために一括提供されるべく選ばれた貿易財セットを構成するものではない。

|                 |      |
|-----------------|------|
| 鉄棒一本            | 銅棒 4 |
| ビーズ束一つ          | 4    |
| ランゴ五つ           | 4    |
| 蓋付きジョッキ 一つ      | 3    |
| 1 号製帽型一つ        | 4    |
| その他の数字は比率として少ない |      |
| リネン一ヤード         | 1    |
| ナイフ六本           | 1    |
| 1 号真鍮の鐘一つ       | 3    |
| その他の数字は比率として少ない |      |

(Barbot 1732:465)

鉄棒の大ざっぱなマークアップが、損失に対する常識的な予防措置となった。トマス・フィリップス管長は、鉄棒をロンドンで 3 シリング 6 ペンスで買い、バッサムで黄金と引き換えに、7 シリング 6 ペンスで売った<sup>13</sup>。これは黄金取引における初期の 100% マークアップであり、予言的なものだった。これは「平均百パーセント」マークアップの基準となり、それが新しい通貨単位「取引オンス」の導入につながることになる。「取引オンス」という装置は単に、ヨーロッパ人が奴隷の対価として支払うべき黄金オンス数について「実物」で

---

<sup>13</sup> 「1 アッチーは約 5 シリングの価値 (中略) 私は鉄棒 1 本につき 1½ アッチー (の黄金) を受け取った」  
(Phillips, 1746:214)

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

支払うという話だが、そのときに財を「取引オンス」で測る、つまり平均100%のマークアップを上乗せしたオンスで計算するということだ。この会計単位が地元奴隷商人たちに受け容れられるようになると、ヨーロッパ人たちは金銭化を通じた輸出品の多様化と、利益マージンの組み込みの両方に手が届くようになった。

この「取引オンス」の歴史は、ビジネスデータを反映した情報源が不十分だったために、ぼかされていた。そうしたビジネスデータは、当然ながら当時の世間からはほとんど秘密にされていたのだ。議会の証人たちは、奴隷貿易からイギリス経済に貯め込まれている巨額の利潤を軽視しているとは見られなくなかったが、一方では時に奴隷商人たちが法外な値段を支払わされており、もちろんそれ故に同情されるべきだとは主張したかったのだ。

ボスマンは、刊行されたやりとりの印刷版に空白を残し、奴隷の実際の値段は明らかにせず、かわりに怪しげなダッシュを書いている。「取引オンス」の歴史はこうした抑制により、影響を受けずにはいられなかった。議会証人たちは戦術的に歪んだ情報を提示し、同時代の黒人取引相手の頭に、いかに不当なものであれ誤解を生じさせるよりは、後世の経済史研究者をがっかりさせるほうを選んだのであった。それでも、ヨーロッパ貿易商たちの通貨単位の変更が存在したという証拠と、その根拠についての証拠は大量に浮かび上がってくる。

分析上、利潤を指す三つの用語を区別しよう。まず、産物を事前にマークアップして利益マージンを確保するという初期のやり方、二つ目は、事後的に実現した利益水準を変えるやり方、最後に、16000 タカラガイの為替レートを持つ「取引オンス」という通貨単位の台頭だ。それ以前も以後も、黄金オンスは32000 タカラガイの為替レートだったのだ。

情報源の不十分さは歴史学の方法論に長期的な影響をもたらした。デイヴィーズとウィングダムは、「取引オンス」に一度も言及していない。ごく最近まで、これは奴隷貿易史の研究者に無視されており、最新の研究文献ですらここに関わる問題の議論には曖昧さがつきまとう。ニューベリーはこう書く。

奴隷の価格を正確に決めるのは貿易「オンス」で示す以外のやり方ではできない。このオンスという会計単位は、黄金海岸での場合と同様、各種のヨーロッパ製の財——布、タカラガイ、ビーズ、銃、火薬、ラム酒、タバコ、鉄棒——の寄せ集めでできしており、これは地元ではオンスで価値が計られるが、その原価はまったくちがうのである。<sup>14</sup> (Newbury 1961 :22)

---

<sup>14</sup> ニューベリーの言及は明らかに、「詰め合わせでの支払い (payments in sortings)」という新しいやり方についてのものだ。黄金オンスと「取引オンス」との区別すらきちんとしていない。この区別はダルゼルやイゼルトの時代にはしっかり確立していた。

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

まず1789年の奴隷貿易に関する議会委員会は、西アフリカ貿易で実践されている支払い様式を調べたところ、例外なく次の答えを得た。「支払いなし、物々交換のみ」。さらなる質問で「物々交換というのが、支払いが常に実物で行われるという意味だと確認された。権威ある人々、たとえばダルゼルなどは、支払いは奴隷価格の「半分程度」でしかないと付け加えた。別の商人はこう述べた。「1英ポンドはヨーロッパ人には10シリングの費用となる」。「サフォークからの紳士」アトキンスは、船員の中に外科医として加わっていたが、もっとはっきりしていた。アポロニア岬での奴隷貿易で、奴隷は「オンス」で測られ、ひとり4「オンス」とされた。彼によれば「財のマークアップ100%と考えると、奴隷は平均で8英ポンドの費用がかかる」(1737:74)。つまり、4「オンス」の値づけをされた奴隷は、たった8英ポンドの財で支払われたということだ。黄金4オンスは16英ポンドとなる(1オンスあたり4ポンドの計算)。4取引オンス(つまり実物での支払い)は、たった8英ポンドにしか相当しない。言い換えると、ヨーロッパ人は自分が負った「オンス」に100%のマークアップを上乗せした財で支払いを行った。彼らが支払った「オンス」は、実はダルゼルのような後の専門家が、その価値が黄金半オンス、あるいは2ポンドだと公式に認知したときに「取引オンス」と呼んだものだった。

これまで強調してきたように、100%のマークアップは平均と考えるべきだ。事前のマークアップはあらゆる財について異なり、取引ごとにさえ異なった。それでも貿易商は、「中間で」あるいは「おおよそ」こうしたマークアップを取引から確保できた。

確かに、個別取引はおろか貨物丸ごとで見ても、ずっと低い利益率しか得られなかった可能性はある。だが話をはっきりさせておくために、取引オンスの価値の差についての話は持ち出さないほうがよかろう。100%のマークアップは、早い時期から知られていたし、バルボとボスマンの両方が記録している。1680年に自分が市場で買ったものについて書いたバルボは、ニワトリが「財で買えば一羽6ペンスであり、つまりは原価で3ペンスである」と書く(Barbot 1732:330; また cf. Bosman, 1814:503)。ウィダで支払われる関税料を推計するとき、ボスマンは関税——これは財で支払われる——は「ギニア価値で百ポンドほど、つまり財がその地で売れるはずの値段でその額になる」と述べる(Bosman 1814:489)。

つまり「取引オンス」は、慣習的な価値について作られた架空の会計単位であり、地元民に対してヨーロッパ人が負っている黄金価値を精算するためにそれが使われたということだ。ヨーロッパ人同士の間では、それは「ギニア価値」(Barbot)と呼ばれたり、ウィングダムによれば「海岸のお金」と呼ばれたりしていた。貿易港は奴隷取引会社と協定に調印して、奴隷に対する支払いで詰め合わせの使用を認知した。これは王が、ある単独のモノだけにより支払いにこだわるのをはっきり禁止するためのものだった。ウィダでタカラガイは貿易財の地位を得ていたので、この禁止令は暗黙のうちに、奴隷貿易においてヨーロッパ人たち

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

の唯一の支払い方式が詰め合わせだと確立することになった。

勅許会社の代表たちが、1704年以降にウィダでほぼ同時に「交わした」「協定」が、彼らをお互いに平均事前マークアップ 100%という慣習に縛るものだったということは十分に考えられる。実は、事後的なマークアップの場合、「中間で」(Atkins)、「ほとんど」(Bosman)、「近く」といった条件づけの一句が、私たちの情報源でついていない場合は決してない。ここでお目にかかるのは、平均マークアップから、新しい通貨単位への移行だ。ダルゼルの「ダホメのお金、数字や重さを数人の著者から集めた完全な表」は、お金をタカラガイの数と、イギリスの硬貨ではシリングとペンスで表示している。そこにはこうある。「4 アッキー=16000 タカラガイ=40 シリング 0 ペンス」。ダルゼルの表を編纂した「J.F.」は、二種類のオンスがあると述べている。「黄金オンスは4英ポンドの価値で、取引オンスはその半分の価値しかない」(Dalzel, 1793:134)。マクラウドもまたその価値を40シリングとしている(McLoad 1820:90)。イゼルトは一貫して同じやり方に従っている(Isert 1797:112-13)。議会委員会での証人として、ダルゼル総督はウィダでの奴隷価格についてだけは言葉を濁しているが、各種価格については一貫して「取引オンス」で述べている。彼は「平均的な奴隷」が5オンス(取引)=10ポンドかかると述べ、「上級奴隷」は、供給が低いときには「30ポンド弱」で販売されたと語っている(Parliamentary Papers, 1789: 191)。

貿易財の価格は、奴隷だろうと鉄棒だろうと、変動していた。だが黄金のタカラガイ為替レートや、架空の「取引オンセ」の黄金価値は、まったく安定していた。

通貨の浮沈を考察するにあたっては、イギリスのギニア貿易は黄金貿易の制度的、運用的な伝統から決して大きくは逸脱しなかったことは忘れないようにしよう。1698-1712年の潜り商人に関する方針変更——十パーセント屋規定——を除けば、その歴史はすべて王立アフリカ会社の年代記に含まれる。ロンドンでは黄金会計は捨てられておらず、イギリスの貿易商たちにとって「オンス」は絶対に黄金オンス、つまり4英ポンドのことだった。ロンドン塔の造幣局は砂金やナゲットを金塊に変えたものの基準有効性の守護者であり、1シリング以内の幅でしか変動は許されなかった。王と王宮は、通常の商売として儲かるものと期待された事業に出資した株主だった——とはいえ初期を除けば儲からなかったのだが。財務省に損失補填をさせるわけにはいかなかったし、西インド諸島に供給されたアフリカ奴隷一人あたりの報奨金も提供しなかった。「ギニー&ビニー」事業の株は自由に売買された。そして多少の権謀術策やありがちな汚職はあったが、ギニア貿易は保守的なやり方で粛々と実施され、ビジネス生活に内在する規律により統括されていた。横領、賄賂、従業員の士気や命の無駄遣いが会社を蝕んだことはなかった。だが経済史研究者にとって、その図式は不変だった。イギリス奴隷貿易は、全体としてパターン通りだった。

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

フランスの海外貿易、特に奴隷貿易は二つの集団が組織していた。一つは王立のコンパニー、もう一つはブルジョワ市民の艦隊商船だ。資本過少のコンパニーは、宮廷人用の閑職を提供するもので、通常は数年しか続かなかったが、すぐに別の短命なコンパニーがかわりに登場した。その新しいコンパニーも、そっくりながら別の名前を持ち、同じように短命に終わる。こうしたコンパニーは海事や軍事問題担当の省の管轄下にあった。ギニア海岸の要塞や倉庫を担当し、地元住民を雇用して、アフリカ奴隷が仏領アンティル諸島に上陸したあとの政府報奨金請求をチェックし、商人たちつまり奴隷貿易人たちを海事当局に登録した。奴隷商人は出港するとき、当局の許可が必要だったのだ。

コンパニーの収入は、ギニア貿易に携わるあらゆる登録船のトン数に基づく税金からくるものだった。その総督、管理職などの職員は高給取りだった (cf. Davies, 1957: ch.i)。経費はフランス王を代表する人物の高邁な要件に従ったものだった。デュカスの視察旅行 (1682) に続く、同世紀中の外交使節職員に加わった人々としては、デルビー、ダモン、ジャン・ドブレ、デマルシェ、そして位は下がるがラバト神父、やがて不運なグルグ総督がいた、と書いておくだけで、それがフランス政府の代表であって、もっぱら民間事業に携わる人々ではなかったのがわかる。

もう一つの集団はといえば、きわめて少数のナントにある豊かな企業群が、私有船を艀装した艦隊商船で、その数はコンパニー船よりはるかに多かった。多くの船主出資者を持つブルジョワ艦隊商船と、気取ったコンパニーとの激しい反目は、フランス革命にはっきり貢献した大きな要因だった、とガストン＝マルタンは語る (Gaston-Martin 1931: 433)。

制度史を見るため、ちょっと 1704 年に戻ろう。これはフランスの活動が、ウィダを国際開放港として確立した中立性宣言に結実した年だ。K. G. デイヴィーズは、これに続く二年間に、英仏の貿易会者が「協定を結んだ」ことをつぎとめている (Davies 1957: 274)。イギリスの歴史学者たちを見ると、サヴィにあるウィダの王の竹製宮殿で間もなく起こる劇的な出来事の兆候は一切見られない、とデマルシェは述べる (Labat, 1731)。1704 年 9 月 6 日の協定は、奴隷貿易外交官たちの署名が見られるが、その意図はデイヴィーズが中身を明記していない「協定」に対応したものかもしれない。いくつか重要な方向性は想定できよう。

「実物」による支払いしか行わないこと、詰め合わせ、つまり多様な貿易財が支払いにおいてセットとして扱われるという方式が継続されること、奴隷に対する支払いとして、単一の財による支払いを要求してはならないこと。詰め合わせにおける各種財にそれぞれの参加者が自分の判断で上乘せする平均の「マークアップ」がヨーロッパ人の利潤の源として認知されること。だが 1704 年の文言がはっきり述べているのは、支払いとして詰め合わせがよいという話だけで、他は暗黙のものでしかなかった。また、イギリスはこの協定の有効性について公然と疑問視していたらしい。だが条約好きなフランス人のほうが上手だった。新し

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

い独立ウィダの王を擁立したのはフランスだったのだ。その直接的な結果がフランスの「オンセ」だ。これを研究するには、70 年近く後の仏コンパーニュの奴隷船ダホメット号の事例に頼らねばならない。この船の書類をシモン・バーバンが刊行してくれたからだ。

「オンセ」——フランス語——は、ウィダにおけるフランスの奴隷貿易の会計通貨だった。これは奴隷とヨーロッパの財両方で使われ、イギリスの「貿易オンセ」とまったく同じ形だった。だがその運用は、少なくとも明示的には、イギリスとはちがって黄金オンス=4 英ポンドに基づくものではなかった。英ポンドとはちがい、フランスのリーブルは黄金に基づいてはおらず、したがって黄金オンスのリーブル価値は固定されていなかった。

こういうふうに説明してみようか。フランス人は、奴隷を買うときには、地元のレートで現物支払いをした。ウィダの奴隷取引に関する最高の歴史学者シモン・バーバンは「取引は架空の会計単位であるオンセに基づいて行われた。これは 16 リーブルに分割され、黒人は交換する財を固定の尺度に基づいてこれで評価する」(Barbain 1942:68) と書いている。フランス船ダホメット号の記録 (1772) を見ると、「オンセ」の等価物が奴隷購入に関する船の日々の会計で使われていたことがわかる。取引で提供される財は、不変の価格表にしたがっている、とフランス総督グルグは述べた (1892:769)。だが、鉄棒は需要に左右され、サンゴや絹は品質によって変わるので例外としている。

ダホメット号の書類の、i「オンセ」(訳注:8 オンセ?でも原文はiとなっている)と見積もられる女奴隷ひとりに関する典型的な記録は以下の通り:

| 売り手と詰め合わせの数           | 「オンセ」 |
|-----------------------|-------|
| ブイヨンから、女 1 人を 8「オンセ」で |       |
| ブランデー 3 樽             | 3     |
| タカラガイ 123 ポンド重量       | 3     |
| [1「オンセ」あたり 41 ポンド]    |       |
| ハンカチ類 2 切れ            | 1     |
| プラティーユ 8 つ            | 1     |
| [きつく畳んだ白い綿布]          |       |
|                       | 8     |

(Berbain, 1942: 113)

この詰め合わせは、タカラガイについて驚くべき指定が見られる。「タカラガイ 123 ポンド重量=3 オンセ」というのは、41 ポンド重量のタカラガイが 1「オンセ」、つまり 16000 タカラガイに等しいことになる。この表記は、タカラガイで慣習的に使われるもので、重量で表記されており、「オンセ」価値をタカラガイの物理的な量と等しいものとしている。タカ

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

ラガイ 41 ポンド重量という量は、こうしてタカラガイ 16000 個と等しいとされ、ひいてはイギリスの「取引オンス」と等価とされる。

だがバーバンは、「取引オンス」に一切言及しない。その特徴は文献では一切まとまっていないが、その基本的な要素はこれまで見た通り、多くの事実面での項目で記録されている。たとえば、鉄棒のマークアップ、4 英ポンドが 1 オンスの黄金と等価だったこと、黄金オンスのタカラガイ価値が 32000 個で、取引オンスのタカラガイ価値が 16000 個であること、あるいは最も単純には、奴隷に対する支払いを 100% マークアップした「実物」財で行うことで、支払いが半値になっていることだ。

イギリスの学者と同様に、バーバンは彼女の研究実施にあたっての制約を明かしている。その論説の題名 "Le Comptoir français de Juda (Ouidah) au XVIIIe siècle," (18 世紀におけるジュダ (ウィダ) のフランス総督府) が物語る通り、その対象はフランス奴隷貿易におけるウィダ事務所の機能だった。その範囲は意図的に、ウィダに集中したフランスの奴隷貿易に限定されている。仏領アンティル諸島の奴隷取引は扱われないし、フランス以外のウィダでの奴隷貿易も扱わない。だからイギリスの組織は検討されず、イギリス「取引オンス」は無視された。これでフランスの通貨システムだけが「オンセ」の扱いにおいての唯一の参照枠組みとなる。ここから論理的に、イギリスとフランスの通貨システムの根本的なちがいを常に暗黙のうちに含意しつつ、決して言及しないことになってしまう。

イギリス通貨システム (英ポンド) における黄金の役割は、フランスのリーブルが黄金から独立していたのとは好対照で、絶対的なものと見なされていた。だが実際問題としては、その黄金からの独立の結果としてリーブルは変動通貨になっていたものの、それは地元の理由から ウィダとそのフランス組織には適用されなかった。奴隷ラッシュがもたらした条件の下で、フランスはイギリスと同様に、詰め合わせを使って利益マージンを組み込んだ形で取引する以外のはできなかった。これはやはり、架空の会計単位を設立することで実現された、イギリスは黄金通貨を持っていたので、この架空単位を黄金に基づくものにした。ウィダのフランスも、そうせざるを得なかった。だから、バーバンの提示を混乱させるパラドックスが生じた。フランスの「オンセ」は、会計通貨としては安定したタカラガイ価値を維持するはずだった。そしてこの事実から、タカラガイの安定した黄金価値は、「オンセ」を間接的に黄金に結びつけているのだ、という事実が出てくるが、それは隠されたままになっているのだ。

バーバンはまた、タカラガイの価値は奴隷海岸でのみ維持されていたと主張する。その価値は、16000 タカラガイ、または 4 カベスだとされる<sup>15</sup>。確かに、それはダホメット号船長

---

<sup>15</sup> "41 livres bouges ou 16,000 valent une once ou 4 cabeches." (Berbain, 1942: 124)



## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

が記録した詰め合わせにおいては常に「オンセ・タカラガイ」として登場する。この事実から、リーブルもまた決まる。つまり「オンセ」の1/16ということだ。そこから計算すると、「オンセ」はイギリスの「取引オンス」または16000 タカラガイと等しくなる。要するに、イギリスの「取引オンス」は黄金オンスの半分の価値で、フランス「オンセ」は同じ数の価値を持っていた。だがこの事実は「オンセ」の定義には登場しない。「オンセ」は架空単位で、16 リーブルに分割されるのだと述べられるだけだ。リーブル・トゥルノワは黄金に基づいてはいなかったが、バーバンのリーブルは「オンセ」のタカラガイ価値を通じて間接的に、黄金に縛られていた。リーブルは「オンセ」の1/16 だからだ。だから、リーブルの二つの変種について、決定的な関係は定義できないものの、その両者の差はおそらくある決まった範囲で変動していたはずだ。その範囲は、パリとロンドンの実際の為替レートで決まただろう。

「取引オンス」のこれまた別の変種が、フランスよりはイギリスに近い形で、オランダとデンマークにより開発された。その架空単位「リスダーレル・モネイまたはクラント」は「リスダーレル・オア」の半分として流通した。この二つは「取引オンス」と黄金オンスの関係と同じだった。

フランス「オンセ」は実際には、詰め合わせに含まれる商品数をきわめて限られた貿易財に減らすというやり方につながった。アトキンスの時代を思わせるやり方だ。バーバンは正直に、成功する取引のためには三つの財しか要らないと述べている。タカラガイ、プラチーユ、ブランデーだ。ダホメット号の貨物は九割がこれらで占められていた。イゼルトの詰め合わせと貨物の例は反対方向を示している。そこには1 ダース以上の財が含まれる。こうした数字はどうしてもよいものに思えるが、貿易港、詰め合わせ、「取引オンス」が、三点セットになっていたという発想を支持するものにはなっているし、そこではフランスの「オンセ」取引手法も多少劣る形で参加していた。実際、封建的なコンパーニュが、詰め合わせと「取引オンス」の組み合わせで実現できるほどの、輸出品の多様性発達に熱心だったとは考えにくい。

架空の会計通貨の一方的な導入は、それが英仏その他だれによるものだろうと、奴隷貿易の経済を大いにかき乱すのはまちがいない。分析的には、フランス「オンセ」はかなりの共通点を持つ「取引オンス」の変種でしかない。「取引オンス」そのものも、ギニア海岸におけるヨーロッパ貿易のもう一つのイノベーション、詰め合わせから導かれたものだ。詰め合わせと「取引オンス」はかみ合うパターンを形成し、それがアフリカへのヨーロッパ通貨侵入までずっと続くことになる。表面的には、こうしたヨーロッパの活動は、自分たちを有利にするだけの一方的な交換比率の改訂だ。ヨーロッパ人のこの改訂の影響として、二つの断

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

絶が生じた、分析的には別個のものだが、この二種類の変化は相互に関係していた。

価格と利益に関して、ヨーロッパ価格のマークアップは絶対的なものだった。奴隷ラッシュ前には、トマス・フィリップスの鉄棒や、アトキンスによる奴隷価格の名目英ポンドから半分の「実物」支払いへの変更、さらにバルボやボスマンの「ギニア価値」と「海岸のお金」(Wyndham, 1935:68) を見ると、ヨーロッパ人のビジネス方針には疑問の余地がないように見える。だが実際の利潤はそれでも、100%という目標をはるかに下回った。地元の黄金の売り手や、たまに奴隷を売る人々は、まだ複雑な財の詰め合わせに直面してはおらず、単一の輸入品を提示されただけだった。

奴隷ラッシュにより、詰め合わせへの移行が急速に起こり、これが貿易港設置と共に、物々交換の条件そのものを変えた。というのも、全面的に拒否された場合を除けば、詰め合わせはその状態で支払い手段として受け容れられねばならないからだ。平均マークアップは支払い単位としての「取引オンス」に集約された。貿易港運用から生じた商業規律がその原動力となる要因だった。奴隷が、標準的な身長や手足や歯を欠いた状態で、売り手が欠陥支払いをすませないうちにその手を離れるという事態は、法律上は認められてはいたが、それでも貿易港がダホメの監督下にあればヤヴォガンの介入により、買い手に対してほとんどタカラガイ現金により賠償がなされることになるのはまちがいない (Berbain, 1942: 72)。国大紛争の中でも公開港が提供する庇護は、港湾当局の中立性だけでなく、海軍船によっても確保されていた。

「取引オンス」に対する地元民の最初の反応は、奴隷価格の壮絶な引き上げだった。K. G. デイヴィーズを引用しよう。「70 年代と 80 年代には、アフリカ奴隷の通常の価格は 3 ポンドだった。これはペトリ・ウェイボーンが 1687 年に、ウィダでニグロを供給するときに契約した価額である」。そして彼は脚注にこう追加する。

私が発見できた限りでは、提示される奴隷価格はすべて、その購入に使われる商品の請求原価を示している。ほとんどの場合、財の請求原価は、会社がイギリスで支払った価格と同じであり、輸送費はまったく考慮されていない。

本部はこう続く。

1663 年 (訳注：おそらく 1693 年のまちがい) にアフリカ会社の船長たちは、黄金海岸のニグロたちを一人あたり 5 英ポンドで買えるだけ買うよう指示された。1702 年にはさらなる値上げがあったが、おそらく他と比べてウィダではそれほどではなかったはずだ。やがて黄金海岸のニグロたちは、一人 10 ポンド、11 ポンド、12 ポンドに

## 第10章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

もなり、1712年には16-17ポンドもの金額が支払われた。だから二十年強ほどの間に奴隷価格はほとんど五倍になったわけだ。(Davies 1957:237)

制度的には、実におもしろい事実が残る。現地人たちは相変わらず英ポンドをオンス換算で理解しており、「取引オンス」はヨーロッパ人しか使っていなかった1791年には、ジョン・ジョンストン船長の船スワロー号の書類(1920)は、平均的な男性奴隷の価格が13オンスだったと示している。これは明示的に「貿易オンス」ですべて表示されているのだ。だが、地元民自身のお金の単位に、それに対応する変化を示すものはまったくない。したがって私たちは、地元民の反応は主に経済的なものだったと考える。伝統的なオンス単位で見た奴隷価格の即時引き上げだ。いきなり奴隷価格が急上昇したことについて、これまでの唯一にして不十分な説明は、フランスともぐり商人たちの競争により需要増大が生じた、というもので、「取引オンス」への言及は一切なかった。残念ながら、1789年公聴会のイギリス承認は、奴隷貿易における価格と通貨の混乱をはっきりさせる気はあまりなかったようで、単に支払い条件が購入者にきわめて有利なものだったと繰り返すにとどまった。この有利な条件は例外的に、少なくともイギリス貿易商としては、地元の売り手に対して「取引オンス」に組み込まれた過剰なマークアップについて補償しようという気をおこさせたのかもしれない。それがマシュー氏の議会委員会前の謎めいた主張の説明になるかもしれない。「塩、工業製品などをあげます。15-18ポンドが、請求書価格以上に支払われているのです(後略)」(Parliamentary Papers, 1789)。ここまでは、移行は価格と利潤についてのものだ。その苦労は双方が、ちがった支出という形で対応しなければならないというのは常識的な提言に思える。やがて成長の道を広げて、維持不可能な伝統的ポジションから撤退するときには被った移行時の損失を各参加者に補償する西洋のやり方が残った。成長は多方面に及んだ。ヨーロッパ輸出品と地元の布の多様性、内陸部の対象の数と範囲も何倍にもなり、それとともに海外貿易の量も何倍にも増えた。

金銭分野での鮮度的な以降には、主要なステージが三つあった。ペトリー・ウェイボーンによる奴隷価格3ポンドの推定では、二つの基準、つまりヨーロッパ財としては鉄棒と、奴隷にはタカラガイがウィダで流通していた。1704年になると、ウィダ王は独立を果たし、外国の貿易商は彼に「関税」を支払わねばならなかった。その年の「協定」では、鉄棒とタカラガイは明示的に、価値単位として奴隷に置きかえられた(Labat, 1731 [II]: 91-92)。価格表のパターンは、産物の物々交換を行う国で私たちがよく見かけるものだ。ハムラビ法典より昔の日付を持つエシュヌナ法典は、本書で扱う時代に「バー海岸」で行われているのと同じやり方、つまり各種の産物が価値で「バー」一本に相当する量を示している。この古いバビロニア法では、銀1単位(シェケル)は各種の量の穀物、さまざまな品質の油、羊毛など

## 第 10 章 奴隷貿易における架空のヨーロッパ通貨

に対し、この同じやり方で相殺されている。ウィダはアフリカ奴隷の国際貿易港となるので、価値単位として奴隷に注目するのは適切に思える。だが、間もなくダホメがそれを制圧して、タカラガイが支配的になった。この第 3 ステージには、転回点が生じた。タカラガイで見た黄金の安定性が、ダホメの宗主性にとって絶対的な要件となった。だから制度の分野では、ダホメ時代以前のウィダを検討し、ヨーロッパ財には鉄棒、奴隷にはタカラガイが標準だった時代を調べる必要があるのかもしれない。ダホメがウィダを征服すると、黄金オンスの価値についてはタカラガイが価値の標準となった。経済的な混乱は、架空のお金の単位対等で示される、広範な制度変化に対する表面的な反応でしかなかったのだ。

もっと注意して見ると、タカラガイの黄金価格は奴隷海岸で、最初期の貿易港がない取引の時代から、ウィダにおけるあらゆる金銭基準の変化を経て、ダホメのフランスによる征服まで不変のまま維持されているという驚異的な事実が目当たりにされる。1680 年代ボスマンは、タカラガイ 1000 個の価値が 2 シリング 6 ペンスとしている。バルボはタカラガイ 200 個の価格で販売されているニワトリの蚊カウを 6 ペンスとしている (Barbot, 1732: 330)。どちらの価値評価も、ちょうど黄金 1 オンスあたり 3200 タカラガイとなる。ダルゼルの表 (Dalzel 1793: 134 および n.; 135) は、黄金 1 オンスを 4 英ポンドとし「貿易オンス」を 2 英ポンド、または 16000 タカラガイとした。ダホメの係官クラッソウ・ド・メディイユは、1772 年になっても重さ 41 ポンドのタカラガイを、何度も 16000 タカラガイと等しいとしており、それがフランス「オンセ」または半オンスの黄金に相当するとしている (Berbain, 1942: 101 ff.)。要するにタカラガイで見た黄金の価値は、ダホメにおける不変の古式通貨システムの一部を形成していたわけだ。

## 第 IV 部 結論

## 第 11 章 古式経済制度

### 古式貨幣の社会機能

私たちの分析は、生計プロセスが古式経済制度に埋め込まれるやり方について、西アフリカの事例を扱っている。三つの交換制度のうち、貿易と市場の古式変種はすでに説明した。だがお金（その安定性はダホメ経済の突出した業績だ）にはほとんど触れていない。地元のお金の価値を、地域的に安定したものに保つのは何か、そして適切な仕組みもないのに、等価関係はどのように維持されているのだろうか？

答は、私たちの提案では、お金の社会的機能とそれが社会構造に与える影響に求めるべきである。本書で、タカラガイ通貨が表しているお金の変種を見てみよう。そして市場システムの代替として、古式社会を構成する構造の堅牢性を見よう。

私たちが「古式」と呼ぶ経済は、「未開」の血族組織社会には見られず国家社会だけにあらわれる経済制度だが、交換手段としてのお金が広まると再び消えるような経済制度だ。国家社会で登場する経済制度は、大ざっぱに二つのグループに分かれる。利息を取ったり担保融資をしたり事業パートナーシップを行ったりするようなものは、いったん確立されると現代まで続く。そしてそれ以外のもう一つは、自発的な労働チームや子供の質入れ、果樹の相続といった仕組みであり、それはやがてどうでもいいものに退行するか、あるいは消え去る。後者の初期国家社会に限定されるものだけが、厳密に古式経済制度と呼ばれるべきものだ。それは数ダースにのぼるが、一覧としてはごく少数を挙げるにとどめる。ローマ法での担保提供は、利息と似たような目的を果たした。土地、ウシ、奴隷だろうと、保証として与えられた物体は、貸し手に渡されるだけでなく、貸し手はその物体を、借り手の返済が済むまで使ってよかった。市場がなくても売上は確保された。スーダンの一部では、販売は仲介人を通じてごく普通に行われ、競売人すら雇われたが、彼らは仲介人でもあった。ほとんどの産物について等価物が設定され。私たちが「産物ファイナンス」と呼ぶものを行った。これは特に、再分配と家計会計の運営ではよく見られた。

交易、市場、お金といった交換の制度は、それぞれ古式版の対応物を持っている。特にこれは「行政処方」取引の場合に成り立つ。これは地位としての交易者や貿易港などが関わる場合だ。「孤立した」市場は強制的なお金の使用を伴う。そして最後に重要な、お金の古式変種がある。ダホメのタカラガイ通貨はその見事な例だ。

## 第 11 章 古式経済制度

一般にお金は発話、書字、重さや長さなどに似た意味システムだ。これは三種類すべてのお金の利用に当てはまる——支払い、基準として、交換手段としてだ。さて古式のお金は、社会構造を固めるという独特な効果を持つ。制度は数字の導入により生じる、義務や権利の定量的な同定により強まる傾向を持つ。制度が伴う社会的特徴は、主に地位と地位構築だ。古式経済制度は、一般に、この二つとの結びつきにより仲介される。地位はこうした制度の発達の中で確認され、国家は集約される。これは一方では、集団や階級に有利となる利益の支持に頼ることになる。

具体的にはつまり、古式経済制度にはその厳密に経済的な役割とは別に、社会機能が伴うのだ。イブン＝バトゥータ (1958) は、14 世紀ニジェール帝国における細い銅線と太い銅線が地位を示すお金として使われていたことを発見したことで賞賛されるべきだ。賃金が支払われる細い針金では、薪と未精製のキビしか買えなかったが、太い針金はエリート財を含め何でも買えた。つまり貧乏人には消費の制約が設けられており、有閑階級の高い生活水準は自動的に安泰となった。「貧乏人のお金」は蒸留階級の特権を維持する道具だった、と言っても何ら不公平なところはない。だが意図的な厚生の意図についての地位の含意は、記録にも残っている。16 世紀の近東では、バスラで安物の布を買うときには「貧乏人のエレ」という長さの単位が存在した。これは高価な布を買うときの普通のエレに比べて五分の一長いのだ。

反対の変更がホメロスのギリシャにおける「エリート流通」では大きかった。これは宝石の贈り物返報という形だ。西アフリカでは「エリート流通」は取引の原理だった。馬、象牙、技能奴隷、貴金属、宝石、宝物は、こうした一連のエリート財アイテムとの交換でしか手に入らなかった。古代の近東では、古式のお金に伴う地位の差が、一部の楔形文字に見られる経済的な謎の鍵となるかもしれない。ハムラビ法典によると、銀で返済された借金は 20% の利息を伴うが、その借金が大麦で返済されたら、金利は  $33\frac{1}{3}\%$  だ。だが返済方式はどうやら、借り手側が好きを選んでよかったらしい。これはなんとも奇妙に思える。だが銀の融資は貴人にだけおこなわれ、平民は大麦の融資しか受けられないのであれば、地位がこの見かけ上の異常の説明となる。古式のお金が各種の形で地位に結びついていたのは明らかで、それが社会の実体と強力な目に見えないつながりを創り出していたのだ。

### タカラガイと黄金

ダホメ、アシャンティ、ウィダという三つの隣接する国々では、別々の通貨が使われていた。ダホメでは、タカラガイの貝殻単位が王家により発行されていた。アシャンティで流通するのは黄金だけだった。貿易港ウィダでは、イギリスの奴隷商人たちが会計上のお金とし

## 第 11 章 古式経済制度

て「取引オンス」というお金の単位を開発し、フランスは同じくらい架空の「オンセ」、オランダとデンマークは「リスダーレル・モネイ」を発達させた。

19 世紀の国際金本位制は、確立した人工のお金の単位としてのイギリスポンドに基づいていたが、ギニア海岸のほとんどでは、この機能がダホメの束ねたタカラガイに与えられた。これは戦時も平和時も定期的に発行され、国内物価水準的にも、タカラガイと黄金の外国為替の面でも安定していた。だが、黄金とタカラガイの役割の比較をあまりやりすぎるのは禁物だ。西洋では、黄金は紙幣の裏付けとなり、外国為替レートを通じて外国貿易メカニズムを調整する役目も果たした。貝殻にはそんな統合的な役割は伴わなかった。またダホメは商船隊も持たず、活発な貿易もおこなっていない。唯一のお金だった貝殻は、遙かな珊瑚礁からやってきたもので、貿易商たちはそれを底荷として、ほとんど費用をかけずに輸出してきた。

過去 75 年にわたり、装飾品としてもお金としても、タカラガイの利用については集中的な研究がおこなわれてきた。貝類学、地理学、文化人類学、考古学、経済史が貢献している。J. W. ジャクソン (Jackson 1915) は先史時代のタカラガイの総合的な広がり記録している。二種類のお金として使われるタカラガイは、ごく例外的にしか見つからない。それ以外の無数にある *Cypraeidae* 種は、初期の人類によって装飾品か、性的な想像力の喚起物として好まれた。先史時代から有史時代初期に移り、鉄、同、貴金属が広範な地域でお金として使われるようになると、タカラガイは金属貨幣といっしょに登場したが、単独の通貨となったことは、ほばないも同然だ。歴史的なタカラガイは、お金として使われるものだけ、つまり *Cypraea moneta* と *Cypraea annulus* だけだ。重く大きい *Cypraea annulus* は、青灰入りがかって黄色い輪がついており、通常は純白できれいな *Cypraea moneta* と混ぜられた。*Annulus* の産地はザンジバル対岸のアフリカ東海岸だ。この二級のタカラガイがダホメについたのは、主に海路からで、ずっと扱いやすくきれいな *C. moneta* と競合することになる。いずれにしても、タカラガイ通貨はどこにいても、同じ地域の先史時代の発見物とはまったく対応していない。また有史時代には、古代を含め、西アフリカのほとんどや極東の一部とは対照的に、中近東にはタカラガイのお金がまったく見られない。

通貨は、その制度的な特徴とともに、文化的性向としてのタカラガイの装飾面とはまったく縁遠い現象だ。これはタカラガイ通貨の研究に、概念的な絶対性をもたらし、それが経済史に魅力を与える。私たちの西洋文化の外に生じる経済事象について、人々を簡単にとらえてしまう自民族中心主義的な偏向には、警戒する必要がある。何世紀にもわたり、金銀と、タカラガイは競争状態にあった。近東の銀が少なくとも二千年にわたり黄金より先を行っていたが、やがて現代人は、その洗練をもって黄金を勝者とした。ここでは銀は無視して、黄金とタカラガイの比較だけに絞ることにしよう。



## 第 11 章 古式経済制度

黄金とタカラガイの固有をそれぞれ通貨単位としてふさわしくするのに、貢献したり足を引っ張ったりした各種性質を、ここでざっと比較しておくといいたいだろう。黄金より貝殻が文句なしに優れているのは、それが目に見える単位として存在していることだ。黄金には単位がなく、重量で量るしかないし、当時は黄金重量のまともな単位は存在していなかった。貝殻の別の利点は、その単位価値が実に微少だということだ。おかげで未開生活におけるきわめて重要なアイテム、つまり一口分の食品を、みんなが帰るようにする。これに対して黄金は、エリート的な含意もあってこの点では不利だ。もちろんウィダ市場における砂金の粒などはあるわけだが。その一方で、「工業」利用においては、黄金は大きな経済敵重要性を持つ別の用途があり、おかげできわめて弾力的な需要が生じた。タカラガイの装飾的な需要は非弾性的で、その限られた範囲内においてすら、各種金属の「工業」利用が持つ経済的な重要性には比べようがない。黄金通貨の安定性となると、黄金の工業利用が持つ本質的な役割は、あまりに有名すぎてここで強調するまでもない。だがタカラガイの利点に話を戻すと、偽造不可能だ。だが砂金や金の延べ棒は、しばしば真ちゅう粉を混ぜることで純度を下げられ、金貨は削られる。また別の政策的な側面として、タカラガイはかさばるので、富の貯め込みが自然に明らかになってしまう。スパルタ人は、指導者たちが賄賂の魅力に勝てないという事実を承知していたので、黄金の輸入を禁止して鉄を使わねばならなかった。ダホメのゲゾ王はバートンによると、隣接するcong山地に黄金はあるのだが、二つの理由からタカラガイを好んだ。一つは偽造できないこと、そしてだれもタカラガイでこっそり金持ちにはなれないことだ。(Burton 1893 [I]: 117, n.3).

一方でタカラガイは、アンビバレントな流動性を持ち、それにはタカラガイの物理的な性質が一役買っている。タカラガイの貝殻は、注ぎ込み、袋に詰め、シャベルで運び、山積みし、土に埋め、砂利のように落とし込むこともできる——それでもきれいで、ピカピカで、染みがなく、きれいで純白のまま。何千万単位で輸送できる。これはタカラガイ通貨の成功裏の運用を阻害する傾向があり、すでに確立したタカラガイ通貨が、このために再び消えうせることもしばしばあった。

私たちは、タカラガイを他の貝殻と一緒にくたにして、原始的なお金の一種と考え、「お金の期限と発達」といった、進化的と称する視点で見ることになってしまっている。歴史研究はこの進化的な偏向を取りのぞく。タカラガイ通貨は、金属通貨や、鑄造のお金が地中海の中心ではとくに確立していた時代に、ニジェール川の中央部と上部で対等した。イスラム教の西アフリカにおける、新しい非金属通貨の台頭は、こうした背景のもとで見必要がある。そうすれば、お金の全般的な発達の一部としてまちがった理解をするのではなく、初期ニグロ帝国における中央集権政府と食品市場の拡大の特徴として理解できるようになる。

## 第 11 章 古式経済制度

それがお金の局所的な歴史に刻印を残したのだ。

ダホメ地域では、たまたま砂金とタカラガイが食品市場でのお金の役割をめぐって激しい競争をしていた。ヴォルタ川は砂金をたっぷり提供したし、タカラガイは南のギニア海岸から入ってきたにせよ、北のニジェール地域から入ってきたにせよ、入手可能だった。ご存じの通り、砂金はダホメ北の産地でもとれる。だが砂金は精密な天秤が手元にないと（アシャンティでは服務員が通常持っていた）市場の男性には扱えなかった。アシャンティはまた、各種の標準化されていない個人的な黄金の重さを、共通単位なしに使っていた。ウィダの女性は砂金の品質を見分け、ほんのわずかな粒ですら指先で感じ取るという評判だった。だがこれは、貝殻が提供する細かいお釣りの離散単位とは比べものにならない。食品市場ではタカラガイは、黄金より何倍も優れていた。さらにそれは、重さでも体積でも、当然ながら個数でも計測できる。長期的にはタカラガイの弱点となったもの、その極度の安さと変動性は、古式条件下では致命的なものではなかった。タカラガイは、ヨーロッパの硬貨と楽々と渡り合えたとし、やがて黄金の利点の前に屈したのも、国際金融の条件が登場したからでしかなかった。国際金融には、タカラガイはまったく不向きだった。

南北からのタカラガイ

ダホメが成立するはるか以前から、黒人と白人は西アフリカで、2 ヶ所で遭遇していた。アフリカでのタカラガイの物語は、その出会いの様相をある程度は明かしてくれるはずだ。その最初の出会いはニジェール中部、そして次に一世紀後にギニア海岸で起こった。タカラガイが西アフリカに浸透したのは、いつ、どこで、どのようにしてのことだろうか？ そしてどんな過程でタカラガイが通貨システムとして確立したのだろうか？

ダホメは、ギニア海岸と広大なニジェール川大湾曲の間に位置している。ベナン湾の浜辺とニジェール中部ではそれぞれ、タカラガイは二種類のちがった交易人たちによってもたらされた。一方ではベルベル人＝トゥアレグ人と後にはアラブ人、もう一方ではポルトガル人だ。だがこの両者の地域的な境界は、1500 キロ以上の距離で隔てられている。ティンブクトゥとゴゴとを隔てる距離だ。ヴェネツィア商人たちはモルジブ産のタカラガイをトゥアレグ隊商経由で送りだし、南のポルトガル人はヨルバ文化の出店たるベナンやアルドラでそれをやっていた。

タカラガイが北から西アフリカに到達したと思われる最も早い日付は、マルコ・ポーロがヴェネツィアから極東に向けた旅に出発した、1290 年頃のことだ。中国南西部の雲南で、タカラガイ通貨に出会ったときの驚きを述べた詳細な記述は、心からのものだ。私たちの情報源も、マルコ・ポーロの故郷で家族ビジネスの拠点ヴェネツィアこそが、ペルシャ湾から

## 第 11 章 古式経済制度

ニジェールにタカラガイを送り、そのエキゾチックな貝殻で黄金を買おうとした主体なのである、と述べている。これで時間の幅は 1290 年から 1352 年春の間にまで狭まる。1352 年にはイブン=バットゥータが、ニジェール川が急転して南に向かうニジェール中部のゴゴでタカラガイのお金が使われているのを発見しているのだ。あらゆる点から見て、マリ帝国においてタカラガイは、金の延べ棒と銅線と並び、標準通貨となっている。だからイブン=バットゥータは黄金の価値を、タカラガイの個数でためらわずに述べている。彼は、かつての雲南におけるマルコ・ポーロ同様に、極東で（訳注：これは間違いだと思う。イブン=バットゥータの話はニジェールでのもの）タカラガイに出くわして大いに驚いているが、ポーロとはちがひ、それについて熟知していたし、お金としての利用も承知していた。イブン=バットゥータが驚いたのは、タカラガイの価値がミトカルあるいはダカット金貨あたり 1150 個という高値だったことだ。モルジブでなら、同じ金貨で少なくともタカラガイ 40 万個、いやヘタをすればその三倍の 120 万個すら買えることもあったのだ。ゴゴでの為替レートは、イブン=バットゥータが確信をもって断言している。そしてカ・ダ・モストは、タカラガイなど見たこともなかったが、1455 年に伝聞だけに基づいて *Cypraea moneta* を正確に描いており、ペルシャ湾からヴェネツィア、ヴェネツィアから西サハラ of 砂漠ルートを通してニジェールにたどりつくという軌跡について、具体的な情報を付け加えている。

後年、タカラガイが西アフリカに南からはいつてきた日付はほぼ同じくらい確実だが、それが起きた輸送手段はずっと不確実だ。北のアラブ商人たちは、11 世紀の世界的なイスラム移動を示すものだった（17 世紀に彼らが侵攻したのは、かなり短期間で不自然なことだった）。いまや彼らは、ローマ時代以来上ニジェールからカルタゴとリビアに向けて流れていた、黄金の源を自分で獲得しようと考えた。彼らが上ニジェールや中部ニジェールに与えた文化的な影響はきわめて大きく、彼らがなじんでいたタカラガイは、少なくとも東のゴゴまではマリで流通していた。アラブ商人たちは、生まれながらにしてミトカルとその分数を使うように育てられ、また黄金と銀のディナールはディルハムを使っており、「不信仰者」どものように、黄金の重量を測るのにダンバ豆だのタクだのに限定されてはいなかった。15-16 世紀に海岸でヨーロッパ人たちに出会うと、ムラーたちは貿易における対等またはそれ以上の存在だと実感した。だが 15 世紀のベナンにおけるポルトガルの貿易は、アラブ人から見るといささかちがった代物で、彼らはそれを、自分たちの内陸領土への侵入と見なした。ポルトガル人たちは黄金海岸に定着し、アフリカ産の黄金を、限られたヨーロッパ製品と交換した。布、銃、火薬、使用済みシート（訳注：used sheets, 意味不詳）、たらいやナイフといった金物、そして何より鉄棒や「銅の輪」だ。隊商奴隷やタカラガイはまだ登場しない。そして 1497 年にインドへの航路が開けたことで、ポルトガルの商業は方向を変えた。フェルナンド・ポー島とサントメ島に拠点を置いたポルトガル人たちは、ベナン湾をポルト

## 第 11 章 古式経済制度

ガルの湖に仕立てた。彼らが地元民から買うものは、いまや彼らの地元島のサトウキビ農園や海岸貿易で使われるためのものとなった。これで、タカラガイ使用地域の中でポルトガルがある程度侵入した二つの地域に話が戻ってくる。ベナンとアルドラだ。

当のベナンとアルドラですら撤退した、この不健康な浜辺にはポルトガル人たちも住もうとはしなかった。彼らは沖合の島や、海から 100-120km ほどの内陸部を好んだ。彼らは内陸の現地人たちに、奴隷を含む手持ちの産物を取引しようと持ちかけた。だがベナンの優れた文明は、イレ＝イフェの宗教、芸術、国家機構の継承者であり、ポルトガルの文化拡大をきわめて狭い範囲に限定した。さらに、はるか北からのアラブ商人が彼らのところまでやってきて、ポルトガル人がそれ以上内陸に入り込むのを阻止した。

だがアルドラ国に対してポルトガルは大きな影響力を行使した。王自身がサントメ島のキリスト教修道院で育てられた。ここでタカラガイ通貨の重要な特徴が生まれた。このシステムにおける数値的な記数法はすべてポルトガル語の名前がついているのだ。つまり、ひもでつないだ 40 個の最小単位はトク、5 トクで貝殻 200 個はガリナ、20 ガリナで貝殻 4000 個はカベスだが、この名前はポルトガル語だ。呪物など重要な文化シンボルもののポルトガル語の名前がついているし、各種集団の行政長や多少なりとも重要な港湾の長をあらわすカボセロスもポルトガル語だ。ちなみに、各種のタカラガイの束を示す単語の現地語表現もダホメでは使われていた。だがひもでつないだタカラガイのお金が使われる全域で、ポルトガル語の名前が使われていた。ダホメもその一部だ。

そこそこ短期間の、13 世紀末から 14 世紀半ばの間に、タカラガイはニジェール中部に到達した。その後 15 世紀の最終四半期に、ポルトガル人はベナン内陸部でもタカラガイを発見したかもしれない。ニジェール中部のものはまちがいなく北の砂漠ルートで地中海からやってきたものだが、それがベナンにあったのは、北のニジェールからのニグロまたはアラブの商人たちによる遺漏のせいだったかもしれない。いずれにしても、この流入は後に、喜望峰を超えてやってくる外国からの流入で大いに強化されることになる。東海岸から、今後強国を越えてチョロチョロ入ってくるタカラガイは無視してよい。

当初はバラバラの貝殻で、二種類のタカラガイ *Cypraea annulus* と *moneta* が混じり合っていたアフリカのタカラガイ通貨起源をめぐる私たちの疑問は、これで部分的に答えられる。それがいつどこからやってきたかを見れば、タカラガイ通貨システムを創始したのがダホメではなかったのは確実だ。ただし、やがてダホメはそれを採用し、その主役となる。だがダホメにおけるひもでつないだタカラガイ通貨の重要な初期段階については、ほとんど何もわかっていない。ただ、ダホメに征服される以前から、ウィダではタカラガイがひもでつながれていたことだけはわかっている。ここで念頭においているのは、単にバラバラのタカラガイをお金として使うという話ではない。タカラガイを通貨として使うという組織化

## 第 11 章 古式経済制度

されたシステムの話だ。そしてこれは、いったんダホメに定着すると、その国家実存においてあまりに顕著な道具となり、ギニア海岸の広い領域における地域的な経済組織でも突出した存在となった。

経済史における記録されたエピソードが、ここで関係するかもしれない。ポルトガルの四角い布のお金は、リスボンでポルトガル王家の紋章がスタンプされており、それがギニア海岸の新しい内陸支配者たちの通貨的想像力を刺激した可能性がある。バルボの甥、ジェイムズ・バルボ・ジュニアは、実におもしろいアンゴラの現地報告をしているが、これはギニア海岸に関する叔父の報告の補遺として印刷されている。アンゴラが今後帝国から分離したことで、カプチン派の僧侶たちは、現地人たちを改宗させ、リスボンに拠点を持つ経済組織を導入するチャンスを得た。包括的な課税システムは、地元の行政組織に基づいて導入された。これはさらに特権的な地元階層であるソナセンに任されることになった。アンゴラの通貨システムは地域化され、部分的に王家独占とされた。当時お金として使われていた貝殻である小シンボ (*Olivetta nana*) は、わずかしか現地産ではなく、相当量はブラジルから輸入されていた。国産シンボのうち、ロアンダ地方のものがその美しい色のおかげで最も価値があった。こうした人気あるシンボは、重量 64 ポンド (29kg) 入りのわら袋に入れて、現地の使用人たちがかつぎ、今後に運んで、奴隷や現地産の木の皮で作られる各種の大きさの四角い布と交換された。ジェイムズ・バルボ・ジュニアによると、コンゴでは金銀食料を含めあらゆるものがこの貝殻で買われるのだという。そして「硬貨の使用は、金だろうと他のどんな金属製だろうと、コンゴ全土で弾圧され禁止されており、これはアフリカの他のいくつかの場所も同じだ」と加筆されている (James Barbot, Jr., 1732:518)。だがリスボンのポルトガル政府は、税のとりたてと、リスボンで印章を押した法定通貨発行の独占とを組み合わせ、そしてそれをアンゴラに導入して、徴税人と、この王立「造幣局」の財務的独占者に、過大な利潤をもたらすことになった。

紋章つきクラウト (布貨幣) の公式価値は、紋章なしのものの四倍であり、二重に紋章がついているクラウトは、紋章なしのものの 5-6 倍だった。紀元前 4 世紀と紀元 9 世紀に中国が紙幣を試してみた場合を除き、帝国規模でこんな野心的な仕組みの記録はどこにも見られない。ポルトガル人がダホメの国家財務に与えた知的影響を見くびってはならない。地域的に安定した通貨というギニアの大胆な取り組みは、以前のアンゴラでの実験から発したものかもしれないのだ。ダホメよりはるかに古い北のニジェール帝国では、こんな高度な通貨があったという兆候すら見られない。

もっと基本的な部分での無知は告白せねばならない。つまり、そもそもこうした貝殻がどのようにして、こんな長い軌跡にわたり、その産地から大量に物理的に運ばれるに到ったのか、ということだ。伝統的には、タカラガイの移動について民俗学者たちは自信たっぷりに、

## 第 11 章 古式経済制度

それはインド商人たちが金銭的利得を求めたのが起源だと述べていた。だが貿易は説明にはならない。というのもこの説明自体が、なぜそんなものが需要されたのかという説明を必要とするからだ。確かにその利潤は、イブン=バットゥータの記述に寄れば、10 万%の水準にも達した。だがこれは、その取引の源泉には触れずじまいとなる。つまりなぜタカラガイが、アフリカで通貨として利用されるためにこれほど需要されたのか、ということだ。またそれは、なぜ購買力がこんな形で、大規模に費やされることが可能で、実際に費やされたのか、という質問には答えてくれない。

つまり経済学者は、初期社会においてこのような通貨の手段に対する一時的な有効需要が生じた理由の説明ができずにいる。経済発展が、主に私たちが「経済的利益」と呼ぶのに慣れたもののせいで生じるという発想は、誤解のもとになりやすい。むしろ、国家建設と経済組織の領域における重要なできごとが、西アフリカの通貨システム導入の原因だったのかもしれない。これが通貨として使用されるお金物体の需要源だったのであろうし、ひいてはその購入のための購買力を供給できる財政の源だったはずだ。経済史研究者は、新帝国の台頭や、はては地元食品市場の働きを加速するための一般通貨の必要性に、その原因を求めねばならないだろう。タカラガイの伝承はこの方向を示しているようだ。

### タカラガイの伝承

ダホメへのタカラガイ到来と食品市場到来に関する地元の伝承は、この二つのできごとを結びつけている。狩猟生活から定住生活への移行で、地元民たちは血族の中でも村の組織の中でも居場所のない地元民が生まれたかもしれない。その居場所のない新しい居民たちへの食べ物の配布は、北の各種ニジェール帝国には問題となったはずで、また後には南のブッシュやサバンナの王国にとっても問題だったろう。後者は、ある程度までは北部の輦みに倣っただろう。

ダホメ初代王、フウェグバジャの弟テ・アグバンリ (1688-1729) の伝承の一つは、彼がポルト・ノヴォ地域に定住したときの様子を語る。ある出来事が、お金と市場の密接な関係を示している。語り手は、お金がなかった時代を回想し、テ・アグバンリが市場を「発明した」と述べる。

その頃にはお金はなくてな。何かを買いたくて、手元に塩があって別の人が穀物を持っていたら、こっちが塩を渡し、相手は穀物をくれるんだ。あんたが魚がほしくて私がトウガラシを持っていたら、こっちはトウガラシをあげて、あんたは魚をくれる。当時は、交換しかなかった。お金もなし。お互い手持ちを人にわたし、その相手から

## 第 11 章 古式経済制度

自分の要るものを得た。

さて、テ・アグバンリはよそ者だったので、アコノの人々にこう言った。「ここには市場がないな。あんたらのために市場を発明したい」。そこにいたアコノの男はこう言った。「なんでよそ者に、なんでもかんでもくれてやらにゃいかんのだ？ あいつに住むところをやったら、今度は市場のための土地を求めやがる」(M. and F. Herskovits, 1958:364)

この異論を唱えた可哀想なアコノの男は、市場のお清め用の人身御供にされてしまった。そのほぼ同時期に、テ・アグバンリの兄フウェグバジャ、ダホメのアラドクソヌ王朝の創建者は、アボメイ平野の南端あたりで、先住民ゲデヴィ族の王アグワゲデと、激しい権力争いを繰り広げていた。二人の王は、魔術と社会イノベーションの領域で競い合った。フウェグバジャは、新しい法制度と、綿布の紡績と織布と、死者を木の中にいれるのではなく地面に埋葬する方法、そして代々の王が埋葬に土地を使う権利のため、永遠に支払いを続けるという制度を導入した。「人々はこれが大いに気に入った。そこでこう言った。『よし、あんたが気に入った。あんたをずっと王様にしよう』」(ibid.:361)。だが最終的にはフウェグバジャが勝ったものの、短期的にはアグワゲデに負けていた。アグワゲデは、干ばつのときに雨を降らせ、作物を食べる「呪物」イナゴを作り、さらに呪物でそのイナゴの災厄を止め、地面からピーナッツを生み出し、さらにタカラガイのお金を創り出した。最後の二つのできごとは、彼こそ王としての正当な地位を持つことを示すはずのものだった。

テングブウェという薬草があつてな。それがその瞬間に生えてきた。彼（アガ＝ゲデ）は再び言った。「大地が真にわが父のものであるなら、この草を引き抜くと、いっしょにピーナッツが引き上げられるであろう」。彼が草を抜くとそこにピーナッツがあった。

民は叫び声をあげた。手を口にあてて彼をほめそやした。

彼は再び言った。「大地が真にわが父のものであるなら、薬草を引き抜けばタカラガイが出てくるであろう」。これをやると、タカラガイが出てきた。民はいまや食べ物を得て、物の交換に頼らなくなった。お金ができたんだ。(中略)

民はアグワ＝ゲデに駆けよって宣言した。「あなたが我々の王だ。他に王なし (中略)」

こうして民はフウェグバジャを認知せず、アグワ＝ゲデが死んでからやっと、フウェグバジャの治世が始まったんだ。(Ibid.: 366-67)

## 第11章 古式経済制度

こうしてタカラガイのお金は、先住民の王によるイノベーションとして伝承に登場する。そしてその結果——「民はいまや食べ物を得て、物の交換に頼らなくなった」——は、彼らの心の中でお金と市場が密接につながっていることを示唆する。実はすでに見た通り、ダホメ市場は食品市場であり、重要な事実としてそこではタカラガイによる支払いが強制されていた。

経済を形成して組織した実際の力は国家であり、それを体現したのが王だ。食品、お金、市場はすべて国家が作る。ヘーゲル＝マルクスの国家は、経済社会 (Gürgerliche Gesellschaft) の一機能でしかなく、経済社会と対比される存在となっているが、この発想は初期国家には当てはまらない。ファラオ時代のアフリカからバビロンを経てニジェール帝国に到るまで、国家建設の動きは、経済組織の領域内で、世俗の力として登場する。そうした国家の成立そのものを確実に後押しした要因は、また別の話だ。軍事要因とならび、それは国家の経済的な前史に属する。だがいったん国家建設の道に乗りだしたら、王は軍とその「実物」支給、課税装置としての通貨の開始、食品流通のための市場と小銭の創設に乗り出す。これもまた、納税や配給において相互に代替できる産物の比率を決める、国家制定の「等価関係」を必要とする。こうした経済に関する政府の活動は、ここではいままでの章から引き出してきたもので、タカラガイ通貨の起源と機能について、もっと現実的なアプローチを提供しようとするものだ。ダホメでは、タカラガイは王の妻たちによってひもに通され、これにより被征服者たちは地元の食品市場で食べ物を買えるようになったのだった。

### タカラガイと国家

未開社会は、お金として使える中央発行の貝殻など知らない。またそうしたものは、お金が交換手段として一般的になった社会では、生き残ってはいない。実際、ダホメのひもでないだタカラガイは、驚異的な古式制度に思えるだろう。現代人の頭ですら、金融政策における類似の専門的な話を理解するのに苦労しているからだ。タカラガイは重要な厚生面での機能を果たす必要があったが、それを安定させるのはとんでもなくむずかしかった。全国、および国際的な規模で安定性を実現するためには、大きな障害をいろいろ克服する必要があった。

いささか誤解のもとではあるが、このジレンマは現代の厚生とインフレの天秤という選択に多少似たところがあったかもしれない。そのとんでもなく小さな価値のため、タカラガイは一世紀にわたり貧乏人のお金だった。だからインドや、後には (程度は劣るにせよ) 西スーダンでは、タカラガイは福祉国家の一要素として本当に機能した一方で、その流動性——粘性の不在——は貴金属で見た正式な為替レート維持を、ほぼ不可能にしてしまった。



## 第 11 章 古式経済制度

それでもウィダと、ダホメ全域では、黄金で見たタカラガイの完全な安定性が実現した。これは、金銀での会計を行っている多くの貿易国がしょっちゅう訪れる、国際港という複雑な条件下で実現したものだった。

インドの通貨問題は、西アフリカ以前から存在した。イブン=バットゥータ (1958) が 14 世紀第二四半期に訪れたムガル帝国は貧富のとんでもない両極を示していたが、後の文明が、支配者による大衆の生活への関心と呼んだであろうものも示している。イブン=バットゥータは、デリーで飢餓の最中に行政の高官に指名され、私人として五百人の貧困者を喰わせる負担を背負い込まされた。このとき、タカラガイはインドではイスラムヒンズー国家の福祉経済の一部を形成していた。その四世紀ほど後のアフリカでは、ニジェールのムーア人支配下での状況も大差なかった。ただしまだタカラガイが使われていたティンブクトゥ以外では、貝殻に変わってキビが貧乏人のお金として使われるようになっていた。北部におけるタカラガイの古式的人気の反映は、ピーナッツ、タカラガイ、食品市場をまとめて生み出したという創建王に対する狩人の賞賛というダホメの伝承に見られるかもしれない。だが、ダホメのフォン族王朝を、帝国建設の道具としてタカラガイの採用に向かわせた力については、何一つ知らない。

イブン=バットゥータは、三年にわたりモルジブで最大のマランで重要な役職を務めてから、その職を辞したときに、王からきわめて巨額のタカラガイを贈られた。王は、それがあればベンガルで米を買えるぞと固執したが、イブン=バットゥータは、それが自分には無用の長物だとして受け取りを拒否した。彼は中国への道中にベンガルに寄るはずだったのだ。イブン=バットゥータは、最初は同意しかけたが、王の役人が同行して取引を管理するのを条件とした。やがて彼は、王から一定金額を黄金で与えられた。他の証言でも、タカラガイは貧乏人が日々の米を買えるお金として描かれているが、それが船いっぱいにあっても黄金は買えないのだった。

やはりイブン=バットゥータが訪れたマラバール海岸では、黄金と銀が商業のお金だったが、インド亜大陸の内陸都市では、貧乏人のお金としてタカラガイが使われていた。タカラガイはバラバラの貝殻として使われており、ダホメの仕組みのような、習慣的な記数法にさらに分解されたりはしていなかった。鑄造されたディルヘムに対してどんな科合わせレートで交換されたのかを見極めるのは困難だ。そもそもそんな為替が存在したとして、そのレートがいつどんな形で変動したのかもわからない。なんといっても、きわめて政府が発達していたモルジブにおいてすら、その為替レートはきわめて不安定だったらしい。イブン=バットゥータは、ゴゴでの体験を伝えるにあたり、その変動ぶりに触れている。

当時の西アフリカ帝国がタカラガイ輸入を始めたのは、やっと 14 世紀初めになってから

## 第 11 章 古式経済制度

だった。これはニジェール中部では目新しいもので、インドできわめて安いとはいえ、ゴゴで決して無価値ではなく、イブン=バトゥータはそこでタカラガイが大いに賞賛されているのを自分で確認している。だがそれを西サハラの長いルートをとって片道を運んだベルベル人商人たちは、戻りに際しては何を運ぶにしても黄金での支払いにこだわった。隣接する中央スーダンでは、タカラガイは知られておらず、飢餓の間にムーア人の王は貧困者にキビを配った。キビは食べられるし、他のどんな通貨と比べても、市場でなんでも安く買えたのだ。キビと同様に、タカラガイのお金は初期国家の福祉政策において、重要な役割を果たすようになった。

専門的にいえば、ダホメのタカラガイは絶対に原始的なお金などではない。オセアニアの貝殻貨幣とちがうのは、「野蛮」人たちのお金に比べると、自然状態に近いという点だった。タカラガイはひもに通してあったが、それ以外は未加工であり、モルジブの珊瑚礁で「収穫」されたままの自然状態にあった。未開人の貝殻は磨かれ、着られ、技能と辛抱をもって彫られており、しばしば面倒な共同作業を経ていた。だからこそ、彼らのお金の「希少性」が生じた。その価値は、その希少性と、その製作に注ぎ込まれた人間の努力に対する情緒的な反応から生じていた (Malinowski, 1922)。これに対してタカラガイが通貨の地位を得たのは、国の政策のおかげであり、国がその使用を統制し、大量に船に積まれて勝手に輸入されて広まるのを防いでいた。未開社会でも、現代の条件下でも (理由はちがうが) こんなタカラガイの扱いは不可能だった。1848 年にボルヌは、タカラガイ通貨の立ち上げにひどく苦勞した。やがて通貨としてのタカラガイは、フランス支配の到来、金属通貨の導入、交換手段としてのお金の一般的な利用により、ダホメでは消滅してしまった。

つまり私たちの用語では、タカラガイ通貨は、まちがいなく古式経済制度だった。その仕組みは詳しく検討する価値がある。17-18 世紀のダホメにおける為替レートは、黄金 1 オンス (アラブの 8 ミトカルに相当) が正確に 32000 タカラガイだったが、スーダン地域では、ハインリッヒ・バルト (Barth 1859)、オスカル・レンツ (Lenz 1884)、ナクティガル (Nachtigal 1887) が 19 世紀半ばに報告しているレートは、1 ミトカルあたり 3500-4000 個の間で変動していた (つまりまだ基準にきわめて近い)。その産地近いインド洋では、タカラガイは船に山積みにもでも市内限り、ほぼ無価値だった。19 世紀後半までその産地からの大きな地理的距離からもたらされる保護は、レートの悲惨な変動に対する保護として機能した。

さらに特筆すべきは、西アフリカにおけるタカラガイの地理的発生地の欠落部分だ。文化の他の側面でのちがいににもかかわらず、原始的なお金の多くの事例を含む数々の文化的性向は、一地域にとどまることなく、あらゆる方向に広がる。だが西アフリカにおける古式のお金の拡散はかなりちがっており、その使用の広がり決して全方位的ではなかった。実は、タカラガイを使う地域と、支払いに受け付けてもらえない地域との境界は、まるで行政当局

## 第 11 章 古式経済制度

が境界線を定めたかのようにだった。確かに私たちは、この「タカラガイのお金の生態」とでも呼ぶべき現象をめぐる運用側については知らない。そこでは、断片的ながらもしっかりとした範囲を持つ地域において黄金とタカラガイの不変の為替レートが、驚いたことに実現されていたのだ。だからこそ、西アフリカにおけるタカラガイ地域の分布を、南北に地域をわける東西方向の境界線という形で地図に落とそうとしても、何の価値もないのだ。それはある程度までは、組織化された地域や隊商ルート以外の場所で、広く使用されていることはめったになかった。これもまた初期国家と同様、各国の領土外を旅する、準政体を自認していた隊商の性質で説明がつく。断片化の証拠を挙げよう。黄金貿易の中心であるティンブクトゥ市は、サハラの子タカラガイ地域と、広範な北部ニジェール川大湾曲地域の間に存在しており、常にタカラガイのお金の飛び地として有名だった。さらに西にいくと、またもやタカラガイは大西洋岸地域の手前で終わってしまう。またそれが通貨として使われていた地域が、ニジェールから東のハウサ国家群のほうに広がったのはずっと後になってからだった。砂金通貨のアシャンティに向かう途中で上ヴォルタの交易中心ボンドゥクを通りがかったピンガーは、タカラガイが通貨として使われる最後の地点がアオウアボウ村だと記し、その南にある次の村では使用を拒否されたと書いている (Binger 1892 [II] : 241)。

ダホメのように初期国家の条件下や、国同士を結ぶ隊商でないと、タカラガイの貝殻が持つ過剰な流動性は中立化せきないのだ。だがマリとソンガイの歴史的な帝国を除くと (これらはダホメに先立つ)、ニジェール川の峡谷と大湾曲の広大な地域は、どこもダホメに比肩する国家機構には到達できなかった。だからこそ、タカラガイ使用がずいぶん飛び飛びで変動していたのだ。これはダホメのタカラガイ通貨の領域にはまったく見られなかった。ダホメではタカラガイのお金が古式経済制度になっていたのだ。世界市場のブレイクスルーにより、貝殻の流動性は再び手に負えなくなってしまった。

こうした精悍な貝殻が、海洋船舶から文字通り何千万個単位であふれ出てくるようになると、タカラガイは植民地行政にとって悪夢となった。ボルヌーが 1848 年に導入を決めてから、リバプールからのタカラガイ輸出は 1848 年には 60 トンで 1849 年には 300 トン、あわせて 7200cwt だった。その二十年後の 1868-70 年になると、ラゴスの輸入量は 172,000cwt を優に超え、1 ポンドあたりタカラガイ 380 個の為替レートで、この 3 年間にわたりタカラガイ 70 億個が入ってきた。

ウガンダではイギリス政府が行動を採った。1896 年に、タカラガイは 1 ルピー 200 個ほどで交換されていたが、1901 年に為替レートは 800 個まで上がった。1901 年 3 月 31 日以降、タカラガイは納税では受け付けてもらえなくなった。同時に政府はタカラガイに禁輸措置をかけた (中略) 大量のタカラガイがドイツ業の東アフリカか

## 第 11 章 古式経済制度

ら輸入されているという情報を得たためである。政府自身の在庫はやがて、消石灰を得るために焼かれた。1902 年に政府の在庫が破壊された後も、ウガンダではまだ三億個の貝殻が流通していたと推計されている。(H. P. Thomas and R. Scott, *Uganda*, 1935:231, q. Einzig, 1949:134)

仏領スーダンでは、フランス人はタカラガイ供給の分布の不適切性を相手に、負け戦を戦っているところだった。「セグーでフランス当局はあるとき、タカラガイ 2 千万個以上を貯め込んだ。(中略) ジェネ (240 キロほど離れたところ) では行政官は (中略) 一つも貯め込まなかった (Einzig, 1949: 143)。三つの村における現金不足を解消するため、そうしたコミュニティではフランス人たちが、タカラガイ 400 万個を早急に消費しなくてはならなかった。ここでも流通が問題だった」(ibid.).

19 世紀末になると、タカラガイはハウサランドでは減価した。C. H. ロビンソンの遠征隊は、病気になって数日休まねばならない馬を売ることになった。

困ったことに、売れないのだ。というのもそのタカラガイでの価値は、輸送に追加の荷担ぎ人を 15 人必要とするし、その荷担ぎ人たちに彼らが担いでいる全額と、加えてかなりの金額を支払わねばならないからだ。(後略) (C. H. Robinson, *Hausaland*, 1896 :46, q. Einzig, 1959: 148)

タカラガイはもはや古式経済制度の一部を形成しなくなったが、まだ市場システムがその後を埋める準備はできておらず、タカラガイは市場システムによって流通する商品にもなっていなかった。では、18 世紀ギニア海岸の、ほぼ完璧な地域通貨システムを説明するような、社会的影響を生み出す古式貨幣の具体的な性質とは何だったのだろうか？

### 地位と国家建設

最近の人類学的、歴史的な研究により、原始的なお金に関する私たちの視野は広がった。風側異な物体の博物館における展示にかわり、いまやそうした物体にお金の機能を授与する制度に関心が向けられるようになった。倫理的な根拠に基づくお金の階級づけへの洞察は、ポーナンが示したもののだが (Bohannon 1955; 1959)、未開社会におけるお金の地位構築機能を前面に引き出してくれる。原始通貨のこの側面は、初期国家で重要性を増すし、同時に国家創造への貢献という目新しい機能も重要なものとなる。

古式のお金は、要するに発達する国家構造と密接に関連している。アリソン・クイギン

## 第 11 章 古式経済制度

(Quiggin 1949)は、未開社会においては訪問する部族が、首長や王に対して贈り物の提供という形であるモノを儀式的に提示することにより、その物体にマナが与えられるのだと示している。効用主義的な財は、納付物、献呈品、相手を重んじる贈り物としての表示と、それが社会の長により受け容れられたことで、地位と尊厳を獲得する。こうした見事な公的なやりとりで、その財にお金の特権的な性質が与えられ、そうしたお金の使用は多様なルールの下に置かれる。クイギンはこれが、通貨の制度的源の一つだと述べており、私たちとしてはそれにより、権利や義務に定量的な含意が導入され、それが社会構造のまとまりに決定的に貢献し、時間による損耗への抵抗が高まり、また階層化された国家社会につきものの内部的な緊張に対しても耐性ができるのだと付け加えたい。

多くの古式取引は、意図的ではないものも含め、あらゆる不当利益に対する道徳的な安全対策として、習慣的な等価関係の規定の存在を前提としていた。ユダヤ教のミシュナは、「高利貸し」、つまりは交換を通じた不当利得の可能性について、極度のこだわりを見せている。これもまた、あらゆる販売/購入において、お金と財を衡学的なまでに区別するという、ミシュナでの法的詭弁を支持する根拠となっていた。この手順があるからこそ、お金をお金で買うというのが原理的に排除されるわけだ。クイギンは、お金は未開社会においては交換手段が主眼ではなかったのだ、という理論を強く打ち出している。だが、初期の国家社会でもそれは同様だった。そこでのお金は、初期国家としっかりした社会構造の建設材料の一つとなっているのだ。

実際、取引手段としてのお金は、地位のないお金の存在を前提としている。販売購入、あるいは賃貸賃借といった経済取引は、伝統社会では原則として、まだ地位取引のおまけでしかない。地位取引とはつまり、財はその人物の運命に従うということだ。個人による土地、ウシ、奴隷の占有は、地位の変化、たとえば養子縁組や結婚と結びついている。財産権ではなく、使用权だけの移転もよくあるし、使用权だけをお互いに交換して、財産そのものはそれぞれの家族の手に残ることでさえ、よく見られることだ。これはバビロニアのヌジのディテヌトゥに見られるものと同じだ。また地位の点でいうなら、土地の授与は侵食、軍、交易の役職とつながっている。だから古式経済制度の下では、経済統合と地位構造は相互に依存し合っている。地位から生じる権利と義務は、一部の人の特権が、他人の負の地位に対応している場合には、統合的な影響を持ったりする。逆に、経済統合のある種の形態は、地位への影響をもたらしかねず、それを同時に強化することになりかねない。これは明らかに再分配、互酬、家事の持つ国家建設と地位とのつながりにあてはまる。

交換も例外ではない。交易の古式変種は公益人という地位を生み出す。その地位の起源は血縁や指名によるものかもしれない。貿易港もまたそうした古式制度の一つだ。女性の地位をおおむね決めた食品市場も古式制度だ。こうした制度的な背景が、古式通貨につながっ

## 第 11 章 古式経済制度

た。これでダホメのタカラガイ通貨が注目されたのだった。

また経済の組織化においては、初期の国家もまた制度の古式世界に属する。国家領域の経済と、その非国家領域との監督行政的な接触が、全体としての経済プロセスを形成する。ここでも統合の交換形態が存在すると、国家がそれを形成する役割を果たす。代替比率に関する等価関係と価格設定、輸出入のための行政的な貿易港、地元食品市場での強制的なお金の使用は、典型的な古式経済制度で、これらは少なくとも周縁的には、政府機能に依存している。経済的な取引を、もともとそれが準拠していた地位の取引からはがし取るのは、国家領域で発達した制定法の枠組みの中で生じる。こうして、国家と地位という二重の焦点が、古式経済制度の発達を形成する。だからこそ、古式経済の強さをもたらすと正当に認識されている、あの緊密な社会組織が存在することになるのだ。

## 参考文献

- Atkins, John [R.N. Surgeon] 1737 *Voyage to Guinea, Brasil and West-Indies in His Majesty's Ships the Swallow and Weymouth*. Second Edition. London.
- Baillaud, Emile 1902 *Sur les Routes du Soudan*. Toulouse.
- Barbot, James Jr. 1732 in Appendix of John Barbot, *A Description of the Coasts of North and South Guinea, and of Ethiopia inferior, vulgarly Angola*, Vol. V. London: Churchill, Awnsham Comp.
- Barbot, John 1732 *A Description of the Coasts of North and South Guinea, and of Ethiopia inferior, vulgarly Angola*, Vol. V. London: Churchill, Awnsham Comp.
- Barth, Heinrich 1857-58 *Reisen und Entdeckungen in Nord-und Central-Afrika in den Jahren 1849 bis 1855*. Gotha: J. Perthes.
- Barth, Heinrich 1859 *Travels and Discoveries in North and Central Africa*. New York: Harper and Brothers.
- Basden, George T. 1921 *Among the Ibos of Nigeria*. London: Seeley Service.
- Berbain, Simone 1942 *Le Comptoir Français de Juda (Ouidah) au XVIII<sup>e</sup> Siècle. Memoires de l'IFAN*, No. 3. Paris.
- Binger, Captain Louis G. 1892 *Du Niger au Golfe du Guinée par le Pays de Kong et la Mossi*. Paris: Librairie Hachette et Cie.
- Bohannon, Paul 1959 "The Impact of Money on an African Subsistence Economy." *American Journal of Economic History*, Vol. 19, No. 4.
- Bohannon, Paul 1955 "Some Principles of Exchange and Investment Among the Tiv". *American Anthropologist*, Vol. 57, No. 1.
- Bohannon, Paul 1954 *Tiv Farm and Settlement*. London: Her Majesty's Stationery Office.
- Bohannon, Laura and Paul 1957 "Tiv Markets". *Transactions of the New York Academy of Sciences, New Series*, Vol. 19, No. 7. Pp. 613-621.
- Bosman, Willem 1808-14 "A New and Accurate Description of the Coast of Guinea". In John Pinkerton (ed.) *A General Collection of the Best and Most Interesting Voyages and Travels in All Parts of the World*, Vol. XVI. London.
- Brunner, Otto 1942 *Land und Herrschaft*. Briinn: R. M. Rohrer.

## 参考文献

- Biicher, Karl 1913 *Die Entstehung der Volkswirtschaft*. Tiibingen: Verlag der H. Laupp 'fchen Buchhandlung.
- Burns, A. C. 1929 *History of Nigeria*. London: G. Allen and Unwin Ltd.
- Burton, Captain Sir Richard F. 1863 *Abeokutia and the Camaroons Mountains*. London: Tinsley Brothers.
- Burton, Capt. Sir Richard F. 1893 *A Mission to Gelele, King of Dahome* (2 vols.), Memorial Edition. London.
- Ca da Mosto 1780 in De la Harpe, M. *Abrege de l'histoire generale des voyages*, Tome 2.
- Clapperton, Hugh 1829 *Journal of a Second Expedition into the Interior of Africa from the bight of Benin to Soccatoo*. Philadelphia: Carey, Lea and Carey.
- Dalzel, Archibald 1793 *History of Dahomey*. London: Author.
- D'Amon 1935 "Relation du Chevalier D'Amon" (1698). In *L'Etablissement d'Issiny, 1687-1702*, Paul Roussier. Paris: Larose.
- Davies, Kenneth Gordon 1957 *The Royal African Company*. London, New York: Longmans, Green.
- De la Harpe, M. 1780 "Abrege de l'histoire generale des voyages" (Vol. 2, Ch. IV. *Dahomey*; and Vol. 3). Paris: Hotel de Thou, Rue des Poitevins.
- D'Elbee 1671 *Journal du Voyage du Sieur d' Elbee en 1669* par I. Clodore. Paris.
- Doublet, J. 1883 *Journal du Corsaire Jean Doublet de Hanfleur*. Paris. Du Casse, J.  
--- 1935 "Relation du Sieur Du Casse" (1687-1688). In *L'Etablissement d'Issiny, 1687-1702*, Paul Roussier. Paris: Larose.
- Duncan, John 1847 *Travels in Western Africa, in 1845 and 1846* (2 vols.). London: R. Bentley.
- Dunglas, Edouard 1957-58 *Contribution a l'histoire du Mayen-Dahomey (Royaumes d'Abomey, du Ketou et de Ouidah)*. 3 vols. Etudes dahomeennes, XIX-XXI. IFAN.
- Einzig, Paul 1949 *Primitive Money in its Ethnological, Historical and Economical Aspects*. London: Eyre and Spottiswoode.
- Foa, Edouard 1895 *Le Dahomey*. Paris: A. Hennuyer.
- Forbes, Frederick E. 1851 *Dahomey and the Dahomans, Being the Journal of Two Missions to the King of Dahomey, and Residence at His Capital in 1849 and 1850*. London: Longmans, Brown, Green and Longmans.
- Forde, C. Daryll 1960 *The Cultural Map of West Africa: Successive Adaptations to Tropical Forests and Grasslands*. In *Cultures and Societies of Africa*, Ottenberg, S. and P., editors. New York.
- Gautier, Emile Felix 1935 *L'Afrique noire occidentale*. Paris: Librairie Larose.



## 参考文献

- Gourg, M. 1892 "Ancien Memoire sur le Dahomey ..." (1791). In *Memorial de l'Artillerie de la Marine*, 2e Serie, Tome XX. Pp. 747-776.
- Herskovits, Melville J. and Frances S. 1958 *Dahomean Narrative*. Evanston: Northwestern University Press.
- Herskovits, Melville J. 1938 *Dahomey, an Ancient West African Kingdom* (2 vols.). New York: Augustin.
- Ibn Batuta 1958 *Travels, A. D. 1325-1354*. Cambridge: Printed for the Hakluyt Society at the University Press. 邦訳イブン・バットゥータ『大旅行記』1-8 (家島 彦一訳、東洋文庫、2000)
- Isert, Paul Erdmann 1797 *Reize van Koppenhagen naar Guinea*. Amsterdam.
- Jackson, J. W. 1915-16 *The Use of Cowry-Shells for the Purposes of Currency, Amulets and Charms*. Manchester Memoirs, Vol. LX, No. 13.
- Jobson, Richard 1904 *The Golden Trade or a Discovery of the River Gambia and the Golden Trade of the Aethiopians (1620-21)*. Teignmouth, Devonshire: E. E. Speight and R.H. Walpole.
- Johnson, Rev. S., S. J. 1921 *The History of the Yorubas from the Earliest Time to the Beginning of the British Protectorate*. London: G. Routledge and Sons.
- Johnston, Captain John 1930 in *The Proceedings of the American Antiquarian Society*, N.S. --- 1930 "The Journal of an African Slaver, 1789-1792," with an introductory note by George A. Plimpton. *Proceedings of the American Antiquarian Society*, N.S. vol. 39, pp. 379-465.
- Labat, Pere Jean-Baptiste 1731 *Voyage du Chevalier des Marchais en Guinee*. Amsterdam: Aux depens de la Compagnie.
- Lambe, Bulfinch 1744 Report, 27th November 1724. In *A New Voyage to Guinea*, W. Smith, editor.
- Le Herisse, A. 1911 *L'ancien Royaume du Dahomey*. Moeurs, Religion, Histoire. Paris.
- Lenz, Oskar 1884 *Timbuku: Reise durch Marokko, die Sahara und den Sudan 1879/80*. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Mage, Abdon Eugene 1868 *Voyage dans le Soudan occidental (Senegambie-Niger)*. Paris: L. Hachette et Cie.
- Malinowski, Bronislaw 1922 *Argonauts of the Western Pacific*. London: G. Routledge and Sons. 邦訳ブロニスワフ・マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者』(増田義郎訳、講談社学術文庫、2010)
- Martin, Gaston 1948 *Histoire de l'esclavage dans les colonies fran;aises*. Paris: Presses universitaires de France.
- Martin, Gaston 1931 *Nantes au XVIIIe Siecle, L'ere des negriers, (1714-1774)*. Paris: Felix Akan.

## 参考文献

- McLeod, John 1820 *A Voyage to Africa with Some Account of the Manners and Customs of the Dahoman People*. London: J. Murray.
- Mercier, Paul 1951 “Les taches de la sociologie”. *Initiations Africaines*. IFAN.
- 1954a *L'affaiblissement des processus d'integration dans des societees en changement*. (Bulletin) de l'IFAN, Vol. 16.
- 1954b *Cartes Ethno-demographiques de l'ouest Africain*. Feuilles No. 5, IFAN.
- Mercier, Paul 1954c “The Fon of Dahomey.” In *African Worlds*, D. Forde, editor. London: Oxford University Press.
- Nachtigal, Gustav 1879-89 *Sahara und Sudan*. Berlin: Weidmann. Newbury, C. W.
- 1961 *The Western Slave Coast and Its Rulers*. Oxford: Clarendon Press.
- Parliamentary Papers 1789 *Minutes of the Evidence taken before a Committee of the House of Commons of the whole House to consider the circumstances of the Slave Trade*.
- Parliamentary Papers 1790 *Report of the Lords of the Committee of Council relating to the Slave Trade (Board of Trade)* 1789. (刊行 1790.)
- Phillips, Thomas 1746 *Journal of a Voyage to Africa and Barbadoes, Vol. VI*. London: Churchill, Awnsham Comp.
- Polanyi, Karl 1944 *The Great Transformation*. New York: Rinehart. 邦訳カール・ポラニー『大転換』野口建彦、栖原学訳、東洋経済新報社、2009.
- 1947 “Our Obsolete Market Mentality”. *Commentary*, Vol. 13, September. Pp. 109-17.
- 1963 “Ports of Trade in Early Societies”. *The Journal of Economic History*, Vol. XXIII, No. 1, March.
- Quiggin, Alison H. 1949 *A Survey of Primitive Money*. London: Methuen.
- Richard-Molard, Jacques 1949 *Afrique occidentale française*. Paris: Berger-Levrault.
- Robinson, Charles Henry 1896 *Hausaland*. London: S. Low, Marston and Co.
- Rodbertus, Karl 1865 *Zur Geschichte der römischen Tributsteuern*. *Jarbucher für Nationalökonomie und Statistik*, IV.
- Rostovtzeff, Michael 1932 *Caravan Cities*. Oxford: Clarendon Press. 邦訳ミカエル・ロストフツェフ『隊商都市』青柳正規訳、ちくま学芸文庫、2018.
- Roussier, Paul 1935 *L'établissement d'Issiny, 1687-1702. Voyages de Ducasse, Tibierges et d'Amon d la cote de Guinée (publiés pour la première fois et suivis de la relation du voyage au royaume d'Issiny du Père Godefroy Loyer)*. Paris: Larose.
- Sile, Endre 1961-63 *Histoire de L'Afrique Noire, Tome I-II [Traduit par Frida Lederer]*. Budapest: Akademiai Kiadó.

## 参考文献

- Skertchly, J. A. 1874 *Dahomey as it is: Being a Narrative of Eight Months' Residence in that Country*. London: Chapman and Hall.
- Smith, William 1744 *A New Voyage to Guinea*. London.
- Snelgrave, Capt. William 1734 *A New Account of Some Parts of Guinea, and the Slave Trade*. London: J. J. and P. Knapton.
- Thomas, Harold Bekan, and Robert Scott 1935 *Uganda*. London: Oxford University Press.
- Thurnwald, Richard 1916 The Bararo. *Memoirs, American Anthropologist*, No. 4.
- Towrson, William 1907 “The First Voyage of Master William Towrson, 1555”. In R. Hakluyt, *The Principall Navigations of the English Nation*. London.
- Wyndham, H. A. 1935 *The Atlantic and Slavery*. London: Oxford University Press.

## 訳者あとがき

これは Karl Polanyi, *Dahomey and the Slave Trade: An Analysis of an Archaic Economy* (1966, University of Washington Press) の全訳だ。

本書にはすでに邦訳がある。栗本慎一郎他が訳した『経済と文明』(サイマル出版会/ちくま学芸文庫) だ。が、その翻訳のダメさ加減には定評があるところ。アマゾンのレビューでも結構手厳しいことが書かれている。昔はもっと罵倒レビューがあったように記憶しているが、アマゾンでは低評価レビューを削除することになっているようなので、いまは読めない。

旧約がそんなにひどかったかは知らない。昔、栗本慎一郎がニューアカデミズムに便乗して出てきたとき、一度手に取ったような気がするが、まともには読まなかった。が、オンラインの評価を見ると、確かにあまりよい点数はあげられそうにない。

その一方で、それを完全に旧訳者たちの力量のせいにしてしまうのも、かわいそうではある。というのも、本書のカール・ポランニーの英語はかなりクセがあるのは事実だし、また完成前に死んでしまったので、英語がちょっと変なところもそこそこある。このぼくですら、一読して「あれ？」と思って構文をたどりなおさねばならないところが結構あった。旧著者たちは原文がむずかしかったと弁解をしているそうだけれど、それは決してナンセンスな言い訳ではない。

そしてもちろん、本書はいま常識となっている、市場システムに基づく経済を否定……とはいわないまでも、唯一無二のものとはしない立場だ。だから、出てくる用語が特殊になる。「価格」というと、ぼくたちはすぐに需要と供給を調整するために市場で決まるものだと考えてしまう。「価格」というのを見た瞬間に、そういう仕組みを想定してしまう。ところがダホメではそうした「価格」決定メカニズムはなかった。価格の多くは、交換比率として政府＝王様が決めるものだった。それを示すために、本書では「等価関係」なる用語を使った。そうした特殊な用語の使用で、何を言っているのかよくわからない。本書ではそれを「相場」と表現してみたりしたけれど、どんなものだろう。

## 訳者あとがき

また、ちょっと面倒なのが「アシャンティ」「ヨルバ」といった地名/国名/民族名だ。英語だと、この使い分けにあまり気を使う必要がない。でも訳すときには、国家としてのアシャンティなのか、部族としてのアシャンティ族なのかわかりにくいこともある。そこらへん、曖昧でいいところは曖昧にして、

「酋長」というと、一部の人は「ドジン扱いしてる、差別だ～」と騒ぐ。が、ぼくはそうは思わない。それはアンタのかってな思いこみだ。本書の基本的な主張は、まさにそうした血縁に強く基づく部族的な社会が、まったく別の合理性を持つ (合理性というのもポランニーがケチをつけている用語だが、それなりに筋が通りある程度のつじつまがあった、くらいに思ってください) 経済の仕組みを構築している、という話だ。

さて本書は、カール・ポランニーの名著の一つだ。

市場に支配されない経済システムがあった、というのはきわめて重要な知見だ。ただしその一方で、その別の経済がそんなによかったのか、というのはよく考えて見るべきだ。

特にアームチェア文明評論家のみなさんは、「すべてが市場化され、金銭化されるのはけしからん、それが社会を非人間化している云々」と眉をしかめる。人と人とがありのままにつながりあう、豊穡な意味を持つ世界がそこにはあったはずだ、と勝手に妄想して、お花畑の世界に入り込んでしまう。

でも、本書で読み取らねばならない教訓はもう一つある。その「別の経済システム」とはどんなものか

モノの流通が限られている村落社会だ。

非常におもしろいことだけれど、これはつい先日までのキューバなど、多くの社会主義経済で見られた仕組みと非常によく似ている。

国内は、CUP しかもお金の部分は少ない。作ったものは全部政府がまきあげて、その中から

## 訳者あとがき

レーニンは『帝国主義論』で、資本主義が進むと帝国主義になるんだ、だから資本主義ではないロシアで革命が起きてもいいんだ、だってすでに資本主義が帝国主義になっていただけなんだもん、というろくでもない屁理屈をこねた。

でも社会主義はおそらく、むしろ資本主義化されていない封建主義、血縁主義の前近代社会のほうが相性がいいのだ。中心が生産物をすべて吸い上げ、それを下々に再分配する、という市場に頼らない仕組み。国内経済と外国経済との切り離し、そのための二重通貨。

Even less were "shillings" more than a fictitious unit, not a means of exchange, though, like the natives' "static bar," they were serviceable as a local standard. The